前期博士課程科目

※(休)の表示がある科目は履修できないので注意すること。
※入学年度によって履修できる科目・標準履修年次が異なります。
入学時に配布された履修の手引きと本冊子P1を参照のこと。

■哲学歴史学専攻

科目名欄　「☆」～2019年度入学生　履修可能　「★」2020～入学生　履修可能。

科目名	開講期・曜日・時限	教員名	単位数	備考	授業コード	科目ナンバー
人間文化学研究Ⅰ	後月4	仲原	2		LM00010010	LAGEN1501
人間文化学研究Ⅱ	後火1	仁木・平田・北村	2		LM00020010	LAGEN1502
哲学研究	前水4	佐金	2		LM01010010	LAPHL2501
哲学研究演習	後水4	佐金	2		LM01020010	LAPHL2502
西洋哲学史研究	前木4	(加藤)	2	学部共通	LM01260010	LAPHL2503
西洋哲学史研究演習	前火2	高梨	2		LM01270010	LAPHL2504
倫理学研究	前火4	土屋	2		LM01280010	LAPHL2505
倫理学研究演習	後火4	土屋	2		LM01290010	LAPHL2506
美学研究	前木3	高梨	2		LM01130010	LAPHL2507
美学研究演習	後木3	高梨	2		LM01140010	LAPHL2508
宗教学研究	前月3	仲原	2		LM01300010	LAPHL2509
宗教学研究演習	後月3	仲原	2		LM01310010	LAPHL2510
論理学・科学哲学研究Ⅰ		【休】	2		LM01170010	LAPHL2511
論理学・科学哲学研究Ⅱ		【休】	2		LM01180010	LAPHL2512
哲学総合研究Ⅰ	前金2	仲原・高梨・土屋・佐金	2		LM01200010	LAPHL2513
哲学総合研究Ⅱ	後金2	仲原・高梨・土屋・佐金	2		LM01210010	LAPHL2514
哲学研究指導Ⅰ	前金1	仲原・高梨	2		LM01220010	LAPHL3601
哲学研究指導Ⅱ	後金1	仲原・高梨	2		LM01230010	LAPHL3602
修士論文(哲学)	通年集中	仲原・高梨	0		LM18000010	
日本史学研究Ⅰ	前火2	磐下	2		LM02010010	LAJPH2501
日本史学研究演習1	後火2	磐下	2		LM02020010	LAJPH2502
日本史学研究Ⅱ	前月2	仁木	2		LM02030010	LAJPH2503
日本史学研究演習2	後月2	仁木	2		LM02040010	LAJPH2504
日本史学研究Ⅲ	前水3	齊藤	2		LM02050010	LAJPH2505
日本史学研究演習3	後水3	齊藤	2		LM02060010	LAJPH2506
日本史学研究Ⅳ	前火3	佐賀	2		LM02070010	LAJPH2507
日本史学研究演習4	後火3	佐賀	2		LM02080010	LAJPH2508
日本史学研究Ⅴ	前集中	(古野)	2	学部共通	LM02090010	LAJPH2509
日本史学研究Ⅵ	前集中	(廣川)	2	学部共通	LM02100010	LAJPH2510
考古学研究	前木2	岸本	2		LM02110010	LAJPH2511
考古学研究演習	後木2	岸本	2		LM02120010	LAJPH2512
日本史学総合研究Ⅰ	前月1	仁木・岸本・佐賀・磐下・齊藤	2		LM02130010	LAJPH2513
日本史学総合研究Ⅱ	後月1	仁木・岸本・佐賀・磐下・齊藤	2		LM02140010	LAJPH2514
日本史学研究指導Ⅰ	前金1	仁木・岸本・佐賀	2		LM02150010	LAJPH3601
日本史学研究指導Ⅱ	後金1	仁木・岸本・佐賀	2		LM02160010	LAJPH3602
修士論文(日本史)	通年集中	仁木・岸本・佐賀	0		LM18000020	
東洋史学研究Ⅰ	前水5	平田	2		LM03010010	LAWHE2501
東洋史学研究演習1	後水5	平田	2		LM03020010	LAWHE2502
東洋史学研究Ⅱ	前水4	平田	2		LM03030010	LAWHE2503
東洋史学研究演習2	後水4	平田	2		LM03040010	LAWHE2504
東洋史学研究Ⅲ	前水2	渡辺	2		LM03050010	LAWHE2505
東洋史学研究演習3	後水2	渡辺	2		LM03060010	LAWHE2506
東洋史学研究Ⅳ	前木3	上野	2		LM03070010	LAWHE2507
東洋史学研究演習4	後木3	上野	2		LM03080010	LAWHE2508
東洋史学研究Ⅴ	後金4	(松本)	2	学部共通	LM03090010	LAWHE2509
東洋史学研究Ⅵ	前集中	(前田(弘))	2	学部共通	LM03100010	LAWHE2510
東洋史学総合研究Ⅰ	前火5	平田・渡辺・上野	2		LM03130010	LAWHE2511
東洋史学総合研究Ⅱ	後火5	平田・渡辺・上野	2		LM03140010	LAWHE2512
東洋史学研究指導Ⅰ	前木5	平田	2		LM03150010	LAWHE3601
東洋史学研究指導Ⅱ	後木5	平田	2		LM03160010	LAWHE3602
修士論文(東洋史)	通年集中	平田	0		LM18000030	
世界史学研究	前期集中	(野村)	2	学部共通	LM03170010	LAGEM2501
世界史学研究演習		【休】	2		LM03180010	LAGEM2502

西洋史学研究Ⅰ	後月1	(藤井)	2	学部共通	LM04010010	LAWEW2503
西洋史学研究演習1		【休】	2		LM04020010	LAWEW2504
西洋史学研究Ⅱ	前木4	草生	2		LM04030010	LAWEW2505
西洋史学研究演習2	後木4	草生	2		LM04040010	LAWEW2506
西洋史学研究Ⅲ	前月2	草生	2		LM04050010	LAWEW2507
西洋史学研究演習3	後月2	北村	2		LM04060010	LAWEW2508
西洋史学研究Ⅳ	前月3	北村	2	学部共通	LM04070010	LAWEW2509
西洋史学研究演習4	後月3	北村	2		LM04090010	LAWEW2510
西洋史学研究Ⅴ		【休】	2		LM04100010	LAWEW2511
西洋史学研究Ⅵ	前金2	(伊藤(順))	2		LM04110010	LAWEW2512
西洋史学総合研究Ⅰ	前火5	北村・草生	2		LM04130010	LAWEW2513
西洋史学総合研究Ⅱ	後火5	北村・草生	2		LM04140010	LAWEW2514
西洋史学研究指導Ⅰ	前月1	北村・草生	2		LM04150010	LAWEW3601
西洋史学研究指導Ⅱ	後月4	北村・草生	2		LM04160010	LAWEW3602
修士論文(西洋史)	通年集中	北村・草生	0		LM18000040	

■人間行動学専攻

科目名	開講期・曜日・時限	教員名	単位数	備考	授業コード	科目ナンバー
人間行動学研究Ⅰ	後火3	(進藤)	2	学部共通		
人間行動学研究Ⅱ	前集中	(森口)	2	学部共通	LM00040010	LBGEN1502
人間行動学研究Ⅲ	前集中	(西村)	2		LM00050010	LBGEN1503
人間行動学研究Ⅳ	前金2	(濱田)	2	学部共通	LM00060010	LBGEN1504
社会学基礎問題研究Ⅰ		【休】	2		LM05010010	LBSOC2501
社会学基礎問題研究演習1	後火4	石田	2		LM05020010	LBSOC2502
社会学基礎問題研究Ⅱ	前火4	笹島	2		LM05030010	LBSOC2503
社会学基礎問題研究演習2		【休】	2		LM05040010	LBSOC2504
社会学特殊問題研究Ⅰ	前水4	伊地知	2		LM05050010	LBSOC2505
社会学特殊問題研究演習1	後水4	伊地知	2		LM05060010	LBSOC2506
社会学特殊問題研究Ⅱ	前木3	川野	2		LM05070010	LBSOC2507
社会学特殊問題研究演習2	後木3	川野	2		LM05080010	LBSOC2508
社会学特殊問題研究Ⅲ	前月4	平山	2		LM05090010	LBSOC2509
社会学特殊問題研究演習3	後月4	平山	2		LM05100010	LBSOC2510
社会学特殊問題研究Ⅳ		【休】	2		LM05110010	LBSOC2511
社会学特殊問題研究Ⅴ		【休】	2		LM05120010	LBSOC2512
社会学総合研究Ⅰ	前火5	伊地知・石田・川野・笹島・平山	2		LM05140010	LBSOC2513
社会学総合研究Ⅱ	後火5	伊地知・石田・川野・笹島・平山	2		LM05150010	LBSOC2514
社会学研究指導Ⅰ	前月5	伊地知・石田・川野・笹島・平山	2		LM05170010	LBSOC3601
社会学研究指導Ⅱ	後月5	伊地知・石田・川野・笹島・平山	2		LM05180010	LBSOC3602
修士論文(社会学)	通年集中	伊地知・石田・川野・笹島・平山	0		LM18000050	
心理学基礎問題研究	前木3	池上	2		LM06010010	LBPSY2501
心理学基礎問題研究演習	後木3	池上	2		LM06020010	LBPSY2502
実験心理学研究	前火2	山	2		LM06030010	LBPSY2503
実験心理学研究演習	後火2	山	2		LM06040010	LBPSY2504
心理学特殊問題研究Ⅰ	前月4	川邉	2		LM06050010	LBPSY2505
心理学特殊問題研究演習1	後月4	川邉	2		LM06060010	LBPSY2506
心理学特殊問題研究Ⅱ	前火3	佐伯	2		LM06070010	LBPSY2507
心理学特殊問題研究演習2	後火3	佐伯	2		LM06080010	LBPSY2508
心理学特殊問題研究Ⅲ		【休】	2		LM06090010	LBPSY2509
心理学特殊問題研究Ⅳ		【休】	2		LM06100010	LBPSY2510
心理学総合研究Ⅰ	前火5	山・池上・川邉・佐伯	2		LM06110010	LBPSY2511
心理学総合研究Ⅱ	後火5	山・池上・川邉・佐伯	2		LM06120010	LBPSY2512
心理学研究指導Ⅰ	前月5	山・池上	2		LM06130010	LBPSY3601
心理学研究指導Ⅱ	後月5	山・池上	2		LM06140010	LBPSY3602
修士論文(心理学)	通年集中	山・池上	0		LM18000060	
教育学基礎問題研究	前水5	柏木	2		LM07010010	LBEDU2501
教育学基礎問題研究演習	後火3	柏木	2		LM07020010	LBEDU2502
学校教育学研究Ⅰ	前火2	島田	2		LM07030010	LBEDU2503
学校教育学研究演習1	後火2	島田	2		LM07040010	LBEDU2504
学校教育学研究Ⅱ	後木4	森	2		LM07050010	LBEDU2505

学校教育学研究演習2	後木5	森	2		LM07060010	LBEDU2506
教育学特殊問題研究Ⅰ	前火3	辻野	2		LM07070010	LBEDU2507
教育学特殊問題研究演習1	後月4	辻野	2		LM07080010	LBEDU2508
教育学特殊問題研究Ⅱ	前月2	添田	2		LM07090010	LBEDU2509
教育学特殊問題研究演習2	後月2	添田	2		LM07100010	LBEDU2510
教育学総合研究Ⅰ	前金2	柏木・添田・森・辻野・島田	2		LM07110010	LBEDU2511
教育学総合研究Ⅱ	後金2	柏木・添田・森・辻野・島田	2		LM07120010	LBEDU2512
教育学研究指導Ⅰ	前水2	柏木・添田	2		LM07130010	LBEDU3601
教育学研究指導Ⅱ	後水4	柏木・添田	2		LM07140010	LBEDU3602
修士論文(教育学)	通年集中	柏木・添田	0		LM18000070	
地理学基礎問題研究	後火3	山﨑	2		LM08010010	LBGEO2501
地理学基礎問題研究演習	前火3	山﨑	2		LM08020010	LBGEO2502
地理情報論研究	前木3	木村	2		LM08030010	LBGEO2503
地理情報論研究演習	前木4	木村	2		LM08040010	LBGEO2504
人文地理学特殊問題研究Ⅰ	後月2	水内	2	学部共通	LM08050010	LBGEO2505
人文地理学特殊問題研究演習1	前月2	水内	2		LM08060010	LBGEO2506
人文地理学特殊問題研究Ⅱ	前水4	大場	2		LM08070010	LBGEO2507
人文地理学特殊問題研究演習2	後水4	大場	2		LM08080010	LBGEO2508
人文地理学特殊問題研究Ⅲ	前木2	祖田	2		LM08090010	LBGEO2509
人文地理学特殊問題研究演習3	後木2	祖田	2		LM08100010	LBGEO2510
地理学総合研究Ⅰ	前木5	大場・水内・山﨑・祖田・木村	2		LM08130010	LBGEO2511
地理学総合研究Ⅱ	後木5	大場・水内・山﨑・祖田・木村	2		LM08140010	LBGEO2512
地理学研究指導Ⅰ	前月5	大場・水内・山﨑・祖田	2		LM08150010	LBGEO3601
地理学研究指導Ⅱ	後月5	大場・水内・山﨑・祖田	2		LM08160010	LBGEO3602
修士論文(地理学)	通年集中	大場・水内・山﨑・祖田	0		LM18000080	

■言語文化学専攻

科目名	開講期・曜日・時限	教員名	単位数	備考	授業コード	科目ナンバー
言語文化学研究Ⅰ	丹羽	後火2	2			
言語文化学研究Ⅱ		【休】	2		LM00080010	LCGEN1502
言語文化学研究Ⅲ		【休】	2		LM00090010	LCGEN1503
言語文化学研究Ⅳ	前火2	豊田	2		LM00100010	LCGEN1504
国文学研究Ⅰ	前月4	久堀	2		LM09010010	LCJPN2501
国文学研究演習1	後月4	久堀	2		LM09020010	LCJPN2502
国文学研究Ⅱ	前火4	小林	2		LM09030010	LCJPN2503
国文学研究演習2	後火4	小林	2		LM09040010	LCJPN2504
国文学研究Ⅲ	前火3	山本	2		LM09050010	LCJPN2505
国文学研究演習3	後火3	山本	2		LM09060010	LCJPN2506
国文学研究Ⅳ	前月3	奥野	2		LM09070010	LCJPN2507
国文学研究演習4	後月3	奥野	2		LM09080010	LCJPN2508
国語学研究	前月2	丹羽	2		LM09190010	LCJPN2509
国語学研究演習	後月2	丹羽	2		LM09200010	LCJPN2510
国語国文学研究	前水2	(佐野)	2	学部共通	LM09210010	LCJPN2511
国語国文学研究演習	後水2	(佐野)	2	学部共通	LM09220010	LCJPN2512
国語国文学総合研究Ⅰ	前火5	丹羽・小林・久堀・奥野・山本	2		LM09130010	LCJPN2513
国語国文学総合研究Ⅱ	後火5	丹羽・小林・久堀・奥野・山本	2		LM09140010	LCJPN2514
国語国文学研究指導Ⅰ	前月5	丹羽・小林・久堀	2		LM09150010	LCJPN3601
国語国文学研究指導Ⅱ	後月5	丹羽・小林・久堀	2		LM09160010	LCJPN3602
修士論文(国語国文学)	通年集中	丹羽・小林・久堀	0		LM18000090	
中国文学研究	前木3	高橋	2		LM10210010	LCCHN2501
中国文学研究演習	後木3	高橋	2		LM10220010	LCCHN2502
中国文化学研究	前火4	張	2		LM10050010	LCCHN2503
中国文化学研究演習	後火4	張	2		LM10060010	LCCHN2504
中国語学研究	前月3	大岩本	2		LM10230010	LCCHN2505
中国語学研究演習	後月3	大岩本	2		LM10240010	LCCHN2506
中国文献文化学研究Ⅰ		【休】	2		LM10250010	LCCHN2507
中国文献文化学研究演習1		【休】	2		LM10260010	LCCHN2508
中国文献文化学研究Ⅱ		【休】	2		LM10270010	LCCHN2509
中国語応用研究	後金1	張・大岩本	2		LM10310010	LCCHN2510

中国語中国文学総合研究Ⅰ	前金2	張・大岩本・高橋	2		LM10130010	LCCHN2511
中国語中国文学総合研究Ⅱ	後金2	張・大岩本・高橋	2		LM10140010	LCCHN2512
中国語中国文学研究指導Ⅰ	前木1	張・大岩本	2		LM10150010	LCCHN3601
中国語中国文学研究指導Ⅱ	後木1	張・大岩本	2		LM10160010	LCCHN3602
修士論文(中文)	通年集中	張・大岩本・高橋	0		LM18000100	
英文学研究Ⅰ		【休】	2		LM11010010	LCENG2501
英文学研究演習1		【休】	2		LM11020010	LCENG2502
英文学研究Ⅱ	前木4	田中(孝)	2		LM11030010	LCENG2503
英文学研究演習2	後木4	田中(孝)	2		LM11040010	LCENG2504
英文学研究Ⅲ	前火4	内丸	2		LM11050010	LCENG2505
英文学研究演習3	後木3	内丸	2		LM11060010	LCENG2506
米文学研究	前水4	古賀	2		LM11070010	LCENG2507
米文学研究演習	後水4	古賀	2		LM11080010	LCENG2508
英米文化学研究	前月3	リチャーズ	2		LM11090010	LCENG2509
英米文化学研究演習	後月4	リチャーズ	2		LM11100010	LCENG2510
英語学研究Ⅰ	前木2	豊田	2		LM11110010	LCENG2511
英語学研究演習1	後火4	豊田	2		LM11120010	LCENG2512
英語学研究Ⅱ		【休】	2		LM11130010	LCENG2513
英語学研究演習2		【休】	2		LM11230010	LCENG2514
英米言語文化論	前集中	(渡邊)	2	学部共通	LM11140010	LCENG2515
英語英米文学総合研究Ⅰ	前金1	田中(孝)・豊田・リチャーズ・古賀・内丸	2		LM11150010	LCENG2516
英語英米文学総合研究Ⅱ	後金2	田中(孝)・豊田・リチャーズ・古賀・内丸	2		LM11160010	LCENG2517
英語英米文学研究指導Ⅰ	前金2	田中(孝)・豊田	2		LM11170010	LCENG3601
英語英米文学研究指導Ⅱ	後金1	田中(孝)・豊田	2		LM11180010	LCENG3602
修士論文(英文)	通年集中	田中(孝)・豊田	0		LM18000110	
ドイツ語フランス語圏言語文化研究Ⅰ	後火4	長谷川	2		LM13210010	LCDFX2501
ドイツ語フランス語圏言語文化研究Ⅱ		【休】	2		LM13220010	LCDFX2502
ドイツ語圏文学研究Ⅰ	前木2	髙井	2		LM13230010	LCDFD2501
ドイツ語圏文学研究演習1	後木4	髙井	2		LM13240010	LCDFD2502
ドイツ語圏文学研究Ⅱ	前水4	長谷川	2		LM13250010	LCDFD2503
ドイツ語圏文学研究演習2	後水4	長谷川	2		LM13260010	LCDFD2504
ドイツ語圏文化学研究	前水2	長谷川	2		LM13270010	LCDFD2505
ドイツ語圏文化学研究演習		【休】	2		LM13280010	LCDFD2506
ドイツ語学研究	前月2	(神竹)	2		LM12090010	LCDFD2507
ドイツ語学研究演習		【休】	2		LM12100010	LCDFD2508
フランス語圏文学研究	前火3	原野	2		LM13290010	LCDFF2501
フランス語圏文学研究演習	後火3	原野	2		LM13300010	LCDFF2502
フランス語圏文化学研究	前水2	白田	2		LM13310010	LCDFF2503
フランス語圏文化学研究演習	後水2	白田	2		LM13320010	LCDFF2504
フランス語学研究	後木4	福島	2		LM13090010	LCDFF2505
フランス語学研究演習	前木4	福島	2		LM13100010	LCDFF2506
フランス語圏言語文化論Ⅰ	後水4	原野	2		LM13330010	LCDFF2507
フランス語圏言語文化論Ⅱ	前木2	白田	2		LM13340010	LCDFF2508
ヨーロッパ言語文化学研究		【休】	2		LM13350010	LCDFX2503
多文化学研究	前集中	(中條)	2	学部共通	LM13360010	LCDFX2504
地域社会文化学研究Ⅰ	前火2	髙井	2		LM13370010	LCDFX2505
地域社会文化学研究Ⅱ	前集中	(粕谷)	2	学部共通	LM13380010	LCDFX2506
ドイツ語フランス語圏言語文化学総合研究Ⅰ	前金2	髙井・福島・白田・原野・長谷川	2		LM13390010	LCDFX2507
ドイツ語フランス語圏言語文化学総合研究Ⅱ	後金2	髙井・福島・白田・原野・長谷川	2		LM13400010	LCDFX2508
ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅰ	前月5	髙井・福島・白田	2		LM13410010	LCDFX3601
ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ	後月5	髙井・福島・白田	2		LM13420010	LCDFX3602
修士論文(独仏)	通年集中	髙井・福島・白田	0		LM18000120	
言語応用学研究Ⅰ	前火3	井狩	2		LM14210010	LCLNG2501
言語応用学研究演習1	後火3	井狩	2		LM14220010	LCLNG2502
言語応用学研究Ⅱ	前火4	山崎(雅)	2		LM14230010	LCLNG2503
言語応用学研究演習2	後火4	山崎(雅)	2		LM14240010	LCLNG2504
言語応用学研究Ⅲ	前木3	田中(一)	2		LM14250010	LCLNG2505
言語応用学研究演習3	後水4	田中(一)	2		LM14260010	LCLNG2506
言語応用学研究Ⅳ	前集中	(関)	2		LM14270010	LCLNG2507

言語応用学研究演習4		後水3	辻(香)	2		LM14280010	LCLNG2508
言語応用学総合研究Ⅰ		前金1	田中(一)・井狩・山崎(雅)・辻(香)	2		LM14290010	LCLNG2509
言語応用学総合研究Ⅱ		後金1	田中(一)・井狩・山崎(雅)・辻(香)	2		LM14300010	LCLNG2510
言語応用学研究指導Ⅰ		前金2	田中(一)・井狩・山崎(雅)・辻(香)	2		LM14310010	LCLNG3601
言語応用学研究指導Ⅱ		後金2	田中(一)・井狩・山崎(雅)・辻(香)	2		LM14320010	LCLNG3602
修士論文(言応)		通年集中	田中(一)・井狩・山崎(雅)・辻(香)	0		LM18000130	
表現文化学研究Ⅰ (文化構想学研究a(表現文化))	☆	前水2	高島・野末・増田・海老根	2		LM00130010	LCART2501
表現文化学研究演習1	☆		【休】	2		LM15020010	LCART2502
表現文化学研究Ⅱ (テクスト文化論研究)	☆	後木2	野末	2		LM19010010	LCART2503
表現文化学研究演習2 (テクスト文化論研究演習)	☆	前木4	野末	2		LM19020010	LCART2504
表現文化学研究Ⅳ (表象文化構造論研究)	☆	前月4	海老根	2		LM19070010	LCART2507
表現文化学研究演習4 (表象文化構造論研究演習)	☆	後火 2	海老根	2		LM19080010	LCART2508
表現文化学研究Ⅴ (比較表現論研究)	☆	後木4	高島	2		LM19030010	LCART2509
表現文化学研究演習5 (比較表現論研究演習)	☆	前火4	高島	2		LM19040010	LCART2510
表現文化学研究Ⅵ (表現文化学特別講義a)	☆	前集中	(山中)	2		LM19090010	LCART2511
表現文化学特殊研究 (表現文化学特別講義b)	☆	後集中	(木村(覚))	2		LM19100010	LCART2512
表現文化学総合研究Ⅰ (表現文化学総合研究Ⅰ)	☆	前金1	高島・野末・増田	2		LM19110010	LCART2513
表現文化学総合研究Ⅱ (表現文化学総合研究Ⅱ)	☆	後金2	高島・野末・増田	2		LM19120010	LCART2514
表現文化学研究指導Ⅰ	☆	前金3	高島・野末・小田中	2		LM15150010	LCART3601
表現文化学研究指導Ⅱ	☆	後金3	高島・野末・小田中	2		LM15160010	LCART3602
修士論文(表文)	☆	通年集中	高島・野末・小田中	0		LM18000140	

■アジア都市文化学専攻

科目名 (読替科目)		開講期・曜日・時限	教員名	単位数	備考	授業コード	科目ナンバー
アジア都市文化学基礎研究Ⅰ (文化構想学研究b(アジア文化))	☆	前月2	多和田・松浦・堀	2		LM00140010	LDASA1501
アジア都市文化学基礎研究Ⅱ (文化構想学研究c(文化資源))	☆	後火5	天野・菅原・小田中・沼田	2		LM00150010	LDASA1502
都市文化学研究 (ポピュラー文化論研究)	☆	前火2	増田	2		LM19050010	LDASA2501
都市文化学研究演習 (ポピュラー文化論研究演習)	☆	後火4	増田	2		LM19060010	LDASA2502
都市環境学研究 (芸術文化資源論研究)	☆	前月4	菅原	2		LM21030010	LDASA2503
都市環境学研究演習 (芸術文化資源論研究演習)	☆	後月4	菅原	2		LM21040010	LDASA2504
アジア民族文化学研究 (アジア共生文化政策論研究)	☆	前月4	多和田	2		LM20040010	LDASA2511
アジア民族文化学研究演習 (アジア共生文化政策論研究演習)	☆	後月4	多和田	2		LM20050010	LDASA2512
アジア比較文化学研究 (アジア比較文化実践論研究)	☆	前水2	堀	2		LM20060010	LDASA2513
アジア比較文化学研究演習 (アジア比較文化実践論研究演習)	☆	後水2	堀	2		LM20070010	LDASA2514
アジア観光文化学研究 (観光文化資源論研究)	☆	前水5	天野	2		LM21050010	LDASA2518

アジア観光文化学研究演習 (観光文化資源論研究演習)	☆	後水5	天野	2		LM21060010	LDASA2519
アジア都市文化学特講Ⅰ (アジア文化学特別講義a)	☆	後集中	(シュラトフ)	2		LM20080010	LDASA2520
アジア都市文化学特講Ⅱ (アジア文化学特別講義b)	☆	後金3	(王)	2		LM20090010	LDASA2521
アジア都市文化学総合研究Ⅰ (アジア文化学総合研究Ⅰ)	☆	前金1	多和田・松浦・堀	2		LM20100010	LDASA2522
アジア都市文化学総合研究Ⅱ (アジア文化学総合研究Ⅱ)	☆	後金1	多和田・松浦・堀	2		LM20110010	LDASA2523
アジア都市文化学研究指導Ⅰ	☆	前金3	多和田・野崎・菅原・増田	2		LM16220010	LDASA3601
アジア都市文化学研究指導Ⅱ	☆	後金3	多和田・野崎・菅原・増田	2		LM16230010	LDASA3602
修士論文(アジア都市文化学)	☆	通年集中	多和田・野崎・菅原・増田	0		LM18000150	

■文化構想学専攻

科目名 (読替科目)		開講期・曜日・時限	教員名	単位数	備考	授業コード	科目ナンバー
文化構想学研究a(表現文化)	★	前水2	高島・野末・増田・海老根	2		LM00130010	LEGEN1501
文化構想学研究b(アジア文化)	★	前月2	多和田・松浦・堀	2		LM00140010	LEGEN1502
文化構想学研究c(文化資源)	★	後火5	天野・菅原・小田中・沼田	2		LM00150010	LEGEN1503
テクスト文化論研究	★	後木2	野末	2		LM19010010	LEART2501
テクスト文化論研究演習	★	前木4	野末	2		LM19020010	LEART2502
比較表現論研究	★	後木4	高島	2		LM19030010	LEART2503
比較表現論研究演習	★	前火4	高島	2		LM19040010	LEART2504
ポピュラー文化論研究	★	前火2	増田	2		LM19050010	LEART2505
ポピュラー文化論研究演習	★	後火4	増田	2		LM19060010	LEART2506
表象文化構造論研究	★	前月4	海老根	2		LM19070010	LEART2507
表象文化構造論研究演習	★	後火2	海老根	2		LM19080010	LEART2508
表現文化学特別講義a	★	前集中	(山中)	2	学部共通	LM19090010	LEART2509
表現文化学特別講義b	★	後集中	(木村(覚))	2	学部共通	LM19100010	LEART2510
表現文化学総合研究Ⅰ	★	前金1	高島・野末・増田	2		LM19110010	LEART2511
表現文化学総合研究Ⅱ	★	後金2	高島・野末・増田	2		LM19120010	LEART2512
アジア文化構想学研究演習	★	後月2	多和田・松浦・堀	2		LM20010010	LEASA2501
アジア地域文化創造論研究	★	前木3	松浦	2		LM20020010	LEASA2502
アジア地域文化創造論研究演習	★	後木3	松浦	2		LM20030010	LEASA2503
アジア共生文化政策論研究	★	前月4	多和田	2		LM20040010	LEASA2504
アジア共生文化政策論研究演習	★	後月4	多和田	2		LM20050010	LEASA2505
アジア比較文化実践論研究	★	前水2	堀	2		LM20060010	LEASA2506
アジア比較文化実践論研究演習	★	後水2	堀	2		LM20070010	LEASA2507
アジア文化学特別講義a	★	後集中	(シュラトフ)	2		LM20080010	LEASA2508
アジア文化学特別講義b	★	後金3	(王)	2		LM20090010	LEASA2509
アジア文化学総合研究Ⅰ	★	前金1	多和田・松浦・堀	2		LM20100010	LEASA2510
アジア文化学総合研究Ⅱ	★	後金1	多和田・松浦・堀	2		LM20110010	LEASA2511
国際文化資源論研究	★	前火4	小田中	2		LM21010010	LECRS2501
国際文化資源論研究演習	★	後火4	小田中	2		LM21020010	LECRS2502
芸術文化資源論研究	★	前月4	菅原	2		LM21030010	LECRS2503
芸術文化資源論研究演習	★	後月4	菅原	2		LM21040010	LECRS2504
観光文化資源論研究	★	前木4	天野	2		LM21050010	LECRS2505
観光文化資源論研究演習	★	後木5	天野	2		LM21060010	LECRS2506
社会実践文化資源論研究	★	前水2	沼田	2		LM21070010	LECRS2507
社会実践文化資源論研究演習	★	後水2	沼田	2		LM21080010	LECRS2508
文化資源学特別講義a	★	後金4	(木川)	2	学部共通	LM21090010	LECRS2509
文化資源学特別講義b	★	前火3	(福田(一))	2		LM21100010	LECRS2510
文化資源学総合研究Ⅰ	★	前金1	菅原・小田中・天野・沼田	2		LM21110010	LECRS2511
文化資源学総合研究Ⅱ	★	後金1	菅原・小田中・天野・沼田	2		LM21120010	LECRS2512

授業科目名	科目NO.	LAGEN1501	授業コード	LM00010010
人間文化学研究Ⅰ Advanced Studies in Human and Culture Ⅰ Advanced Studies in Human and Culture Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 仲原　孝			

●科目の主題

哲学の基本的な研究態度を身につけるとともに、受講者各自が主体的に問題を立て、必要な文献を探索して読解し、それを使って研究論文を構築するまでのプロセスを実践的に学ぶ。

●到達目標

受講者各自が哲学的な研究論文を構築する技能を身につけることを目標とする。

●授業内容・授業計画

今年はカントの『純粋理性批判』をとりあげ、それを原書講読しながら、受講者が各自の問題意識に応じたテーマを設定し、それについての研究論文的レポートを作成するところまでを指導する。ただし授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。

第1回 オリエンテーション
第2回 原書講読 (1)
第3回 原書講読 (2)
第4回 原書講読 (3)
第5回 原書講読 (4)
第6回 原書講読 (5)
第7回 中間研究発表と講評
第8回 資料探索とレポート構築とのための指示
第9回 原書ないし資料講読 (1)
第10回 原書ないし資料講読 (2)
第11回 原書ないし資料講読 (3)
第12回 原書ないし資料講読 (4)
第13回 原書ないし資料講読 (5)
第14回 最終研究発表と講評
第15回 レポートへの評価。論文構成上の指導

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

遅刻は大幅に減点する。特段の理由なく欠席した者には単位を認めないので注意すること。

●参考文献・教材

必要な資料は印刷して授業中に配布する。

授業科目名	科目NO.	LAGEN1502	授業コード	LM00020010	
人間文化学研究Ⅱ Advanced Studies in Human and Culture Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	仁木　宏／北村　昌史／平田　茂樹				

●科目の主題

歴史学の意義と研究法

●到達目標

各受講生が歴史研究を行うに際して、専門とする分野に限定されない広い視野を養う。

●授業内容・授業計画

人間文化を歴史的に把握する意義を、理念・学史・方法の視点から検討する。日本史、東洋史、西洋史を横断し、広く「歴史とは何か」を考え、歴史的世界に規定された人間文化の併存と現代社会における人間文化の統合について理解を深め、現代社会において歴史学研究を行なう意味を確認する。授業は、受講者の報告を受けて進める。

第1回 ガイダンス
第2回 歴史とは何か①
第3回 歴史とは何か②
第4回 歴史学の歴史—日本—①
第5回 歴史学の歴史—日本—②
第6回 歴史学の歴史—中国—①
第7回 歴史学の歴史—中国—②
第8回 歴史学の歴史—ヨーロッパ—①
第9回 歴史学の歴史—ヨーロッパ—②
第10回 現代歴史学の方法①
第11回 現代歴史学の方法②
第12回 現代歴史学の方法③
第13回 現代歴史学の方法④
第14回 現代歴史学の方法⑤
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

事前に指示された文献を読んでおくこと。授業を通して得られたことを総合レポートにまとめること。

●評価方法

平常点（出席、報告・レポート）。

●受講生へのコメント

具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

授業科目名	科目NO.	LAPHL2501	授業コード	LM01010010	
哲学研究 Advanced Studies in PhilosophyAdvanced Studies in Philosophy				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 佐金　武				

●科目の主題

哲学の諸問題について、テキストの読解を軸に哲学研究を行う。
哲学研究に必要な文献の調べ方・読み方・まとめ方、そして発表や議論の仕方などを実践的に学ぶ。

●到達目標

哲学研究に必要とされる、高度な探求能力の涵養と問題意識の掘りさげを目指す。

●授業内容・授業計画

受講生の希望と必要に応じて、初回の授業でいくつかのオプションを提示する。
特に希望がない場合、次のテキストにしたがって、物理学（physics）と形而上学（metaphysics）の関係について考察する。

Tim Maudlin (2012) Philosophy of Physics: Space and Time, Princeton University Press.

第1回 導入：物理学を哲学する
第2回 第1章Classical Accounts of Space and Timeの講読（1）
第3回 第1章Classical Accounts of Space and Timeの講読（2）
第4回 第2章Evidence for Spacial and Temporal Structureの講読（1）
第5回 第2章Evidence for Spacial and Temporal Structureの講読（2）
第6回 第3章Eliminating Unobservable Structureの講読（1）
第7回 第3章Eliminating Unobservable Structureの講読（2）
第8回 第4章Special Relativityの講読（1）
第9回 第4章Special Relativityの講読（2）
第10回 第5章The Physics of Measurementの講読（1）
第11回 第5章The Physics of Measurementの講読（2）
第12回 第6章Genaral Relativityの講読（1）
第13回 第6章Genaral Relativityの講読（2）
第14回 第7章The Direction and Topology of Timeの講読（1）
第15回 第7章The Direction and Topology of Timeの講読（1）

●事前・事後学習の内容

授業で取り上げたいテーマや内容など、何か提案がないか各自で検討しておくこと。

●評価方法

授業内でのパフォーマンスと課題の達成度により評価する。

●受講生へのコメント

積極的に議論に参加し、自らの問題意識を明確にしていくことを期待する。

●参考文献・教材

授業中に提示する。

授業科目名	科目NO.	LAPHL2502	授業コード	LM01020010
哲学研究演習 Advanced Seminar in PhilosophyAdvanced Seminar in Philosophy			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 佐金　武			

●科目の主題

哲学の諸問題について、テキストの読解を軸に哲学研究を行う。
哲学研究に必要な文献の調べ方・読み方・まとめ方、そして発表や議論の仕方などを実践的に学ぶ。

●到達目標

哲学研究に必要とされる、高度な探求能力の涵養と問題意識の掘りさげを目指す。

●授業内容・授業計画

受講生の希望と必要に応じて、初回の授業でいくつかのオプションを提示する。
特に希望がない場合、次のテキストにしたがって、物理学（physics）と形而上学（metaphysics）の関係について考察する。

Tim Maudlin (2007) The Metaphysics within Physics, Oxford University Press.

第1回 導入：物理学と形而上学の関係を考える
第2回 第1章 A Modest Proposal Concerning Laws, Counterfactuals, and Explanationsの講読（1）
第3回 第1章 A Modest Proposal Concerning Laws, Counterfactuals, and Explanationsの講読（2）
第4回 第2章 Why Be Humean の講読（1）
第5回 第2章 Why Be Humean の講読（2）
第6回 第3章 Suggestions from Physics for Deep Metaphysicsの講読（1）
第7回 第3章 Suggestions from Physics for Deep Metaphysicsの講読（2）
第8回 第4章 On the Passing of Timeの講読（1）
第9回 第4章 On the Passing of Timeの講読（2）
第10回 第5章 Causation, Counterfactuals, and the Third Factorの講読（1）
第11回 第5章 Causation, Counterfactuals, and the Third Factorの講読（2）
第12回 第6章 The Whole Ball of Waxの講読（1）
第13回 第6章 The Whole Ball of Waxの講読（2）
第14回 エピローグA Remark on the Method of Metaphysicsの講読
第15回 まとめとディスカッション

●事前・事後学習の内容

授業で取り上げたいテーマや内容など、何か提案がないか各自で検討しておくこと。

●評価方法

授業内でのパフォーマンスと課題の達成度により評価する。

●受講生へのコメント

積極的に議論に参加し、自らの問題意識を明確にしていくことを期待する。

●参考文献・教材

授業中に提示する。
特に指定しない。

授業科目名	科目NO.	LAPHL2503	授業コード	LM01260010
西洋哲学史研究 Advanced Studies in the History of Western Philosophy			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 加藤　憲治			

●科目の主題

哲学的古典をフランス語（あるいは英語）で精読することによって、哲学的基礎知識を習得し、西洋哲学の思考方法に慣れ親しむ。

●到達目標

フランス語（あるいは英語）文献読解能力の向上と西洋哲学史の潮流を把握することを目的とする。

●授業内容・授業計画

ベルクソン(1859-41)の『笑い――おかしさの意味についての試論』(1900) を読む。
「動物の中で笑うものはヒトだけである」（アリストテレス）と言われるように、人間に特有なこの〈笑い〉という現象を古来哲学者や文学者は考察し、解明しようと試みてきた。しかし、〈笑い〉という現象はこの試みからすり抜け、逃れ去ってしまう。哲学的には小さな問題であるが、この問題にベルクソンはこの著作で取り組む。一般的にベルクソンは「生の哲学」の立場から「生きたものにかぶせられた機械的なもの」に〈笑い〉の源泉を見ていると考えられている。しかし、ベルクソンの『笑い』における試みはこうした定式におさまらないものをもっている。というのは、ベルクソンが試みたのは、「イメージの連想についての研究、イメージの『相互的な伝染』についての研究、おかしさの出現がイメージからイメージへ伝播していく運動についての研究」であったからだ。
こうした視点からこの著作の始めの部分を読解したい。

第1回　ベルクソン哲学と『笑い』への導入
第2回 「笑いの意味」の読解と検討（1）
第3回 「笑いの意味」の読解と検討（2）
第4回 「笑いについての三つの所見」の読解と検討（1）
第5回 「笑いについての三つの所見」の読解と検討（2）
第6回 「笑いについての三つの所見」の読解と検討（3）
第7回 「形のおかしさ」の読解と検討（1）
第8回 「形のおかしさ」の読解と検討（2）
第9回 「形のおかしさ」の読解と検討（3）
第10回 「身振りと運動のおかしさ」の読解と検討（1）
第11回 「身振りと運動のおかしさ」の読解と検討（2）
第12回 「おかしさの伝播力」の読解と検討（1）
第13回 「おかしさの伝播力」の読解と検討（2）
第14回 「おかしさの伝播力」の読解と検討（3）

●事前・事後学習の内容

フランス語（あるいは英語）文献読解能力を向上させるためには、この演習の予習・復習をしっかりやることが求められる。
演習内容を包括的に理解するためには『笑い』全体を翻訳（日本語）で読んでおくことが望ましい。

●評価方法

平常点によって評価する。
平常点は、出席状況、演習に取り組む態度、議論への参加から総合的に判定する。

●受講生へのコメント

これからフランス語を習得しようとする者の参加を歓迎する。英訳での参加も可。

●参考文献・教材

H. Bergson, Le rire, PUF, 1900
(Laughter)
プリントを配布する

授業科目名	科目NO.	LAPHL2504	授業コード	LM01270010
西洋哲学史研究演習 Advanced Seminar in the History of Western Philosophy			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 高梨　友宏			

●科目の主題

カントの目的論について概観する。

●到達目標

Immanuel Kantの Kritik der Urteilskraft,1790（判断力批判） の第2部「目的論的判断力の批判」におけるカントの目的論の概要を把握することを目指す。またこのことを踏まえて、カントの目的論と美学との関係、批判哲学体系における『判断力批判』の位置づけ、カントの目的論の哲学史上の位置づけと意義、等に関して、二次文献も視野に入れながら検討を加えたい。

●授業内容・授業計画

概ね以下のようなプランに沿って進める予定。ただしあくまで予定なので、実際にはこの通りに進められない場合があることをあらかじめ了承願いたい。なお、この主題を扱うのは半期のみとなるため、多くの時間を講述に割くことになるが、テキストの重要箇所については独語原文を呈示し、演習形式を導入する予定。

第1回 カント目的論についての概説（1）：客観的合目的性と主観的合目的性
第2回 カント目的論についての概説（2）：分析論①
第3回 カント目的論についての概説（3）：分析論②
第4回 カント目的論についての概説（4）：分析論③
第5回 カント目的論についての概説（5）：弁証論①
第6回 カント目的論についての概説（6）：弁証論②
第7回 カント目的論についての概説（7）：弁証論③
第8回 カント目的論についての概説（8）：方法論①
第9回 カント目的論についての概説（9）：方法論②
第10回 カント目的論についての概説（10）：方法論③
第11回 カントの目的論の諸問題（1）：目的論と美学の関係
第12回 カントの目的論の諸問題（2）：『判断力批判』の体系的意義①
第13回 カントの目的論の諸問題（3）：『判断力批判』の体系的意義②
第14回 哲学史上におけるカントの目的論の位置付けについて（1）
第15回 哲学史上におけるカントの目的論の位置付けについて（2）

●事前・事後学習の内容

事前学習　講述部分については、事前に配布する関連資料を読んで授業に臨まれたい。原書訳読演習部分については、訳読担当者を事前に決めるが、その日訳読を担当しない人も、必ず訳読準備をして授業に臨むこと。

事後学習　本研究演習で扱う『判断力批判』第2部は第1部「美的判断力の批判」（いわゆる「カント美学」）の知識を必ずしも前提しなくとも、独立の文献として読めるが、本研究演習では、カントの目的論を彼の「美学」との関連でも捉えたいので、美学についての講師の不十分な講述に拘わらず、第1部のテキストを授業と並行して計画的に独習されたい（本来の「事後学習」の意味には当たらないが）。

●評価方法

平常点による評価。

●受講生へのコメント

・独語原文の訳読を導入する場合があるので、受講者については独語中級程度の既修を前提に、授業を進める。
・授業中のディスカッションを歓迎。積極的な姿勢で臨むことを希望する。

●参考文献・教材

必要な教材、テキストなどは、コピーして配布する。

授業科目名	科目NO.	LAPHL2505	授業コード	LM01280010	
倫理学研究 Advanced Studies in Ethics				単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 土屋　貴志				

●科目の主題

現代英米倫理学の基本文献を原語で読み進めながら解説する。

●到達目標

現代倫理学の主要問題について基礎的知識と展望を得るとともに、倫理学を研究するために必要な英語力を身に付ける。

●授業内容・授業計画

テキストを読み進みながら解説する。

具体的には下記のように進める予定であるが、必要に応じて変更する可能性もある。

第1回 序論
第2回 第1章
第3回 第1章（続き）
第4回 第2章
第5回 第2章（続き）
第6回 第3章
第7回 第3章（続き）
第8回 第4章
第9回 第4章（続き）
第10回 第5章
第11回 第5章（続き）
第12回 第6章
第13回 第6章（続き）
第14回 第7章
第15回 第7章（続き）

●事前・事後学習の内容

事前学習として、テキストの課題部分を全員必ず精読してくること。
事後学習として、講義内容を踏まえて、テキストを読み直すこと。

●評価方法

毎回の読解課題の達成度を総合し平常点として評価する。

●受講生へのコメント

内容の要点と論理を正確に把握することを重視する。全体を平板に訳すのではなく、重要な箇所を見極めて、アウトラインをしっかりつかむ読み方を心がけること。そのためには、重要箇所を正確に理解し翻訳できる語学力が前提になるので、日頃から英語力の向上に努めてほしい。

●参考文献・教材

下記の文献をテキストの候補とするが、受講者と相談の上で、これ以外のテキストを読むこともありうる。
A. Sen & B. A. O. Williams (eds.), Utilitarianism and beyond, Cambridge University Press, 1982.
参考文献については授業中に紹介する。

授業科目名	科目NO.	LAPHL2506	授業コード	LM01290010	
倫理学研究演習 Advanced Seminar in Ethics				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 土屋　貴志				

●科目の主題

「倫理学研究」に引き続き、現代英米倫理学の基本文献を原語で読む。

●到達目標

現代倫理学の主要問題について基礎的知識と展望を得るとともに、倫理学を研究するために必要な英語力を身に付ける。

●授業内容・授業計画

テキストを読み進めながら内容を検討する。

具体的には下記のように進める予定であるが、必要に応じて変更する可能性もある。

第1回　第8章
第2回　第8章（続き）
第3回　第9章
第4回　第9章（続き）
第5回　第10章
第6回　第10章（続き）
第7回　第11章
第8回　第11章（続き）
第9回　第12章
第10回　第12章（続き）
第11回　第13章
第12回　第13章（続き）
第13回　第14章
第14回　第14章（続き）
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習として、テキストの課題部分を全員必ず精読してくること。

事後学習として、授業での検討内容を踏まえ、テキストを読み直すこと。

●評価方法

毎回の読解課題の達成度を総合し平常点として評価する。

●受講生へのコメント

内容の要点と論理を正確に把握することを重視する。全体を平板に訳すのではなく、重要な箇所を見極めて、アウトラインをしっかりつかむ読み方を心がけること。そのためには、重要箇所を正確に理解し翻訳できる語学力が前提になるので、日頃から英語力の向上に努めてほしい。

なお「倫理学研究」を前期に履修しておくことが望ましい。

●参考文献・教材

下記の文献をテキストの候補とするが、受講者と相談の上で、これ以外のテキストを読むこともありうる。

A. Sen & B. A. O. Williams (eds.), Utilitarianism and beyond, Cambridge University Press, 1982.

参考文献については授業中に紹介する。

授業科目名	科目NO.	LAPHL2507	授業コード	LM01130010
美学研究 Advanced Studies in Aesthetics			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 高梨　友宏			

●科目の主題

カント美学について理解し、その諸論点を吟味する。

●到達目標

Immanuel Kant *Kritik der Urteilskraft,* 1790（判断力批判） の論点を整理して、第1部「美的判断力の批判」におけるいわゆる「カント美学」の概要を把握したうえで、実際にテキストを読みながら、そこで論じられる内容に関して、他の『純粋理性批判』や『実践理性批判』における関連事項も参照しつつ、吟味を加える。これらのプロセスを通じて、「カント美学」の総合的理解を目指す。

●授業内容・授業計画

できるかぎり、以下のプランに沿って進めたい。ただし、必ずしもこのプラン通りにならない可能性がある点、了承願いたい。

第1回 導入
第2回 趣味判断の諸相（1）：四つの契機
第3回 趣味判断の諸相（2）：アプリオリな総合判断
第4回 趣味判断の諸相（3）：趣味の体系的意義
第5回 天才論
第6回 崇高論（1）：美学史における意義
第7回 崇高論（2）：現代との関連
第8回 目的論（1）：主観的合目的性と客観的合目的性
第9回 目的論（2）：目的論的世界観へ
第10回 総括：目的論としての美学
第11回 『判断力批判』第一序論の独語原書講読演習（以下、演習と略記）（1）
第12回 演習（2）
第13回 演習（3）
第14回 演習（4）

●事前・事後学習の内容

事前学習 ：講述部分については、事前に配布する関連資料を読んで授業に臨まれたい。原書訳読演習部分については、訳読担当者を事前に決めるが、その日訳読を担当しない人も、必ず訳読準備をして授業に臨むこと。

事後学習 ： 前年度から読み続けているテキストであるため、演習部分では前年度の続きから読み進めることになる。本演習で既読のテキスト箇所については、講師の講述に拘わらず、少なくとも翻訳書を用いて独習されたい（本来の「事後学習」の意味には当たらないが）。

●評価方法

平常点による評価。

●受講生へのコメント

ドイツ語原書の講読演習も含むので、受講に当たってはドイツ語中級程度の読解力が条件となる。

授業中のディスカッションを歓迎。積極的な姿勢で臨むことを希望する。

●参考文献・教材

適宜コピー等を配布する。

授業科目名	科目NO.	LAPHL2508	授業コード	LM01140010
美学研究演習 Advanced Seminar in Aesthetics			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 高梨　友宏			

●科目の主題

Immanuel Kant *Kritik der Urteilskraft*, 1790（判断力批判）の「第一序論」に関する研究演習。原文を読みながら、カント美学の諸問題について考える。

●到達目標

できるだけ先まで進むように努力し、「カント美学」の総合的理解を深めたい。ただし、参加者間の議論を重視し、毎回できる限り疑問を払拭しながら、読み進めることとしたい。

●授業内容・授業計画

「第一序論」に関して、前期「美学研究」で読んだ箇所以降を読む。ドイツ語原文の読解と、内容に関する議論にほとんどの時間を充てる予定。

第1回 導入
第2回『判断力批判』の独語原書講読演習（以下、演習と略記）(1)
第3回 演習(2)
第4回 演習(3)
第5回 演習(4)
第6回 演習(5)
第7回 演習(6)
第8回 演習(7)
第9回 演習(8)
第10回 演習(9)
第11回 演習(10)
第12回 演習(11)
第13回 演習(12)
第14回 演習(13)

●事前・事後学習の内容

事前学習：講述部分については、事前に配布する関連資料を読んで授業に臨まれたい。原書訳読演習部分については、訳読担当者を事前に決めるが、その日訳読を担当しない人も、必ず訳読準備をして授業に臨むこと。

事後学習：本演習は、本年度前期「美学研究」と連続する科目であるため、前期に読んだ箇所の続きから読み進めることになる。本演習で既読のテキスト箇所については、講師の講述に拘わらず、少なくとも翻訳書を用いて独習されたい（本来の「事後学習」の意味には当たらないが）。

●評価方法

平常点による評価。

●受講生へのコメント

受講に当たっては、ドイツ語中級程度の読解力が必要。また前期に開講する「美学研究」もあわせて受講することが望ましい。

●参考文献・教材

テキストや参考文献については適宜コピーを配布する。

●参考文献・教材

授業科目名	科目NO.	LAPHL2509	授業コード	LM01300010	
宗教学研究 Advanced Studies in Religious Problems				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 仲原　孝				

●科目の主題

宗教学・宗教哲学の基礎的文献を原書講読する。さらに、当該文献に関する出席者の研究発表の機会も随時もうける予定である。

●到達目標

外国語の文献を正確に読解した上で、それに関する研究を行なうために必要な手法を修得することを目標とする。

●授業内容・授業計画

ハイデガーの主著『存在と時間』を原書により研究的に読解しながら、そこに含まれる哲学的問題について、議論の中で思考を深めることを目指す。

授業計画は以下の通り。研究Ｉでは「世界」の分析を中心に読解・検討する。ただし授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。

第1回 §14 (1)
第2回 §14 (2)
第3回 §14 (3)
第4回 §15 (1)
第5回 §15 (2)
第6回 §15 (3)
第7回 §16 (1)
第8回 §16 (2)
第9回 §16 (3)
第10回 §17 (1)
第11回 §17 (2)
第12回 §17 (3)
第13回 §18 (1)
第14回 §18 (2)
第15回 §18 (3)

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。作成した要約や、課題についての報告を、随時レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

欠席・遅刻は大幅に減点する。特段の理由なく欠席した者には単位を認めないので注意すること。

●参考文献・教材

テキストは、Martin Heidegger: Sein und Zeit, Max Niemeyer Verlagを使用する。

授業科目名	科目NO.	LAPHL2510	授業コード	LM01310010	
宗教学研究演習 Advanced Seminar in Religious Problems				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	仲原　孝				

●科目の主題

宗教学・宗教哲学の基礎的文献を原書講読する。さらに、当該文献に関する出席者の研究発表の機会も随時もうける予定である。

●到達目標

外国語の文献を正確に読解した上で、それに関する研究を行なうために必要な手法を修得することを目標とする。

●授業内容・授業計画

前期の「宗教学研究」に引きつづき、ハイデガーの『存在と時間』を原書講読する。後期は「内存在」の分析論のところを講読する。

授業計画は以下の通り。ただし、授業進度の都合上、授業計画に多少の変更が行なわれる場合もありうることを付記しておく。

第1回 §28 (1)
第2回 §28 (2)
第3回 §29 (1)
第4回 §29 (2)
第5回 §30 (1)
第6回 §30 (2)
第7回 §31 (1)
第8回 §31 (2)
第9回 §32 (1)
第10回 §32 (2)
第11回 §33 (1)
第12回 §33 (2)
第13回 §34 (1)
第14回 §34 (2)
第15回 §34 (3)

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。作成した要約や、課題についての報告を、随時レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

欠席・遅刻は大幅に減点する。特段の理由なく欠席した者には単位を認めないので注意すること。

●参考文献・教材

授業科目名	科目NO.	LAPHL2513	授業コード	LM01200010
哲学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Philosophy Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	仲原　孝／高梨　友宏／土屋　貴志／佐金　武			

●科目の主題

哲学研究に要する基本的事項を総合的に研究、講義する。

●到達目標

哲学研究を行うための基本的な方法の習得を目標とする。

●授業内容・授業計画

総合研究Ⅰでは、研究のために必要な基本的事項を、哲学の様々な領域（哲学、哲学史、倫理学、宗教哲学、美学）にわたって教授する。問題領域に応じて、資料収集から問題点の設定に至るまで幅広く指導する一方で、適宜、研究発表会を開催し、発表の仕方、論文の書き方についての具体的な指導も行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

積極的に質問し、自分自身の問題意識を明確にするよう努めること。

●参考文献・教材

適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LAPHL2514	授業コード	LM01210010
哲学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Philosophy Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	仲原　孝／高梨　友宏／土屋　貴志／佐金　武			

●科目の主題

哲学研究に要する基本的事項を総合的に研究、講義する。

●到達目標

哲学研究を行うための基本的な方法の習得を目標とする。

●授業内容・授業計画

総合研究Ⅱでは、各受講生の研究テーマに応じて、個別的指導を含め、具体的な研究の進め方を教授する。受講生の研究経過について適宜報告を求め、議論を深めながら、研究を行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、その回の授業に関する要約の作成と、次回までに準備しておくべき課題とを指示するので、それを適切に果たしてから授業に臨むこと。随時、作成した要約や、課題についての報告を、レポートの形で提出するよう求める。

●評価方法

担当課題をどの程度適切に果たしたか、授業時の議論にどの程度積極的に参加したか、要求されたレポートは適切であったか、を総合的に考慮して評価する。

●受講生へのコメント

積極的に質問し、自分自身の問題意識を明確にするよう努めること。

●参考文献・教材

適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LAPHL3601	授業コード	LM01220010
哲学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Philosophy Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	仲原 孝／高梨 友宏			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果である。修士論文の執筆は、2年次の「哲学研究指導1」（前期）、「哲学研究指導2」（後期）の指導を受けることによって薦める。

前期の「哲学研究指導1」では、1年次までの学修に基づき、修士論文の執筆計画を立て、修士論文構想発表会・修士論文中間発表会などの機会を柱としながら、修士論文に必要な知識・技能を身につける。

●到達目標

(1) 修士論文執筆計画を立て実行する
(2) 問題意識を整理し、研究課題の学術的意義を提示する
(3) 研究目的に応じた適確な課題を設定する
(4) 研究課題に応じた適切な研究方法を計画する
(5) 研究課題に応じた先行研究の読み込みを行う
(6) 研究課題に応じた実験結果、調査結果、文献資料を蓄積する
(7) 修士論文研究に関わる研究倫理について考える

●授業内容・授業計画

第1回 オリエンテーション
修士論文とは何か（確認）
哲学の方法論（確認）
修士論文研究・執筆計画について
修士論文の評価規準・基準について
第2～5回 修士論文構想発表会（連続4コマ）
テーマに関する問題意識の整理
予想される（期待している）結論
研究方法の目処
同学年他学年の学生、複数の教員との質疑応答から学ぶ
第6回 研究計画に即して研究倫理を考える
第7回 先行研究の読み込み
第8回 「先行研究の整理」の意義と方法
第9回 修士論文の章立て
第10回 文献分析の方法
第11～14回 修士論文中間発表会（連続4コマ）
問題意識の提示
論証しようとしていること（仮の結論）
論証のための方法とその目処
章立て
これからの課題
第15回 修士論文中間発表会のふりかえり

●事前・事後学習の内容

第1回 修士論文計画を立てて提出する。修士論文構想発表会の準備を行い、レジュメを作成する。
第2～5回 修士論文構想発表会の議論を踏まえ、自分の修士論構想を練り直す。
第6回 自分の研究計画に即して研究倫理を考え、研究倫理の観点から研究計画を練り上げる。

第7回　研究課題に応じた先行研究の読み込みを計画し、読み込んだ結果を発表する。
第8回　自分の修士論文に必要な「先行研究の整理」を行ってみる。
第9回　修士論文の章立てを考える
第10回　修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。
第11～14回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論文研究・執筆計画を練り直す。
第15回　7月以降の修士論文執筆計画を立てる。

●評価方法

修士論文中間発表会、発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題をどの程度適切に果たしたかによって評価する。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の修士課程の集大成である。広義の哲学（哲学史・宗教学・倫理学・美学などを含む）の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「哲学研究指導1」の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、修士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

.特に指定しない。

授業科目名	科目NO.	LAPHL3602	授業コード	LM01230010
哲学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Philosophy Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	仲原　孝／高梨　友宏			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果である。修士論文の執筆は、2年次の「哲学研究指導1」（前期）、「哲学研究指導2」（後期）の指導を受けることによって薦める。

後期の「哲学研究指導2」では、修士論文の仕上げに向けて、修士論文中間発表会などの機会を柱としながら、修士論文に必要な知識・技能を身につける。

●到達目標

(1) 修士論文の評価基準を知る
(2) 執筆途上において、その時点の自分の修士論文を評価基準に準拠して点検する
(3) 点検の結果を踏まえ、修士論文計画・執筆計画を修正しながら修士論文を完成させる

●授業内容・授業計画

第1回　修士論文の進捗状況の報告
第2回　修士論文の評価基準の確認
第3～6回　修士論文中間発表会（4コマ連続）
完成に向けての執筆方針の確認
（研究方法論、課題設定、先行研究の整理、章立て等）
完成に向けての研究・執筆計画
第7回　修士論文中間発表会の振り返り
第8回　問題意識と学術的意義を扱う部分についての点検
第9回　研究目的に応じた課題設定を扱う部分について点検
第10回　研究手法の説明を扱う部分についての点検
第11回　先行研究を扱う部分についての点検
第12回　実験結果、調査結果、文献分析を扱う部分についての点検
第13回　論理の組み立てや一貫性に関する点検
第14回　学術論文としての表現、表記法等に関する点検
第15回　研究倫理の側面からの修士論文の点検

●事前・事後学習の内容

第1回　修士論文研究進捗状況の報告レジュメ提出
第2回　修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。
第3回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論研究・執筆計画を練り直す。
第7回　完成までの期間の研究・執筆計画を立てる
第8回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第9回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第10回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第11回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第12回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第13回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第14回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第15回　修士論文作成全体を通しての振り返り　振り返りのための発表の準備をする。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題をどの程度適切に果たしたかに応じて評価する。

「哲学研究指導2」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質を評価するのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「哲学研究指導2」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の修士課程の集大成である。広義の哲学（哲学史・宗教学・倫理学・美学などを含む）の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「哲学研究指導1」の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、修士課程を集大成させてほしい。

テキストは、Martin Heidegger: Sein und Zeit, Max Niemeyer Verlagを使用する(初回授業時にテキストのコピーを配布する)。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000010	
修士論文（哲学） Master's Thesis（哲学）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	仲原　孝／高梨　友宏				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポシシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆は、2年次の「哲学研究指導1」「哲学研究指導2」の指導を受けながら進める

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1)修士論文は、哲学分野おける一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2)(評価基準)修士論文は以下の各項目について、哲学分野における十分な水準を満たさなければならない。

(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、哲学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、哲学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、哲学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3)(論文の体裁)修士論文は、論を展開する上で、哲学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

各回の授業内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「哲学研究指導1」「哲学研究指導2」のシラバスを参照すること。

●事前・事後学習の内容

「修士論文」にそぐわないので省略する

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「哲学研究指導1」は、修士論文を提出する年度の前期に、「哲学研究指導2」は後期の履修登録期間中に、Web履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。広義の哲学(哲学史・宗教学・倫理学・美学などを含む)の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

各自が参考文献一覧を作成することになる。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2501	授業コード	LM02010010
日本史学研究Ⅰ Advanced Studies in Japanese History Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 磐下　徹			

●科目の主題

古記録の読解

●到達目標

平安後期の貴族である源俊房の日記『水左記』の読解を通し、古記録読解に必要な基本知識やスキルを身につける。
あわせて、古代から中世への転換期にあたる、11世紀後半～12世紀にかけての政治・社会・文化に対する理解を深める。

●授業内容・授業計画

第1回　ガイダンス
第2回　『水左記』解題
第3回　『水左記』治暦5年（延久元年）正月条の発表
第4回　『水左記』同年2月条（前半）の発表
第5回　『水左記』同年2月条（後半）と4月条の発表
第6回　『水左記』延久6年（承保元年）11月条の発表
第7回　『水左記』同年12月条（前半）の発表
第8回　『水左記』同年12月条（後半）の発表
第9回　『水左記』承保2年正月条の発表
第10回　『水左記』同年7月条と8月条の発表
第11回　『水左記』同年9月条の発表
第12回　『水左記』同年10月1～2日条の発表
第13回　『水左記』同年10月3日条の発表
第14回　まとめ
＊上記はあくまで目安で、講読の進度によって計画は変更されることもある。
『水左記』の記事を2～3日分ずつ割り振り、その読解と記述内容に関する考察を発表してもらう。
本年度は治暦5年（延久元年）から読み進める。

●事前・事後学習の内容

講読範囲をあらかじめ精読し、関連する先行研究などに目を通しておくこと。
また事後は、講読範囲を振り返りその内容をよく復習しておくこと。
講義で紹介された参考文献に、各自の判断で適宜目を通しておくこと。

●評価方法

平常点で評価。
発表内容（80%）と発表回以外の授業参加態度（20%）で判定する。

●受講生へのコメント

幅広い視野を持ちながら発表・討議に参加してほしい。

●参考文献・教材

必要に応じて配布・指示する。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2502	授業コード	LM02020010
日本史学研究演習1 Advanced Seminar in Japanese History 1			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 磐下　徹			

●科目の主題

日本古代史の研究発表

●到達目標

研究発表とそれにもとづく討議を行い、各自の研究の深化をはかる

●授業内容・授業計画

第1回　ガイダンス
第2回　発表①　報告者①による報告
第3回　発表②　報告者①による再報告
第4回　発表③　報告者②よる報告
第5回　発表④　報告者②による再報告
第6回　発表⑤　報告者③による報告
第7回　発表⑥　報告者③による再報告
第8回　発表⑦　報告者④による報告
第9回　発表⑧　報告者④による再報告
第10回　発表⑨　報告者⑤による報告
第11回　発表⑩　報告者⑤による再報告
第12回　発表⑪　報告者⑥による報告
第13回　発表⑫　報告者⑥による再報告
第14回　まとめ
＊学修効果を高めるため、受講者の状況に応じて計画は変更されることもある。
受講者が自分の取り組んでいるテーマについての研究発表を行い、それにもとづき討議を進める。
討議内容を踏まえて再報告を実施する。

●事前・事後学習の内容

事前に報告者によって示される参考文献や資料を読んでおくこと。
事後は演習中の議論を踏まえ、追加で参考文献にあたるなどして理解を深めておくこと。

●評価方法

平常点で評価。
発表内容（80%）と発表回以外の授業参加態度（20%）で判定する。

●受講生へのコメント

幅広い視野を持ちながら発表・討議に積極的に臨んでほしい

●参考文献・教材

必要があれば適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2503	授業コード	LM02030010
日本史学研究Ⅱ Advanced Studies in Japanese History Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 仁木　宏			

●科目の主題

中世文書の読解能力を高めるとともに、中世社会を考察する基本的力量を身につける。

●到達目標

戦国時代の各地の戦国大名や地域権力が発給した法令を素材にする。文書を読解した上で、その歴史的意義や背景、関連する文書・事項などについて総合的に検討し、報告することで、中世史研究能力を涵養する。

戦国時代の社会的特質を多面的に考察し、中世社会の本質を解明する。

●授業内容・授業計画

佐藤進一・百瀬今朝雄編『中世法制史料集』第5巻・武家家法Ⅲを輪読する。

第1回　ガイダンス。担当の割り振り
第2回　三好氏の文書
第3回　赤松氏の文書
第4回　毛利氏の文書
第5回　長宗我部氏の文書
第6回　大友氏の文書
第7回　島津氏の文書
第8回　六角氏の文書
第9回　浅井氏の文書
第10回　斎藤氏の文書
第11回　織田氏の文書
第12回　今川氏の文書
第13回　後北条氏の文書
第14回　武田氏の文書
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

担当者は、テキストの読み下し、現代語訳をおこなうとともに、歴史的背景を説明するためのレジメを準備する。授業中に指摘された点を復習し、次回の報告に備える。（くりかえし）

●評価方法

担当回の報告内容、ならびに史料をめぐる議論における発言によって評価する。

●受講生へのコメント

毎回、地図を用意することを求める。歴史（地理）環境の中で法の本質を読みとる工夫をしてほしい。

●参考文献・教材

『中世法制史料集』第5巻（上述）

授業科目名	科目NO.	LAJPH2504	授業コード	LM02040010	
日本史学研究演習2 Advanced Seminar in Japanese History　2				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 仁木　宏				

●科目の主題

各人の研究内容について、史資料をもとに発表し、関連する文書・事項などについても総合的に検討し、報告する能力を養う。

●到達目標

史資料をもとに実証的に研究を進めるとはどういうことか。具体的な事例の中で学ぶ。

●授業内容・授業計画

毎回、1～2人ずつ、順番に報告してゆく。初めの4回分で、中世史専攻の院生が報告し、次の3回分で、他の時代専攻の院生が報告する。これを2度くり返す。以下は仮の順番であり、第1回の授業時に指示する。

第1回　中世史専攻院生の報告
第2回　中世史専攻院生の報告
第3回　中世史専攻院生の報告
第4回　中世史専攻院生の報告
第5回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第6回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第7回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第8回　中世史専攻院生の報告
第9回　中世史専攻院生の報告
第10回　中世史専攻院生の報告
第11回　中世史専攻院生の報告
第12回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第13回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第14回　中世以外の時代を専攻する院生の報告
第15回まとめ

●事前・事後学習の内容

担当者は、報告するために史料収集・読解をおこない、レジメを用意する。事後には、指摘された点を再度確認する。

●評価方法

担当回の報告内容が、いかにオリジナルなものであるか、説得性をもつかを評価する。
担当回以外の授業中の発言内容も評価対象に入れる。

●受講生へのコメント

担当回の報告が不十分である場合、「宿題」として、次回、あらためてよりレベルの高い報告を求めることになる。
本授業での報告の経験を、学会部会報告や学術専門誌投稿などにつなげてほしい。

●参考文献・教材

特になし。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2505	授業コード	LM02050010	
日本史学研究Ⅲ Advanced Studies in Japanese History Ⅲ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	齊藤　紘子				

●科目の主題

近世都市史研究の最新成果を学ぶ

●到達目標

①日本史の研究を進める上で不可欠となる学術論文の読み方を習得する。
②最新の都市史研究の成果を理解し、今後の研究方向や課題などについて考える力をつける。

●授業内容・授業計画

近世都市史研究における最新の研究成果として、2019年に刊行された吉田伸之・塚田孝・杉森哲也編『シリーズ三都』江戸巻・大坂巻・京都巻（東京大学出版会）を精読し、近世巨大都市の特質・展開について理解を深める。各巻の部立てを踏まえて、<近世へ><権力と社会><町方の社会><民衆世界の位相>の部ごとに三都を比較しながら輪読していく。

予定としては以下の通りだが、変更することもあり得る。

第1回　導入・授業の進め方
第2回　<序>
第3回　<近世へ>江戸・大坂
第4回　<近世へ>京都
第5回　<権力と社会>江戸
第6回　<権力と社会>大坂
第7回　<権力と社会>京都
第8回　<町方の社会>江戸
第9回　<町方の社会>大坂
第10回　<町方の社会>京都
第11回　<民衆世界の諸相>江戸
第12回　<民衆世界の諸相>大坂
第13回　<民衆世界の諸相>京都
第14回　まとめ

●事前・事後学習の内容

授業で扱う章について、全員が事前に精読しておく。報告者はレジュメを準備し、内容理解と論点・疑問点を具体的に示すこと。その他の受講生には、事前の予習を踏まえて、各々の読み方や見解について発言を求める。

●評価方法

授業参加態度（40%）、発表および発表レジュメ（40%）、期末レポート（20%）の総合評価。

●受講生へのコメント

取り上げる論文については時間をかけて丁寧に読んでほしい。

●参考文献・教材

テキスト　吉田伸之編『シリーズ三都　江戸巻』、塚田孝編『シリーズ三都　大坂巻』、杉森哲也編『シリーズ三都　京都巻』東京大学出版会、2019年。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2506	授業コード	LM02060010
日本史学研究演習3 Advanced Seminar in Japanese History 3			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 齊藤　紘子			

●科目の主題

近世都市史料研究

●到達目標

①最新の都市史研究の成果と今後の課題について認識を深める。

②研究動向を踏まえ、自ら立てた問いや課題に対して、史料読解を通じて実証的に解明・検証する力を身につける。

●授業内容・授業計画

前半は、前期「日本史学研究Ⅲ」に続き、近世都市史研究における最新の研究成果として、2019年に刊行された吉田伸之・塚田孝・杉森哲也編『シリーズ三都』江戸巻・大坂巻・京都巻（東京大学出版会）を精読し、近世巨大都市の特質・展開について理解を深める。各巻の部立てを踏まえて、〈三都を結ぶ〉〈周縁へ〉の部ごとに三都を比較しながら輪読していく。

後半は、上記の輪読を踏まえて、三都の史料（町触）から各自の関心に沿う町触数点を選び、史料研究報告を行う。

予定としては以下の通りだが、変更することもあり得る。

第1回　授業の進め方
第2回　<三都を結ぶ>江戸・大坂
第3回　<三都を結ぶ>京都
第4回　<周縁へ>江戸・大坂
第5回　<周縁へ>京都
第6回　小括／史料研究報告にむけて
第7回　史料研究報告①
第8回　史料研究報告②
第9回　史料研究報告③
第10回　史料研究報告④
第11回　史料研究報告⑤
第12回　史料研究報告⑥
第13回　総括報告・討論①
第14回　総括報告・討論②

●事前・事後学習の内容

論文輪読では、授業で扱う章について、全員が事前に精読しておく。報告者はレジュメを準備し、内容理解と論点・疑問点を具体的に示すこと。その他の受講生には、事前の予習を踏まえて、各々の読み方や見解について発言を求める。史料研究報告では、受講生各々が史料を選択し、解釈・論点を整理したレジュメを作成し、発表する。授業での討論を踏まえて再報告と総括報告を行い、期末レポートを作成する。

●評価方法

授業参加態度（40%）、発表および発表レジュメ（40%）、期末レポート（20%）の総合評価。

●受講生へのコメント

前期「日本史学研究Ⅲ」との連続性を意識して受講してほしい。

●参考文献・教材

テキスト　吉田伸之編『シリーズ三都　江戸巻』、塚田孝編『シリーズ三都　大坂巻』、杉森哲也編『シリーズ三都　京都巻』東京大学出版会、2019年。町触については『江戸町触集成』『大阪市史』『京都町触集成』などの史料集を参照する。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2507	授業コード	LM02070010
日本史学研究Ⅳ Advanced Studies in Japanese History Ⅳ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 佐賀　朝			

●科目の主題

「近現代地域社会史研究・総力戦体制史研究の再検討」をテーマに、近年の主要な研究成果について批判的に検討する。

近現代の地域社会史については、都市社会史、医療社会史、自由民権運動、性売買問題史などに目配りをしながら、総力戦体制史研究については、総力戦体制と地域社会、「従軍慰安婦」問題、終戦工作などに留意しながら、近年の研究成果を取り上げ、批判的に吟味するとともに、研究課題を探りたい。

各研究分野から、いくつかの論文や著作を取り上げ、一つ一つの論文を可能な限り精読していく。

●到達目標

近年の研究成果を批判的に検討することを通じて、史料に即して研究を深化させる方向性を明らかにし、課題を整理することを目ざす。

●授業内容・授業計画

主要成果を論文単位で取り上げる（1回に1～2本）。受講生が順番に報告（要約・論評）を担当し、全員で合評する。

報告者には、次の授業の際、前回の議論の要旨をまとめた、簡単な確認の報告もしてもらう。

第1回　ガイダンス・打ち合わせ
第2回　論文の検討と討論（その1）
第3回　論文の検討と討論（その2）
第4回　論文の検討と討論（その3）
第5回　論文の検討と討論（その4）
第6回　論文の検討と討論（その5）
第7回　論文の検討と討論（その6）
第8回　論文の検討と討論（その7）
第9回　論文の検討と討論（その8）
第10回　論文の検討と討論（その9）
第11回　論文の検討と討論（その10）
第12回　論文の検討と討論（その11）
第13回　論文の検討と討論（その12）
第14回　論文の検討と討論（その13）
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前に配布される論文テキストは精読のうえ授業に出席すること。

取り上げる論文は、相互に関連するものが多いため、事後も随時、各論文の論点や課題を整理しながら、授業での討議に参加すること。

●評価方法

授業における報告や発言、レポートなどを総合的に評価する。

●受講生へのコメント

日本史学研究演習4とあわせて受講してください。

●参考文献・教材

授業のなかで随時、提示する。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2508	授業コード	LM02080010	
日本史学研究演習4 Advanced Seminar in Japanese History 4				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	佐賀　朝				

●科目の主題

「近現代地域史研究の実践」をテーマに、近現代の大阪（都市・農村を含め）を主な対象に、地域史研究を実践的に学ぶ。受講生が各自でテーマを設定し、近現代の地域史料を用いた研究報告を実践し、全員で質疑・討論を行う形で進める。

●到達目標

多様な史料にもとづいて地域の社会構造を明らかにするための視点や方法の修得をめざす。

●授業内容・授業計画

扱う史料や報告内容・報告順などについては、第1回目に受講生と相談のうえ決める。
必要に応じて、授業で取り上げた地域のフィールドワーク（まち歩き）なども実施する。

第1回 ガイダンス
第2回 報告その 1
第3回 報告その 2
第4回 報告その 3
第5回 報告その 4
第6回 報告その 5
第7回 報告その 6
第8回 報告その 7
第9回 報告その 8
第10回 報告その 9
第11回 報告その10
第12回 報告その11
第13回 報告その12
第14回 報告その13
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

受講生は、各自の関心と課題設定に沿って、取り上げるべき史料や先行研究を随時、収集し精読・検討しながら報告の準備を行うとともに、報告後も次の報告や学期末の最終レポートに向けて先行研究や史料の検討を継続的に行うこととする。

●評価方法

授業における報告や発言、レポートなどを総合的に評価する。

●受講生へのコメント

日本史学研究Ⅳとあわせて受講してください。

●参考文献・教材

授業のなかで随時、提示する。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2509	授業コード	LM02090010
日本史学研究Ⅴ Advanced Studies in Japanese History Ⅴ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 古野　貢			

●科目の主題

近年、中世後期の政治権力構造についての研究は、戦国大名権力に収斂する「大名」、およびそれに準じる領主権力の存在形態の追求を中心に行われている。かつて戦国大名論を相対化するために「守護」権が果たした役割や機能に着目して戦国期までを見通す「戦国期守護」論が提起されが、現在では守護権が当該期社会や政治構造に果たした役割への評価は後景に退いている。

本科目では、「守護」を当該期権力の存在形態と役割や機能規定した存在として措定し、その当該期における役割や機能をあらためて検討することで、中世後期社会の政治構造の再構成し、あらためて評価することを目指す。″

●到達目標

中世社会の政治構造における「守護」権について、中世前期に設置された段階のあり方を確認する。

室町幕府成立以後の「守護」権」について、時期的な変化・変質と、室町期以降成立する守護家（守護分国）ごとの実態・特質（「国成敗権」の中身）について、具体的に理解する。

中世後期社会における「守護」権の役割や意味について確認したうえで、時代理解の素材として活用（表現）できる。

●授業内容・授業計画

第1回　導入　中世後期の政治史研究で「守護」を取り上げる意味
第2回　鎌倉・南北朝期の守護ー中世前期ー
第3回　室町幕府と守護ー「天下成敗権」と「国成敗権」ー
第4回　「国成敗権」の中身ー各守護の実態①　細川氏ー
第5回　「国成敗権」の中身ー各守護の実態②　畠山氏ー
第6回　「国成敗権」の中身ー各守護の実態③　六角氏ー
第7回　「国成敗権」の中身ー各守護の実態④　斯波氏ー
第8回　「国成敗権」の中身ー各守護の実態⑤　赤松氏ー
第9回　「国成敗権」の中身ー各守護の実態⑥　仁木氏ー
第10回　「国成敗権」の中身ー各守護の実態⑦　大内氏ー
第11回　「国成敗権」の中身ー各守護の実態⑧　九州地方ー
第12回　「国成敗権」の中身ー各守護の実態⑨　関東地方ー
第13回　「国成敗権」の評価ー戦国期大名権力とのかかわりー
第14回　まとめ　中世後期社会において「守護」とは何であったか
第15回　試験

授業中に内容や自分の意見をまとめるペーパーを配布し、毎授業終了後回収する。次回授業で論点や課題を提示して説明や意見表明を求める。

●事前・事後学習の内容

授業前に次回講義にかんする資料を配布する。事前に内容を確認し、授業内容の理解を深めるための準備をしておくこと。

●評価方法

第15回目に実施する試験（50％）
講義時間中に実施する確認への回答（25％）
授業への取り組み・ペーパーの内容（25％）

●受講生へのコメント

講義対象はもちろん、その周辺領域にも問題関心をもって取り組むこと。

●参考文献・教材

授業中に適宜資料を配布する。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2510	授業コード	LM02100010
日本史学研究VI Advanced Studies in Japanese History VI			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	廣川　和花			

●科目の主題

「近代日本における医療と公衆衛生のシステム形成」というテーマのもと、近世末から戦時期までの日本の医療と公衆衛生のシステムがどのように立ち現れてくるのかを地域社会に着目して論じる。

●到達目標

近代日本の地域社会における医療をめぐる諸問題の展開を歴史的文脈のなかで理解し、それらを現代社会とのつながりの中でとらえ直すことができるようになることを目標とする。

●授業内容・授業計画

・授業内容

近代日本の疾病構造とそれへの対策は、幕末から明治初期に焦眉の公衆衛生的課題となったコレラやペストなどの襲来型急性感染症に始まり、次いで急速な都市化・産業化の下で深刻化した腸チフスなど消化器系の常在型急性感染症との闘いなどを経て、明治末期からはハンセン病や結核、花柳病などの慢性感染症対策にも目が向けられるようになる。すなわち、疫学転換にともなって政策の焦点も移り変わったといえる。

本講義では、近代日本の地域社会において、人々が経験した病や健康に関わる諸問題の検討と、それへの対応として形成されてくる医療と公衆衛生のシステムを分析し、近代日本の医療と公衆衛生が形成されてくる歴史をとらえる枠組みを提示する。その際には、近世・近代の連続性と断絶性の両方に着目し、近代日本の医療・公衆衛生のシステムが、いつどのように形成されてきたのか、「福祉国家」としての日本の諸制度の特徴はどのような点にあるのかを明らかにしたい。

・授業計画

1　医療と公衆衛生システム形成の史学史
2　人々の「病の経験」をとらえる方法としての「疫学的遺産」
3　コレラ流行と日本の地域社会（1）
4　コレラ流行と日本の地域社会（2）
5　梅毒罹患と地域社会
6　「病院」というシステムの導入
7　「医師の近代化」と「開業医集団」の成立
8　「医療の社会化」を求める運動
9　開業医批判と「無医村」問題
10　1920～30年代における医師の地域的偏在
11　疫学転換とそれにともなう衛生行政の転換点
12　「社会国家」の諸問題
13　戦時社会政策と「日本型福祉国家」
14　「日本型福祉国家」と医療・公衆衛生システム
15　期末試験と講評

●事前・事後学習の内容

事前・事後学習については、毎回の授業で事前・事後学習のポイントと課題を提示する。
主として配布プリント（レジュメと資料プリント）を用いた事後学習について指示する。

●評価方法

小レポートと学期末試験により評価する。

●受講生へのコメント

地域社会と人々の健康という身近な問題から、日本の近世から近代の歴史を考えてみましょう。歴史学以外の専攻の受講生も歓迎します。

●参考文献・教材

・猪飼周平『病院の世紀の理論』有斐閣、2010年
・川上武『現代日本医療史』勁草書房、1965年
・杉田菜穂『人口・家族・生命と社会政策―日本の経験』法律文化社、2010年

・高岡裕之「「医師の近代化」と地域的分布―「医療環境の社会史」を考えるために」『歴史科学』199号、2009年
・高岡裕之『総力戦体制と「福祉国家」―戦時期日本の「社会改革」構想―』岩波書店、2011年
・川越修・友部謙一編『生命というリスク―二〇世紀社会の再生産戦略―』法政大学出版局、2008年
・永島剛「感染症統計にみる都市の生活環境―大正期東京の腸チフスを事例として―」『三田学会雑誌』97巻4号、2005年
・二谷智子「1879年コレラ流行時の有力船主による防疫活動―宮林彦九郎家の事例―」『社会経済史学』75巻3号、2009年
・脇村孝平「医療・公衆衛生システム」社会経済史学会編『社会経済史学会創立80周年記念　社会経済史学の課題と展望』有斐閣、2012年所収
・渡辺理絵「近世農村社会における天然痘の伝播過程：出羽国中津川郷を事例として」『地理学評論』83巻3号、2010年
Ehlers, M. Give and Take: Poverty and the Status Order in Early Modern Japan, Cambridge: Harvard University Asia Center, 2018.
Suzuki, A. “Smallpox and the Epidemiological Heritage of Modern Japan: Towards a Total History,” Medical History, 55, 2011.
以上のほか、授業のなかで随時、提示する。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2511	授業コード	LM02110010	
考古学研究 Advanced Studies in Archaeology				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	岸本　直文				

●科目の主題

修士論文の研究内容を固めることを意識し、各自の研究テーマに即して関連ある考古学的成果を取り上げ、先行研究について理解を深める。

●到達目標

各自の研究テーマとしている時代や地域あるいは分野についての考古学研究について、先行研究の成果を学習し、どういった研究があるのか、どのような資料があるのか、研究上の課題は何かといった点を整理する。

●授業内容・授業計画

3回程度の発表を予定する。その内容について参加者で討論し、そのなかから次回の発表について考えていく。

第1回 受講者の研究テーマによる考古学的課題の指導
第2回 受講者の研究についての発表と質疑(1)
第3回 受講者の研究についての発表と質疑(2)
第4回 受講者の研究についての発表と質疑(3)
第5回 受講者の研究テーマによる考古学的課題の設定
第6回 先行研究の把握(1)
第7回 先行研究の把握(2)
第8回 先行研究の把握(3)
第9回 先行研究の把握(4)
第10回 先行研究を踏まえての課題設定の相談
第11回 研究課題の整理(1)
第12回 研究課題の整理(2)
第13回 研究課題の整理(3)
第14回 研究課題の整理(4)
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

発表に際して、1回ごとに取り組む課題を十分に計画し、それにむかって準備すること。発表に際して、冒頭で、自分の目的意識と今回の発表内容の選択について説明すること。発表後、質疑をふまえ発表内容について振り返り、理解や認識について整理しておくこと。

●評価方法

発表内容、質疑への参加状況を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

修士論文を意識し、発表機会を生かして自分の研究を深めていくよう、意欲的に取り組んでほしい。

●参考文献・教材

とくになし。必要に応じて参考文献を示す。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2512	授業コード	LM02120010
考古学研究演習 Advanced Studies and Seminar in Archaeology			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 岸本　直文			

●科目の主題

考古学研究を承けて、各自の研究テーマに即して関連ある考古学的課題を設定し、研究発表を通じて、考古学的な肉付けをすることを主題とする。

●到達目標

各自の研究テーマについて、地理情報など空間的な分析や、具体の遺跡や遺物の検討により、考古学的な観点を加味した総合化を試みる。

●授業内容・授業計画

設定した考古学的課題について、関連する考古資料を取り上げ、関係する遺跡や遺物の先行研究に学びつつ、発掘調査報告書などを用いて独自に吟味し研究発表を行う。その内容について参加者で討論し、そのなかから次回の発表について考えていく。3回の発表を予定している。

第1回 受講者との課題に関する指導
第2回 受講者の発表1回目(1)
第3回 受講者の発表1回目(2)
第4回 受講者の発表1回目(3)
第5回 受講者の発表1回目(4)
第6回 和泉市合同調査の検討(1)
第7回 受講者の発表2回目(1)
第8回 受講者の発表2回目(2)
第9回 受講者の発表2回目(3)
第10回 受講者の発表2回目(4)
第11回 和泉市合同調査の検討(2)
第12回 受講者の発表3回目(1)
第13回 受講者の発表3回目(2)
第14回 受講者の発表3回目(3)
第15回 受講者の発表3回目(4)

●事前・事後学習の内容

発表に際して、1回ごとに取り組む課題を十分に計画し、それにむかって準備すること。発表に際して、冒頭で、自分の目的意識と今回の発表内容の選択について説明すること。発表後、質疑をふまえ発表内容について振り返り、理解や認識について整理しておくこと。

●評価方法

発表内容質疑への参加状況を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

修士論文を意識し、発表機会を生かして自分の研究を深めていくよう、意欲的に取り組んでほしい。途中、和泉市合同調査の成果についての検討の場を設けることがある。

●参考文献・教材

とくになし。必要に応じて参考文献を示す。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2513	授業コード	LM02130010	
日本史学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Japanese History Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	仁木　宏／岸本　直文／佐賀　朝／磐下　徹				

●科目の主題

日本史学研究法（研究計画立案）。

●到達目標

日本史学研究法の基礎を学び、考古学から古代・中世・近世・近現代にわたる日本史の総合的な研究遂行能力を養成することをめざす。

●授業内容・授業計画

受講生各自が研究テーマの設定と研究計画を立案する基礎能力を獲得するため、担当教員が分担して各時代・分野の研究状況について講ずる。その上で、受講生の関心にしたがっていくつかの研究テーマを設定し、それに関する専門書や学術論文の体系的かつ批判的検討を行う。

●事前・事後学習の内容

受講生は、各自の関心と課題設定に沿って、取り上げるべき先行研究を収集し精読しながら報告の準備を行う。報告後も研究史と課題の整理を行い、学期末の最終レポートとして、自らの研究計画を提出することとする。

●評価方法

平常点（出席と研究報告・レポート）。

●受講生へのコメント

具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

必要な資料はコピー等で配付する。
参考文献は授業時間に指示する。

授業科目名	科目NO.	LAJPH2514	授業コード	LM02140010	
日本史学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Japanese History Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	仁木　宏／岸本　直文／佐賀　朝／磐下　徹				

●科目の主題

日本史学研究法（史料）。

●到達目標

日本史学研究法を史料の点から論じ、考古学から古代・中世・近世・近現代にわたる日本史の基礎的な史料分析能力を養成することをめざす。

●授業内容・授業計画

受講生が日本史の研究能力の基盤をなす史料分析能力を広く身につけるため、担当教員が分担して各時代・分野の史資料の特徴について講ずる。その上で、受講生の関心を考慮して対象史料を選定し、具体例を通じて各時代・分野の歴史史料の調査・読解・分析の基礎能力の高度化をはかる。

●事前・事後学習の内容

受講生は、各自の関心と課題設定に沿って、取り上げるべき一次史料を収集・分析して報告の準備を行う。報告後も関連史料の収集・分析を行い、学期末の最終レポートとして、自らの研究ノートを提出することとする。

●評価方法

平常点（出席と研究報告・レポート）。

●受講生へのコメント

日本史学総合研究Ⅰを履修していることが望ましい。
具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

必要な資料はコピー等で配付する。
参考文献は授業時間に指示する。

授業科目名	科目NO.	LAJPH3601	授業コード	LM02150010
日本史学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Japanese History Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	仁木　宏／岸本　直文／佐賀　朝			

●科目の主題

日本史に関する修士論文作成の指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「日本史学研究指導1」（前期）、「日本史学研究指導2」（後期）の指導によって完成させる。

前期の「日本史学研究指導1」では、1年次までの学修に基づき、修士論文の執筆計画を立て、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文執筆計画を立て実施する
(2)問題意識を整理し、研究課題の学術的意義を提示する
(3)研究目的に応じた適確な課題を設定する
(4)研究課題に応じた適切な研究方法を計画する
(5)研究課題に応じた先行研究の読み込みを行う
(6)研究課題に応じた実験結果、調査結果、文献資料を蓄積する
(7)修士論文研究に関わる研究倫理について考える

●授業内容・授業計画

第1回　オリエンテーション；修士論文とは何か（確認）、日本史学の方法論（確認）、修士論文研究・執筆計画について、修士論文の評価規準・基準について

第2～5回　修士論文構想発表会（連続4コマ）；テーマに関する問題意識の整理。予想される（期待している）結論。研究方法の目処。同学年他学年の学生、複数の教員との質疑応答から学ぶ

第6回　研究計画に即して研究倫理を考える

第7回　先行研究の読み込み

第8回　「先行研究の整理」の意義と方法

第9回　修士論文の章立て

第10回　実験、調査、文献分析の計画と結果の予想

第11～14回　修士論文中間発表会―章立ての仮決定のために―（連続4コマ）；問題意識の提示。論証しようとしていること（仮の結論）。論証のための方法とその目処。章立て。これからの課題

●事前・事後学習の内容

毎回、課題の準備と復習を行う。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

●受講生へのコメント

修士論文は長丁場の取り組みであり、山もあれば谷もある。そこを乗り越えて頑張ってほしい。

●参考文献・教材

プリント配布。

授業科目名	科目NO.	LAJPH3602	授業コード	LM02160010
日本史学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Japanese History Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 仁木　宏／岸本　直文／佐賀　朝			

●科目の主題

日本史に関する修士論文作成の指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「日本史学研究指導1」（前期）、「日本史学研究指導2」（後期）の指導によって完成させる。

後期の「日本史学研究指導2」では、修士論文の仕上げに向けて、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文の評価規準と基準を知る

(2)執筆途上において、その時点の自分の修士論文を評価基準に準拠して点検する

(3)点検の結果を踏まえ、修士論文計画・執筆計画を修正しながら修士論文を完成させる

●授業内容・授業計画

第1回　修士論文の進捗状況の報告

第2回　修士論文の評価基準の確認

第3～6回　修士論文中間発表会（4コマ連続）；完成に向けての執筆方針の確認（研究方法論、課題設定、先行研究の整理、章立て等）。完成に向けての研究・執筆計画

第7回　修士論文中間発表会の振り返り

第8回　問題意識と学術的意義を扱う部分についての点検

第9回　研究目的に応じた課題設定を扱う部分について点検

第10回　研究手法の説明を扱う部分についての点検

第11回　先行研究を扱う部分についての点検

第12回　実験結果、調査結果、文献分析を扱う部分についての点検

第13回　論理の組み立てや一貫性に関する点検

第14回　学術論文としての表現、表記法等に関する点検

●事前・事後学習の内容

修士論文の準備を進める。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

「日本史学研究指導Ⅱ」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質が評価されるのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「日本史学研究指導Ⅱ」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は長丁場の取り組みであり、山もあれば谷もある。そこを乗り越えて頑張ってほしい。

●参考文献・教材

プリント配布。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000020	
修士論文（日本史） Master's Thesis（日本史）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	仁木　宏／岸本　直文／佐賀　朝				

●科目の主題

日本史学専修では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポリシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修独自の修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「日本史学研究指導1」「日本史学研究指導2」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1)修士論文は、日本史学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2)(評価基準)修士論文は以下の各項目について、日本史学分野における十分な水準を満たさなければならない。

(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、日本史学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、日本史学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、日本史学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3)(論文の体裁)修士論文は、論を展開する上で、日本史学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

修士論文は個別指導をうける。

●事前・事後学習の内容

個別指導の前後に自習する。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

日本史学専修においては、修士論文を重視しており、前期博士課程の学修成果を発揮するべくつとめてほしい。

●参考文献・教材

授業中に適宜、指示する。

授業科目名	科目NO.	LAWHE2501	授業コード	LM03010010
東洋史学研究Ⅰ Advanced Studies in Oriental History Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	平田　茂樹			

●科目の主題

中国史の主要な研究成果を学び、研究方法の習得を目指す。

●到達目標

日本の中国史研究は世界的に見て、極めて高い水準を有しています。これまでの先駆的な研究成果をたどりつつ、どのような研究視角からどのように研究を進めていくのかを習得することを目指していきます。

●授業内容・授業計画

日本の主要な研究成果を紹介し、その研究方法の習得を目指していきます。

1. イントロダクション：現在の中国史研究の状況
2. 内藤湖南の中国史研究
3. 桑原隲蔵の中国史研究
4. 加藤繁の中国史研究
5. 宮崎市定の中国史研究
6. 仁井田陞の中国史研究
7. 曽我部静雄の中国史研究
8. 周藤吉之の中国史研究
9. 西嶋定生の中国史研究
10. 宇都宮清吉の中国史研究
11. 谷川道雄の中国史研究
12. 斯波義信の中国史研究
13. 渡辺信一郎の中国史研究
14. まとめ

●事前・事後学習の内容

毎回、事前に読むべき論文を渡し、内容の理解に努めさせる。授業終了後においては、事前に予習した内容と授業の内容とを突き合わせ、正しい理解ができているのかを確認するために小レポートを提出させる。

●評価方法

レポート（100％）

●受講生へのコメント

研究史をたどることは自己の研究の視野を広げる上で、不可欠な作業です。しっかり予習をし、授業に臨むようにしてください。

●参考文献・教材

毎回、所定論文を配布。

授業科目名	科目NO.	LAWHE2502	授業コード	LM03020010	
東洋史学研究演習1 Advanced Seminar in Oriental History 1				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	平田　茂樹				

●科目の主題

中国史の各種史料についてその特徴を捉えるとともに、読解方法を習得することを目指す。

●到達目標

中国史の史料は、時代、領域において多様性を有し、基本的に取り扱える能力を有することが不可欠です。本授業では各種史料を読み解くことを目標として、演習形式で授業を進めていく。目標としては、中国史研究を進める上で高度な読解能力を身につけることを目指す。

●授業内容・授業計画

1. イントロダクション：中国史の史料概観
2. 正史
3. 実録
4. 会要
5. 起居注
6. 時政記
7. 公文書
8. 墓誌銘、神道碑、行状
9. 日記
10. 手紙
11. 筆記
12. 小説
13. 記、題跋、序
14. まとめ

●事前・事後学習の内容

授業では担当を決め、順番に史料を読み進めていきます。担当者は事前に十分な予習をし、レジュメを作成し、授業に臨むこととなります。

その他の受講者も同様に史料について十分な予習を行い、授業内での討論に臨めるように準備を行います。

授業後においては、授業内で示した課題について取り組み、定期的にその成果をレポートとして提出してもらいます。

●評価方法

平常点

●受講生へのコメント

毎回の取り組みが重要ですので、弛まず授業に臨むようにしてください。

●参考文献・教材

毎回配布。

授業科目名	科目NO.	LAWHE2503	授業コード	LM03030010	
東洋史学研究Ⅱ Advanced Studies in Oriental History Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	平田　茂樹				

●科目の主題

「南宋文集を用いた政治社会史研究」

●到達目標

宋代には数多くの文集が残されており、当時の政治や社会の実態を読み解く上での重要な史料となっている。今回は劉克荘『後村先生大全集 』の「題跋」を読み解く作業を通じて、南宋後半期の社会の実態を解析して行く。

●授業内容・授業計画

崔與之『宋丞相崔清献公全録』をテキストとし、担当を決め、順次、史料を読んでいくとともに、宋代社会のネットワークとコミュニケーションについて講義する。

第1回 宋代史概観
第2回 劉克荘とは？
第3回 理宗時代の政治
第4回「題跋」の選読1
第5回「題跋」の選読2
第6回「題跋」の選読3
第7回「題跋」の選読4
第8回「題跋」の選読5
第9回「題跋」の選読6
第10回「題跋」の選読7
第11回「題跋」の選読8
第12回「墓誌銘」の選読9
第13回「墓誌銘」の選読10
第14回 宋代社会のネットワークとコミュニケーション

●事前・事後学習の内容

毎回、授業で読む箇所を指定するので、事前に当該箇所を予習する。事後は、授業で講じたポイントを振り返るとともに、紹介した論文を読み、理解を深める。

●評価方法

平常点（100％）

●受講生へのコメント

文集を読んでいくことを通じて、漢文読解方法を身につけるとともに、宋代の社会構造の変化について学ぶことを目指してください。

●参考文献・教材

テキストはプリント配布。
参考文献は、『世界歴史大系中国史3　五代－元』（山川出版社）、平田茂樹『宋代政治構造研究』（汲古書院）。

授業科目名	科目NO.	LAWHE2504	授業コード	LM03040010	
東洋史学研究演習2 Advanced Seminar in Oriental History 2				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	平田　茂樹				

●科目の主題

呂中「皇朝中興大事記」選読。

●到達目標

宋代には数多くの歴史評論の史料が残されており、当時の政治実態を読み解く上での重要な史料となっている。今回は南宋の呂中が書き残した『皇朝中興大事記』を読み解く作業を通じて、南宋前半期の政治の実態を解明して行く。

●授業内容・授業計画

『皇朝中興大事記』をテキストとし、担当を決め、順次、史料を読んでいくとともに、南宋初期の政治構造について講義する。

第1回 ガイダンス
第2回『皇朝中興大事記』第一部選読
第3回『皇朝中興大事記』第二部選読
第4回『皇朝中興大事記』第三部選読
第5回『皇朝中興大事記』第四部選読
第6回『皇朝中興大事記』第五部選読
第7回『皇朝中興大事記』第六部選読
第8回『皇朝中興大事記』第七部選読
第9回『皇朝中興大事記』第八部選読
第10回『皇朝中興大事記』第九部選読
第11回『皇朝中興大事記』第十部選読
第12回『皇朝中興大事記』第十一部選読
第13回『皇朝中興大事記』第十二部選読
第14回『皇朝中興大事記』第十三部選読

●事前・事後学習の内容

毎回、授業で読む箇所を指定するので、当該箇所を予習する。事後は授業で講じたポイントを振り返るとともに、紹介した論文を読むことを通じて、理解を深める。。

●評価方法

平常点（100％）

●受講生へのコメント

白文の漢文史料を読んでいくことを通じて、漢文読解方法を身につけるとともに、宋代の政治構造の変化について学ぶことを目指してください。

●参考文献・教材

テキストはプリント配布。参考文献は、『世界歴史大系中国史3　五代－元』（山川出版社）、平田茂樹『宋代政治構造研究』（汲古書院）。

授業科目名	科目NO.	LAWHE2505	授業コード	LM03050010	
東洋史学研究Ⅲ Advanced Studies in Oriental History Ⅲ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	渡辺　健哉				

●科目の主題

王国維『蒙韃備録箋證』選読

●到達目標

『蒙韃備録箋證』を選読することを通じて、高度な漢文史料読解能力を身につけるとともに、史料を通じて問題を発見し、それを分析する能力を身につけることを目指す。

●授業内容・授業計画

第01回　ガイダンス
第02回『蒙韃備録箋證』(1)
第03回『蒙韃備録箋證』(2)
第04回『蒙韃備録箋證』(3)
第05回『蒙韃備録箋證』(4)
第06回『蒙韃備録箋證』(5)
第07回『蒙韃備録箋證』(6)
第08回『蒙韃備録箋證』(7)
第09回『蒙韃備録箋證』(8)
第10回『蒙韃備録箋證』(9)
第11回『蒙韃備録箋證』(10)
第12回『蒙韃備録箋證』(11)
第13回『蒙韃備録箋證』(12)
第14回　総括と討論

●事前・事後学習の内容

本授業では中国近世史に関連する研究論文(日本語・中国語)をしばしば紹介するので、事前に授業で読む史料について予習をするとともに、それらの論文を講読しておく。また授業の終了後、受講生は関連論文及び授業内容について振り返り、理解を深める。

●評価方法

平常点(100%)

●受講生へのコメント

本授業では中国近世史および北アジア史の様々な課題を扱います。受講生自身がそれぞれの専門に照らして自ら各種問題について調べ、意見を述べられるようにしてください。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

授業科目名	科目NO.	LAWHE2506	授業コード	LM03060010	
東洋史学研究演習3 Advanced Seminar in Oriental History 3				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	渡辺　健哉				

●科目の主題

王国維『黒韃事略箋證』選読

●到達目標

中国近世の史料に関する理解力と分析力を身につけるため、王国維『黒韃事略箋證』を選読していく。また同時に、モンゴルの風土を実際に目にした南宋の使者の記録を通じて、異文化理解も学ぶ。

●授業内容・授業計画

第01回　ガイダンス
第02回『黒韃事略箋證』(1)
第03回『黒韃事略箋證』(2)
第04回『黒韃事略箋證』(3)
第05回『黒韃事略箋證』(4)
第06回『黒韃事略箋證』(5)
第07回『黒韃事略箋證』(6)
第08回『黒韃事略箋證』(7)
第09回『黒韃事略箋證』(8)
第10回『黒韃事略箋證』(9)
第11回『黒韃事略箋證』(10)
第12回『黒韃事略箋證』(11)
第13回『黒韃事略箋證』(12)
第14回　総括と討論

●事前・事後学習の内容

事前に関連の史料を調べておくこと。事後には授業で討論したポイントを振り返り、遊牧社会についての理解を深める。

●評価方法

平常点(100%)

●受講生へのコメント

史料に基づいて論理を構成する能力を身につけるようにしてください。

●参考文献・教材

プリント配付

授業科目名	科目NO.	LAWHE2507	授業コード	LM03070010
東洋史学研究Ⅳ Advanced Studies in Oriental History Ⅳ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	上野　雅由樹			

●科目の主題

オスマン帝国の社会文化史に関する英文研究文献を輪読する。

●到達目標

西アジア史分野の高度な専門文献で論じられている内容を正確に説明でき、その内容について批判的な観点から疑問点を提示できる。

●授業内容・授業計画

この授業では、オスマン帝国期の服飾に関する研究文献を輪読する。

1. ガイダンス
2. なぜ服装か
3. 文献史料と図像史料
4. 服装と公序
5. 宗教と服装
6. 生地の使用
7. 近世のファッション
8. 家族写真
9. 貧困とのみの市
10. 史料解釈の問題
11. 服装と社会秩序
12. アイデンティティ
13. 自己表現
14. 文化接触

●事前・事後学習の内容

事前に課題文献を読み、疑問点や問題点を整理しておくこと。事後学習として、各回の読解内容を読み返し、自身の理解を整理すること。

●評価方法

演習形式で行うため、平常点のみで評価する。

●受講生へのコメント

講読文献で扱われている内容を自分の興味関心に引き付けて読んでいって下さい。

●参考文献・教材

講読文献は配布する。参考文献として以下のものをあげる。

Suraiya Faroqhi and Christoph K. Neumann eds,*Ottoman Costumes*: From Textile to Identity, Eren, 2004.

授業科目名	科目NO.	LAWHE2508	授業コード	LM03080010
東洋史学研究演習4 Advanced Seminar in Oriental History 4			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	上野　雅由樹			

●科目の主題

近世世界のアルメニア人商人に関する英文文献を輪読する。

●到達目標

近世西アジア史に関する高度な専門文献で論じられている内容を正確に説明できる、その内容について批判的な観点から疑問点を提示できる。

●授業内容・授業計画

近世アルメニア人商人に関する文献を輪読する。

1. ガイダンス
2. From Trade Diasporas to Circulation Societies
3. Old Julfa, the Great Deportations, and the Founding of New Julfa
4. The World of Indian Ocean
5, 6. The Mediterranean, Northwestern European, and Russian Networks
7, 8. Business Correspondence and the Courier System
9, 10. The Circulation of Men and Credit
11, 12. Trust, Social Capital, and Networks
13. The Decline and Collapse of the Julfan Trade Network
14. Comparative Thoughts on Julfan Armenians

●事前・事後学習の内容

事前学習として、報告者が取り上げる箇所に事前に目を通して内容を確認し、疑問点をあげておくこと。事後学習として、取り上げられた箇所を再読し、各自の理解を再確認すること。

●評価方法

演習形式の授業であるため、平常点のみで評価する。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

Sebouh David Aslanian,*From the Indian Ocean to the Mediterranean*: *The Global Trade Networks of Armenian Merchants from New Julfa*, University of California Press, 2011.

Ina Baghdiantz McCabe, *The Shah's Silk for Europe's Silver: The Eurasian Trade of the Julfa Armenians in Safavid Iran and India,* 1530-1750, Scholars Press, 1999.

授業科目名	科目NO.	LAWHE2509	授業コード	LM03090010	
東洋史学研究Ⅴ Advanced Studies in Oriental History Ⅴ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
講義	松本　保宣				

●科目の主題

中国中世の歴史のうち、唐王朝の政治制度について理解する。

●到達目標

日本古代史と関連する中国王朝の諸制度について理解し、東アジアの文明に対する理解を深め、歴史に対する知見と探究心を涵養し、独創的な発見を見出せるようになる。

●授業内容・授業計画

講義形式で、唐王朝の政治制度について基本事項を概説し、その上で最新の研究成果を教授し、受講生と質疑応答・討論を行う。

第1回:オリエンテーション、中国の歴史の特色について解説する。
第2回:隋唐史概説
第3回:唐代官制史
第4回:中国中世の都城
第5回:長安と洛陽の解説(1):建設理念
第6回:長安と洛陽の解説(2):唐代における変容
第7回:唐代の宮城の構造
第8回:文書制度と宮城
第9回:宮城と直訴
第10回:唐代聴政制度(1):唐代前半期の聴政
第11回:唐代聴政制度(2):唐代後半期の聴政
第12回:皇帝と聴政(1):文宗皇帝の場合
第13回:皇帝と聴政(2):宣宗皇帝の場合
第14回:唐代朝儀の構造:入閤とはなにか
定期試験は実施しない。

●事前・事後学習の内容

授業1週間前に、次回の講義に関する資料を配布する。必ず事前に内容を確認し、授業に臨むこと。また、授業のはじめに前回の講義内容について予習する。各自講義の要点をまとめるなど、準備を欠かさないようにすること。

●評価方法

定期試験に代わるレポート(100%)

●受講生へのコメント

本講義に関連して、中国史の概説科目を受講していることが望ましい。
また、各自概説書を読み、基本的な知識を習得すること。

●参考文献・教材

テキスト
特になし
参考書・参考資料等
松本保宣『唐王朝の宮城と御前会議―唐代聴政制度の展開』;晃陽書房;2006年

授業科目名	科目NO.	LAWHE2510	授業コード	LM03100010
東洋史学研究Ⅵ Advanced Studies in Oriental History Ⅵ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	前田 弘毅			

●科目の主題

サファヴィー帝国の画期であるアッバース一世による国制改革の詳細について論じる。また、この改革で活躍した「王の奴隷」を政治的・文化的・宗教的「境界」を越えた集団の観点から捉え直す。ペルシア語史料のみならずジョージア／グルジア語史料を利用することで出身地コーカサスの視点を取り入れ、イスラーム世界の「奴隷軍人論」を再考する。

●到達目標

サファヴィー帝国とその周辺世界に関する研究に基づく専門的な知識を修得し、バランスのとれた視点から近世以降の世界史について説明することが出来る。

●授業内容・授業計画

授業計画

第1回:イントロダクション・「越境」という視点
第2回:アーリー・モダンの帝国
第3回:「イラン史」の誕生
第4回: ペルシア語・ジョージア／グルジア語史料の伝統と意義
第5回:ポスト・モンゴル時代のユーラシア史とサファヴィー朝の成立
第6回: シャー・アッバースの時代(1)国制改革の経緯・「異人」登用による集権化
第7回: シャー・アッバースの時代(2)帝都建設・強制移住・ハウスホールド帝国の建設
第8回: イタリア人旅行者の見たイラン社会
第9回:「奴隷軍人」論の虚実
第10回:「王の奴隷」軍団の実像
第11回: ギオルギ・サアカゼの「闘い」
第12回: アルチル二世の「憂鬱」
第13回: バラタシュヴィリ家の「サーガ」
第14回:「越境」と「異人」の世界史
定期試験

●事前・事後学習の内容

事前に教科書や参考図書等を通じて基本的事項を理解しておくこと。授業中に紹介する専門文献を通して事後の学習で理解を深めること。

●評価方法

定期試験

●受講生へのコメント

世界の歴史は常につながっています。また、人類社会の歴史には共通点が多々あります。中東イスラーム世界のみならず、中央ユーラシア、ロシア・東欧、地中海世界他、多様な地域に関心を持つ学生の参加を歓迎します。

●参考文献・教材

永田雄三・羽田正『成熟のイスラーム社会』中央公論社、1998年。
羽田正『勲爵士シャルダンの生涯:17世紀のヨーロッパとイスラーム世界』中央公論新社、1999年。
前田弘毅『イスラーム世界における奴隷軍人とその実像』明石書店、2009年。
清水和裕『イスラーム史のなかの奴隷』山川出版社、2015年。
チャールズ・キング(前田弘毅監訳)『黒海の歴史』明石書店、2017年。

授業科目名	科目NO.	LAWHE2511	授業コード	LM03130010	
東洋史学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Oriental History Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	平田　茂樹／上野　雅由樹／渡辺　健哉				

●科目の主題

東洋史学の特徴を理解し、その長所を生かした研究について考える。

●到達目標

それぞれの研究テーマに即して、研究目的や方法を明確化する。

●授業内容・授業計画

東洋史学を総合的に理解するよう、基本的諸問題および史学史について、担当教員がそれぞれの専門分野にしたがって講ずる。あわせて、研究目的・方法を明確にし、修士論文の研究テーマの設定と研究計画の立案ができるよう、受講生にレポートや研究報告を求め、それに基づく討論を行う。

●事前・事後学習の内容

担当報告者は、事前に報告内容を準備させる。また、授業終了後、個別に報告者に指導を行い、課題について指示を与えて、取り組ませる。

●評価方法

出席（30％）と報告内容（70％）

●受講生へのコメント

自分の研究テーマだけでなく、ほかの受講生のテーマにも関心をもって、ディスカッションに参加できるようにしてください。

●参考文献・教材

随時紹介する。

授業科目名	科目NO.	LAWHE2512	授業コード	LM03140010	
東洋史学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Oriental History Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	平田　茂樹／上野　雅由樹／渡辺　健哉				

●科目の主題

受講生各自が研究テーマの特徴を理解したうえで、研究に取り組むことを考える。

●到達目標

研究状況の把握や史料収集方法に関する能力を高められるようにする。

●授業内容・授業計画

東洋史学の研究手法を総合的に理解するよう、基本的な専門書・論文の収集・読解・分析の仕方を、担当教員がそれぞれの専門分野にしたがって講ずる。あわせて、受講生各自のテーマにかんする史料の所在の確認・収集の仕方を指導し、受講生各自のレポートに基づいて、より高度な基礎能力を獲得できるよう討論を行う。終了時に、研究計画書の提出を求める。

●事前・事後学習の内容

担当報告者は、事前に報告内容を準備させる。また、授業終了後、個別に報告者に指導を行い、課題について指示を与えて、取り組ませる。

●評価方法

出席（30％）と報告内容（70％）

●受講生へのコメント

自分の研究テーマだけでなく、ほかの受講生のテーマにも関心をもって、ディスカッションに参加できるようにしてください。

●参考文献・教材

随時紹介する。

授業科目名	科目NO.	LAWHE3601	授業コード	LM03150010	
東洋史学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Oriental History Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	平田　茂樹				

●科目の主題

それぞれの研究計画に基づき史料の収集・読解・分析を行う。その際、史料解析の問題点を指摘し、データの整理の仕方を会得するよう努める。

●到達目標

修士論文の作成に必要とされる史料解析能力を習得させる。

●授業内容・授業計画

学生は研究テーマに応じて、授業並びに授業以外においても適宜、教員の指導を受ける。

●事前・事後学習の内容

報告担当者は入念な準備を行うと共に、授業終了後は、教員の個人指導を受け、その指示に従い、課題に取り組むようにさせる。

●評価方法

出席（30%）と報告内容（70%）

●受講生へのコメント

自分の研究テーマを相対化できるよう、幅広い知見をもってください。

●参考文献・教材

随時紹介する。

授業科目名	科目NO.	LAWHE3602	授業コード	LM03160010	
東洋史学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Oriental History Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	平田　茂樹				

●科目の主題

論文の構成、執筆上の問題点などを指摘しながら、論文の完成度を高める。

●到達目標

論文の完成に至るまで、緊密な個別指導と報告会を通じての共同指導を行う。

●授業内容・授業計画

学生はその研究テーマに応じて、授業（報告会）並びに授業以外も適宜、教員の指導を受ける。

●事前・事後学習の内容

報告担当者は入念な準備を行うと共に、授業（報告会）終了後は、教員の個人指導を受け、その指示に従い、課題に取り組むようにさせる。

●評価方法

出席（30％）と報告内容（70％）

●受講生へのコメント

自分の研究テーマを相対化できるよう、幅広い知見をもってください。

●参考文献・教材

随時紹介する。

指定しない

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000030	
修士論文（東洋史） Master's Thesis（東洋史）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	平田　茂樹				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポシシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「東洋史学研究指導1」「東洋史学研究指導2」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1)修士論文は、東洋史学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2)(評価基準)修士論文は以下の各項目について、東洋史学分野における十分な水準を満たさなければならない。

(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、東洋史学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、東洋史学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、東洋史学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3)(論文の体裁)修士論文は、論を展開する上で、東洋史学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

各回の授業内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「東洋史学研究指導1」「東洋史学研究指導2」のシラバスを参照すること。

●事前・事後学習の内容

事前・事後学習の内容は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「東洋史学研究指導1」「東洋史学研究指導2」のシラバスを参照すること。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「東洋史学研究指導1」は、修士論文を提出する年度の前期に、「東洋史学研究指導2」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。履修モデルとしての東洋史学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

授業科目名	科目NO.	LAGEM2501	授業コード	LM03170010	
世界史学研究 Lecture on World History				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	野村　親義				

●科目の主題

1990年代前半以降の本格的な経済自由化とその後のおおよそ順調といえる経済の発展により、10億を超える人口を抱える巨大なインド経済は、ここ10数年世界の注目を浴びてきた。2000年代半ば以降チャイナ・リスクを本格的に意識するようになった日本も、近年、遅ればせながら、世界中が熱い視線を向けるインド経済の動向に関心を向けるようになっている。本科目の主題は、近年とみに注目を集める独立(1947年)後インド経済の概要を、近現代の政治・経済の歴史に十分配慮しながら、概観することである。

●到達目標

到達目標は、独立後インド経済における基本的な論点を習得することである。

●授業内容・授業計画

1. 導入
2. 植民地支配からの独立:政治
3. 植民地支配からの独立:経済
4. インド経済概観:供給サイドを軸に(1)
5. インド経済概観:供給サイドを軸に(2)
6. インド経済概観:需要サイドを軸に(1)
7. インド経済概観:需要サイドを軸に(2)
8. 経済政策:輸入代替工業化(1950年代から1970年代)
9. 経済政策:輸入代替工業化と農業
10. 経済政策:輸出加工型業化(1980年代以降)
11. 輸出加工型工業化と企業
12. 輸出加工型工業化とその課題
13. 独立後インド政治:概要と制度
14. まとめ

●事前・事後学習の内容

事前にインド関連の新聞記事等に目を通しておくこと。

●評価方法

試験で評価する。

●受講生へのコメント

近年急速に注目を集めているインド経済の動向を正確に理解するには、インドが1947年に独立して以降たどってきた歴史に対する深い理解が不可欠である。現代と過去のインド経済に対する深い関心を持ちつつ授業に参加することを期待する。

●参考文献・教材

特になし

授業科目名	科目NO.	LAWEW2503	授業コード	LM04010010	
西洋史学研究 I Advanced Studies in Western History I				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
講義	藤井　崇				

●科目の主題

碑文から見るローマ帝国史

●到達目標

ローマ帝国の歴史（おおよそ前3世紀末から古代末期まで）を、主要な一次史料である（おもにギリシア語）碑文を通じて理解できるようになる。

●授業内容・授業計画

第1回　イントロダクション
第2回　ヘレニズム世界とローマ帝国
第3回　内乱の世紀
第4回　アウグストゥスの革命
第5回　ローマ人になる
第6回　皇帝崇拝
第7回　皇帝の仕事
第8回　都市自治
第9回　スペクタクルの世界
第10回　古代版グローバル世界 I
第11回　古代版グローバル世界 II
第12回　辺境と軍隊
第13回　宗教
第14回　授業中試験

●事前・事後学習の内容

授業開始までに古代ギリシア語のアルファベットを読めるようにしておくこと（文法知識は必要ありません）。事後学習として、授業中に使用した資料の復習を十分に行うこと。

●評価方法

授業中（第14回）に行う筆記試験（100%）で評価する。

●受講生へのコメント

上記の授業計画は、若干の内容変更があり得ることをご理解ください。

●参考文献・教材

主要な資料は授業中に配布する。参考文献としては、クリストファー・ケリー著（藤井崇訳）『ローマ帝国』岩波書店（2010年）ならびに南川高志編『B.C. 220年：帝国と世界史の誕生』山川出版社（2018年）がある。

授業科目名	科目NO.	LAWEW2505	授業コード	LM04030010
西洋史学研究Ⅱ Advanced Studies in Western History Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 講義／演習	担当教員名 草生　久嗣			

●科目の主題

中世東地中海における文化的諸問題について、とりあげる。受講者の希望も踏まえたうえで、「書物・メディア論」・「宮廷文化論」・「地方行政論」・「政治教会問題」などを取り上げ、それぞれについての基本文献の検討・議論をもとに考察を深めてゆく。

●到達目標

身近ではなかった地域・テーマについても、基礎文献およびその研究手法、プレゼンについて習熟することにより、その研修成果を各自の研究展開に役立てる。

●授業内容・授業計画

第1回 イントロダクション：中世東地中海という課題
第2回 歴史文化概観I：後期ローマ史
第3回 歴史文化概観II：古代末期史・初期ビザンツ史
第4回 歴史文化概観III：ビザンツ史
第5回 思想文化概観I：多神教世界
第6回 思想文化概観II：一神教世界
第7回 思想文化概観III：ネオ＝プラトニズム・二元論世界
第8回 メディア論I：木簡、パピルス、獣皮紙、紙
第9回 メディア論II：アレクサンドリア図書館、宮廷書庫、個人コレクション
第10回 メディア論III："Bookmen"と知識人
第11回 メディア論IV：勅撰大叢書プロジェクト論
第12回 宮廷文化論I：ビザンツ席次・位階論
第13回 宮廷文化論II：ビザンツ儀礼空間論
第14回 宮廷文化論III：ビザンツ装束論

第8回から14回までのテーマ選択については、第2回から第6回までの基礎学習に基づいて再検討する余地がある。

●事前・事後学習の内容

各回において、文献の収集および検討、レジュメとしてのアウトプットの用意が求められる。その作法については、授業内で解説を行う。

●評価方法

平常点とレポートによる。

●受講生へのコメント

受講者の語学力にあわせ、英語に限らない外国語文献を検討するが、最低限、英語資料の丁寧な読解が報告担当者に求められる。

●参考文献・教材

授業中に指定する。

授業科目名	科目NO.	LAWEW2506	授業コード	LM04040010
西洋史学研究演習2 Advanced Seminar in Western History 2			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 草生　久嗣			

●科目の主題

中世東地中海世界における異端問題（ビザンツ史特論）

●到達目標

中世ヨーロッパ・ビザンツの信仰・社会について理解するカギを、史料の講読を通じて学ぶ。

●授業内容・授業計画

西洋中世史・ビザンツ史・中世異端史の最新有力論考や古典とされている文献を選択し、東方ビザンツ世界を題材としたものについて講読してゆく。担当者はその資料の精読・翻訳・要約を行って授業に臨む。（ただし、参加者の専門・意向に合わせた内容調整あり）

第1回 ガイダンス
第2回 (1)ビザンツ帝国の内と外
第3回 (1.1)『帝国統治論』(コンスタンティノス7世)
第4回 (1.2)"Byzantine Commonwealth" (オボレンスキー)
第5回 (1.3)まとめ
第6回 (2)ビザンツ帝国の異端対策
第7回 (2.1)ユスティニアノス帝の対異端政策(和田廣)
第8回 (2.2) How to Read Heresiology? (A.カメロン)
第9回 (2.3)まとめ
第10回 (3)二元論異端ーガイド
第11回 (3.1)異端の源流(ストヤノフ)
第12回 (3.2)カタリ派(渡邊昌美)
第13回 (3.3)まとめ
第14回 総括プレゼン

●事前・事後学習の内容

各回、担当者は指定された読書報告を行い、参加者はそれに合わせた情報補足や議論の整理を行う。課題となる文献は、必要なものが議論の流れにあわせて補われていく予定。テキストの内容把握にとどまらず、学会動向・技術的な知見も習得してもらう。

●評価方法

参加の姿勢および報告、提出課題に対する評価

●受講生へのコメント

西洋のキリスト教異端問題は、これまで西ヨーロッパにおける事例を軸に検討されてきましたが、同時期の東方世界、ビザンツ正教会世界にあっては別質の特徴ある姿をとっていました。思想・信仰に対する審判や弾圧、差別を再生産してゆく異端レッテルの機能など、歴史人類学および歴史社会学にもおよぶテーマとして扱うことで、ビザンツ帝国史研究に従来とは異なった形でアプローチしていこうと思います。

●参考文献・教材

検討対象文献：参照箇所などは授業中に指示する

・Dimitri Obolensky, 'The principles and methods of Byzantine diplomacy,' in Byzantium and the Slavs: Collected Studies, 1994, pp. 1-22.
・和田廣「ユスティニアヌス1世帝の異端迫害政策について」『史潮』20号(1986年)18～30頁
・草生 久嗣「ビザンツ帝国の異端対策--異端学と対策法規の分析から」『地中海学研究』25(2002年)27～48頁
・Andrs Nmeth,The Excerpta Constantiniana and the Byzantine Appropriation of the Past, Cambridge, 2018.
・Averil Cameron, 'How to Read Heresiology', "Journal of Medieval and Early Modern Studies", Volume 33, Number 3, Fall. 2003, pp. 471-492.・ユーリー・ストヤノフ著、三浦清美訳『ヨーロッパ異端の源流 カタリ派とボゴミール派』平凡社、2001年
・渡邊昌美『異端カタリ派の研究―中世南フランスの歴史と信仰』岩波書店、1989年

授業科目名	科目NO.	LAWEW2507	授業コード	LM04050010	
西洋史学研究Ⅲ Advanced Studies in Western History Ⅲ				単位数	2単位
授業形態 講義／演習	担当教員名 草生　久嗣				

●科目の主題

中世東地中海史講読

●到達目標

大学院レベルでの講読の機会は、語学実習でなく、それ自体が研究成果となる。中世東地中海史において、日本ではまだ紹介がなされていない優れた研究業績がある。その良質かつ適切な量の文献の精読を行い、翻訳および要約の技術を習得する。

●授業内容・授業計画

第1回 イントロダクション
第2回 参加者の自己紹介1(研究テーマ)
第3回 参加者の自己紹介2(読書ジャンル)
第4回 レクチャー1:講読と翻訳のスタイルについて
第5回 演習1:訳読
第6回 演習2:訳読
第7回 演習3:訳読
第8回 レクチャー2:註解について
第9回 演習4:訳読と註解
第10回 演習5:訳読と註解
第11回 演習6:訳読と註解
第12回 レクチャー3:編集について
第13回 演習7:編集作業
第14回 演習8:編集作業

●事前・事後学習の内容

電子辞書を用意し、翻訳作業にむけた作業体制を構築しておくこと。

●評価方法

訳稿の評価

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

以下については、現在硬軟とりあわせて出版が豊かにあるので、それぞれ自前の第二・第三外国語における知識をストックしておくのが望ましい。

・翻訳学の関連書(語学の教科書ではないので注意)
・文献学の関連書(校本・編集といった概念について)

授業科目名	科目NO.	LAWEW2508	授業コード	LM04060010	
西洋史学研究演習3 Advanced Seminar in Western History 3				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	北村　昌史				

●科目の主題

西洋中世・近世史の諸問題

●到達目標

西洋中世・近世史研究に不可欠な語学力、あるいは文献読解力を養う。

●授業内容・授業計画

受講生の関心と語学力を考慮して、日本語、あるいは英語、あるいはドイツ語文献の講読をおこなったのち、受講生による自由発表をおこなう。

第1回 授業の進め方についての説明
第2回 文献講読。
第3回 文献講読。
第4回 文献講読。
第5回 文献講読。
第6回 文献講読。
第7回 文献講読。
第8回 文献講読。
第9回 文献講読。
第10回 文献講読。
第11回 自由発表。
第12回 自由発表。
第13回 自由発表。
第14回 自由発表。
第15回自由発表。

●事前・事後学習の内容

予習復習は必須であるが、授業内容に応じて必要とされる学習はちがってくるので、授業において改めて指示する。

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

主体的な参加を求める。演習形式の授業では、教員は一言も言葉を発しないのが、担当者の理想である。

●参考文献・教材

受講生の関心に応じて、授業開始時点で決める。

授業科目名	科目NO.	LAWEW2509	授業コード	LM04070010	
西洋史学研究Ⅳ Advanced Studies in Western History Ⅳ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	北村　昌史				

●科目の主題

西洋近現代史をめぐる諸問題。前半3分の2は受講生の語学力や関心に応じて、英語ないしはドイツ語の研究書をもとに討論を行う授業をおこない、その後参加者による自由発表をおこなう。

●到達目標

高度な研究書を読み込んで議論を展開する能力を身につけ、自由発表によりその能力を実践する。

●授業内容・授業計画

研究書は未定。研究書ないしは論文を読む際には、毎回担当者を決めレジュメを作成してきていただいて、それをもとに報告していただく。それを受けて出席者で討論する。自由発表は受講生が現在関心を持っているテーマについて報告していただく。

第1回 ガイダンス
第2回 英語ないしはドイツ語の研究書
第3回 英語ないしはドイツ語の研究書
第4回 英語ないしはドイツ語の研究書
第5回 英語ないしはドイツ語の研究書
第6回 英語ないしはドイツ語の研究書
第7回 英語ないしはドイツ語の研究書
第8回 英語ないしはドイツ語の研究書
第9回 英語ないしはドイツ語の研究書
第10回 英語ないしはドイツ語の研究書
第11回 自由発表
第12回 自由発表
第13回 自由発表
第14回 自由発表
第15回自由発表

●事前・事後学習の内容

前半3分の2の事前学習は、予習をして、自分なりに内容を整理し、事後学習は、授業で議論された研究手法や歴史的事実について文献やインターネットなどで確認すること。自由発表の回については具体的な内容は指示できないが、他人の報告を聞いて自分の研究について様々な角度から見つめなおすこと。

●評価方法

平常点:100%

●受講生へのコメント

研究書に基づいて討論する授業では予習は必須。自由発表では、出席者は必ず質問すること。自分で授業を作るぐらいの気概で授業に出席すること。

●参考文献・教材

授業で適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LAWEW2510	授業コード	LM04090010
西洋史学研究演習4 Advanced Seminar in Western History 4			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 北村　昌史			

●科目の主題

西洋史をめぐる諸問題。歴史研究の土台である「史料」について検討する。担当教員および受講生が現在取り組んでいる史料をそれぞれ紹介し、その史料の持つ研究上の可能性を議論する。

●到達目標

「史料」のもつ可能性と限界についての議論を通じて、「史料」から何がわかるかについての感覚を身につける。

●授業内容・授業計画

担当教員がまず自分の「史料」をいくつか紹介し、それを受けて受講生による「史料」の紹介を行う。

第1回 ガイダンス
第2回 担当教員が検討している史料
第3回 担当教員が検討している史料
第4回 担当教員が検討している史料
第5回 担当教員が検討している史料
第6回 受講生が検討している史料
第7回 受講生が検討している史料
第8回 受講生が検討している史料
第9回 受講生が検討している史料
第10回 受講生が検討している史料
第11回 受講生が検討している史料
第12回 受講生が検討している史料
第13回 受講生が検討している史料
第14回 総括的議論
第15回総括的議論

●事前・事後学習の内容

事前・事後学習については、他人の「史料」をめぐる議論を聞いて自分の研究を様々な角度から見つめなおしてほしい。

●評価方法

平常点:100%

●受講生へのコメント

授業を自分が作るくらいの気概で臨んでほしい。

●参考文献・教材

とくになし。

授業科目名	科目NO.	LAWEW2512	授業コード	LM04110010
西洋史学研究VI Advanced Studies in Western History VI			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	伊藤　順二			

●科目の主題

後期ロシア帝国とコーカサス

●到達目標

ロシア帝国に関する基本的知識を習得し、帝国と植民地についての歴史的イメージを会得する。

●授業内容・授業計画

第1回　イントロダクション:「コーカサス人種」の地
第2回　「半アジア人」のロシア:ヨーロッパから俯瞰されるロシア
第3回　「半アジア人」のコーカサス:ロシアが俯瞰するコーカサス
第4回　ロシア帝国とオスマン帝国の狭間で:露土戦争
第5回　石油の帝国:バクーにおける石油産業の進展
第6回　石油と労働:社会主義的労働運動の進展
第7回　石油と未来:コスミズム思想とコーカサス1
第8回　山岳と瞑想:コスミズム思想とコーカサス2
第9回　1905年の義賊たち:農民運動と社会主義
第10回　排外主義:ロシア帝国とドイツ人・ユダヤ人・ムスリム
第11回　戦争と排除:第一次世界大戦とロシア帝国・オスマン帝国の民族政策
第12回　戦争と革命:アルメニア人強制移住、ソヴェト政権との対立
第13回　革命と共和国:「第一民主共和国」の崩壊
第14回　おわりに

●事前・事後学習の内容

事前学習として、イントロダクションで紹介する日本語文献を読んでおくことが望ましい。各講義後に分かりにくかった用語を各自調べておくこと。講義後の質問も歓迎する。

●評価方法

期末レポート80%，中間レポート20&

●受講生へのコメント

特になし

●参考文献・教材

授業中にプリントを配布する。

授業科目名	科目NO.	LAWEW2513	授業コード	LM04130010
西洋史学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Western History Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	北村　昌史／草生　久嗣			

●科目の主題

西洋史学研究法の基礎を学ぶ

●到達目標

参考図書の使い方、文献探索・収集の方法、史料読解法などについての基本的な技術を習得することをめざす。

●授業内容・授業計画

西洋史学に関する基本的な問題について、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマ(「ビザンツ史」、「近・現代ドイツ社会史」など)について、総合的に講じる。それと並行して各種研究方法について概説し、歴史資料の扱いについても講じる。また受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討論をする。

●事前・事後学習の内容

担当教員の指示する文献を事前に通読しておくこと。

●評価方法

平常点(出席と研究報告)。

●受講生へのコメント

具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

必要な資料はコピー等で配付する。
参考文献は授業時間に指示する。

授業科目名	科目NO.	LAWEW2514	授業コード	LM04140010
西洋史学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Western HistoryⅡ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	北村　昌史／草生　久嗣			

●科目の主題

西洋史研究法をより具体的に論じる。

●到達目標

西洋史学総合研究Ⅰで学んだ西洋史学研究法を各自の研究テーマに適用しつつ、修士論文作成へ向けて準備作業を進める。

●授業内容・授業計画

担当教員がそれぞれの専門分野における個別的テーマ(「ビザンツ帝国における異端問題」「19世紀ベルリン都市史」など)を取り上げて、研究史・研究方法について具体的に講じる。それと並行して受講生から、予定している修士論文のテーマとその概要について、あるいはそれに関わる研究について報告を求め、それに基づく討論をする。終了時に、研究計画書の提出を求める。

●事前・事後学習の内容

担当教員の指示する文献を事前に通読しておくこと。

●評価方法

平常点(出席と研究報告)

●受講生へのコメント

西洋史学総合研究1を履修していることが望ましい。
具体的な履修方法については指導教員の指示に従うこと。

●参考文献・教材

必要な資料はコピー等で配付する。
参考文献は授業時間に指示する。

授業科目名	科目NO.	LAWEW3601	授業コード	LM04150010	
西洋史学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Western History Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	北村　昌史／草生　久嗣				

●科目の主題

西洋史学に関する修士論文作成の指導を行なう。

●到達目標

学界が要求する水準の論文を完成することを目指す。

●授業内容・授業計画

論文テーマの設定、文献・史料の調査・収集、史料の分析、主題とそれを論じる研究方法の適合性、論文の構成、主題に即した論述の一貫性、論文の形式的な統一など、修士論文作成に必要な事項について指導し、論文完成に至らしめる。学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（草生久嗣教授） 主に、古代から中世にかけての研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

（北村昌史教授） 主に、近代から現代にかけての研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

報告前に資料の作成法について教員の指導を受けること。報告後は報告内容に対する教員の指摘に従って論文内容を再考すること。

●評価方法

平常点（出席と研究報告）。

●受講生へのコメント

論文内容とともに口頭によるプレゼンテーションの方法にも工夫してほしい。

●参考文献・教材

随時指示。

授業科目名	科目NO.	LAWEW3602	授業コード	LM04160010
西洋史学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Western History Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 北村　昌史／草生　久嗣			

●科目の主題

西洋史学に関する修士論文作成の指導を行なう。

●到達目標

学界が要求する水準の論文を完成することをめざす。

●授業内容・授業計画

論文テーマの設定、文献・史料の調査・収集、史料の分析、主題とそれを論じる研究方法の適合性、論文の構成、主題に即した論述の一貫性、論文の形式的な統一など、修士論文作成に必要な事項について指導し、論文完成に至らしめる。学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（草生久嗣教授）主に、古代から中世にかけての研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

（北村昌史教授）主に、近代から現代にかけての研究テーマに関わる修士論文の研究指導を行なう。

●事前・事後学習の内容

報告前に資料の作成法について教員の指導を受けること。報告後は報告内容に対する教員の指摘に従って論文内容を再考すること。

●評価方法

平常点（出席と研究報告）。

●受講生へのコメント

論文内容とともに口頭によるプレゼンテーションの方法にも工夫してほしい。

●参考文献・教材

随時指示。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000040	
修士論文（西洋史） Master's Thesis（西洋史）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	北村　昌史／草生　久嗣				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポシシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「西洋史学研究指導1」「西洋史学研究指導2」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1)修士論文は、西洋史学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2)(評価基準)修士論文は以下の各項目について、西洋史学分野における十分な水準を満たさなければならない。

【規準ごとの基準は現在教務委員会等で検討中であるので、以下は規準のみの記述】

(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、西洋史学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、西洋史学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、西洋史学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3)(論文の体裁)修士論文は、論を展開する上で、西洋史学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

なお、「修士論文」に連動するものとして、「西洋史学研究指導1」「西洋史学研究指導2」のシラバスを参照すること。

●事前・事後学習の内容

なお、「修士論文」に連動するものとして、「西洋史学研究指導1」「西洋史学研究指導2」のシラバスを参照すること。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「西洋史学研究指導1」は、修士論文を提出する年度の前期に、「西洋史学研究指導2」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。履修モデルとしての西洋史学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

指定しない。

授業科目名	科目NO.	LBGEN1501	授業コード	LM00030010
人間行動学研究Ⅰ Advanced Studies in Human Behavioral Sciences Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 進藤　雄三			

●科目の主題

「すべての歴史は現代史である」。この命題を基軸すえつつ、19世紀から現代にいたる社会学の歴史を、通史として概観する。

●到達目標

社会学という学問の成立、展開の歴史的経緯を理解するとともに、社会学の主題、分野、方法を基礎を習得することを目的とする。

●授業内容・授業計画

講義は下記のスケジュールで行う。

第1回 オリエンテーション
第2回 近代社会と啓蒙思想：ルソーからマルクスへ
第3回 近代社会の転換点
第4回マックス・ヴェーバー：行為論
第5回 ゲオルク・ジンメル：相互行為論
第6回 エミール・デュルケム：全体論
第7回 20世紀社会学へ：シカゴ学派とフランクフルト学派
第8回 アメリカ社会学の興隆：パーソンズと機能主義
第9回反旗1：交換理論、象徴的相互作用論
第10回 反旗2現象学的社会学とエスノメソドロジー
第11回 中間考察：構造機能主義以後のアメリカ社会学
第12回ヨーロッパ社会学：
第13回 現代の諸理論
第14回 現代社会学の課題
第15回 Coda

●事前・事後学習の内容

【事前学習】特段の次善学習は求めません。
【事後学習】各授業の冒頭、前回授業復習の時間を設けます。

●評価方法

授業参加度10点、コメント20点、小レポート20点、期末レポート50点、計100点満点で評価します。

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

テキストは使用しない・毎回プリントを配布し、文献は随時指示する・
参考文献：大澤真幸『社会学史』講談社現代新書(2019)　土井文博『はじめて学ぶ社会学』ミネルヴァ書房
富永健一『思想としての社会学』新曜社(2008)

授業科目名	科目NO.	LBGEN1502	授業コード	LM00040010	
人間行動学研究Ⅱ Advanced Studies in Human Behavioral Sciences Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
講義	森口　佑介				

●科目の主題

発達認知神経科学論

●到達目標

認知発達とその脳内機構を理解する

●授業内容・授業計画

1.イントロダクション
2.認知発達理論小史
3.脳の基礎知識
4.脳の発達
5.実行機能
6.実行機能の発達
7.実行機能の発達の個人差
8.実行機能の介入
9.自己認識
10.自己認識の発達
11.心の理論の発達
12.想像力
13.メンタルタイムトラベル
14.まとめ

●事前・事後学習の内容

授業までに参考書に目を通しておくこと。各授業の前後にそれぞれ2時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

平常点(50%)および最終レポート(50%)

●受講生へのコメント

受講人数にもよるが，何らかの発表をさせる可能性がある

●参考文献・教材

参考書：森口佑介『自分をコントロールする力　非認知スキルの心理学』(講談社現代新書)

授業科目名	科目NO.	LBGEN1503	授業コード	LM00050010
人間行動学研究Ⅲ Advanced Studies in Human Behavioral Sciences Ⅲ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 西村　拓生			

●科目の主題

思想史研究と教育の現実

●到達目標

教育実践にとって思想を学ぶことの意義を理解すること。

●授業内容・授業計画

担当教員が行ってきた「美と教育」に関する研究と物語り論的な臨床教育学研究を紹介することを通して、思想史研究と教育の現実とのつながりを考える。

第1回：問いの所在思想史研究と教育の現実
第2回：「美と教育」という問題思想史的概観
第3回：ポストモダンの時代の「美と教育」
第4回：プリズムとしてのシラー『美育書簡』
第5回：シラー解釈の諸相
第6回：仮象としての美
第7回：仮象論と物語り論
第8回：教育の物語り論の文脈ポスト冷戦期教育学と臨床教育学
第9回：物語り論の理論リクールを中心に
第10回：物語り論的授業研究の試み
第11回：物語りと公共性
第12回：公共性と美シラーとハーバーマス
第13回：物語りの彼岸
第14回：おわりに実践において生成する理念

●事前・事後学習の内容

事前学習：集中講義の各ユニット毎に、事前に配布した文献を読んでおくこと。
事後学習：集中講義の各ユニット毎に、講義内容に関する自分の理解をまとめた上で、疑問点、感想を書いてミニレポートとして提出すること。

●評価方法

最終レポート（100％）

●受講生へのコメント

「美」と「物語り」をキーワードに、教育の思想（史）研究と現実との往還の中で考えてきたことをお話ししたいと思っています。いくつかある「引き出し」の中から何を取り上げるのかは、初回に受講者の皆さんの関心をお聞きして決めます。

●参考文献・教材

テキスト
特に使用しない
参考書・参考資料等
・『教育思想史コメンタール』教育思想史学会、2010年
・矢野智司・鳶野克己編『物語の臨界「物語ること」の教育学』世織書房、2003年
・皇紀夫編『「人間と教育」を語り直す教育研究へのいざない』ミネルヴァ書房、2012年
・西村拓生『教育哲学の現場物語りの此岸から』東京大学出版会、2013年

授業科目名	科目NO.	LBGEN1504	授業コード	LM00060010
人間行動学研究Ⅳ Advanced Studies in Human Behavioral Sciences Ⅳ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	濱田　琢司			

●科目の主題

地域文化の価値付けと文化的消費

●到達目標

・地域と文化との関わりについて多面的に検討する視点を獲得できている。
・地域文化や民俗文化が創られるというプロセスの有り様を理解できている。
・地域文化消費の状況を，とくに工芸生産の事例から把握できている。

●授業内容・授業計画

第1回　地域と文化―イントロダクション―
第2回　創られるものとしての地域文化
第3回　文化的価値の生成を考える
第4回　地域文化と近代
第5回　近代における「文化の発見」と現代における活用①―柳田国男と柳宗悦―
第6回　近代における「文化の発見」と現代における活用②―地域おこしとの関わり―
第7回　文化の他者表象と自己表象①―沖縄を事例として―
第8回　文化の他者表象と自己表象②―沖縄文化の位置づけ―
第9回　文化の他者表象と自己表象③―沖縄らしさの展開―
第10回　工芸生産と文化的消費①―後進と改良―
第11回　工芸生産と文化的消費②―民芸運動―
第12回　工芸生産と文化的消費③―伝統意識の発生―
第13回　伝統工芸の「現代化」①―セレクトとコラボレーション―
第14回　伝統工芸の「現代化」②―まなざしと産業振興―

●事前・事後学習の内容

・初回授業時までに，とくに伝統的地域文化の文化的価値について考えてくること。
・第2回以降は，講義中に指示した課題について，必ず取り組むこと。

●評価方法

講義中課題（10%）・期末レポート（90%）

●参考文献・教材

講義中に指示する

授業科目名	科目NO.	LBSOC2502	授業コード	LM05020010
社会学基礎問題研究演習1 Seminar on　Basic Issues in Sociology 1			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	石田　佐恵子			

●科目の主題

ミクロな社会理論、特に、文化社会学、映像社会学、メディア文化研究に関係する専門領域について、学説研究や理論、方法などについて幅広く学ぶ。

●到達目標

修士論文のテーマ設定を意識しながら、各自の関心領域についての知識を深める。演習の後半には、それぞれの関心に応じた個人報告を求める。学会発表における報告スタイル、プレセンテーション能力を身につける。

●授業内容・授業計画

映像社会学・メディア文化研究等を主題とした最新のテキストを講読する。後半には、各自の関心に従って報告と討議を行う。

第1回 ガイダンス(報告・発表スケジュールの決定)
第2回 映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読(1)
第3回 映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読(2)
第4回 映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読(3)
第5回 映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読(4)
第6回 映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読(5)
第7回 映像社会学・メディア文化研究に関する基本文献の購読(6)
第8回 学会発表における報告スタイルについて
第9回 各自の関心に基づく報告と議論(1)
第10回 各自の関心に基づく報告と議論(2)
第11回 各自の関心に基づく報告と議論(3)
第12回 各自の関心に基づく報告と議論(4)
第13回 各自の関心に基づく報告と議論(5)
第14回 各自の関心に基づく報告と議論(6)
第15回 レポートの作成と提出

●事前・事後学習の内容

事前学習:課題図書のみならず、関連図書を十分に読み、報告者はレジュメを用意してくること。報告者以外の参加者は討議に参加する準備を整えてくること。

事後学習:議論となったさまざまな論点について、自分なりのノートを作成し、自らの研究展開に活かす。

●評価方法

毎回の出席、参加態度、報告水準、および学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

受講生には、毎回の予習と復習、インターネットの積極的な活用、掲示板での議論など、熱心な参加を求める。

●参考文献・教材

テキスト:開講時に相談の上、決定する。 参考書:随時指示する。

授業科目名	科目NO.	LBSOC2503	授業コード	LM05030010
社会学基礎問題研究Ⅱ Advanced Studies on Basic Issues inSociology Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 笹島　秀晃			

●科目の主題

都市と文化をめぐる社会学的研究の近年の研究動向を確認し、主要な論点とその問題点を検討する。具体的には、英語圏のPoetics、Cultural Sociology、International Journal of Urban and Regional Research、Urban Studiesといった文化社会学、都市社会学の雑誌や、American Journal of SociologyやSocial Forcesといったアメリカ合衆国の雑誌を講読する。

●到達目標

都市と文化をめぐる近年の社会学的研究の動向について理解を深める。英語の論文を読む際の基本的な語学力を身につける。自身で適切な英語論文を収集し、研究関心に応じて適切にレビューする能力を培う。

●授業内容・授業計画

1. ガイダンス、および講読文献の選定
2. レクチャー：都市と文化の社会学の研究史①
3. レクチャー：都市と文化の社会学の研究史②
4. 文献講読：DiMaggio (1982) ①
5. 文献講読：DiMaggio (1982) ②
6. 文献講読：Silver et.al (2010) ①
7. 文献講読：Silver et.al (2010) ②
8. 文献講読：Bottero et.al. (2011) ①
9. 文献講読：Bottero et.al. (2011) ②
10. 文献講読：Accominotti et.al. (2018) ①
11. 文献講読：Accominotti et.al. (2018) ②
12. 文献レビューに関する個人報告①
13. 文献レビューに関する個人報告②
14. ?文献レビューに関する個人報告③

●事前・事後学習の内容

事前学習：

授業で取り上げる文献を一通り読み、論点を整理するとともに、内容について批判的に考察しておくこと。

事後学習：

講読した文献の文献リストを参照し、より進んだ検討を行うために、各自で新しい文献を読み進めていくこと。

●評価方法

授業内でのコメント（30％）・課題提出（70%）

●受講生へのコメント

ある程度のスピードで英語論文を読み進めていくので、しっかり予習復習をして授業に臨むこと。大まかな内容理解にとどまらず、一文一文丁寧に読み進めることを目標にし、授業の中では単語の意味・構文のレベルでも議論をするため、授業参加者は必ず電子辞書やPCなどを必ず持参すること。

●参考文献・教材

【講読予定文献】

授業では、参加者の研究関心に応じてある程度柔軟に論文を選定する予定であるが、現時点では下記の論文を取り上げる予定である。

Dimaggio, Paul, 1982, “Cultural Entrepreneurship in Nineteenth-Century Boston: the Creation of an Organizational Base for High Culture in America,” Media, Culture & Society 4(1): 33?50.Silver, D., T. N. Clark, and C. J. Navarro Yanez, 2010, “Scenes: Social Context in an Age of Contingency,” Social Forces, 88 (5): 2293?324.?Bottero, Wendy, and Nick Crossley, 2011, “Worlds, Fields and Networks: Becker, Bourdieu and the Structures of Social Relations,” Cultural Sociology, 5 (1): 99?119.?Accominotti, Fabien, Shamus R. Khan, and Adam Storer.2018, “How Cultural Capital Emerged in Gilded Age America: Musical Purification and Cross-Class Inclusion at the New York Philharmonic,” American Journal of Sociology,123 (6): 174383.

授業科目名	科目NO.	LBSOC2505	授業コード	LM05050010	
社会学特殊問題研究Ⅰ Advanced Studies on Specific Issues in Sociology Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	伊地知　紀子				

●科目の主題

質的調査の理論と実践技法について基礎と応用力を会得することを目的としている。

●到達目標

フィールドワーク、参与観察法、インタビュー調査、ライフヒストリー分析、エスノグラフィーといった質的社会調査の手法と実践について事例を踏まえながら演習形式で学習する。

●授業内容・授業計画

第1回　質的調査とフィールドワーク
第2回　対象選定と倫理
第3回　調査者と被調査者
第4回　対話と分析（1）
第5回　対話と分析（2）
第6回　参与観察（1）
第7回　参与観察（2）
第8回　インタビュー調査（1）
第9回　インタビュー調査（2）
第10回　ライフヒストリー（1）
第11回　ライフヒストリー（2）
第12回　エスノグラフィー（1）
第13回　エスノグラフィー（2）
第14回　質的調査の課題と可能性
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

取り上げる文献を熟読すること。

●評価方法

平常点、学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

受講生には、熱心な参加を求める。

●参考文献・教材

テキスト：開講時に相談の上、決定する。
参考書：随時指示する。

授業科目名	科目NO.	LBSOC2506	授業コード	LM05060010	
社会学特殊問題研究演習1 Seminar on Specific Issues inSociology 1				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	伊地知　紀子				

●科目の主題

エスノグラフィを学ぶ。

●到達目標

社会学、人類学などで蓄積されてきたエスノグラフィを購読し、理論、方法、記述などについて幅広く学ぶ。

●授業内容・授業計画

秀逸なエスノグラフィを丹念に読み解くことで、修士論文の方向性を模索し課題設定へと進める。後半には受講生各自の関心にもとづいた報告をする。

第1回 ガイダンス
第2回 エスノグラフィの購読(1)
第3回 エスノグラフィの購読(2)
第4回 エスノグラフィの購読(3)
第5回 エスノグラフィの購読(4)
第6回 エスノグラフィの購読(5)
第7回 エスノグラフィの購読(6)
第8回 エスノグラフィの課題と可能性について
第9回 受講生の報告と議論(1)
第10回 受講生の報告と議論(2)
第11回 受講生の報告と議論(3)
第12回 受講生の報告と議論(4)
第13回 受講生のと議論(5)
第14回 レポートの作成と提出
第15回まとめ

●事前・事後学習の内容

授業で取り上げるテキストについては関連文献も含めて熟読すること。

●評価方法

学期末のレポートによる。

●受講生へのコメント

受講生には、毎回の予習と復習、演習での議論への熱心な参加を求める。

●参考文献・教材

テキスト:開講時に相談の上、決定する。
参考書:随時指示する。

授業科目名	科目NO.	LBSOC2507	授業コード	LM05070010
社会学特殊問題研究Ⅱ Advanced Studies on Specific Issues in Sociology Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 川野　英二			

●科目の主題

多変量解析に関する演習

●到達目標

計量論文を読み書きするために必要な多変量解析の基本的な技法を習得する。

●授業内容・授業計画

授業は統計ソフトウェアRとRStudioを使用し、実習形式で行う。授業では、各分析についての説明を行ったのち、ソフトウェアを用いて実際にデータの分析を行う。

1 統計ソフトRとRStudioの使用法
2 ソフトウェアを使った統計学の復習1
3 ソフトウェアを使った統計学の復習2
4 重回帰分析の復習1
5 重回帰分析の復習2
6 ロジスティック回帰分析1
7 ロジスティック回帰分析2
8 多項ロジット分析
9 順序ロジット分析
10 マルチレベル分析1
11 マルチレベル分析2
12 マルチレベル分析3
13 社会的ネットワーク分析1
14 社会的ネットワーク分析2
15 社会的ネットワーク分析3

●事前・事後学習の内容

事前学習：課題図書・文献を読む。
事後学習：課題をおこなう。

●評価方法

平常点
課題の提出

●受講生へのコメント

本授業は専門社会調査士認定科目（I）に相当するもので、学部で社会調査士資格を取得していることを前提としたカリキュラムである。

本授業を履修するさいには、担当教員に事前相談すること。

●参考文献・教材

【教科書】テキスト・資料は授業中に配布する。
【参考書】今井耕介ほか『社会科学のためのデータ分析入門（上）（下）』2018年 岩波書店
浅野正彦ほか『Rによる計量政治学 』2018年 オーム社
松村 優哉 『RユーザのためのRStudio[実践]入門 tidyverseによるモダンな分析フローの世界』2018年 技術評論社

授業科目名	科目NO.	LBSOC2508	授業コード	LM05080010
社会学特殊問題研究演習2 Seminar on Specific Issues in Sociology 2			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	川野　英二			

●科目の主題

社会学理論と経験的研究

●到達目標

最新の社会学理論とそれに対応した経験的研究の手法を身につけ、自分の研究テーマに応用する。

●授業内容・授業計画

現代の社会学理論は経験的な研究法と切り離すことはできない。この授業ではこれまでの社会学理論のアプローチを復習し、最新の社会学理論とそれに対応した経験的研究の方法論を身につけることを目的とする。具体的には、分析社会学、関係社会学、プラグマティック社会学の主要な文献を読み、そこで用いられている多変量解析、ネットワーク分析、言説分析などの調査法・研究法について検討を行ない、自らの研究テーマに応用することを検討する。

第1回 ガイダンス
第2回 社会学理論の復習
第3回 社会学理論の復習
第4回 社会調査法の復習
第5回 社会調査法の復習
第6回 分析社会学の基礎
第7回 分析社会学の方法
第8回 分析社会学の方法
第9回 関係社会学の基礎
第10回 関係社会学の方法
第11回 関係社会学の方法
第12回 プラグマティック社会学の基礎
第13回 プラグマティック社会学の方法
第14回 プラグマティック社会学の方法
第15回 研究テーマへの応用

●事前・事後学習の内容

事前学習：指定した文献を読む
事後学習：学習した方法を復習し身につける

●評価方法

平常点、提出物(論文・レポートなど)

●受講生へのコメント

最新の社会学理論と方法を学んで自らの研究テーマに応用するため、積極的に文献を読み、新たな手法を身につける意欲が必要である。

●参考文献・教材

テキスト・資料は授業中に配布する。

授業科目名	科目NO.	LBSOC2509	授業コード	LM05090010	
社会学特殊問題研究Ⅲ Advanced Studies onSpecific Issues in Sociology Ⅲ				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 平山　亮				

●科目の主題

フェミニスト社会学の方法

●到達目標

ジェンダー理論としてのフェミニズムのパースペクティブにもとづいて社会調査を計画・実施・評価するために、その基礎となる知識を習得する。

●授業内容・授業計画

ジェンダーやセクシュアリティの力学は、社会調査のプロセスにどのように作用しているのか。性の非対称性にセンシティブな調査を行おうとする際、どのようなジレンマに直面しやすく、また、それに対して過去どのようなアプローチが試みられてきたのか。フェミニスト社会学の方法についてのテキストを講読し、調査を実施する上での倫理的・実践的課題を検討する。なお、授業は参加者の発表と議論を中心とした演習形式で行う。

第1回 ガイダンス
第2回 研究倫理とフェミニズム
第3回 問いを立てる際の困難
第4回 枠組みを選ぶ上での困難①
第5回 方法を選ぶ際の困難
第6回 対象を選び、アクセスする際の困難
第7回 データを集める際の困難
第8回 社会調査におけるインターセクショナリティの視点①
第9回 データを管理する上での困難
第10回 枠組みを選ぶ上での困難②
第11回 データを解釈する際の困難
第12回 社会調査におけるインターセクショナリティの視点②
第13回 結果を報告する際の困難
第14回 研究を評価する／される際の困難
第15回 リフレクション

●事前・事後学習の内容

事前学習：テキストの指定範囲を読み、議論に積極的に参加できるよう、該当部分に対する自分の意見や立場を明確にしておく。

事後学習：議論のなかであがった論点を踏まえて自分の考えをもう一度整理した上で、自身の今後の研究に役立てられるようノートにまとめておく。

●評価方法

発表を含む担当役割の遂行（35%）、議論への貢献（35%）、学期末のレポート（30%）で評価する。

●受講生へのコメント

参加にあたっては、社会調査の実施に関する基本的な知識を前提とします。また、参加者の人数や問題関心に応じて、内容や進め方を変更する場合があります。主に英語のテキストを用いるので、苦手な人には負担が大きいかもしれませんが、その分「読んでよかった」と思っていただけそうなものを用意できるよう、こちらも努めます。

●参考文献・教材

教科書：複数のテキストそれぞれから、候補となる章を初回にいくつか提示します。参加者の研究関心や計画している調査などにあわせて、相談の上で決定しましょう。

参考書：各回の内容に関連する論文や書籍をその都度紹介します。

授業科目名	科目NO.	LBSOC2510	授業コード	LM05100010
社会学特殊問題研究演習3 Seminar on Specific Issues inSociology 3			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 平山　亮			

●科目の主題

調査企画・設計に関する演習

●到達目標

社会調査の企画・設計・実施を行い、分析・集計するための実践的な知識と能力を習得する。

●授業内容・授業計画

社会調査の一連の流れに沿って、社会調査におけるデータ収集と分析の技法を解説する。本授業では量的調査と質的調査の企画と設計を扱う。授業ではデータ分析用のソフトウェアを使った実習も行う。受講者は、授業の進行に合わせて、自身の調査企画案を構想することが求められる。

第1回　調査の企画と調査倫理
第2回　仮説構成
第3回　調査対象・方法の設定
第4回　統計ソフトウェアの使用法
第5回　サンプリングの実際と課題
第6回　サンプルサイズと標本誤差
第7回　尺度構成法
第8回　質問文の作成と調査票の構成
第9回　調査票の作成実習
第10回　実査、データの入力
第11回　調査データの整理(1):エディティング、コーディング
第12回　調査データの整理(2):クリーニング、コードブックの作成
第13回　集計とグラフ作成
第14回　クロス集計表の作成とエラボレーション
第15回　報告書の作成

●事前・事後学習の内容

事前学習:次回の授業で扱う教科書の範囲を読んでおく。
事後学習:統計ソフトの使い方を含め、授業で扱った一連の手続きを復習しておく。

●評価方法

平常点(40%)と学期末のレポート(60%)で評価する。

●受講生へのコメント

本授業は専門社会調査士認定科目(H)に相当する。

●参考文献・教材

教科書:初回の授業時に提示します。
参考書:各回の内容に関連する論文や書籍をその都度紹介します。

授業科目名	科目NO.	LBSOC2513	授業コード	LM05140010	
社会学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Sociology Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	伊地知　紀子／石田　佐恵子／川野　英二／笹島　秀晃／平山　亮				

●科目の主題

社会学の研究を行う上で必要となる基本的事項を担当教員全員で総合的に指導する。

●到達目標

修士論文の作成・完成を目標とする。

●授業内容・授業計画

社会学の理論、およびフィールド・ワークの方法、ならびにデータ処理のための分析法に関する広範な知識の技能を、基本的な課題において総合的に把握し、展開するために、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマを取り上げて講じる。また、受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討論によって理解を深める。

●事前・事後学習の内容

事前学習：レジュメを作成しておく。

事後学習：指摘された点を確認する。

●評価方法

受講生による研究報告を評価の主な対象とする。

●受講生へのコメント

受講生による活発な議論を望む。

●参考文献・教材

随時指示する。

授業科目名	科目NO.	LBSOC2514	授業コード	LM05150010
社会学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Sociology Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	伊地知　紀子／石田　佐恵子／川野　英二／笹島　秀晃／平山　亮			

●科目の主題

社会学の研究を行う上で必要な基本的事項を実際に応用する具体的な方法について、担当教員全員で総合的に指導する。

●到達目標

修士論文の作成・完成を目標とする。

●授業内容・授業計画

社会学の理論と方法に関する広範な知識と技能を、特定の個別課題において総合的に把握し、展開するために、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマを取り上げて講じる。また、受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討論によって理解を深める。これと並行して、受講生から予定している修士論文のテーマとその概要についての報告を求め、それに基づき討論を行う。

●事前・事後学習の内容

事前学習：レジュメを作成しておく。
事後学習：指摘された点を確認しておく。

●評価方法

受講者による研究報告を評価の主な対象とする。

●受講生へのコメント

受講生の積極的な討論を望む。

●参考文献・教材

随時指示する。

授業科目名	科目NO.	LBSOC3601	授業コード	LM05170010	
社会学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Sociology Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	伊地知　紀子／平山　亮／川野　英二／石田　佐恵子／笹島　秀晃				

●科目の主題

修士論文の研究課題を考察するために必要な内外の論文の検討を行いながら、立案した調査計画に基づいて、文献収集やフィールド・ワークを実施し、得られた知識の整理検討とデータの分析を行う。

●到達目標

修士論文の作成・完成をめざす。

●授業内容・授業計画

学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受け、修論執筆の進行状況について報告する。また、少なくとも一回は修論の中間報告を行い、教員全員からの指導を受ける。

●事前・事後学習の内容

事前学習：レジュメを作成しておく

事後学習：指摘点を確認しておく

●評価方法

学生による研究報告を主な評価対象とする。

●受講生へのコメント

積極的な関与が望まれる。

●参考文献・教材

随時指示する。

授業科目名	科目NO.	LBSOC3602	授業コード	LM05180010
社会学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Sociology Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	伊地知　紀子／平山　亮／川野　英二／石田　佐恵子／笹島　秀晃			

●科目の主題

修士論文の研究課題を考察するために必要な内外の論文の検討を行いながら、フィールド・ワークなどの調査等で得られた知識の整理検討とデータの分析を行い、知見と問題点を明確にし、議論を発展させる。

●到達目標

こうした研究遂行の指導を通して、修士論文の完成をめざす。

●授業内容・授業計画

学生はその研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受け、修論執筆の進行状況について報告する。また、最終的な段階においては、論文報告会で修論の内容を報告し、教員全員からの指導を受ける。

●事前・事後学習の内容

事前学習：レジュメを作成しておく。
事後学習：指摘された点を確認する。

●評価方法

学生による研究報告を主な評価対象とする。

●受講生へのコメント

積極的な参与が求められる。

●参考文献・教材

随時指示する。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000050	
修士論文（社会学） Master's Thesis（社会学）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	伊地知　紀子／石田　佐恵子／川野　英二				

●科目の主題

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。 ２月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。 修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●到達目標

「修士論文」および「社会学論文指導」は、修士論文を提出する年度の前期と後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。　修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。履修モデルとしての社会学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●授業内容・授業計画

第1回　ガイダンス
第2回　テーマについて(1)
第3回　テーマについて(2)
第4回　方法論について(1)
第5回　方法論について(2)
第6回　先行文献レビュー(1)
第7回　先行文献レビュー(2)
第8回　先行文献レビュー(3)
第9回　事例分析(1)
第10回　事例分析(2)
第11回　事例分析(3)
第12回　最終報告(1)
第13回　最終報告(2)
第14回　最終報告(3)
第15回　社会学の分野における卒業論文の完成と提出

●事前・事後学習の内容

事前学習:社会学の分野における修士論文の完成と提出　事後学習:口述試験

●評価方法

社会学の分野における修士論文を評価の対象とする

●受講生へのコメント

修士課程の必要単位をすべて習得し、十分な研究指導を受けること

●参考文献・教材

随時指示する。

授業科目名	科目NO.	LBPSY2501	授業コード	LM06010010	
心理学基礎問題研究 Advanced Studies of Fundamental Topics in Psychology				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 池上　知子				

●科目の主題

人間は自分を取り巻く社会的世界の成り立ちや、そこに生起する事象をどのように認識し理解しているのだろうか。また、それは人々にどのような感情を喚起し行動を引き起こすことになるのだろうか。これらは心理学全体に通底する問いである。このような問いに答えることを中心的学問課題としているのが社会的認知研究である。社会的認知研究は、成立当初は純粋に認知レベルの問題に焦点があてられていたが、今日では扱う問題も多岐にわたり理論も格段に深化した。本授業では、例年、社会的認知研究のこれまでの展開を踏まえ、当該分野の最新動向を把握することを主題としている。本年度は、感情の問題に焦点をあて、テキストに準拠しながら上記の議論を深めたい。

●到達目標

感情をめぐる問題に焦点をあて、感情が生起する心理学的メカニズムへの理解を深めることを通して、心理学専修の院生が修士論文を作成するに際し必要となる高度な専門的知識の習得を図る。

●授業内容・授業計画

下記のテキストを使用しながら、毎回、特定のトピックに焦点をあてて議論する。また、必要に応じて、関連する英語文献の発表を求める。

第1回 感情を科学するとは
第2回 感情を作る脳のしくみ
第3回 価値を学習するしくみ
第4回 内臓の運動制御と感情
第5回 他者の感情を知るしくみ
第6回 認知機能に対する感情の影響
第7回 感情障害を理解するための基本的考え方
第8回 うつ病の本質
第9回 不安障害と失感情症
第10回 なぜ自閉症になるのか
第11回 不確実性と感情・意思決定
第12回 感情をコントロールする
第13回 内受容感覚と感情
第14回 感情と知覚と運動の関係

●事前・事後学習の内容

前週の授業時に次回の授業内容に関係するテキスト内の該当箇所を事前に読んでおくように指示する。また、授業内容の発展的理解のために関連する英語文献を入手し、読んでおくように指示する。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

少人数による授業であるので受講生の活発な議論を期待したい。

●参考文献・教材

乾　敏郎著『感情とはそもそも何なのか　−現代科学で読み解く感情のしくみと障害』ミネルヴァ書房　2018年

授業科目名	科目NO.	LBPSY2502	授業コード	LM06020010	
心理学基礎問題研究演習 Advanced Seminar on Fundamental Topics in Psychology				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 池上　知子				

●科目の主題

前期の「心理学基礎問題研究」の内容を踏まえ、感情と意識をめぐる問題について下記のテキストを講読しながら議論を深める。

●到達目標

感情をめぐる問題について多角的かつ体系的にまとめられた英語の学術書を精読することによって、修士論文を作成するために必要な文献読解力と体系的な研究計画を立案するための素養を養う。

●授業内容・授業計画

受講生全員で下記のテキストを輪読しながら、毎回、特定のトピックに焦点をあて討論する。

第1回 感情に関する知識の獲得と利用における身体化の役割
第2回 感情と認知の相互作用
第3回 認知的コントロールと感情
第4回 無意識的情報処理と感情
第5回 意識されない感情
第6回 感情の知覚
第7回 非言語コミュニケーションにおける意識的・無意識的感情
第8回 不安・恐怖の統制と行動システム
第9回 感情と知覚
第10回 感情の二過程理論
第11回 感情における無意識的過程
第12回 感情と行動
第13回 感情と意識
第14回 感情研究の7つの罪

●事前・事後学習の内容

発表者を含む受講者全員が、毎回の授業に関係するテキストの各章に事前に目を通し、質問事項を考えてくるように指示する。授業内容の発展的理解のために、事後に関連文献を入手し各自読んでおくように指示する。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

少人数の授業であるため、受講者の積極的な議論を期待する。

●参考文献・教材

Barrett, L.F., Niedenthal, P.M., & Winkielman, P. (Eds.),　Emotion and Consciousness　Guilford Press　2005

授業科目名	科目NO.	LBPSY2503	授業コード	LM06030010	
実験心理学研究 Advanced Studies in Experimental Psychology				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	山　祐嗣				

●科目の主題

以下のテキストを読むことによって、進化心理学、文化心理学、認知心理学と科学的思考を理解することを目的とする。

●到達目標

心理学における重要な研究や最先端の研究は多くは英語で書かれている。本講では、英文の論文を読む訓練と、さらには科学的思考についての心理学研究に触れることを目標とする。

●授業内容・授業計画

最初に、科学的心理学のパラダイムに触れ、次いで、Carruthers, P., Stich, S., & Siegal, M. (eds.), (2002). The cognitive basis of science.の以下の章を受講生による発表形式で読み進める。

第1回 Outline of cognitive, evolutionary, and cultural psychology.
第2回 Intriduction: What makes science possible?
第3回 Human evolution and the cognitive basis of science.
第4回 Modular and cultural factors in biological understanding.
第5回 The roots of scientific reasoning.
第6回 Understanding the role of cognition in science.
第7回 Thinking about causality.
第8回 Thepassionate sciencetist.
第9回 Social psychology and the theory of science.
第10回 研究発表
第11回 研究発表
第12回 研究発表
第13回 研究発表
第14回 研究発表

●事前・事後学習の内容

自分の担当の章はレジメを作成して発表してください。

●評価方法

授業中の発表・討論にもとづく平常点とする。

●受講生へのコメント

単にテキストを読むだけではなく、そこで引用されたあるいは各自の研究と関連する論文を併せて読むことが推奨される。

●参考文献・教材

テキスト：Carruthers, P., Stich, S., & Siegal, M. (eds.), (2002). The cognitive basis of science. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

授業科目名	科目NO.	LBPSY2504	授業コード	LM06040010
実験心理学研究演習 Advanced Seminar:Advanced Studiesin Experimental Psychology			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 山　祐嗣			

●科目の主題

認知心理学、進化心理学、文化心理学の代表的な以下の論文を読むことによって、基本的な概念、研究法を理解する。

●到達目標

心理学における重要な研究や最先端の研究は多くは英語で書かれている。本講では、英文の論文を読む訓練と、さらには代表的な研究に触れることを目標とする。

●授業内容・授業計画

授業では、各論文毎に受講者を割り当て、レジュメ発表と討議を行う。

第1回 認知心理学・進化心理学・文化心理学イントロダクション
第2回 Cummins, D. D. (1998)
第3回 Cummins, D. D. (1998)
第4回 Markovits, H., & Barrouillet, P. (2002)
第5回 Markovits, H., & Barrouillet, P. (2002)
第6回 Markus, H. R. and Kitayama, S. (1991)
第7回 Markus, H. R. and Kitayama, S. (1991)
第8回 Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001)
第9回 Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001)
第10回 Yama (2016)
第11回 Yama (2018)
第12回 Yama (2019a)
第13回 Yama (2019b)
第14回 研究発表

●事前・事後学習の内容

紹介する文献について、精読したのち、わかりやすいレジュメを用意してください。

●評価方法

授業中の発表と討論にもとづく平常点とする。

●受講生へのコメント

単に割り当てられた論文を読むだけではなく、自分の研究テーマと関連する論文も読み、興味の範囲を広げていくことが望まれる。

●参考文献・教材

・Cummins, D. D. (1998). Social norms and other minds; The evolutionary roots of higher cognition. In D. D. Cummins & C. Allen (Eds.), The evolution of mind. New York: Oxford University Press, Pp. 30-50.

・Markus, H. R. and Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, 224-253.

・Markovits, H., & Barrouillet, P. 2002 The development of conditional reasoning: A mental model account. Developmental Review, 22, 5-36.

・Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A. (2001). Culture and system of thought: Holistic versus analytic cognition. Psychological Review, 108, 291-310.

・Yama, H. (2016). A perspective of cross-cultural psychological studies for global business. In N.Zakaria, A-N, Abdul-Talib, and N. Osman (eds.), Handbook of research on impacts of international business and political affairs on the global economy. Hershey, PA: IGI Global, Pp. 185-206.

・Yama , H. (2018). Thinking and reasoning across cultures. In L. J. Ball, & V. A. Thompson (eds.), The Routledge international handbook of thinking and reasoning. Oxon, UK & New York: Routledge, Pp.624-638.

・Yama, H. (2019a). Laugh and laughter as adaptation in human beings: Past and present. In H. Yama & V. Salvano-Pardieu

(eds.), Adapting human thinking and moral reasoning in contemporary society. Hershey, PA: Information Science Reference, pp.156-175.

・Yama, H. (2019b). Morality and contemporary civilization: A dual process approach. In H. Yama & V. Salvano-Pardieu (eds.), Adapting human thinking and moral reasoning in contemporary society. Hershey, PA: Information Science Reference., pp.92-114.

授業科目名	科目NO.	LBPSY2505	授業コード	LM06050010	
心理学特殊問題研究Ⅰ Advanced Studies in Selected Topicsin Psychology Ⅰ				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 川邉　光一				

●科目の主題

生理心理学・行動神経科学に関する基礎的なテキストの通読により、脳・神経系についての生物学的知識と、様々な精神機能・行動と脳・神経系の関係を学ぶ。

●到達目標

上記主題の内容を学ぶことにより、生理心理学・行動神経科学の基礎を習得する。

●授業内容・授業計画

テキストの各章について担当者を決め、その内容について発表してもらう。また、適宜その内容についての解説を加える。

第1回　オリエンテーション
第2回　テキスト講読(1)
第3回　テキスト講読(2)
第4回　テキスト講読(3)
第5回　テキスト講読(4)
第6回　テキスト講読(5)
第7回　テキスト講読(6)
第8回　テキスト講読(7)
第9回　テキスト講読(8)
第10回　テキスト講読(9)
第11回　テキスト講読(10)
第12回　テキスト講読(11)
第13回　テキスト講読(12)
第14回　テキスト講読(13)

●事前・事後学習の内容

受講者全員が、当日発表が予定されるテキストの各章に授業前に目を通しておくこと。授業後は授業で論点となった点を踏まえ、テキストやその内容に関連する文献を読むこと。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

テキスト　授業中に指定する。

授業科目名	科目NO.	LBPSY2506	授業コード	LM06060010	
心理学特殊問題研究演習1 Advanced Seminar in Selected Topicsin Psychology 1				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 川邉　光一				

●科目の主題

生理心理学・行動神経科学に関するより専門的なテキストの通読により、精神機能や行動と脳・神経系の関係を学ぶ。

●到達目標

精神機能や行動と脳・神経系の関係について理解を深める。

●授業内容・授業計画

テキストの各章について担当者を決め、その内容について発表してもらう。また、適宜その内容についての解説を加える。

第1回　オリエンテーション
第2回　テキスト講読(1)
第3回　テキスト講読(2)
第4回　テキスト講読(3)
第5回　テキスト講読(4)
第6回　テキスト講読(5)
第7回　テキスト講読(6)
第8回　テキスト講読(7)
第9回　テキスト講読(8)
第10回　テキスト講読(9)
第11回　テキスト講読(10)
第12回　テキスト講読(11)
第13回　テキスト講読(12)
第14回　テキスト講読(13)

●事前・事後学習の内容

受講者全員が、当日発表が予定されるテキストの各章に授業前に目を通しておくこと。授業後は授業で論点となった点を踏まえ、テキストやその内容に関連する文献を読むこと。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

本演習の受講には脳・神経系についての生物学的知識が必要となるので、前期の「心理学特殊問題研究Ｉ」とともに受講するのが望ましい。

●参考文献・教材

テキスト　授業中に指定する。

授業科目名	科目NO.	LBPSY2507	授業コード	LM06070010
心理学特殊問題研究Ⅱ Advanced Studies in Selected Topics in Psychology Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 佐伯　大輔			

●科目の主題

ヒトや動物における「判断」、「意思決定」、「選択行動」の研究は、心理学、経済学、生物学等の研究分野においてなされてきた。この授業では、主に、学習心理学や認知心理学における研究を取り上げ、これまでに提案された理論とデータについて概観する。

●到達目標

ヒトや動物を対象とした「判断」、「意思決定」、「選択行動」の研究に関する知識を深め、研究対象や接近法の異なる研究領域間で、どのようにして理論やデータの比較ができるのかを理解することが到達目標である。

●授業内容・授業計画

主に以下の章立てで講義を進める。

第1回　はじめに
第2回　確実状況下の意思決定(1):Luceの選択公理
第3回　確実状況下の意思決定(2):多属性効用理論
第4回　不確実状況下の判断(1):ヒューリスティックとバイアス
第5回　不確実状況下の判断(2):基礎生起率判断の誤り
第6回　不確実状況下の意思決定(1):期待効用理論
第7回　不確実状況下の意思決定(2):プロスペクト理論
第8回　学習理論に基づく選択行動研究
第9回　マッチング法則
第10回　自己制御選択と遅延割引
第11回　リスク選択と確率割引
第12回　選択行動における遅延と確率の関係
第13回　協力選択と社会割引
第14回　行動経済学
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習:「参考文献」に上げた書籍の該当部分を読んでおく。
事後学習:授業内容について理解が不十分な点を復習する。

●評価方法

授業への出席と学期末のレポートにより成績評価を行う。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

参考文献

広田すみれ・増田真也・坂上貴之[編著] (2018)『心理学が描くリスクの世界:行動的意思決定入門　第3版』慶應義塾大学出版会
Rachlin, H. (1989) Judgment, decision, and choice: A cognitive/behavioral synthesis. New York: Freeman.
坂上貴之[編] (2009)『意思決定と経済の心理学』朝倉書店
佐伯大輔[著] (2011)『価値割引の心理学―動物行動から経済現象まで―』昭和堂

授業科目名	科目NO.	LBPSY2508	授業コード	LM06080010
心理学特殊問題研究演習2 Advanced Seminar in Selected Topicsin Psychology 2			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 佐伯　大輔			

●科目の主題
現代の行動主義について解説がなされているHoward Rachlinの“Introduction to modern behaviorism”を読み、心理学における行動主義の考え方や、そこから発展した学習研究についての知識を学ぶ。
●到達目標
行動主義の考え方について学ぶことを通して、学習心理学が他の心理学研究分野とどのような関係にあるのかを理解することが到達目標である
●授業内容・授業計画
テキストを輪読形式で読んでいく。各受講者には、毎回の授業において、該当部分をその場で訳出することが求められる。

第1回 オリエンテーション
第2回 Cartesian Dualism
第3回 The Mind: Introspection, Innate Ideas, Principles of Association
第4回 The Mind: Visual Distance, Meaning, Mental Chemistry, Studies of Sensation
第5回 The Mind: Intensity of Sensation, Quality of Sensations
第6回 The Mind: Secondary Laws of Association
第7回 The Body: Nervous Conduction, The Reflex Arc
第8回 The Body: Complex Behavior
第9回 The Relation of Physiological Psychology to Mental Psychology: Molarism
第10回 The Relation of Physiological Psychology to Mental Psychology: Gestalt Psychology
第11回 The Relation of Physiological Psychology to Mental Psychology: Behavioral Molarism
第12回 The Relation of Physiological Psychology to Mental Psychology: Functionalism
第13回 Classical Conditioning: Pavlov's Experiments
第14回 Classical Conditioning: Elements of Classical Conditioning
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容
事前学習：次に授業で訳す部分を読み、理解する。
事後学習：授業内容について理解が不十分な点を復習する。
●評価方法
出席と授業での発表により評価する。
●受講生へのコメント
特になし。
●参考文献・教材
テキスト　Rachlin, H. (1991) Introduction to modern behaviorism (3rd edition). New York: Freeman.

授業科目名	科目NO.	LBPSY2511	授業コード	LM06110010	
心理学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Psychology Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	山　祐嗣／池上　知子／佐伯　大輔／川邉　光一				

●科目の主題

心理学の各研究分野における基本的事項について理解を深める。

●到達目標

学術的テーマについて、各人が発表したり積極的に討論に参加することによって、プレゼンテーション能力の向上を図り、意見交換を行えるようなスキルを習得させる。

●授業内容・授業計画

担当教員全員で総合的に指導する。受講生が研究発表を行い、各発表内容に対して担当教員がそれぞれの専門分野の観点からテーマについて解説し、受講生全員と討論を行う。自分の専門分野のみならず他分野の研究内容の理解を図るとともに、自ら研究発表を行い討論することにより、互いに質問し批評し合う訓練の場としたい。

●事前・事後学習の内容

発表者は、発表内容に関するレジメを準備し、そのほかの受講者は、発表テーマについて予備知識を得て質問事項を考えておくように指示する。授業時に受けたコメントや議論の内容を受講者全員が次回の発表に生かすように指示する。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

積極的に発言することを期待する。

●参考文献・教材

特に使用しない。課題文献は適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LBPSY2512	授業コード	LM06120010	
心理学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in PsychologyⅡ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	山　祐嗣／池上　知子／佐伯　大輔／川邉　光一				

●科目の主題

各研究分野の実験、調査などの研究方法やデータ解析法についての理解を深める。

●到達目標

学術的テーマについて、積極的に討論に参加し、意見交換を行えるようなスキルを習得させる。

●授業内容・授業計画

担当教員が全員で総合的に指導する。各担当教員がそれぞれの専門分野における方法論を具体的な事例を取り上げて解説するとともに、受講生にも研究発表を行わせ、討論を通して、自分の専門分野のみならず他分野の研究方法やデータ解析法への理解を深める。自ら研究発表を行い討論することにより、互いに質問し批評しあう訓練の場としたい。

●事前・事後学習の内容

発表者は、発表内容に関するレジメを準備し、そのほかの受講者は、発表テーマについて予備知識を得て質問事項を考えておくように指示する。授業時に受けたコメントや議論の内容を受講者全員が次回の発表に生かすように指示する。

●評価方法

平常点により評価する。

●受講生へのコメント

積極的に発言することを期待する。

●参考文献・教材

特に使用しない。

授業科目名	科目NO.	LBPSY3601	授業コード	LM06130010
心理学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Psychology Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	山　祐嗣／池上　知子			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「心理学研究指導1」（前期）、「心理学研究指導2」（後期）の指導によって完成させる。

前期の「心理学研究指導1」では、1年次までの学修に基づき、修士論文の執筆計画を立て、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文執筆計画を立て実施する
(2)問題意識を整理し、研究課題の学術的意義を提示する
(3)研究目的に応じた適確な課題を設定する
(4)研究課題に応じた適切な研究方法を計画する
(5)研究課題に応じた先行研究の読み込みを行う
(6)研究課題に応じた実験結果、調査結果、文献資料を蓄積する
(7)修士論文研究に関わる研究倫理について考える

●授業内容・授業計画

1オリエンテーション
修士論文とは何か(確認)
心理学の方法論(確認)
修士論文研究・執筆計画について
修士論文の評価規準・基準について2研究計画発表
テーマに関する問題意識の整理
予想される(期待している)結論
研究方法の目処
同学年他学年の学生、複数の教員との質疑応答から学ぶ3456. 研究倫理7先行研究の読み込み8「先行研究の整理」の意義と方法9修士論文の章立て10実験、調査、文献分析の計画と結果の予想11実験・調査計画発表
—章立ての仮決定のために—(連続4コマ)
問題意識の提示
論証しようとしていること(仮の結論)
論証のための方法とその目処
章立て
これからの課題12131415実験・調査実施への準備

●事前・事後学習の内容

受講者は、研究テーマに関連する文献や研究計画の発表、研究結果の中間報告を行うため、事前にレジメを準備する。授業時に受けたコメントや議論の内容を次回の発表に生かすようにする。

●評価方法

研究発表等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の前期博士課程の集大成である。履修モデルとしての心理学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「心理学研究指導1」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、修士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

適宜、紹介する。

授業科目名	科目NO.	LBPSY3602	授業コード	LM06140010	
心理学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Psychology Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	山　祐嗣／池上　知子				

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「心理学研究指導1」（前期）、「心理学研究指導2」（後期）の指導によって完成させる。

後期の「心理学研究指導2」では、修士論文の仕上げに向けて、実験・調査結果発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1) 実験や調査により得られた成果を体系立てて提示し、先行研究と関連づけながら論旨の一貫した論文を作成できるようにする。

(2)修士論文の評価規準と基準を知る

(3)執筆途上において、その時点の自分の修士論文を評価基準に準拠して点検する

(4)点検の結果を踏まえ、修士論文計画・執筆計画を修正しながら修士論文を完成させる

●授業内容・授業計画

1修士論文の進捗状況の報告2修士論文の評価基準の確認3実験・調査発表（4コマ連続）

完成に向けての執筆方針の確認

（研究方法論、課題設定、先行研究の整理

章立て等）

完成に向けての研究・執筆計画4567実験・調査発表から論文へ8問題意識と学術的意義を扱う部分についての点検9研究目的に応じた課題設定を扱う部分について点検10研究手法の説明を扱う部分についての点検11先行研究を扱う部分についての点検12実験結果、調査結果、文献分析を扱う部分についての点検13論理の組み立てや一貫性に関する点検14学術論文としての表現、表記法等に関する点検15研究倫理の側面からの修士論文の点検

修士論文作成全体を通しての振り返り

●事前・事後学習の内容

受講者は、研究テーマに関連する文献や研究計画の発表、研究結果の中間報告を行うため、事前にレジメを準備する。授業時に受けたコメントや議論の内容を次回の発表に生かすようにする。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

「心理学研究指導2」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質が評価されるのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「心理学研究指導2」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の前期博士課程の集大成である。履修モデルとしての心理学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「心理学研究指導2」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、前期博士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

適宜、紹介する。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000060	
修士論文（心理学） Master's Thesis（心理学）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	山　祐嗣／池上　知子				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポシシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、前期博士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「心理学研究指導Ⅰ」「心理学研究指導Ⅱ」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1)修士論文は、心理学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2)(評価基準)修士論文は以下の各項目について、心理学分野における十分な水準を満たさなければならない。

?(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、心理学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、心理学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、心理学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3)(論文の体裁)修士論文は、論を展開する上で、心理学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

適宜、修士論文の研究課題のために行った実験・調査のデータをまとめ、修士論文の構成と論述の仕方などを具体的に指導する。そして、最終的に修士論文を完成させる。

なお、学生は、各自の研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

〔池上知子教授〕 主に、社会的行動の基礎をなす認知と感情、自己と社会的アイデンティティなど、社会心理学の分野に関する修士論文の指導を行う。

〔山　祐嗣教授〕 主に、思考と推論、認知の文化差など、認知心理学の分野に関する修士論文の指導を行う。

●事前・事後学習の内容

受講者は、修士論文研究のテーマに関連する文献や研究計画の発表、研究結果の報告を行い、論文の執筆を行う。授業時に受けたコメントや議論の内容を論文に生かすようにする。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「心理学研究指導Ⅰ」は、修士論文を提出する年度の前期に、「心理学研究指導Ⅱ」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。履修モデルとしての心理学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

受講生各自必要な文献を探したり、教員が適宜紹介したりする。

授業科目名	科目NO.	LBEDU2501	授業コード	LM07010010
教育学基礎問題研究 Advanced Studies of Fundamental Problems in Education			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 柏木　敦			

●科目の主題

（１）設定した各テーマに関する知識を身につける。

（２）各テーマに関わる歴史的資料の読解能力を身につける。

●到達目標

(1)日本の学校教育制度の見方や知識を「研究」の水準で身につける。

(2)教育事実に関わる歴史的史料を読解する能力を身につける。

●授業内容・授業計画

日本の教育を形づくっている事柄についていくつかのテーマを設定し、史的考察を試みる。今日の学校教育の中で「当たり前」として受け止められていること、ここ数年、特徴的に現れていると受け止められがちなことなどが、いつ、どのような形で学校教育の中で一般化していったのか、設定した各テーマに関わる研究論文や史料を読み解きながら実証的に考察してゆく。

授業計画

第1回:オリエンテーション

第2回:日本近代における学校をめぐる諸研究

第3回:近代学校制度と「学齢」の登場　「学齢児童」とは(1)

第4回:何故「学齢」は満6歳から満14歳までなのか「学齢児童」とは(2)

第5回:等級制下における進級方法　等級制から学年制へ(1)

第6回:学年制と試験　等級制から学年制へ(2)

第7回:「教室」の望ましい形とは?学校建築史(1)

第8回:「教室」の規定　学校建築史(2)

第9回:学校事件に関する諸研究

第10回:児童の問題行動　学校における問題行動(1)

第11回:「懲戒」を巡る事件　学校における問題行動(2)

第12回:日本近代の教員養成に関する諸研究

第13回:教育実習はいつ、どのように始まったのか

第14回:大正期の教育実習日誌を読む

定期試験

●事前・事後学習の内容

事前学習:各回の課題となる研究論文、史料を読み込んでおくこと。

事後学習:講義中に用いた史料について、くずし字辞典などを用いながら自分なりに読み直しておくこと。

●評価方法

授業の主題および受講生の問題関心に関連したレポート:80%、授業への参加(発言など):20%。

●受講生へのコメント

歴史的な用語理解、文書判読能力を養うので、くずし字辞典、漢和辞典、国語辞典に慣れておくことが望ましい。

●参考文献・教材

テキスト

特になし。

参考書・参考資料等

佐藤秀夫『教育の文化史』(1、学校の構造)、(2、学校の文化)、阿吽社。

女子学習院編『女子学習院五十年史』女子学習院、1935年。

中村紀久二『国定修身教科書　複刻　解説』大空社、1990年永芳弘武・中村紀久二・加藤宗晴　編『教科書検定総覧』(小学校篇、中学校篇、高等学校篇)小宮山書店、1968年-1970年

パイインターナショナル『世界の美しい学校』パイインターナショナル、2019年

久木幸男『日本の宗教　過去と現在』サイマル出版会、1971年

久木幸男『検証　清沢満之批判』法蔵館、1995年
古田東朔『小學讀本便覧』第8巻、武蔵野書院、2007年
古田東朔『国語科教育―誕生と発展 』(古田東朔 近現代 日本語生成史コレクション 第5巻) くろしお出版、2013年
四方利明『学校の建築と教育　学校化・教育改革・境界人』阿吽社、2018年
その他、授業中に適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LBEDU2502	授業コード	LM07020010
教育学基礎問題研究演習 Advanced Seminar:Studies of Fundamental Problems in Education			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 柏木　敦			

●科目の主題

設定した各テーマを軸に、履修者の興味関心の対象を明確にして基礎的な研究手法を身につける。

●到達目標

自己のテーマに関わる歴史的視点を養い、研究到達点の確認、課題設定方法、研究論文作成に関わる基礎的な技術などを習得する。

●授業内容・授業計画

日本近代の教育制度政策史に関する諸研究を検討し、教育史研究における研究到達点、課題設定方法、研究論文作成に関わる基礎的な技術などを習得する。それらの作業を通して、履修者の課題意識、方法意識を明確にすることを本演習の目的とする。

第1回:オリエンテーション
第2回:「学制」成立および展開に関する研究
第3回: 教育令制定、改正に関する研究
第4回: 諸学校令に関する研究
第5回: 日本の中等教育制度成立に関する研究
第6回: 日本の中等教育制度政策の展開に関する研究
第7回: 日本の高等教育制度成立に関する研究
第8回:日本の高等教育制度政策の展開に関する研究
第9回: 大正自由教育に関する研究
第10回: 大正期教育政策に関する研究
第11回: 戦時期における教育政策に関する研究
第12回: 学童疎開に関する研究
第13回: 戦後日本の教育制度政策に関する研究
第14回:現代教育史研究の動向と展望
定期試験

●事前・事後学習の内容

事前学習:各回のテーマ、対象時期の研究に関する調査(文献・資料収集)
事後学習:授業で扱ったテーマと自己の研究課題との関連性について検討し、レポートおよび論文の内容に関連づける。

●評価方法

受講者各自の問題意識に基づくレポート:80%、授業参加の程度:20%。

●受講生へのコメント

国立国会図書館デジタルライブラリーの利用方法を自分なりに会得しておくこと。

●参考文献・教材

参考書・参考資料等
石川松太郎『藩校と寺子屋』(教育社歴史新書)教育社、1978年。
下司晶・丸山英樹・青木栄一『教育研究の新章』(教育学年報11)、世織書房、2019年。
成城学園教育研究所編『教育問題研究』(復刻版)、龍渓書舎、1970-1991年
東京茗渓会『東京茗渓会雑誌』第1巻～第20巻(復刻)、現代情報社
日本図書センター『文部時報』(復刻版第Ⅲ期、全14巻)、同前『文部時報』(復刻版第Ⅳ期、全12巻)、同前『文部時報』(復刻版第Ⅴ期、全12巻)、2014年??2015年。
文部省普通学務局『小学校令施行規則の沿革』文部省、1940年。
その他授業中に適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LBEDU2503	授業コード	LM07030010
学校教育学研究Ⅰ Advanced Studies on Education Practices in Schools Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 島田　希			

●科目の主題

わが国における授業研究の蓄積と海外における広がり、さらには授業研究を基盤とした学校づくりや授業研究の方法論的特徴に関して考察を深める。

●到達目標

①わが国における授業研究の歴史・実態・今日的課題や海外における広がりについて説明することができる。
②授業研究を基盤とした学校づくりに関するキーコンセプトについて説明することができる。
③上記①②をふまえた上で、授業研究の方法論および教育方法学研究としての今後の展開について考えをまとめることができる。

●授業内容・授業計画

わが国における授業研究の取り組みやその広がりについて検討することを通して、「専門的な学習共同体」としての学校について考察を深めていく。なお、以下に挙げる参考文献を中心に関連文献を読み進めるとともに、受講生相互によるディスカッションを中心に進めていく。教材となる文献を丁寧に読み解くこと、さらには、ディスカッションへの積極的な参加を求める。

第1回:オリエンテーション
第2回:わが国における授業研究の蓄積
第3回:わが国における授業研究の特色
第4回:わが国における授業研究の実態
第5回:わが国における授業研究の今日的課題
第6回:海外における授業研究の広がり①米国における展開
第7回:海外における授業研究の広がり②アジアにおける展開
第8回:海外における授業研究の広がり③北欧における展開
第9回:授業研究を基盤とした学校づくり
第10回:授業研究を基盤とした学校づくりを実現する好事例の分析
第11回:授業研究の方法論に関する理論的考察
第12回:授業研究の方法論に関する実践的動向
第13回:教育方法学研究としての授業研究の展開と展望
第14回:まとめ

●事前・事後学習の内容

授業中に紹介・配付する資料や参考文献を授業の事前・事後に読むほか、関連する文献等を自ら収集し、授業内容のさらなる理解に努めること。

●評価方法

授業時の発表、ディスカッションへの参加、小レポート(60%)と期末レポート(40%)により、総合評価する。

●受講生へのコメント

以下に挙げる教材を読み進めるとともに、受講生相互によるディスカッションを中心に進めていく。
教材となる文献を丁寧に読み解くこと、さらには、ディスカッションへの積極的な参加を求める。

●参考文献・教材

テキスト
・特になし
参考書・参考資料等
・日本教育方法学会編(2009)『日本の授業研究―授業研究の歴史と教師教育＜上巻＞』学文社.
・日本教育方法学会編(2009)『日本の授業研究―授業研究の方法と形態＜下巻＞』学文社.
・日本教育工学会監修/水越敏行・吉崎静夫・木原俊行・田口真奈(2012)『授業研究と教育工学』ミネルヴァ書房.
・日本教育工学会監修/小柳和喜雄・柴田好章(2017)『Lesson Study(レッスンスタディ)』ミネルヴァ書房.

授業科目名	科目NO.	LBEDU2504	授業コード	LM07040010
学校教育学研究演習1 Advanced Seminar on Education Practices in Schools 1			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 島田　希			

●科目の主題

学校教育学研究Ⅰの内容をふまえつつ、授業研究に関わる先行研究の検討を行う。授業研究に関する様々な研究アプローチにふれることを通じて、その方法論的特徴について考察する。さらに、わが国における授業研究の継続・発展に関わる要因およびそれを実現するための外部ネットワークの構築やそれを実現するツールの開発について考察を深める。

●到達目標

①わが国における授業研究に関する先行研究の特徴について説明することができる。
②授業研究の継続・発展を促す要因について説明することができる。
③授業研究の継続・発展を実現する外部ネットワーク構築の必要性やそれを促すツールの開発について説明することができる。

●授業内容・授業計画

わが国における授業研究に関わる先行研究のレビュー通じて、その全体像や特徴について考察を深めていく。なお、以下に挙げる教材を中心に読み進めるとともに、受講生相互によるディスカッションを中心に進めていく。教材となる文献献を丁寧に読み解くこと、さらには、ディスカッションへの積極的な参加を求める。

第1回:オリエンテーション
第2回:行動主義的アプローチによる授業研究の方法論的特徴
第3回:認知主義的アプローチによる授業研究の方法論的特徴
第4回:社会構成主義的アプローチによる授業研究の方法論的特徴
第5回:教育工学的アプローチによる授業研究の方法論的特徴
第6回:質的アプローチによる授業研究の方法論的特徴
第7回:アクションリサーチとしての授業研究の方法論的特徴
第8回:授業研究の継続・発展を促す分散型リーダーシップの発揮
第9回:授業研究の継続・発展を促すグループアイデンティティの構築
第10回:授業研究の継続・発展を促す必要なリソースの確保と活用
第11回:授業研究の継続・発展を実現する外部ネットワーク構築の必要性
第12回:授業研究の継続・発展を実現する外部ネットワーク構築の好事例の分析
第13回:授業研究の継続・発展を実現する外部ネットワーク構築を促すツール、研修の開発
第14回:まとめ

●事前・事後学習の内容

授業中に紹介・配付する資料や参考文献を授業の事前・事後に読むほか、関連する文献等を自ら収集し、授業内容のさらなる理解に努めること。

●評価方法

授業時の発表、ディスカッションへの参加、小レポート(60%)と期末レポート(40%)により、総合評価する。

●受講生へのコメント

以下に挙げる教材を読み進めるとともに、受講生相互によるディスカッションを中心に進めていく。教材となる文献を丁寧に読み解くこと、さらには、ディスカッションへの積極的な参加を求める。

●参考文献・教材

テキスト
・特になし
参考書・参考資料等
・日本教育方法学会編(2009)『日本の授業研究―授業研究の歴史と教師教育＜上巻＞』学文社.
・日本教育方法学会編(2009)『日本の授業研究―授業研究の方法と形態＜下巻＞』学文社.
・水越敏行・木原俊行・田口真奈・吉崎静夫著/日本教育工学会監修(2012)『授業研究と教育工学』ミネルヴァ書房.
・木原俊行・寺嶋浩介・島田希編著/日本教育工学会監修(2016)『教育工学的アプローチによる教師教育―学び続ける教師を育てる・支える』ミネルヴァ書房.

授業科目名	科目NO.	LBEDU2505	授業コード	LM07050010
学校教育学研究Ⅱ Advanced Studies on Education Practices in Schools Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 森　久佳			

●科目の主題

教育方法学の主要研究領域の一つである「教師教育」に関する基本的素養を養うことで、教育方法学に関する専門的な知見の基礎を身につける。

●到達目標

(1)教師教育の研究に関する基本的素養を身につける
(2)教師教育の研究動向について理解する
(3)教師教育の観点から教育方法学に対する専門的な理解を深める

●授業内容・授業計画

指定したテキストの講読を中心に、テキストの内容についての発表と、それに基づいた対話的な議論を通して、教育方法学に関する専門的な知見の習得及び深化を図る。また、学修の状況に応じて、関連文献の講読も行う。

第1回:オリエンテーション(授業の進め方等についての説明)
第2回:教師に求められる資質について(テキストⅠ)
第3回:教師が育つ条件(テキストⅡ)
第4回:我が国における教師教育改革の動向と求められる専門家像①(テキストⅢ)
第5回:我が国における教師教育改革の動向と求められる専門家像②(テキストⅢ)
第6回:我が国における教師教育改革の動向と求められる専門家像③(テキストⅢ)
第7回:教師教育の目標と対象(テキストⅣ)
第8回:学校環境と教師教育(テキストⅣ)
第9回:大学・大学院と教師教育(テキストⅣ)
第10回:わが国の教師をめぐる課題と背景(テキストⅤ)
第11回:教職の歴史的・文化的特質と課題(テキストⅤ)
第12回:わが国の教師たちのアイデンティティの特質と課題(テキストⅤ)
第13回:教師教育をめぐる研究動向と課題①:教師レジリエンスの観点から
第14回:教師教育をめぐる研究動向と課題②:多忙化と働き方改革の観点から
定期試験は実施しない

●事前・事後学習の内容

課題文献の事前講読と背景情報等の検討。

●評価方法

平常点40%(授業への参加状況、発表の様子)と期末レポート(60%)による。

●受講生へのコメント

入念な予習と活発な議論を期待します。

●参考文献・教材

＜テキスト＞【テキストⅠ】:諸富祥彦(2013)『教師の資質:できる教師とダメ教師は何が違うのか？』朝日新書.【テキストⅡ】:今津孝次郎(2012)『教師が育つ条件』岩波新書.【テキストⅢ】:佐藤学(2015)『専門家として教師を育てる:教師教育改革ののグランドデザイン』岩波書店.【テキストⅣ】:今津孝次郎(2017)『新版　変動社会の教師教育』名古屋大学出版会.【テキストⅤ】:久冨善之(2017)『日本の教師、その12章:困難から希望への途を求めて』新日本出版社.

＜参考文献＞日本教育方法学会編(2014)『教育方法学研究ハンドブック』学文社日本教師教育学会編(2017)『教師教育研究ハンドブック』学文社. 小川正人(2019)『日本社会の変動と教育政策:新学力・子どもの貧困・働き方改革』左右社. 佐藤学編(2016)『学びの専門家としての教師』(岩波講座　教育　変革への展望4)岩波書店.

授業科目名	科目NO.	LBEDU2506	授業コード	LM07060010
学校教育学研究演習2 Advanced Seminar on EducationPractices in Schools 2			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 森 久佳			

●科目の主題

教育方法学の主要研究領域の一つである「教師教育」に関する国際的な研究動向を理解するため、また、英語で論文を執筆することも念頭に置きながら、英語による研究論文の講読を行い、教育方法学に関する専門的な知見を身につける。

●到達目標

(1)教師教育をテーマとする研究論文(英語)を講読するための基本的素養を身につける
(2)教師教育の国際的な研究動向について理解する
(3)教師教育の観点から教育方法学に対する専門的な理解を深める

●授業内容・授業計画

指定したテキストの講読を中心に、テキストの内容についての発表と、それに基づいた対話的な議論を通して、教育方法学に関する専門的な知見の習得及び深化を図る。また、学修の状況に応じて、関連文献の講読も行う。

授業計画

第1回　オリエンテーション(授業の進め方等についての説明)
第2回　教師に求められる資質・能力について①:その背景と課題
第3回　教師に求められる資質・能力について②:研究アプローチの検討を中心に
第4回　教職における同僚性①:その背景と課題
第5回　教職における同僚性②:専門的な共同体(Professional Learning Communityのアプローチの検討を中心に)
第6回　教職における多忙化①:その背景と課題
第7回　教職における多忙化②:有益な取組みに関する検討を中心に
第8回　教職と教師レジリエンス①:その背景と課題
第9回　教職と教師レジリエンス②:教職の専門性・専門職性の観点から
第10回　教職と教師エージェンシー①:その背景と課題
第11回　教職と教師エージェンシー②:教職の専門性・専門職性の観点から
第12回　教師教育をめぐる今日的課題①:チームの観点から
第13回　教師教育をめぐる今日的課題②:教職の業務と働き方改革の観点から
第14回　教師教育をめぐる今日的課題③:研究のアプローチの展望
定期試験は実施しない

●事前・事後学習の内容

課題文献の事前講読と背景情報等の検討。

●評価方法

平常点40%(授業への参加状況、発表の様子)と期末レポート(60%)による。

●受講生へのコメント

入念な予習と活発な議論を期待します。

●参考文献・教材

＜テキスト＞
以下の研究雑誌(英語)に掲載されている諸論文を取り上げて講読する。
Teaching and Teacher Education: An International Journal of Research and Studies. (Elsevier).Journal of Curriculum Studies. (Taylor & Francis).
＜参考文献＞﨑村耕二(2017)『最新　英語論文によく使う表現　基本編』創元社. 迫桂・徳永聡子(2012)『英語論文の書き方入門』慶應義塾大学出版社(初版第2刷2014年)福田尚代・西山聖久(2016)『理工系なら必ず知っておきたい英語論文を読みこなす技術』誠文堂新光社. 安原　和也(2011)『英語論文基礎表現717』三修社. 安原　和也(2012)『英語論文重要語彙717』三修社. 安原　和也(2013)『基本例文200で学ぶ英語論文表現:アウトプット練習問題集三修社.

授業科目名	科目NO.	LBEDU2507	授業コード	LM07070010	
教育学特殊問題研究Ⅰ Advanced Studies in Special Educational Fields Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	辻野　けんま				

●科目の主題

マクロな公教育制度の法制をミクロな教育の営みとのかかわりにおいてとらえ、研究課題が諸研究とどのようにかかわるか見出し深めることができる。

●到達目標

自ら公教育の課題設定ができ、それをマクロな制度的視点から探求できる。

●授業内容・授業計画

公教育のあり方に関して、関連研究に学びつつ討議を通じて思考を深め、現代社会における教育を捉える視角を磨いていく。 本授業では、受講者それぞれの研究関心を加味しつつ文献を選定し、毎回の授業において文献講読、発表、討議、という流れ構成する。各回の授業テーマは以下の内容を含むものとし、状況にあわせてとりあげる順序等を調整する。

第1回:オリエンテーション
第2回:公教育の基本理念
第3回:公教育の制度特性
第4回:学校教育と学校外教育
第5回:公教育と私教育
第6回:教職員の職務と専門性
第7回:学校特別権力関係論
第8回:就学義務と教育義務
第9回:学校と地域社会
第10回:社会教育と国家
第11回:教育と福祉
第12回:教育政策と子ども
第13回:グローバル化と教育政策
第14回:国民国家と公教育
定期試験は実施しない。

●事前・事後学習の内容

毎回の授業にあたり事前に文献読解および報告資料作成を課す。

●評価方法

授業での発表、討議およびレポートを総合し評価する。

●受講生へのコメント

本演習では、様々な 角度から教育経営研究に触れ、読み進め討議を重ねる。それを通じて、受講者各自の研究関心をマクロな教育経営からとらえ直すことを目指す。

●参考文献・教材

テキスト
授業資料は事前に配布し、あらかじめ課題を出す。授業は課題を終えて参加している前提で進める。
参考書・参考資料等
参考資料等は授業内で適宜紹介する。

授業科目名	科目NO.	LBEDU2508	授業コード	LM07080010
教育学特殊問題研究演習1 Advanced Seminar in Special Educational Fields 1			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 辻野　けんま			

●科目の主題

マクロな公教育制度の法制をミクロな教育の営みとのかかわりにおいてとらえ、研究課題を深める。

●到達目標

現代社会を特徴づける事象を捉えながら、公教育の課題を教育行政・制度の観点から考え、自分なりの見解を論理的に構成したり生産的に議論したりできる。

●授業内容・授業計画

現在、日本では、少子高齢化や人口減少がローカルな地域社会の退廃や消滅を進行させる一方で、政治・経済、科学技術、自然環境、国際平和をはじめ様々な領域で国境を超えたグローバル化が急速に拡大している。このような状況下において、国民国家が構築してきた近代教育制度は社会の変容に十分に対応しきれず、ときにその限界さえ露呈させつつある。その一方で、変動する社会の中でもそこに惑わされすぎずに公教育が安定して築いてきた価値もあるだろう。そこで本授業では、ポスト国民国家時代における「公教育の正当性」と、そこにおける「教員の専門性」について教育行政学的な観点から考察を深めていく。

授業計画

本授業では、(A)「公教育制度の概観」、(B)「教育行政と学校経営」、(C)「教育の権利と責任」というテーマ領域について、4～5回ずつの授業を行い、各回では文献講読、報告、討議を重ねていく。

第1回：公教育を行政・制度から捉える視角
第2回：公教育制度の概観I：「学力」政策
第3回：公教育制度の概観II：教育の公共性と私事化
第4回：公教育制度の概観III：教職専門性
第5回：公教育制度の概観IV：公教育経営
第6回：総括的討議—公教育の制度的課題—
第7回：教育行政と学校経営I：学校内外の「連携」
第8回：教育行政と学校経営II：学校選択と学校参加
第9回：教育行政と学校経営III：私学行政
第10回：教育行政と学校経営IV：就学義務と不登校
第11回：総括的討議—教育経営の課題—
第12回：教育の権利と責任I：教育権論争
第13回：教育の権利と責任II：教育裁判
第14回：教育の権利と責任III：公教育と国民国家
定期試験は実施しない。

●事前・事後学習の内容

授業資料は事前に配布し、毎回の授業は文献を事前に読了している前提で議論を進める。

●評価方法

レポートと授業内での発表等を総合し評価する。

●受講生へのコメント

本演習では学校教育を中心とする公教育論について、マクロな制度とミクロな実践との関係を読み解くため、様々な角度から文献講読を重ねていきます。

●参考文献・教材

テキストは指定しない。参考教材は授業内で適宜紹介する。

授業科目名	科目NO.	LBEDU2509	授業コード	LM07090010
教育学特殊問題研究Ⅱ Advanced Studies in Special Educational Fields Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 添田　晴雄			

●科目の主題

文字言語と音声言語の視点から日本と西洋の学習文化を比較研究する。

●到達目標

方法論としての比較教育を考える。文字言語と音声言語の視点から学級活動の話合い活動を分析する。

●授業内容・授業計画

第1回:オリエンテーション
第2回:文字言語・音声言語からみた授業分析併置比較(分析方法)
第3回:文字言語・音声言語からみた授業分析併置比較(分析結果・考察)
第4回:日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習(学級会の特徴)
第5回:日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習(三段階討議法)
第6回:日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習(比べ合い)
第7回:日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習(板書)
第8回:日本の学級活動の話合いにおける書字随伴型学習(学級会ノート)
第9回:アメリカの話合いにおける書字随伴型学習
第10回:日本の近世における書字随伴型学習(手習塾とは)
第11回:日本の近世における書字随伴型学習(手習塾の学習内容)
第12回:日本の近世における書字随伴型学習(手習塾の学習方法)
第13回:西洋の中世・近代における音声中心型学習(レシテーション)
第14回:西洋の中世・近代における音声中心型学習(口頭試験)
レポート

●事前・事後学習の内容

テキストを精読し、論点を提示して根拠にもとづてい議論する準備をする。

●評価方法

レポートおよび授業中において、比較教育文化的視点にたち、日本の特別活動が果たす役割についても考察しているかどうかを評価する。

●受講生へのコメント

テキストを足がかりにして、自分で仮説をたて論証してください。

●参考文献・教材

テキスト
添田晴雄『文字と音声の比較教育文化史研究』東信堂、2019年
参考書・参考資料等
特になし

授業科目名	科目NO.	LBEDU2510	授業コード	LM07100010
教育学特殊問題研究演習2 Advanced Seminar in Special Educational Fields 2			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 添田　晴雄			

●科目の主題

文字言語と音声言語の視点から日本と西洋の学習文化を比較研究する

●到達目標

方法論としての比較教育を考える。文字言語と音声言語の視点から日本と西洋の学習文化を比較研究する。

●授業内容・授業計画

第1回:日本の文字教育観
第2回:西洋の文字教育観
第3回:日本の文字教育観と西洋の文字教育観の比較
第4回:アメリカの国語授業における書字随伴型学習
第5回:アメリカの数学授業における書字随伴型学習
第6回:アメリカの国語・数学授業における書字随伴型学習の比較
第7回:文字言語・音声言語から見た西洋教育移入期関係比較(関係比較とは)
第8回:文字言語・音声言語から見た西洋教育移入期関係比較(机・椅子等の導入)
第9回:文字言語・音声言語から見た西洋教育移入期関係比較(掛図・教科書等の導入)
第10回:文字言語・音声言語から見た西洋教育移入期関係比較(カリキュラムの変遷)
第11回:学習・教育文化関係比較研究における「モノ」(石盤の普及)
第12回:学習・教育文化関係比較研究における「モノ」(練習帳の普及)
第13回:学習・教育文化関係比較研究と「深層構造」と「表層構造」(原理)
第14回:学習・教育文化関係比較研究と「深層構造」と「表層構造」(考察)
レポート

●事前・事後学習の内容

テキストを精読し、論点を提示して根拠にもとづてい議論する準備をする。

●評価方法

レポートおよび授業中において、比較教育文化的視点にたち、日本の特別活動が果たす役割についても考察しているかうかぎ評価する。

●受講生へのコメント

テキストを手がかりにして、自分で仮説をたて論証してください。

●参考文献・教材

テキスト
添田晴雄『文字と音声の比較教育文化史研究』東信堂、2019年
参考書・参考資料等
特になし

授業科目名	科目NO.	LBEDU2511	授業コード	LM07110010
教育学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Education Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	柏木　敦／添田　晴雄／森　久佳／辻野　けんま／島田　希			

●科目の主題

教育思想や制度、内容や方法に関する基本的・総合的な問題について、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマを取り上げて講ずるとともに、受講生も研究発表を行い、討論を通して、教育学における論文作成に必要な基本的事項の理解を深める。

●到達目標

教育学研究を行う上で必要となる基本的な事項と研究方法を学ぶ。

●授業内容・授業計画

授業計画

第1回:オリエンテーション(担当:柏木、添田、森、辻野、島田)
第2回:教育学の全体像(担当:柏木、添田、森、辻野、島田)
第3回:学術情報の探索的検索と収束的検索(担当:添田)
第4回:論文執筆における具体的描写と抽象的描写の往還(担当:添田)
第5回:教育史研究における実証(担当:柏木)
第6回:教育史研究における対象設定および時期区分(担当:柏木)
第7回:教育制度の概観とガバナンスの構造(担当:辻野)
第8回:義務教育の権利的側面と権力的側面(担当:辻野)
第9回:教職の専門職性と専門性をめぐる議論(担当:森)
第10回:専門家としての教職の資質・力量形成(担当:森)
第11回:教育方法学研究における授業研究の位置づけ(担当:島田)
第12回:授業研究とカリキュラム研究の接点(担当:島田)
第13回:教育学をめぐる今日的課題への示唆(担当:柏木、添田、森、辻野、島田)
第14回:まとめ(担当:柏木、添田、森、辻野、島田)

●評価方法

研究報告による(100%)。

●参考文献・教材

テキスト
日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社、2014年。
日本教師教育学会編『教師教育研究ハンドブック』学文社、2017年。
参考書・参考資料等
米田俊彦「個人情報の保護と利用に関する委員会中間報告会」『教育学研究』第73巻第2号、日本教育学会、2006年。
佐藤秀夫「日本近代教育史に関する研究資料の考察――制度政策関係の官制文書史料を中心として――」『日本の教育史学』第13集、教育史学会、1970年。

授業科目名	科目NO.	LBEDU2512	授業コード	LM07120010
教育学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Education Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	柏木　敦／添田　晴雄／森　久佳／辻野　けんま／島田　希			

●科目の主題

教育学の各分野について実証的な手法を学び、また討論や資料調査、その分析手法などを習得する。

●到達目標

各種の研究方法や研究資料・文献の取り扱いについて担当教員が概説するとともに、受講生に研究報告を求め、討論を行う。

●授業内容・授業計画

授業計画

第1回：オリエンテーション（担当：柏木、添田、森、辻野、島田）
第2回：教育学の各分野における研究手法の全体像（担当：柏木、添田、森、辻野、島田）
第3回：教育政策、教育行政文書に関する概説（担当：柏木）
第4回：教育関係雑誌、学校文書に関する概説（担当：柏木）
第5回：比較研究における比較妥当性（担当：添田）
第6回：比較研究における差異化志向と一般化志向（担当：添田）
第7回：公教育経営におけるマクロ・レベル―メゾ・レベル―ミクロ・レベルの層化（担当：辻野）
第8回：公教育経営の全体構造からみる研究課題の再定位（担当：辻野）
第9回：子どもの貧困問題をめぐる教職の課題と展望（担当：森）
第10回：教職における働き方改革の動向と課題（担当：森）
第11回：教育方法学研究における「語り」の扱いとその留意点（担当：島田）
第12回：アクションリサーチとしての教育方法学研究（担当：島田）
第13回：教育学各分野における研究手法の特徴と今日的課題（担当：柏木、添田、森、辻野、島田）
第14回：まとめ（担当：柏木、添田、森、辻野、島田）

●事前・事後学習の内容

●評価方法

研究報告による（100%）。

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

＜テキスト＞【テキストⅠ】：諸富祥彦（2013）『教師の資質：できる教師とダメ教師は何が違うのか？』朝日新書.【テキストⅡ】：今津孝次郎（2012）『教師が育つ条件』岩波新書.【テキストⅢ】：佐藤学（2015）『専門家として教師を育てる：教師教育改革ののグランドデザイン』岩波書店.【テキストⅣ】：今津孝次郎（2017）『新版　変動社会の教師教育』名古屋大学出版会.【テキストⅤ】：久冨善之（2017）『日本の教師、その12章：困難から希望への途を求めて』新日本出版社.

＜参考文献＞日本教育方法学会編（2014）『教育方法学研究ハンドブック』学文社日本教師教育学会編（2017）『教師教育研究ハンドブック』学文社.

授業科目名	科目NO.	LBEDU3601	授業コード	LM07130010
教育学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Education Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 柏木 敦			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「教育学研究指導1」（前期）、「教育学研究指導2」（後期）の指導によって完成させる。

前期の「教育学研究指導1」では、1年次までの学修に基づき、修士論文の執筆計画を立て、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文執筆計画を立て実施する
(2)問題意識を整理し、研究課題の学術的意義を提示する
(3)研究目的に応じた適確な課題を設定する
(4)研究課題に応じた適切な研究方法を計画する
(5)研究課題に応じた先行研究の読み込みを行う
(6)研究課題に応じた実験結果、調査結果、文献資料を蓄積する
(7)修士論文研究に関わる研究倫理について考える

●授業内容・授業計画

第1回:オリエンテーション
修士論文とは何か(確認)
教育学の方法論(確認)
修士論文研究・執筆計画について
修士論文の評価規準・基準について
第2回～第5回:修士論文構想発表会(連続4コマ)
テーマに関する問題意識の整理
予想される(期待している)結論
研究方法の目処
同学年他学年の学生、複数の教員との質疑応答から学ぶ
第6回:研究計画に即して研究倫理を考える
第7回:先行研究の読み込み
第8回:「先行研究の整理」の意義と方法
第9回:修士論文の章立て
第10回～第14回:修士論文中間発表会—章立ての仮決定のために—(連続4コマ)
問題意識の提示
論証しようとしていること(仮の結論)
論証のための方法とその目処
章立て
これからの課題

●事前・事後学習の内容

事前学習
第1回:修士論文計画を立てて提出する。
第2回～第5回:修士論文構想発表会の準備を行う。
第6回:自分の研究計画に即して研究倫理を考え、研究倫理の観点から研究計画を練り上げる。
第7回:研究課題に応じた先行研究の読み込みを計画し、読み込んだ結果を発表する。
第8回:自分の修士論文に必要な「先行研究の整理」を行ってみる。
第9回:修士論文の章立てを考える。
第10回～第14回:これまでの作業を確認しながら発表準備を行う。

事後学習
第1回：修士論文構想発表会の準備を行い、レジュメを作成する。
第2回～第5回：修士論文構想発表会の議論を踏まえ、自分の修士論構想を練り直す。
第6回：大阪市立大学、所属する学会等の研究倫理規程を確認し、研究・調査に反映させる。
第7回：発表の際の議論に基づき、先行研究を吟味する。
第8回：対象とする先行研究の範囲や対象を確認する。
第9回：先行研究を参照しながら、章立ての適否を再検討する。
第10回～第14回：修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論文研究・執筆計画を練り直す。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の修士課程の集大成である。履修モデルとしての教育学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「教育学研究指導1」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、修士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

特に指定しない。

授業科目名	科目NO.	LBEDU3602	授業コード	LM07140010
教育学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Education Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 柏木　敦／添田　晴雄			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「教育学研究指導1」（前期）、「教育学研究指導2」（後期）の指導によって完成させる。

後期の「教育学研究指導2」では、修士論文の仕上げに向けて、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文の評価規準と基準を知る
(2)執筆途上において、その時点の自分の修士論文を評価基準に準拠して点検する
(3)点検の結果を踏まえ、修士論文計画・執筆計画を修正しながら修士論文を完成させる

●授業内容・授業計画

第1回:修士論文の進捗状況の報告
第2回:修士論文の評価基準の確認
第3回～第6回:修士論文中間発表会(4コマ連続)
完成に向けての執筆方針の確認(研究方法論、課題設定、先行研究の整理章立て等)
完成に向けての研究・執筆計画
第7回:修士論文中間発表会の振り返り
第8回:問題意識と学術的意義を扱う部分についての点検
第9回:研究目的に応じた課題設定を扱う部分について点検
第10回:研究手法の説明を扱う部分についての点検
第11回:先行研究を扱う部分についての点検
第12回:実験結果、調査結果、文献分析を扱う部分についての点検
第13回:論理の組み立てや一貫性に関する点検
第14回:学術論文としての表現、表記法等に関する点検

●事前・事後学習の内容

事前学習
第1回:修士論文研究進捗状況の報告レジュメを作成・提出する。
第2回:修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。
第3回～第6回:修士論文中間発表を行い、他の発表者の発表および議論の内容も検討する。第7回:完成までの期間の研究・執筆計画を立てる。
第8回:点検の対象になる部分を執筆する。
第9回:点検の対象になる部分を執筆する。
第10回:点検の対象になる部分を執筆する。
第11回:点検の対象になる部分を執筆する。
第12回:点検の対象になる部分を執筆する。
第13回:点検の対象になる部分を執筆する。
第14回:点検の対象になる部分を執筆する。
事後学習
第1回:
第2回:
第3回～第6回:修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論研究・執筆計画を練り直す。第7回:担当教員、学生との議論を踏まえて研究・執筆計画を見直す。
第8回:点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第9回:点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第10回:点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第11回:点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第12回:点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。

第13回:点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第14回:点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

「教育学研究指導2」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質が評価されるのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「教育学研究指導2」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の学士課程の集大成である。履修モデルとしての教育学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「教育学研究指導2」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、学士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

特に指定しない。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000070	
修士論文（教育学） Master's Thesis（教育学）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	柏木　敦／添田　晴雄				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポシシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「教育学研究指導1」「教育学研究指導2」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1) 修士論文は、教育学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2) (評価基準) 修士論文は以下の各項目について、教育学分野における十分な水準を満たさなければならない。

(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、教育学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、教育学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、教育学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3) (論文の体裁) 修士論文は、論を展開する上で、教育学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

※各回の授業内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「教育学研究指導1」「教育学研究指導2」のシラバスを参照すること。

●事前・事後学習の内容

「修士論文」に連動する「教育学研究指導1」「教育学研究指導2」の事前・事後学習を参照しつつ、論文作成を進めること。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「教育学研究指導1」は、修士論文を提出する年度の前期に、「教育学研究指導2」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。履修モデルとしての教育学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

指定しない。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2501	授業コード	LM08010010
地理学基礎問題研究 Advanced Studies of Fundamental Problems in Geography			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	山﨑　孝史			

●科目の主題

この科目は地理学という学問がどのような課題と方法を持つのかについて、19世紀初頭における近代地理学成立以来の発展過程を振り返りながら、考察することを目的とします。とりわけ1950年代以降の英語圏の地理学における諸スクールの研究分野と基本概念について詳細に検討します。特に今年度の地理学基礎問題研究は「コンタクトゾーンとしての境界都市」をテーマに、沖縄県沖縄市コザ地区を事例に軍事化された都市の境界性について歴史地誌的観点から考察します。

●到達目標

今年度の地理学基礎問題研究は、シンシア・エンローの軍事化、レイチェル・ウッドワードの軍事化された景観（批判軍事地理学）、マリー＝ルイーズ・プラットのコンタクトゾーンの概念ともとに、米軍駐留都市を政治地理学的にとらえうる視角を見出します。まず米軍の国外駐留を米国による覇権維持を支える機構の一つとしてとらえ、「ホスト」地域社会との関係、そこへの影響の地理的顕現を分析し、そこから米軍駐留都市がもつ「境界性」を理解する視座を獲得します。これらのプロセスは、学期末に実施する沖縄県沖縄市コザ地区でのフィールドワークを通して補完されます。

●授業内容・授業計画

第1回　イントロダクション
第2回　ジェンダー研究における軍事化概念①
第3回　ジェンダー研究における軍事化概念②
第4回　ジェンダー研究における軍事化概念③
第5回　批判軍事地理学の視点①
第6回　批判軍事地理学の視点②
第7回　批判軍事地理学の視点③
第8回　コンタクトゾーンとしての基地の街①
第9回　コンタクトゾーンとしての基地の街②
第10回　コンタクトゾーンとしての基地の街③
第11回　沖縄市フィールドワーク
第12回　沖縄市フィールドワーク
第13回　沖縄市フィールドワーク
第14回　沖縄市フィールドワーク

●事前・事後学習の内容

事前学習として課題に関連する参考文献を読み、コメントを事前に提出した上で、授業に臨む必要があります。授業の成果は事後学習としてフィールドワークの実施にフィードバックすることになります。

●評価方法

各週の課題項目へのコメント提出（30点）、論題提起とフィールドワーク参加（40点）、期末レポート（30点）から評価され、総点が60点以上を合格とします。

●受講生へのコメント

課題文献は各自でダウンロードないしコピーしていただきます。沖縄市フィールドワークは12月から2月のいずれかの時期で実施予定ですが、詳細は学期の初めにお知らせします。シラバス等詳細は教員ホームページ（http://polgeog.jp）を参照してください。

●参考文献・教材

シンシア・エンロー（上野千鶴子・佐藤文香訳）『策略―女性を軍事化する国際政治』（岩波書店、2006年）、田中雅一編『軍隊の文化人類学』（風響社、2015年）ほか必要な文献は授業開始時に指示します。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2502	授業コード	LM08020010
地理学基礎問題研究演習 Advanced Seminar:Studies of Fundamental Problems in Geography			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 山﨑　孝史			

●科目の主題

この科目は地理学という学問がどのような課題と方法を持つのかについて、19世紀初頭における近代地理学成立以来の発展過程を振り返りながら、考察することを目的とします。とりわけ1950年代以降の英語圏の地理学における諸スクールの研究分野と基本概念について詳細に検討します。特に今年度の地理学基礎問題研究演習は2020年1月に丸善出版から刊行される『現代地政学事典』を用い、「地政学」の歴史と現在について考察します。

●到達目標

『現代地政学事典』の紹介文は事典刊行の意義を次のように説明しています。「地政学」―人間が暮らす世界としての地理と政治を合わせて考察しようとしたこの学問は、脅威や国家中心主義といった戦争のイメージが付きまとう学問でもある。しかし、現代の地政学／政治地理学は複雑化する空間と政治の結びつきを読み解く，ローカルからグローバルまでのスケールを横断しながら考察する学問領域へと変貌しつつある。それは、「国家」のみならず、私達をとりまく現代社会について、「空間」から、「人々」から、「境界」から、「私達は何におびえ、どう乗り越えるのか」を問おうとする学問である。本書では海外の研究成果も紹介しつつ、大きく6章―私たちを取り巻くさまざまな脅威や不安に関する認識、その構図、伝統地政学、批判地政学、ボーダースタディーズ、さらに地球社会が抱えるさまざまな脅威と解決の模索―で構成。地球社会の脅威を認識し乗り越えるための「新しい地政学」の構築を目指す。

本演習では、こうした「地政学」の歴史と現代的意味を事典の項目の精読を通して理解することを目指します。

●授業内容・授業計画

第1回　イントロダクション
第2回　なぜ今「地政学」なのか
第3回「私たち」は何におびえるのか①
第4回「私たち」は何におびえるのか②
第5回　対立と連携の構図①
第6回　対立と連携の構図②
第7回　伝統地政学の理論と実践を考える①
第8回　伝統地政学の理論と実践を考える②
第9回　批判地政学の生成と展開①
第10回　批判地政学の生成と展開②
第11回　ゆらぐボーダーへの再接近①
第12回　ゆらぐボーダーへの再接近②
第13回「新しい」地政学の地平を求めて①
第14回「新しい」地政学の地平を求めて②

●事前・事後学習の内容

事前学習として課題に関連する参考文献を読み、コメントを事前に提出した上で、授業に臨む必要があります。事後学習として各回の議論をもとに期末レポートの執筆を準備します。

●評価方法

各週の課題項目へのコメント提出（50点）、討論への参加・論題提起（20点）、期末レポート（30点）から評価され、総点が60点以上を合格とします。

●受講生へのコメント

課題項目の入手方法は初回の演習時に指示します。シラバス等詳細は教員ホームページ（http://polgeog.jp）を参照してください。

●参考文献・教材

現代地政学事典編集委員会『現代地政学事典』丸善出版、2020年。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2503	授業コード	LM08030010
地理情報論研究 Advanced Studies in Geographical Information			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	木村　義成			

●科目の主題

地理情報と言えば、何か特殊な分野に聞こえるが、Google MapやYahoo Mapに代表されるように、地理情報は、誰にとっても身近にアクセスでき、日々の生活の中で役立つ情報となっている。近年のIT技術の進展により、地理情報は、GIS（地理情報システム）で管理・分析できるようになり、GPS（全地球測位システム）で高精度の位置情報を取得できるようになった。カーナビゲーションは、それらの一例である。

●到達目標

本科目の到達目標は、自身の研究対象に対して自身でわかりやすい地図の作成や、空間分析ができるようになることである。

本講義では、地理情報の取得・分析方法を中心に説明を行う。また、地理情報がどのような分野で、どのように活用されているかについて数多く紹介する。

●授業内容・授業計画

以下のような内容を想定している。第1回のイントロダクションは、必ず受講すること。

第1回 ・イントロダクション
第2回 ・GIS (Geographic Information System)とは？
第3回 ・GPS (Global Positioning System)とは？
第4回 ・地理情報の取得方法①
第5回 ・地理情報の取得方法②
第6回 ・地理情報の取得方法③
第7回 ・地理情報の管理方法
第8回 ・地理情報の表現方法
第9回 ・地理情報を用いた空間分析法①
第10回 ・地理情報を用いた空間分析法②
第11回 ・地理情報を用いた空間分析法③
第12回 ・地理情報科学からみた研究例①
第13回 ・地理情報科学からみた研究例②
第14回 ・地理情報科学からみた研究例③
第15回 ・総括

●事前・事後学習の内容

本科目はGIS（地理情報システム）に関する実習を含むため、特に事後学習を求める。

事後学習としては、実習で説明した内容についてGISを用いて自分で地図製作や空間分析を行えるように課題を課す。

●評価方法

講義中の小課題やレポート等から総合的に評価する。

評価の比率は、小課題提出が30%、レポート提出が70%を想定している。

●受講生へのコメント

地理情報の技術的な側面のみならず、地理情報の活用事例を中心に判り易く説明するので受講されたい。

地理情報論研究演習と必ず同時に受講すること。

また、第1回のイントロダクションは必ず参加すること。参加していない場合は、受講を許可しないことがある。

●参考文献・教材

講義の中で、定義参考文献を紹介する。

なお、自習書としては以下の文献を推薦する。

浅見泰司、他編著『地理情報科学―GISスタンダード』古今書院

マーク・モンモニア著『地図は嘘つきである』晶文社

Paul A. Longley, et al.『Geographic Information Systems and Science』John Wiley & Sons

授業科目名	科目NO.	LBGEO2504	授業コード	LM08040010	
地理情報論研究演習 Advanced Studies of Geographical Information				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	木村　義成				

●科目の主題

本演習の目的は修士論文や学術論文を作成していく上で必要な技術と知識を習得することである。
主にGISを用いて自身で論文で用いる地図や、諸現象の空間分析を行えるようにしてもらう。

●到達目標

本科目の到達目標は、地理情報を扱う研究を理解し、学会発表や修士論文などの論文におけるマップの作成や空間分析を自身で行えることである。

●授業内容・授業計画

地理学教室所有のGISやGPSを利用した演習・実習を行う。
本演習は「地理情報論研究」と並行して開講されるので、必ず合わせて受講すること。

第1回 ・イントロダクション
第2回 ・空間データの作成と編集①
第3回 ・空間データの作成と編集②
第4回 ・空間データの作成と編集③
第5回 ・空間データの作成と編集④
第6回 ・各種マップの作成①
第7回 ・各種マップの作成②
第8回 ・各種マップの作成③
第9回 ・各種マップの作成④
第10回 ・空間解析①
第11回 ・空間解析②
第12回 ・空間解析③
第13回 ・空間データの統合利用①
第14回 ・空間データの統合利用②
第15回 ・総括

●事前・事後学習の内容

本科目はGIS（地理情報システム）に関する実習を含むため、特に事後学習を求める。
事後学習としては、実習で説明した内容についてGISを用いて自分で地図製作や空間分析を行えるように課題を課す。

●評価方法

演習という講義の性格上、出席点を最重視する。

●受講生へのコメント

同時に「地理情報論研究」を必ず受講すること。演習だけの受講は認めない。
また、第1回のイントロダクションには、必ず参加すること。参加していない場合は、受講を許可しないことがある。

●参考文献・教材

教材・参考文献については、随時紹介する。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2505	授業コード	LM08050010
人文地理学特殊問題研究Ⅰ Advanced Studies in Selected Topics in Human Geography Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 水内　俊雄			

●科目の主題

都市社会・政治地理学の実践：日本の都市を中心に、繁栄と衰退という分極化を示しつつも、さまざまなグラデーションで都市が近年変容している実態を肌身で感じてもらう授業である。フィールドワークも多用するが、前半は都市地域における生活困窮問題、住宅貧困問題、特にホームレス問題にどのように接近し、観察し、関係者と接し、問題の改善にあたっての仕組みづくり、施策づくりの後方支援に関与することを、国内外のフィールドも紹介しながら、身につけてゆくことをめざす。とくに脱ホームレス支援、居住福祉支援というフィールドに焦点をあてて、如上の課題を具体的に紹介したい。一面この分野におけるNPO、NGO、あるいは社会的企業研究でもある。広範は、都市の分極化という観点で、繁栄の景観的反映は何かということで、大阪の都心部の変容、あるいは衰退地域だったところの急激な変身などを観察してもらうことになる。

●到達目標

水内自身が、脱ホームレス支援のNPOの理事として活動しているが、その活動の意味と課題を実感してもらうような講義をめざしている。そのために、現場の支援者（NPO、社会的企業ほか）にも講義に登場してもらいながら、受講生の率直な意見をフィードバックする形で、対話型の授業もめざしたい。脱ホームレス支援は、総合的な生活支援に他ならない。そうしたスキルやモチベーションを少しでも学んでもらいたい。教科書や一般書籍ではなかなか得られない事実が満載であるので、みなさんの生き方や就職のありかたを考える上でも大いに参考になることを期待している。

●授業内容・授業計画

前半は、座学を中心に、生活困窮者問題と都市問題の関わりについて、社会保障、セーフティネットの再編と関連させながら課題の摘出を行う。特にホームレス問題やインナーシティ問題に具体の状況を紹介しながら、現状の最前線を知ってもらう。後半は、実際に地域に出てフィールドワークを行い、特に支援の現場に焦点をあて、現場の声や地域状況を肌で感じてもらう。水内が関係する企画の紹介も行い、自主的に参加してもらう機会も提供する。

第1回　セーフティネットの重荷と大学生として、大学としてわれわれが考えるべきこと
第2回　セーフティネットのほころび:その1　ホームレス問題とハウスレス問題
第3回　新しいホームレス、ネットカフェ難民、派遣切り、ワーキングプア、そして生活困窮者問題
第4回　脱ホームレス支援が居住福祉支援につながる実践事例の紹介:その1
第5回　脱ホームレス支援が居住福祉支援につながる実践事例の紹介:その2
第6回　居住福祉の支援と社会的不動産、NPOとの関係
第7回　社会的企業、NPO論と都市論との関係の整理
第8回　居住福祉の支援は都市再生につながるその実例紹介
第9回　現場訪問その1寄せ場、簡易宿所集中地域における脱ホームレス支援の実態
第10回　現場訪問その2:中間施設としての無料低額宿泊所の役割とNPOの機能
第11回　現場訪問その3:NPOによる支援付住宅という中間施設を用いた脱ホームレス支援
第12回　現場訪問その4:脱ホームレス支援におけるアフターケア支援の実態
第13回　現場訪問その5:アートを生かした新しいまちづくり現場
第14回　現場訪問その6:社会的不動産業による新しいまちづくり現場
第15回　現場訪問その7:社会的企業による新しいまちづくり現場

●事前・事後学習の内容

?'

●評価方法

授業やフィールドワーク毎のミニレポートによる平常点とする。

●受講生へのコメント

現場感覚を養ってもらうために、ゲストスピーカーや関連するプログラムへの参加、あるいはフィールドワークを行うので、体を動かして、目を動かして、五感を働かせて、問題に対処してもらう。大学での講義スタイルから少々異なるので、好奇心あふれる探究心の持ち主が授業参加してくれるとうれしい。

●参考文献・教材

『モダン都市の系譜―地図から読み解く社会と空間―』（ナカニシヤ出版）を参考書として紹介しておく。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2506	授業コード	LM08060010
人文地理学特殊問題研究演習1 Advanced Seminar: Selected Topics in Human Geography 1			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 水内　俊雄			

●科目の主題

都市社会・政治地理学の実践：広義の都市問題に取り組む社会的企業、NPO研究に関する演習でもある。都市地域における生活困窮問題、住宅貧困問題、ホームレス問題、インナーシティでのまちづくり、中山間地域の生活継続や就労問題にどのように接近し、観察し、関係者と接し、問題の改善にあたっての仕組みづくり、施策づくりの後方支援に関与することを、国内外のフィールドワークに参加しながら、身につけてゆくことをめざす。関連する都市論やNPO研究の論文や著書の輪読も行う。

●到達目標

都市社会問題や地域問題に関心を有する受講生向けに構想された演習である。もちろん修士論文や投稿論文につながることをめざしていると同時に、こうした都市社会問題や地域問題に対する研究者としてのアプローチに触れたいという受講生にも門戸は開いている。実践的でアクティブな研究スタイルをシェアし、理論面でのフォローアップも兼ね備え、そしてネットワークのひろがる環境を享受してもらうことを目標としている。

●授業内容・授業計画

水内が進めているプロジェクトにマッチングする受講生の指向を育成する演習をきめ細かく行う。そのプロジェクトとは、戦略的研究プロジェクト「自治体・ NPOと協働する都市困窮地域のリジェネレーションと参加型GIS実践」、水内を代表とする科研プロジェクト「東アジアの広義のホームレス支援に基づく包摂型都市生成と支援の地理学の構築」、「自治体・NPOと協働する都市困窮地域の再成と居住福祉ビジネスの社会化」、COCプラスプロジェクト「紀伊半島地域の再生：命と生活のインフラプロジェクト」に連動した演習をおこなう。生活支援、居住支援NPO研究も学ぶことにもなる。演習と直結することになるフィールドワークについては、受講生の関心を十分に尊重しながら、国内は、全国のホームレス支援やまちづくりの現場や、紀伊半島の中山間地域、国外は、韓国内大都市、香港、台北のいずれかを選択してもらう予定である。あわせて後期の研究Ｉも連動してとることを勧める。授業計画はプロジェクト毎に記しているが、受講生の関心を優先する柔軟な授業計画となることをも付記しておきたい。

第1回　大きくは都市や地域再生にかかわる具体的な実践を身近に取り込みつつ、かつ研究者としてどのようにこうした事象に有機的に関わってゆくかの切磋琢磨の機会ともしたい。このかかわり方についてそれぞれのプロジェクトについて相談の上演習で主体的に取り組むガイダンスとする

第2回　都市研究プラザ公募型共同研究プロジェクト「レジリエンスからイノベーションによるサービスハブ地域賦活過程の都市理論研究」の紹介

第3回　上記研究プロジェクトについて具体的なテーマ設定

第4回　対象地域のフィールドワーク　その1

第5回　対象地域のフィールドワーク　その2

第6回　科研プロジェクト「 仕事・住まい・福祉が連携するサービスハブによるハウジングセーフティネットの構想」の紹介

第7回　上記科研プロジェクトについて具体的なテーマ設定

第8回　対象地域のフィールドワーク　その1

第9回　対象地域のフィールドワーク　その2

第10回　科研プロジェクト「 分極化する都市空間におけるレジリエントな地域再成と包容力ある都市論の構想」の紹介

第11回　上記科研プロジェクトについて集中フィールドワーク設定に関するディスカッション

第12回　紀伊半島プロジェクト「中山間地域多生業アーカイブプロジェクト」の紹介

第13回　上記プロジェクトについてテーマ設定

第14回　上記プロジェクトについての集中フィールドワーク設定に関するディスカッション　その1

第15回　上記プロジェクトについての集中フィールドワーク設定に関するディスカッション　その2

●事前・事後学習の内容

●評価方法

集中フィールドワークへの参加や、その報告書や論文、書籍の一部執筆をもって、評価とする。したがって平常点評価となる。

●受講生へのコメント

都市問題研究や教員の科研プロジェクト、研究プロジェクトと連動しておこなうので、通常時間以外の国内外のフィールドワークにも参加することが前提となるので、調査時間のフレキシブルさに対応できる体制をとっておくこと。フル参加を前提としているので、主体的参加を期待しています。

●参考文献・教材

演習時に指示する。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2507	授業コード	LM08070010
人文地理学特殊問題研究Ⅱ Advanced Studies in Selected Topics in Human Geography Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 大場　茂明			

●科目の主題

ハウジング・システムと住宅政策をテーマとしてとりあげ、近年の地理学ならびに住居学、都市計画学など、隣接諸科学の研究動向とも関連づけながら、都市空間構造の変容を読み解いていく。

●到達目標

先進工業国における住宅政策の再編動向と、その背景にあるハウジング・システム（住宅割当てメカニズム）の変化について、具体的な事例にもとづき理解を深めるとともに、その意義と問題点、今後の課題について説明することができる。

●授業内容・授業計画

本講義では、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、日本におけるハウジング・システムと住宅政策の概要を紹介するとともに、その背景にある社会経済的条件や都市形成過程の差異に留意しつつ、施策の評価を試みる。

第1回 本講義のねらい
第2回 住宅政策の再編とその背景
第3回 住宅政策の発展動向(1) イギリスの事例
第4回 イギリスにおけるハウジング・システムの課題
第5回 住宅政策の発展動向(2) アメリカの事例
第6回 アメリカにおけるハウジング・システムの課題
第7回 住宅政策の発展動向(3) フランスの事例
第8回 フランスにおけるハウジング・システムの課題
第9回 住宅政策の発展動向(4) ドイツの事例
第10回 ドイツにおけるハウジング・システムの課題
第11回 住宅政策の発展動向(5) 日本の事例
第12回 日本におけるハウジング・システムの課題
第13回 再都市化現象と住宅政策：ハンブルクの事例
第14回 住宅政策の展望：規制・築造・誘導をめぐって
第15回 まとめと今後の課題

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、担当教員の指示に基づき、指定された文献を精読するなど、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、講義の要点や指摘されたコメントを整理し、復習を欠かさないようにすること。

●評価方法

講義で扱ったテーマの中から、各自が関心のある文献(授業内で紹介)を読んで、自分の意見を交えつつ作成してもらう期末レポー（1）到達目標の達成度について評価をおこなう。

（2）評価は、授業内での質疑・ディスカッションへの参加状況（40％）、期末レポート（60％）による。

（3）合格（単位修得）のための最低基準は、講義内容に即して文献を紹介できるとともに、自分の意見を交えつつ論理的に記述したレポートが作成出来ていることである。

●受講生へのコメント

授業では当該テーマに関わる内外の学術文献を使用しながら、あわせて受講者にも意見を求めるので、積極的に議論に参加する姿勢が求められる。

●参考文献・教材

テキスト：使用しない。資料は別途プリントを配布する。
参考書：必要に応じて授業中に適宜紹介する。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2508	授業コード	LM08080010
人文地理学特殊問題研究演習2 Advanced Seminar: Selected Topics in Human Geography 2			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 大場　茂明			

●科目の主題

人口構造の変化にともなって先進工業国の成長地域で顕在化しつつある再都市化(reurbanization)現象に関する研究論文を熟読し、その概念と実態、欧米における近年の都市居住の動向、都市更新施策とその効果・問題点について、日本との比較を交えつつ検討を行う。

●到達目標

再都市化にともなう空間構造の変化、日常生活圏の再編など、人口減少と超高齢化社会を前提とした都市のあり方について深く理解し、持続可能な市街地を形成するために解決すべき都市政策上の課題について総合的に議論することができる。

●授業内容・授業計画

再都市化現象の定義と実態、欧米における近年の都市居住の動向、都市更新施策とその効果と問題点をめぐる議論等を順次とりあげていく。その際には、日本での動向も念頭に置きながら、これまでの郊外開発を中心とした都市居住のあり方をいかに評価するかが併せて検討の対象となるが、この授業では、第二次大戦後の都市拡張期と今日との社会経済的条件の違いに留意しながら、政策の意図を読み取っていくことに重点を置く。

第1回 授業の進め方と基本文献の紹介
第2回 人口構造の変化(1) 少子高齢化の現状
第3回 人口構造の変化(2) 人口移動の動向
第4回 再都市化現象とは何か？
第5回 「郊外の20世紀」をめぐって(1) 都市拡張の時代
第6回 「郊外の20世紀」をめぐって(2) 郊外化の功罪
第7回 近年の都市居住の動向(1) 産業構造の変化にともなう既成市街地の衰退
第8回 近年の都市居住の動向(2) ジェントリフィケーションの選択的進行
第9回 都市更新事業とその評価(1) 地区再開発
第10回 都市更新事業とその評価(2) 地区修復
第11回 都市更新事業とその評価(3) 地区保全
第12回 都市再生のコンセプト(1) スマート・グロースの考え方
第13回 都市再生のコンセプト(2) 創造都市と文化政策
第14回 都市再生のコンセプト(3) ローカル・エンパワーメント
第15回 まとめと今後の課題

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、担当教員の指示に基づき、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、指摘されたコメントをもとに内容の修正を行い、次回の報告に備えること。

●評価方法

(1)到達目標の達成度について評価をおこなう。
(2)評価は、授業内での発表(質疑、ディスカッションを含む)(40%)、期末レポート(60%)による。
(3)合格(単位修得)のための最低基準は、授業の主題に即して適切な文献を紹介できるとともに、自分の意見を交えつつ論理的に記述したレポートが作成出来ていることである。

●受講生へのコメント

授業では当該テーマに関わる内外の学術文献を使用するので、発表者には十分な準備が、参加者には積極的に討論に参加する姿勢が求められる。

●参考文献・教材

テキスト:プリントを配布する。
参考書:授業時に適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2509	授業コード	LM08090010
人文地理学特殊問題研究Ⅲ Advanced Studies in Selected Topics in Human Geography Ⅲ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 祖田　亮次			

●科目の主題

本授業では、「災害」や「環境問題」といったテーマを通じて、人間－環境関係について考察するものである。近年、自然災害や環境問題を人文・社会科学的観点から捉えなおそうという試みが活発になっている。地理学においても、従来の自然地理学的な災害研究・環境研究だけではなく、災害や環境問題を社会的・文化的な側面から考察する必要性が指摘されている。このような観点から人間－環境関係を捉えようとする研究は、地理学の本来的な姿勢であると同時に、1980年代以降活発に議論されてきた政治生態学の考え方と通じるものがある。本授業では、こうした研究の流れや関連諸分野の動向もおさえつつ、災害研究・環境研究の現在について考察したい。授業のキーワードは、「災害」「環境問題」「開発」「社会関係」「脆弱性」「回復力（resilience）」などである。

●到達目標

災害、環境といった視点から、地理学の人間－環境関係論を理解できるようになる。

●授業内容・授業計画

この授業では、教員側からいくつかの話題提供を行いつつ、学生が指示された国内外の文献を読み、それを紹介することで、積極的な議論の場を設けたい。こうした作業を通して、研究を行う上でのフレームワークの作り方についても学べるようにしたい。

第1回 イントロダクション
第2回 話題提供1
第3回 話題提供2
第4回 フィールド・トリップ
第5回 日本語文献講読1
第6回 日本語文献講読2
第7回 日本語文献講読3
第8回 日本語文献講読4
第9回 フィールド・トリップ
第10回 英語文献講読1
第11回 英語文献講読2
第12回 英語文献講読3
第13回 フィールド・トリップ
第14回 フィールド・トリップ
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

事前・事後の学習としては、論文の検索と選定、それらの読解、およびレジュメの作成のほか、具体的な事例について自ら調査するという作業も含まれる。

●評価方法

この授業では、数回の課題提出および発表を求める。評価は、発表、数回の課題提出、フィールド・トリップへの参加、および最終レポートを総合的に判断して行う。

●受講生へのコメント

幅広い対象に目を向ける努力をしてもらいたい。

●参考文献・教材

授業中に紹介する。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2510	授業コード	LM08100010	
人文地理学特殊問題研究演習3 Advanced Seminar: Selected Topics in Human Geography 3				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 祖田　亮次				

●科目の主題

この授業では、地理学の独自性と、隣接諸分野との関係性について、具体的な文献の読解を通じて考察する。

●到達目標

地理学は、経済学や文化人類学、社会学、政治学、都市工学など、多様な分野との接点を持つが、それら隣接分野との異同について、各学生の専門分野の立場から発表を行い、それをもとに議論する。そうした議論を通じて、自分自身の研究のオリジナリティを自覚できるようにする。

●授業内容・授業計画

各学生は、まず、地理学の主要雑誌を広くレビューし、自身の研究が学界内においてどのような位置づけにあるのかを発表する。次に、教員が指定した地理学雑誌のなかから、特に重要な最新の論文を選定し、その要旨を紹介したうえで、論点を提示する。さらに、隣接他分野における類似の成果と比較しながら、地理学的な意味について考察する。

第1回 イントロダクション
第2回 文献選定1
第3回 文献選定2
第4回 文献の要旨発表、論点提示、議論1
第5回 文献の要旨発表、論点提示、議論2
第6回 文献の要旨発表、論点提示、議論3
第7回 文献の要旨発表、論点提示、議論4
第8回 文献の要旨発表、論点提示、議論5
第9回 文献の要旨発表、論点提示、議論6
第10回 文献の要旨発表、論点提示、議論7
第11回 文献の要旨発表、論点提示、議論8
第12回 文献の要旨発表、論点提示、議論9
第13回 文献の要旨発表、論点提示、議論10
第14回 文献の要旨発表、論点提示、議論11
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

事前・事後の学習としては、論文の検索と選定、それらの読解、およびレジュメの作成のほか、具体的な事例について自ら調査した内容を発表するための準備作業も含まれる。

●評価方法

発表の内容、形式、および議論への参加を総合して評価する。

●受講生へのコメント

幅広い対象に目を向ける努力をしてもらいたい。

●参考文献・教材

授業中に紹介する。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2511	授業コード	LM08130010
地理学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Geography Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	大場　茂明／水内　俊雄／山﨑　孝史／祖田　亮次／木村　義成			

●科目の主題

地表上の空間と景観にかかわる諸問題の総合的および分析的研究を志向する地理学について、基礎的素養を深める。

●到達目標

本科目では、地理学に関する個別的テーマを取り上げて講義し、地理学研究に対する知見を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

地理学の個別的テーマ（都市構造、国土開発、景観変遷、社会運動、グローバル化、地理情報システムなど）に関する講義のほか、受講生からレポートや報告を求め、それに基づいた討論を行う。

第1回　授業の進め方
第2回～第4回　グローバル化と都市構造の変化
第5回～第7回　国土開発と社会運動
第8回～第10回　経済活動と景観変遷
第11回～第14回　地理情報システムの利用
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、担当教員の指示に基づき、指定された文献を精読するなど、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、講義の要点や指摘されたコメントを整理し、復習を欠かさないようにすること。

●評価方法

（1）到達目標の達成度について評価をおこなう。
（2）評価方法は、期末レポート（60％）、質問など議論への参加状況（40％）による。
（3）合格（単位修得）のための最低基準は、講義内容に即して論理的なレポートが作成出来るとともに、議論に積極的に参加することである。

●受講生へのコメント

受講者は、日ごろから地理学的想像力を養い、社会のさまざまの部分で生起している問題や事象について注視することが求められる。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LBGEO2512	授業コード	LM08140010	
地理学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Geography Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
講義	大場　茂明／水内　俊雄／山﨑　孝史／祖田　亮次／木村　義成				

●科目の主題

地表上の空間と景観にかかわる諸問題の総合的および分析的研究を志向する地理学について、基礎的素養を深める。

●到達目標

本科目では、地理学に関する個別的テーマを取り上げて講義し、修士論文作成に向けて地理学研究に対する知見を深めることを目標とする。

●授業内容・授業計画

地理学の個別的テーマ（都市構造、国土開発、景観変遷、社会運動、グローバル化、地理情報システムなど）に関する講義のほか、受講生から予定している修士論文のテーマと研究成果について報告を求め、それに基づいた討論を行う。

第1回　授業の進め方
第2回～第3回　グローバル化と都市構造の変化
第4回～第5回　国土開発と社会運動
第6回～第7回　経済活動と景観変遷
第8回～第9回　地理情報システムの利用
第10回～第14回　修士論文構想の発表と検討
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、担当教員の指示に基づき、指定された文献を精読するなど、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、講義の要点や指摘されたコメントを整理し、復習を欠かさないようにすること。

●評価方法

（1）到達目標の達成度について評価をおこなう。
（2）評価方法は、期末レポート（60％）、質問など議論への参加状況（40％）による。
（3）合格（単位修得）のための最低基準は、講義内容に即して論理的なレポートが作成出来るとともに、議論に積極的に参加することである。

●受講生へのコメント

受講者は、日ごろから地理学的想像力を養い、社会のさまざまの部分で生起している問題や事象について注視することが求められる。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LBGEO3601	授業コード	LM08150010	
地理学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Geography Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	大場　茂明／水内　俊雄／山﨑　孝史／祖田　亮次				

●科目の主題

地理学の各分野に関する修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

内外の先行研究の検討を行いながら、自らの研究課題を具体的に絞り込む。

●授業内容・授業計画

設定した研究課題に対する内外の先行研究のレヴューを行いながら、立案した調査計画に基づいて、文献収集やフィールドワークを実施し、得られた知識の整理、検討とデータの分析を行う。受講者は、その研究テーマに応じて、主担・副担の研究指導教員の指導を受けるものとする。

第1回　授業の進め方
第2回～第6回　研究テーマに関する先行研究の整理
第7回～第10回　研究課題の設定
第11回～第14回　調査実施計画の作成
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、研究指導教員の指示に基づき、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、指導の終了後には、指摘されたコメントをもとに研究計画の修正を行い、次回の報告に備えること。

●評価方法

研究テーマに関する先行研究の整理、研究課題の設定、調査実施計画など、研究の進捗状況に基づき、総合的に評価する。

●受講生へのコメント

所定の在学年源内に修士論文を提出できるよう計画を立てて、着実に研究を進めていってほしい。

●参考文献・教材

必要に応じて、授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LBGEO3602	授業コード	LM08160010
地理学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Geography Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	大場　茂明／水内　俊雄／山﨑　孝史／祖田　亮次			

●科目の主題

地理学の各分野に関する修士論文作成の指導を行う。

●到達目標

研究の中間報告に基づき、テーマと研究方法の適合性、論文の構成など、論文作成に必要な事項について議論し、修士論文を完成させる。

●授業内容・授業計画

研究指導Ⅰに引き続き、立案した調査計画に基づいて、文献収集やフィールドワークを実施し、得られた知識の整理、検討とデータの分析を行う。受講者は、その研究テーマに応じて、主担当・副担当の研究指導教員の指導を受けるものとする。

第1回　授業の進め方
第2回～第5回　調査計画の発表と検討
第6回～第10回　調査結果の整理とデータ分析
第11回～第14回　調査結果の発表と検討
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、研究指導教員の指示に基づき、事前に十分な準備を行った上で臨むこと。また、指導の終了後には、指摘されたコメントをもとに研究計画の修正を行い、次回の報告に備えること。

●評価方法

研究テーマに関する先行研究の整理、研究課題の設定、調査実施計画など、研究の進捗状況に基づき、総合的に評価する。

●受講生へのコメント

所定の在学年限内に修士論文を提出できるよう計画を立てて、着実に研究を進めていってほしい。

●参考文献・教材

必要に応じて授業中に指示する
プリント配布。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000080	
修士論文（地理学） Master's Thesis（地理学）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	大場　茂明／水内　俊雄／山﨑　孝史／祖田　亮次				

●科目の主題

地理学の分野における修士論文

●到達目標

地理学の分野における修士論文の完成と提出

●授業内容・授業計画

地理学の分野における修士論文の作成と提出

●事前・事後学習の内容

事前学習:地理学の分野における修士論文の作成と提出
事後学習:口述試験

●評価方法

地理学の分野における修士論文を評価の対象とする

●受講生へのコメント

修了に必要なすべての単位を修得し、修士論文作成において指導教員から十分な指導を受けること

●参考文献・教材

使用しないが、参考文献等については担当教員より適宜紹介する。

授業科目名	科目NO.	LCGEN1501	授業コード	LM00070010	
言語文化学研究Ⅰ Introduction to Language and Culture Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	丹羽　哲也				

●科目の主題

日本語の文法・敬語法の諸問題。

●到達目標

日本語の文法および敬語法について、基礎的な知識と研究方法を身につける。

●授業内容・授業計画

日本語（現代語・古典語）の文法あるいは敬語法について、受講生各自がテーマを設定して、調査・考察して発表する。他の受講生は、その発表に対して、質問をし、意見を表明することが求められる。

第1回　日本語文法・敬語法の概説とテーマ設定の相談（1）
第2回　日本語文法・敬語法の概説とテーマ設定の相談（2）
第3回　日本語文法・敬語法の概説とテーマ設定の相談（3）
第4回　受講生の1回目の発表と議論（1）
第5回　受講生の1回目の発表と議論（2）
第6回　受講生の1回目の発表と議論（3）
第7回　受講生の1回目の発表と議論（4）
第8回　受講生の1回目の発表と議論（5）
第9回　受講生の2回目の発表と議論（1）
第10回　受講生の2回目の発表と議論（2）
第11回　受講生の2回目の発表と議論（3）
第12回　受講生の2回目の発表と議論（4）
第13回　受講生の2回目の発表と議論（5）
第14回　レポート相談

●事前・事後学習の内容

発表テーマの選定。継続的な調査と研究。レポートの作成。

●評価方法

自分の担当の発表、他の発表への質問・意見、レポート、それぞれ3分の1ずつ。

●受講生へのコメント

留学生は、これまでの日本語学習の中で疑問に思った点からテーマを探すとよい。日本の古典文学を専門とする受講生は、古文の文法・敬語法をテーマとすること。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCGEN1504	授業コード	LM00100010	
言語文化学研究Ⅳ Introduction to Language and Culture Ⅳ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
講義	豊田　純一				

●科目の主題

言語と社会・文化および人間の認知の関係を理解できる幅広い知識を身に着ける。

●到達目標

世界の言語の文法の多様性、言語の歴史的変遷、言語と人間の認知との関係、言語間の接触など、我々が話す言語を理解するのに必要な要素を学ぶ。

●授業内容・授業計画

文化人類学的視点から言語の構造・意味、ならびにその多様性への造詣を深めながら、我々が話す言語とは何かについて考察する。

第1回：オリエンテーション：言語文化人類学
第2回：世界の言語
第3回：言語構造の多様性
第4回：意味の多様性
第5回：意味とコンテクスト
第6回：社会的多様性
第7回：社会における言語の多様性
第8回：言語相対性仮説
第9回：言語と文化
第10回：言語と人間の認知能力
第11回：脳と言語
第12回：言語の進化と祖先
第13回：言語の歴史的変化と多様性
第14回：英語と公用語に関して
定期試験

●事前・事後学習の内容

各回に該当する資料に目を通しておくこと。さらに、授業の内容に関して、普段から接している言語・学習している言語にどの様に当てはまるか考えるようにできればなおよい。

●評価方法

定期試験（80％）小レポート（20％）

●受講生へのコメント

出席率が70％に満たないものは、単位の対象外とする。出席点は無いので注意すること。
15分以上遅刻したものは欠席とみなすので、気を付けること。
試験・レポートは定期的にあるので、授業中の指示に従うこと。

●参考文献・教材

教材：
Bauer, Laurie, Janet Holmes and Paul Warren (2006). Language Matters. Basingstoke: Palgrave. (ISBN: 1-4039-3628-5)
参考文献
Duranti, Alessandro (1997). Linguistic Anthropology. Cambridge: Cambridge University Press.
Payne, Thomas E. (1997). Describing morphosyntax: a guide for field linguistics. Cambridge: Cambridge University Press.
Saeed, John I. (2003). Semantics (2nd ed.). Oxford: Blackwell.
Trask, R. L. (1993). A dictionary of grammatical terms in linguistics. London: Routledge.

授業科目名	科目NO.	LCJPN2501	授業コード	LM09010010	
国文学研究Ⅰ Advanced Studies in Japanese Literature Ⅰ				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 久堀　裕朗				

●科目の主題

近世の国文学を対象に、その研究の方法と問題点について解説し、議論を行う。具体的には人形浄瑠璃作品を取り上げ、そのテキストを精読しながら、近世の文献、資料についての基本的な知識を身につけ、作品を注釈する能力と、それに基づく読解力を養う。

●到達目標

近世の文献、資料に関する基本的な知識を身につけ、作品注釈に利用することができる。

●授業内容・授業計画

授業は講義と演習とを組み合わせて進めるが、まず研究上の問題の所在について講義をし、その後、具体的な作品分析に入っていく。テキストとしては人形浄瑠璃作品を取り上げ、その舞台化や、江戸時代から今日に至るまでの上演史についても検討を加える。前期は天明3年（1783）大坂竹本座初演、近松半二ほかによる合作、時代浄瑠璃『伊賀越道中双六』を取り上げる。

第1回：本授業のガイダンス／作品解説
第2回：研究上の問題点について
第3回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第4回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第5回：作品講読（講義＋受講者による発表）／中間整理①
第6回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第7回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第8回：作品講読（講義＋受講者による発表）／中間整理②
第9回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第10回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第11回：作品講読（講義＋受講者による発表）／中間整理③
第12回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第13回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第14回：作品講読（講義＋受講者による発表）／中間整理④
第15回：全体の整理／レポート提出

●事前・事後学習の内容

事前学習
作品のテキストをあらかじめよく読んでおくこと。
事後学習
明らかになった問題点について、再度自身で考察すること。

●評価方法

到達目標の達成度について、以下の通りの評価を行う。
評価方法とその割合：授業における発表と期末レポート100％
合格（単位修得）のための最低基準：近世の文献、資料に関する基本的な知識を身につけ、発表やレポート作成時にそれを利用することができる。

●受講生へのコメント

担当範囲だけではなく、取り上げる作品全体を読みこみ、毎回積極的に授業参加すること。

●参考文献・教材

教材：プリントを配布する。
参考文献：授業中に詳しく指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2502	授業コード	LM09020010
国文学研究演習1 Advanced Studies and Seminar in Japanese Literature 1			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 久堀　裕朗			

●科目の主題

近世の国文学を対象に、その研究の方法と問題点について解説し、議論を行う。具体的には人形浄瑠璃作品を取り上げ、そのテキストを精読しながら、近世の文献、資料についての基本的な知識を身につけ、作品を注釈する能力と、それに基づく読解力を養う。

●到達目標

近世の文学作品を精読しながら、作品注釈能力を高め、担当箇所について適切に発表することができる。

●授業内容・授業計画

授業は講義と演習とを組み合わせて進めるが、まず研究上の問題の所在について講義をし、その後具体的な作品分析に入っていく。テキストとしては人形浄瑠璃作品を取り上げ、その舞台化や、江戸時代から今日に至るまでの上演史についても検討を加える。後期は宝暦8年（1758）大坂竹本座初演、近松半二ほかによる合作、時代浄瑠璃『蛭小島武勇問答』を取り上げる。

第1回：本授業のガイダンス／作品解説
第2回：研究上の問題点について
第3回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第4回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第5回：作品講読（講義＋受講者による発表）／中間整理①
第6回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第7回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第8回：作品講読（講義＋受講者による発表）／中間整理②
第9回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第10回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第11回：作品講読（講義＋受講者による発表）／中間整理③
第12回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第13回：作品講読（講義＋受講者による発表）
第14回：作品講読（講義＋受講者による発表）／中間整理④
第15回：全体の整理／レポート提出

●事前・事後学習の内容

事前学習
作品のテキストをあらかじめよく読んでおくこと。
事後学習
明らかになった問題点について、再度自身で考察すること。

●評価方法

到達目標の達成度について、以下の通りの評価を行う。
評価方法とその割合：授業における発表と期末レポート100％
合格（単位修得）のための最低基準：担当箇所について適切に注釈を加え、発表することができる。

●受講生へのコメント

担当範囲だけではなく、取り上げる作品全体を読みこみ、毎回積極的に授業参加すること。

●参考文献・教材

教材：プリントを配布する。
参考文献：授業中に詳しく指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2503	授業コード	LM09030010	
国文学研究Ⅱ Advanced Studies in Japanese Literature Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	小林　直樹				

●科目の主題

中世の伝承と歴史叙述

●到達目標

中世の歴史叙述の中の伝承をテクストの文脈の中に位置づけて読み解く基本姿勢の習得を目指す。

●授業内容・授業計画

鎌倉幕府の準公式的な歴史書『吾妻鏡』の実朝将軍記を伝承的記事を中心に読み解いていく。

第1回 ガイダンス
第2回『吾妻鏡』講読
第3回『吾妻鏡』講読
第4回『吾妻鏡』講読
第5回『吾妻鏡』講読
第6回『吾妻鏡』講読
第7回『吾妻鏡』講読
第8回『吾妻鏡』講読
第9回『吾妻鏡』講読
第10回『吾妻鏡』講読
第11回『吾妻鏡』講読
第12回『吾妻鏡』講読
第13回『吾妻鏡』講読
第14回『吾妻鏡』講読
第15回『吾妻鏡』講読

●事前・事後学習の内容

授業までにテキストの下読みを十分に行い、事前に配布された担当者のレジュメにも目を通し、問題点を認識した上で授業に臨むこと。

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

本科目は後期の研究演習2と併せて受講することが極めて望ましい。

●参考文献・教材

教材：プリントによる。
参考書：『現代語訳　吾妻鏡8承久の乱』（吉川弘文館）、坂井孝一『源実朝』（講談社）など。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2504	授業コード	LM09040010	
国文学研究演習2 Advanced Studies and Seminar in Japanese Literature 2				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	小林　直樹				

●科目の主題

中世の伝承と歴史叙述

●到達目標

中世の歴史叙述の中の伝承をテクストの文脈の中に位置づけて読み解く基本姿勢の習得を目指す。

●授業内容・授業計画

『吾妻鏡』実朝将軍記を注釈的に読解する。担当者の報告と受講生全員による討議を経て理解を深めていく。

第1回『吾妻鏡』講読
第2回『吾妻鏡』講読
第3回『吾妻鏡』講読
第4回『吾妻鏡』講読
第5回『吾妻鏡』講読
第6回『吾妻鏡』講読
第7回『吾妻鏡』講読
第8回『吾妻鏡』講読
第9回『吾妻鏡』講読
第10回『吾妻鏡』講読
第11回『吾妻鏡』講読
第12回『吾妻鏡』講読
第13回『吾妻鏡』講読
第14回『吾妻鏡』講読
第15回『吾妻鏡』講読

●事前・事後学習の内容

授業までにテキストの下読みを十分に行い、事前に配布された担当者のレジュメにも目を通し、問題点を認識した上で授業に臨むこと。

●評価方法

平常点。

●受講生へのコメント

本科目は前期の研究Ⅱと併せて受講することが極めて望ましい。

●参考文献・教材

教材：プリントによる。
参考書：『現代語訳　吾妻鏡8承久の乱』（吉川弘文館）、坂井孝一『源実朝』（講談社）など。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2505	授業コード	LM09050010
国文学研究Ⅲ Advanced Studies in Japanese LiteratureⅢ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 山本　真由子			

●科目の主題

柿村重松『本朝文粋註釈』（大正11年刊）精読。本書は、平安時代の詩文の精粋を集めた藤原明衡撰『本朝文粋』の注釈書である。詳細な出典注を漢文で施し、『本朝文粋』の研究において今もなお第一に依拠すべき書とされる。本授業では、出典注を訓読、原典にあたって解釈するとともに、その注が付された意味を検討する。また、『本朝文粋』の当該作品について、新たに語釈、通釈を加え、作者や製作状況および和文学との関わりなどを考察することにより、平安時代文学について理解を深める。

●到達目標

平安時代を中心とする漢文学に関する知識を身に付ける。あわせて平安時代文学の研究方法を習得する。

●授業内容・授業計画

受講生の人数に合わせて作品を選び、担当箇所を決めて、訓読、調査、考察を行い、発表する。発表と受講生全員による討議を経て理解を深めていく。

第1回　ガイダンス1『本朝文粋』について
第2回　ガイダンス2『本朝文粋註釈』について
第3回　『本朝文粋註釈』(発表と討議1)
第4回　『本朝文粋註釈』(発表と討議2)
第5回　『本朝文粋註釈』(発表と討議3)
第6回　『本朝文粋註釈』(発表と討議4)
第7回　『本朝文粋註釈』(発表と討議5)
第8回　『本朝文粋註釈』(発表と討議6)
第9回　『本朝文粋註釈』(発表と討議7)
第10回　『本朝文粋註釈』(発表と討議8)
第11回　『本朝文粋註釈』(発表と討議9)
第12回　『本朝文粋註釈』(発表と討議10)
第13回　『本朝文粋註釈』(発表と討議11)
第14回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習
発表の準備は、早めにとりかかること。発表者以外の受講生も毎回『本朝文粋註釈』の当該箇所を十分に下読みしておくこと。
事後学習
発表によって明らかになった問題点などを整理し、内容を検討して、再び調査、考察すること。

●評価方法

発表内容と討議への参加状況。

●受講生へのコメント

平安時代の漢文学についての知識は、訓読をふくめて、物語や和歌などの和文学を読み解く上でも欠かせないものです。授業を通して、漢文学に親しみ、広い視野から、各自の文学に対する問題意識を深めていってほしい。

●参考文献・教材

教材
プリントを配布する。
参考文献
小島憲之校注『本朝文粋』(日本古典文学大系・岩波書店・昭和39年)、大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『本朝文粋』(新日本古典文学大系・岩波書店・平成4年)、後藤昭雄『本朝文粋抄　一～五』(勉誠出版・平成18～30年)※その他、授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2506	授業コード	LM09060010
国文学研究演習3 Advanced Studies and Seminar in Japanese Literature 3			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 山本　真由子			

●科目の主題

柿村重松『本朝文粋註釈』（大正11年刊）精読。本書は、平安時代の詩文の精粋を集めた藤原明衡撰『本朝文粋』の注釈書である。詳細な出典注を漢文で施し、『本朝文粋』の研究において今もなお第一に依拠すべき書とされる。本授業では、出典注を訓読、原典にあたって解釈するとともに、その注が付された意味を検討する。また、『本朝文粋』の当該作品について、新たに語釈、通釈を加え、作者や製作状況および和文学との関わりを考察することにより、平安時代文学について理解を深める。

●到達目標

平安時代を中心とする漢文学に関する知識を身に付ける。あわせて平安時代文学の研究方法を習得する。

●授業内容・授業計画

受講生の人数に合わせて作品を選び、担当箇所を決めて、訓読、調査、考察を行い、発表する。発表と受講生全員による討議を経て理解を深めていく。

第1回　ガイダンス
第2回　『本朝文粋註釈』(発表と討議1)
第3回　『本朝文粋註釈』(発表と討議2)
第4回　『本朝文粋註釈』(発表と討議3)
第5回　『本朝文粋註釈』(発表と討議4)
第6回　『本朝文粋註釈』(発表と討議5)
第7回　『本朝文粋註釈』(発表と討議6)
第8回　『本朝文粋註釈』(発表と討議7)
第9回　『本朝文粋註釈』(発表と討議8)
第10回　『本朝文粋註釈』(発表と討議9)
第11回　『本朝文粋註釈』(発表と討議10)
第12回　『本朝文粋註釈』(発表と討議11)
第13回　『本朝文粋註釈』(発表と討議12)
第14回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習
発表の準備は、早めにとりかかること。発表者以外の受講生も毎回『本朝文粋註釈』の当該箇所を十分に下読みしておくこと。
事後学習
発表によって明らかになった問題点などを整理し、内容を検討して、再び調査、考察すること。

●評価方法

発表内容と討議への参加状況。

●受講生へのコメント

平安時代の漢文学についての知識は、訓読をふくめて、物語や和歌などの和文学を読み解く上でも欠かせないものです。授業を通して、漢文学に親しみ、広い視野から、各自の文学に対する問題意識を深めていってほしい。

●参考文献・教材

教材
プリントを配布する。
参考文献
小島憲之校注『本朝文粋』(日本古典文学大系・岩波書店・昭和39年)、大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『本朝文粋』(新日本古典文学大系・岩波書店・平成4年)、後藤昭雄『本朝文粋抄　一～五』(勉誠出版・平成18～30年)※その他、授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2507	授業コード	LM09070010
国文学研究Ⅳ Advanced Studies in Japanese LiteratureⅣ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	奥野　久美子			

●科目の主題

井川（恒藤）恭日記の翻刻、注釈。大阪市立大学初代学長で芥川龍之介の親友であった恒藤恭の、松江での療養時代（中学卒業後、一高入学前）の日記（明治40年、春～初夏）を題材に、原資料にもとづき翻刻と校注を行う。文学への関心が高かった療養時代の井川恭は、自ら創作活動も行う一方で、毎日さまざまな雑誌や書物を読み、それらについて細かく日記に記している。それは明治末期の若者の教養を知る上でも貴重な資料である。そこに書かれた書物等について確認するなどの細かな作業にあたり、明治期の青年の文学環境・社会環境を研究する。

●到達目標

本文校訂と注釈の作業を通じて、明治期の文学環境や恒藤恭の思想形成に対する理解を深める。あわせて近代文学研究の方法を身につける。

●授業内容・授業計画

受講生の人数に合わせて担当箇所を決めて調査研究を行い、発表する。発表者以外の受講生は質疑を行い全員で討論する。

第1回　ガイダンス
第2回　発表と質疑、討論1
第3回　発表と質疑、討論2
第4回　発表と質疑、討論3
第5回　発表と質疑、討論4
第6回　発表と質疑、討論5
第7回　発表と質疑、討論6
第8回　発表と質疑、討論7
第9回　発表と質疑、討論8
第10回　発表と質疑、討論9
第11回　発表と質疑、討論10
第12回　発表と質疑、討論11
第13回　発表と質疑、討論12
第14回　発表と質疑、討論13
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

発表の準備には2～3週間を要する。早めに準備にとりかかること。発表者以外の受講生も毎回の箇所を事前に下読みしておき、事後は疑問点などを整理し内容を検討しておくこと。

●評価方法

発表内容と討論への参加状況。

●受講生へのコメント

毎回とりあげる箇所は各授業前に再度熟読しておくこと。また、質疑、討論には積極的に参加すること。

●参考文献・教材

テキスト：原資料の画像コピーを配布する。
参考文献：関口安義『恒藤恭とその時代』（平一四・五　日本エディタースクール出版部）
山崎時彦編著『恒藤恭の青年時代』（平一五・一〇　未來社）
『向陵記―恒藤恭　一高時代の日記―』（平一五・三　大阪市立大学大学史資料室編）
『袖珍；翡翠記』（井川恭著、宍倉忠臣編及解説、山陰中央新報社、平一六）
『島根の百年』（NHK松江放送局編、昭四三）
『松江市史研究』（松江市教育委員会編）（松江市歴史叢書、平二二～）
『島根県史』（島根県編　名著出版、昭四七）
『人物島根県史』（島根郷土研究会編、昭三四）

『島根県近代教育史』(同教育長、昭五四)
『島根県大百科事典』(山陰中央新報社、昭五七)
内藤正中著『わが町の歴史・松江』(文一総合出版、昭五四)
漢東種一郎文・福田茂宏絵『松江／わが町』(松江今井書店、昭六〇)
『松江北高等学校百年史』(松江北高等学校百年史編集委員会編、昭五一)
その他必要に応じて授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2508	授業コード	LM09080010
国文学研究演習4 Advanced Studies and Seminar in Japanese Literature 4			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 奥野　久美子			

●科目の主題

井川（恒藤）恭日記の翻刻、注釈。大阪市立大学初代学長で芥川龍之介の親友であった恒藤恭の、松江での療養時代（中学卒業後、一高入学前）の日記（明治40年、初夏～）を題材に、原資料にもとづき翻刻と校注を行う。文学への関心が高かった療養時代の井川恭は、自ら創作活動も行う一方で、毎日さまざまな雑誌や書物を読み、それらについて細かく日記に記している。それは明治末期の若者の教養を知る上でも貴重な資料である。そこに書かれた書物等について確認するなどの細かな作業にあたり、明治期の青年の文学環境・社会環境を研究する。

●到達目標

本文校訂と注釈の作業を通じて、明治期の文学環境や恒藤恭の思想形成に対する理解を深める。あわせて近代文学研究の方法を身につける。

●授業内容・授業計画

受講生の人数に合わせて担当箇所を決めて調査研究を行い、発表する。発表者以外の受講生は質疑を行い全員で討論する。

第1回 ガイダンス
第2回 発表と質疑、討論1
第3回 発表と質疑、討論2
第4回 発表と質疑、討論3
第5回 発表と質疑、討論4
第6回 発表と質疑、討論5
第7回 発表と質疑、討論6
第8回 発表と質疑、討論7
第9回 発表と質疑、討論8
第10回 発表と質疑、討論9
第11回 発表と質疑、討論10
第12回 発表と質疑、討論11
第13回 発表と質疑、討論12
第14回 発表と質疑、討論13
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

発表の準備には2～3週間を要する。早めに準備にとりかかること。発表者以外の受講生も毎回の箇所を事前に下読みしておき、事後は疑問点などを整理し内容を検討しておくこと。

●評価方法

発表内容と討論への参加状況。

●受講生へのコメント

毎回とりあげる箇所は各授業前に再度熟読しておくこと。また、質疑、討論には積極的に参加すること。

●参考文献・教材

テキスト:原資料の画像コピーを配布する。
参考文献:関口安義『恒藤恭とその時代』(平一四・五　日本エディタースクール出版部)
山崎時彦編著『恒藤恭の青年時代』(平一五・一〇　未來社)
『向陵記―恒藤恭　一高時代の日記―』(平一五・三　大阪市立大学大学史資料室編)
『袖珍;翡翠記』(井川恭著、宍倉忠臣編及解説、山陰中央新報社、平一六)
『島根の百年』(NHK松江放送局編、昭四三)
『松江市史研究』(松江市教育委員会編)(松江市歴史叢書、平二二～)
『島根県史』(島根県編　名著出版、昭四七)
『人物島根県史』(島根郷土研究会編、昭三四)
『島根県近代教育史』(同教育長、昭五四)

『島根県大百科事典』(山陰中央新報社、昭五七)
内藤正中著『わが町の歴史・松江』(文一総合出版、昭五四)
漢東種一郎文・福田茂宏絵『松江／わが町』(松江今井書店、昭六〇)
『松江北高等学校百年史』(松江北高等学校百年史編集委員会編、昭五一)
その他必要に応じて授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2509	授業コード	LM09190010	
国語学研究 Advanced Studies in Japanese Linguistics				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 丹羽　哲也				

●科目の主題

日本語文法の研究。

●到達目標

日本語文法の諸領域についての基本的文献を精読しながら、研究の現状を把握し、今後の研究の方向について考察する。

●授業内容・授業計画

日本語を専門とする各受講生の研究テーマに即して、基本的文献をいくつか選び、毎回それを精読する。担当の受講生は、論文を要約し、例文を補ったり、反例を考えたりしながら、その論文の達成点と問題点を把握することが求められる。

第1回　発表と議論(1)
第2回　発表と議論(2)
第3回　発表と議論(3)
第4回　発表と議論(4)
第5回　発表と議論(5)
第6回　発表と議論(6)
第7回　発表と議論(7)
第8回　発表と議論(8)
第9回　発表と議論(9)
第10回　発表と議論(10)
第11回　発表と議論(11)
第12回　発表と議論(12)
第13回　発表と議論(13)
第14回　発表と議論(14)

●事前・事後学習の内容

発表者は論文に基づいてレジュメを作成する。他の受講生もあらかじめ論文を精読しておく。必要に応じて関連論文も読む。

●評価方法

平常点による。

●受講生へのコメント

自分の研究テーマに関連する論文を各自でたくさん読んでいくこと。そういう中で、授業で重要文献を精読することが大切である。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2510	授業コード	LM09200010	
国語学研究演習 Advanced Studies and Seminar in Japanese Linguistics				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	丹羽　哲也				

●科目の主題

日本語文法の研究。

●到達目標

日本語文法の諸領域についての基本的文献や最先端の文献を精読しながら、研究の現状を把握し、受講生各自の研究の方向と課題について議論する。

●授業内容・授業計画

日本語を専門とする各受講生の研究テーマに即して、文献をいくつか選び、毎回それを精読する。担当の受講生は、論文を要約し、例文を補ったり、反例を考えたりしながら、その論文の達成点と問題点を把握するとともに、学説間の異同を把握し、今後の研究の方向性について考える。担当以外の受講生も、問題点を十分に把握し、議論に参加することが求められる。

第1回　発表と議論(1)
第2回　発表と議論(2)
第3回　発表と議論(3)
第4回　発表と議論(4)
第5回　発表と議論(5)
第6回　発表と議論(6)
第7回　発表と議論(7)
第8回　発表と議論(8)
第9回　発表と議論(9)
第10回　発表と議論(10)
第11回　発表と議論(11)
第12回　発表と議論(12)
第13回　発表と議論(13)
第14回　発表と議論(14)

●事前・事後学習の内容

発表者は論文に基づいてレジュメを作成する。他の受講生もあらかじめ論文を精読しておく。必要に応じて関連論文も読む。

●評価方法

平常点による。

●受講生へのコメント

論文をめぐる議論の中で、各自の研究方法を構築する足がかりを得るように努めることが重要である。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2511	授業コード	LM09210010
国語国文学研究 Advanced Studies in Japanese Language and Literature			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 佐野　宏			

●科目の主題

古代日本文学における歌謡及び和歌作品について、後世の歌語以前の「文脈付帯語彙」の形成過程について考察を行う。

●到達目標

萬葉集、古事記、日本書紀、風土記といった上代作品についての基礎知識の確認と、それらを研究対象とする場合の学的方法について説明できることを目的とする。

●授業内容・授業計画

第1回　上代語概説①語彙
第2回　上代語概説②音韻
第3回　上代語概説③文法（活用）・付；特殊語法
第4回　上代語概説④文法（副助詞と係助詞）
第5回　上代語概説⑤文法（推量の助動詞の解釈をめぐって）
第6回　上代語資料概説①；資料の範囲、木簡及び出土資料群
第7回　上代語資料概説②：日本文学史上の上代文学
第8回　萬葉集研究の諸問題①：和歌の定型
第9回　萬葉集研究の諸問題②：「歌群論」の問題点
第10回　萬葉集研究の諸問題③：「萬葉集」という作品
第11回　萬葉集研究の諸問題④：古事記、日本書紀との関連性
第12回　萬葉集研究の諸問題⑤：享受史について
第13回　萬葉集研究の諸問題⑥：修辞法
第14回　今期のまとめ"

●事前・事後学習の内容

課題を与えるので配付のプリントを参考にして課題について調査と考察を行う。課題は個別作品、あるいは古代語語彙といった個別の課題ですから、具体的な事前事後学習については個別に指示をします。学的方法（個別の研究対象への分析方法と体系的観点からみたその研究に対する評価）について考えて欲しいと思います。

●評価方法

期末のレポート70%、授業評価コメントを含む平常点30%（学部生の小テストに代わり、教員の講義中の板書、説明についての評価を求めます。）

●受講生へのコメント

とくに事前の知識は必要ありません。古代和歌や日本神話に興味のある方を歓迎します。ただし国文学研究に国語学の知識を活用し、国語学研究に国文学の成果を取り入れるようにしたいと思います。なお、受講生にあわせて素材を適宜変更しますので、上記の回数と内容は順序を入れ換えることがあります。

●参考文献・教材

井手至・毛利正守『校注萬葉集』（和泉書院）、『萬葉事始』（和泉書院）、校注萬葉集の代わりに小島憲之他『萬葉集』本文篇（塙書房）を用いてもよい。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2512	授業コード	LM09220010
国語国文学研究演習 Advanced Studies and Seminar in Japanese Language and Literature			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 佐野　宏			

●科目の主題

国語学と国文学の見方を踏まえて、研究対象を多角的に分析することを通して、人文科学における知識の継承と「古典」形成の意義について考察する。

●到達目標

萬葉集、古事記、日本書紀、風土記といった上代作品について自ら問題を設定し、解決できるようになることを目指します。

●授業内容・授業計画

第1回　演習について
第2回　萬葉集の場合：具体例を示す（譬喩と問答について；文脈付帯語の展相）。
第3回　古事記の場合：具体例を示す（古事記上巻について；天孫降臨の論理）。
第4回　日本書紀の場合：具体例を示す（雄略天皇について；萬葉集巻頭歌の意義）。
第5回　風土記の場合：具体例を示す（三輪山伝説の話形と萬葉集巻13「泣く子守る山」）。
第6回　上代文学研究で今何が問題か（記紀歌謡の諸問題；和歌の次元に措いた時）
第7回　上代語研究で今何が問題か（助動詞の意味分化と事態把握のあり方）
第8回　個別演習①：担当者による研究発表
第9回　個別演習②：担当者による研究発表
第10回　個別演習③：担当者による研究発表
第11回　個別演習④：担当者による研究発表
第12回　個別演習⑤：担当者による研究発表
第13回　個別演習⑥：担当者による研究発表
第14回　今期のまとめ"

●事前・事後学習の内容

課題を与えるので配付のプリントを参考にして課題について調査と考察を行う。課題は個別作品、あるいは古代語語彙といった個別の課題ですから、具体的な事前事後学習については個別に指示をします。学的方法（個別の研究対象への分析方法と体系的観点からみたその研究に対する評価）について考えて欲しいと思います。

●評価方法

期末のレポート70%、授業評価コメントを含む平常点30%（学部生の小テストに代わり、教員の講義中の板書、説明についての評価を求めます。）

●受講生へのコメント

演習科目になりますので、国語国文学研究を履修しておくことが望ましいと考えますが、既に古代語・上代文学について素養のある方はその限りではありません。

●参考文献・教材

井手至・毛利正守『校注萬葉集』（和泉書院）、『萬葉事始』（和泉書院）、校注萬葉集の代わりに小島憲之他『萬葉集』本文篇（塙書房）を用いてもよい。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2513	授業コード	LM09130010	
国語国文学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Japanese Language and Literature Ⅰ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	丹羽　哲也／小林　直樹／久堀　裕朗／奥野　久美子／山本　真由子				

●科目の主題

国語学・国文学研究を進めるための基礎的な素養を身につける。それぞれの時代のそれぞれに特殊性を持った研究対象に深く分け入るだけでなく、そうした枠にとらわれることなく、総合的見地に立って、問題の核心に迫る方法を探り、対象を共時的・通時的座標の上に正確に位置づけるセンスを養う。

●到達目標

国語学・国文学に関する総合的な知見を深める。

●授業内容・授業計画

受講生は次のことが求められる。

・指定された課題研究文献について、指導教員と議論し、レポートを作成する。

・自らの研究領域について、指導教員と議論を重ね、研究の課題と方向を探る。

その他、大学院生の研究発表会に参加し、発表や議論の方法について学んだり、学部の授業を聴講し、議論に参加したりするなど、自分の専門領域にとらわれずに、学ぶ機会を見つけること。

●事前・事後学習の内容

課題文献を継続して読み、レポートを作成する。

●評価方法

平常点とレポートによる。

●受講生へのコメント

自分の研究領域だけでなく、関連領域を広く貪欲に吸収していくことが大切である。

●参考文献・教材

課題文献は適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN2514	授業コード	LM09140010	
国語国文学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Japanese Language and Literature Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	丹羽　哲也／小林　直樹／久堀　裕朗／奥野　久美子／山本　真由子				

●科目の主題

「国語国文学総合研究Ⅰ」と同様に、基礎的な素養を身につけるとともに、各自の研究の方向を見定め、修士論文作成に向けて具体的に課題を絞り込んでいく。

●到達目標

修士論文への目標を定める。

●授業内容・授業計画

受講生は次のことが求められる。

・指定された課題研究文献について、指導教員と議論し、レポートを作成する。

・自らの研究領域について、指導教員と議論を重ね、研究テーマを具体的に定めていく。

その他、大学院生の各種の研究発表会に参加し、発表や議論の方法について学んだり、学部の授業を聴講し、議論に参加するなど、自分の専門領域にとらわれずに、学ぶ機会を見つけること。

●事前・事後学習の内容

課題文献を継続して読み、レポートを作成する。

●評価方法

平常点とレポート、および、大学院生の研究発表会への参加による。

●受講生へのコメント

研究テーマを絞っていきつつも、幅広い関心を持ち続けることが大切である。

●参考文献・教材

課題文献は適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LCJPN3601	授業コード	LM09150010
国語国文学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Japanese Language and Literature Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 丹羽　哲也／小林　直樹／久堀　裕朗			

●科目の主題

国語学・国文学の修士論文作成のための指導を行う。

●到達目標

修士論文の構想を立て、具体化する。

●授業内容・授業計画

論文テーマの設定、テーマとそれを追究する方法の適合性、論文の構成など、論文作成に必要な事項について議論する。

学生はそれぞれの研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（小林直樹教授・久堀裕朗教授） 国文学に関する指導を行う。

（丹羽哲也教授） 国語学に関する指導を行う。

●事前・事後学習の内容

修士論文に向け、研究テーマについての考察を深める。

●評価方法

平常点と修士論文の中間報告による。

●受講生へのコメント

個々の問題に対する調査・考察を丹念に続けていくとともに、論文全体が何をめざすのか、その構想を常に自らに問い続けること。

●参考文献・教材

指導教員が助言もするが、当然ながら、必要な資料や先行研究を博捜することも研究の一環である。

授業科目名	科目NO.	LCJPN3602	授業コード	LM09160010	
国語国文学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Japanese Language and Literature Ⅱ				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 丹羽　哲也／小林　直樹／久堀　裕朗				

●科目の主題

国語学・国文学の修士論文作成のための指導を行う。

●到達目標

修士論文を完成する。

●授業内容・授業計画

論文のテーマ設定の妥当性、テーマとそれを追究する方法の適合性、論文の構成、論文細部の考察の妥当性など、論文作成に必要な事項について議論し、論文完成に至らしめる。

学生はそれぞれの研究テーマに応じて、いずれかの教員の指導を受けるものとする。

（小林直樹教授・久堀裕朗教授） 国文学に関する指導を行う。

（丹羽哲也教授） 国語学に関する指導を行う。

●事前・事後学習の内容

研究テーマについての考察を深め、修士論文を完成させる。

●評価方法

平常点と修士論文の中間報告による。

●受講生へのコメント

個々の問題に対する調査・考察を丹念に続けていくとともに、論文全体が何をめざすのか、その構想を常に自らに問い続けること。論旨が明快であるか、表現が正確であるかといったことを十分に点検すること。

●参考文献・教材

指導教員が助言もするが、当然ながら、必要な資料や先行研究を博捜することも研究の一環である。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000090	
修士論文（国語国文学） Master's Thesis（国語国文学）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	丹羽　哲也／小林　直樹／久堀　裕朗				

●科目の主題

修士論文の執筆。

●到達目標

修士論文を完成させる。

●授業内容・授業計画

各自の研究領域に応じた指導教員に相談しながら、研究の計画を立て、資料を収集し、作品やデータを読み込み、論文の構想を練り、具体的な内容を固めていって、執筆をする。

●事前・事後学習の内容

論文の完成に必要なあらゆることをする。

●評価方法

論文内容の独創性・論理性・資料解釈の正確さ、全体的な完成度の高さなどを総合的に評価する。

●受講生へのコメント

年間を通じた持続力、執筆に到る集中力、自分の研究を客観的に見て修正していく柔軟性が問われる。

●参考文献・教材

指導教員が助言もするが、当然ながら、必要な資料や先行研究の探索も研究の一環である。

授業科目名	科目NO.	LCCHN2501	授業コード	LM10210010
中国文学研究 Advanced Studies in Chinese Literature			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 高橋　未来			

●科目の主題

本講義は、中国古典文学研究分野の論文の読解を通して、最近の当該分野における様々な研究テーマを把握するものである。この講義を通して、受講生が自身の研究テーマを掘り下げ、研究方法や扱う資料についての知識を取得し、修士論文の執筆に活かすことを目的とする。

●到達目標

様々な論文の読解と分析を通して、現在の中国古典文学研究分野において、どのような研究テーマが求められ、どのようなアプローチで論証が行われているかを確認する。それにより、自身の研究テーマをたてる、或いは掘り下げて、仮説と論証の方法などの計画をまとめる。

●授業内容・授業計画

本年度は試みに、六朝から唐、宋代あたりまでにおける、(1)文学と政治、(2)経学と諸子学、(3)兵戦に関する文人の思想と態度――について論じた論文を扱う。受講生に論文の解説、論文中に言及されている作品と資料についての解説を担当してもらい、それに対する意見交換を行う。

第1回 ガイダンス
第2回 文学と政治(六朝)
第3回 文学と政治(唐代)
第4回 文学と政治(唐代)
第5回 文学と政治(宋代)
第6回 経学と諸子学(唐代)
第7回 経学と諸子学(唐代)
第8回 経学と諸子学(宋代)
第9回 経学と諸子学(宋代)
第10回 兵戦に関する文人の思想と態度(詩経から六朝まで)
第11回 兵戦に関する文人の思想と態度(唐代)
第12回 兵戦に関する文人の思想と態度(唐代)
第13回 最近の唐代文学研究における動向及び今後期待されるテーマについて
第14回 自身の研究テーマについて発表

●事前・事後学習の内容

第2回～第5回 文学と政治に関する各論文の下読みと、疑問点の整理。同一著者のその他の論文を調べる。
第6回～第9回 経学と諸子学に関する各論文を下読みし、関連文献を調べる。
第10回～第12回 兵戦に関する文人の思想と態度を論じた各論文を下読みし、引用された作品を調べる。
第13回～第14回 自身の研究テーマについて概要をまとめる。

●評価方法

発表40%、期末課題60%として評価する。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

授業科目名	科目NO.	LCCHN2502	授業コード	LM10220010
中国文学研究演習 Advanced Studies and Seminar in Chinese Literature			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	高橋　未来			

●科目の主題

本講義は、学部の四年間に培った中国古典文学に関する基礎知識を活用し、古典文学作品を正確かつ深く読み、分析する力を養うものである。作品と注釈に引かれる多くの資料の精読を通して、中国古典文学に用いられる語彙、俗語の用法、語法、文人の思考、作風などへの理解を深めることを目的とする。

●到達目標

中国古典文学作品の詩文を正確に読むことができる。作品の特徴と、文学史の中での位置づけについて分析し、解説することができる。

●授業内容・授業計画

本年度は、唐・杜牧撰／清・馮集梧注『樊川詩集注』巻二以降の詩を取り上げる。

第1回 ガイダンス
第2回「華清宮三十韻」(1)
第3回「華清宮三十韻」(2)
第4回「華清宮三十韻」(3)
第5回「長安雑題長句六首」(1)
第6回「長安雑題長句六首」(2)
第7回「長安雑題長句六首」(3)
第8回「河湟」(1)
第9回「河湟」(2)
第10回「許七侍御」(1)
第11回「許七侍御」(2)
第12回「李給事二首」 其一
第13回「李給事二首」 其二
第14回「題永崇西平王」

●事前・事後学習の内容

第1回 杜牧の人生及び主な作品について調べておく
第2回～第4回「華清宮三十韻」本文及び注に引く資料の下調べをする
第5回～第7回「長安雑題長句六首」本文と注の資料の下調べ
第8回～第9回「河湟」河湟の歴史的背景、本文と注の資料の下調べ
第10回～第11回「許七侍御」本文と注の資料の下調べ
第12回～第13回「李給事二首」本文と注の資料の下調べ
第14回 「題永崇西平王」本文と注の資料の下調べ

●評価方法

担当する作品の発表50％、レポート50％として評価する。

●参考文献・教材

唐・杜牧撰／清・馮集梧注『樊川詩集注』(上海古籍出版社、1962)のプリントを配布する。その他、呉在慶『杜牧集繫年校注』(中華書局、2008)等を授業中に使用する。

授業科目名	科目NO.	LCCHN2503	授業コード	LM10050010	
中国文化学研究 Advanced Studies in Chinese Culture				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
講義	張　新民				

●科目の主題

中国独立電影研究

●到達目標

今期は中国独立電影の代表的な作品を考察する。中国独立電影とは、国の管理下にあり、検閲が行われていた商業映画や映画産業システムから独立した、自由な精神で製作されたインディペンデント映画である。

●授業内容・授業計画

本講義は張元の作品を考察する。

第1回 ガイダンス
第2回 張元作品1
第3回 張元作品2
第4回 張元作品3
第5回 張元作品4
第6回 張元作品5
第7回 張元作品6
第8回 張元作品7
第9回 張元作品8
第10回 張元作品9
第11回 張元作品10
第12回 張元作品11
第13回 張元作品12
第14回 張元作品13
第15回 総括

●事前・事後学習の内容

授業時に指示する。

●評価方法

授業中の発表（50%）とレポート（50%）による。
単位取得のための最低基準は達成度60%以上を超えることとする。

●受講生へのコメント

中国語ができることが望ましい。

●参考文献・教材

プリント配布

授業科目名	科目NO.	LCCHN2504	授業コード	LM10060010	
中国文化学研究演習 Advanced Studies and Seminar in Chinese Culture				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	張　新民				

●科目の主題

中国独立電影研究

●到達目標

今期は中国独立電影の代表的な作品を考察する。中国独立電影とは、国の管理下にあり、検閲が行われていた商業映画や映画産業システムから独立した、自由な精神で製作されたインディペンデント映画である。

●授業内容・授業計画

本講義は婁燁の作品を考察する。

第1回 ガイダンス
第2回 婁燁作品1
第3回 婁燁作品2
第4回 婁燁作品3
第5回 婁燁作品4
第6回 婁燁作品5
第7回 婁燁作品6
第8回 婁燁作品7
第9回 婁燁作品8
第10回 婁燁作品9
第11回 婁燁作品10
第12回 婁燁作品11
第13回 婁燁作品12
第14回 婁燁作品13
第15回 総括

●事前・事後学習の内容

授業時に指示する。

●評価方法

授業中の発表（50%）とレポート（50%）による。
単位取得のための最低基準は達成度60%以上を超えることとする。

●受講生へのコメント

中国語ができることが望ましい。

●参考文献・教材

プリント配布

授業科目名	科目NO.	LCCHN2505	授業コード	LM10230010
中国語学研究 Advanced Studies in Chinese Linguistics			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 大岩本　幸次			

●科目の主題

太田齋『韻書と等韻図』を精読し、中古音の基本資料である韻書『切韻』と等韻図『韻鏡』の構成原理や中古音の推定音価に関する基礎的な概念についての理解を目指す。

●到達目標

音韻学の基礎的な用語について理解し、関連論文の読解に活かすことができることを到達目標とする。

●授業内容・授業計画

第1回 ガイダンス
第2回 精読1
第3回 精読2
第4回 精読3
第5回 精読4
第6回 精読5
第7回 精読6
第8回 精読7
第9回 精読8
第10回 精読9
第11回 精読10
第12回 関連論文読解1
第13回 関連論文読解2
第14回 関連論文読解3
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習：資料を事前に読み、疑問点などを整理する。
事後学習：学習内容を復習する。

●評価方法

授業中の発表（50％）とレポート（50％）による。単位取得のための最低基準は達成度60％以上を超えることとする。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

コピーを配布する。

授業科目名	科目NO.	LCCHN2506	授業コード	LM10240010	
中国語学研究演習 Advanced Studies and Seminar in Chinese Linguistics				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	大岩本　幸次				

●科目の主題

中国金代に編纂された字書に引用されて内容の一部が確認できる逸書資料について、具体的に整理・分析を行い、現在は失われてしまった資料の内容の一端を確認し、字書史に関する問題について考察する。

●到達目標

中国古代字書の構造について基本的なところを理解し、実際にデータを集めて初歩的な整理・分析・検討を行えるようになることを目標とする。

●授業内容・授業計画

第1回 ガイダンス・資料配付
第2回 字書史概説1
第3回 字書史概説2
第4回 字書史概説3
第5回 書誌調査
第6回 資料整理1
第7回 資料整理2
第8回 資料整理3
第9回 データ分析1
第10回 データ分析2
第11回 データ分析3
第12回 諸問題の検討1
第13回 諸問題の検討2
第14回 諸問題の検討3
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習：配付された資料に目を通し、付設された問題の答えを考える（第2回～第4回）。配布された資料を比較し差異を見出す（第5回）。配布された資料の要素を整理する（第6回～第8回）。整理したデータを他の字書資料と対照する（第9回～第11回）。他書との対照結果から当該資料の性格を検討する（第12回～第14回）。これまでの作業をまとめ結論を出す（第15回）。

事後学習（第1回～第15回）：学習した内容を復習する。

●評価方法

授業中の発表（50％）とレポート（50％）による。単位取得のための最低基準は達成度60％以上を超えることとする。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

授業科目名	科目NO.	LCCHN2510	授業コード	LM10310010	
中国語応用研究 Applied Studies in Chinese				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	大岩本　幸次／張　新民				

●科目の主題

自らの研究内容を限られた時間内に効果的に伝えるためには、構成方法の工夫、使用言語への習熟などが鍵となる。本科目では、実践を通してそうした能力についての習熟を目指す。

●到達目標

中国語による口頭発表、プレゼンテーション遂行のための能力を身に着ける。

●授業内容・授業計画

毎回、担当者を決め、発表内容に関して相互に意見を述べあい、受講者全員で検討を加える。

第1回　ガイダンス
第2回　発表・討議(1)
第3回　発表・討議(2)
第4回　発表・討議(3)
第5回　発表・討議(4)
第6回　発表・討議(5)
第7回　発表・討議(6)
第8回　発表・討議(7)
第9回　発表・討議(8)
第10回　発表・討議(9)
第11回　発表・討議(10)
第12回　発表・討議(11)
第13回　発表・討議(12)
第14回　発表・討議(13)
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習：毎回準備される資料について事前に目を通して疑問点等を確認しておく。
事後学習：授業での議論を踏まえ、今後への改善点を見出す。

●評価方法

出席・授業への積極性(50%)、課題の提出内容(50%)に拠る。単位取得のための最低基準は達成度60%以上を超えることとする。

●受講生へのコメント

特になし。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

授業科目名	科目NO.	LCCHN2511	授業コード	LM10130010
中国語中国文学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Chinese Language and Literature Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	張　新民／大岩本　幸次／高橋　未来			

●科目の主題

中国語学・中国文学・中国文化学のそれぞれの研究分野において、身につけるべき知識、研究方法を数回に分けて講義する。その上で、学生各自の専攻分野に即した課題を与えてレポートを提出してもらう。また、修士論文の構想発表会、ならびに大阪市立大学中国学会に参加して、若手研究者の問題意識や研究方法を学ばせる。

●到達目標

中国語学・中国文学・中国文化学の研究を進める上で必要な基礎的知識、研究方法を総合的に修得し、修士論文作成に向けた基礎力を養うことを目標とする。

●授業内容・授業計画

第1回　ガイダンス。中国語学に関する講義(1)
第2回　中国語学に関する講義(2)
第3回　中国語学に関する講義(3)
第4回　中国語学に関する講義(4)
第5回　中国語学に関する講義(5)
第6回　中国文学に関する講義(1)
第7回　中国文学に関する講義(2)
第8回　中国文学に関する講義(3)
第9回　中国文学に関する講義(4)
第10回　中国文化学に関する講義(1)
第11回　中国文化学に関する講義(2)
第12回　中国文化学に関する講義(3)
第13回　中国文化学に関する講義(4)
第14回　中国文化学に関する講義(5)
第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習：資料を事前に読み、疑問点などを整理する。
事後学習：学習内容を復習する。

●評価方法

授業中の発表(50%)とレポート(50%)による。単位取得のための最低基準は達成度60%以上を超えることとする。

●受講生へのコメント

研究の基礎力を養成する授業なので、積極的に取り組んでもらいたい。

●参考文献・教材

教材はプリントを配布する。
参考文献は適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LCCHN2512	授業コード	LM10140010	
中国語中国文学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Chinese Language and Literature Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	張 新民／大岩本 幸次／高橋 未来				

●科目の主題

中国語学・中国文学に関わる研究の現状を把握するため、文献講読を中心に進めながら討議を行う。

●到達目標

中国語学・中国文学の分野において、近年の研究状況に基づいた知見を獲得する。

●授業内容・授業計画

院生各自に研究課題を設定させ、それにかかわる資料を収集させる。その上で、それぞれの研究課題に関する先行研究の状況等を整理させ、発表・討議させる。また、大阪市立大学中国学会、および『中国学志』の合評会に参加させ、先輩の研究方法やその成果に学ばせる。

●事前・事後学習の内容

事前に配布する資料の精読は言うまでもないが、さらに質疑応答に備えておくこと。他の報告者に対して意見を述べられるよう準備しておくこと。事後は、自らの研究テーマとのすり合わせを行い、研究方法の見直しに生かすこと。

●評価方法

授業中の発表（50％）とレポート（50％）による。単位取得のための最低基準は達成度60％以上を超えることとする。

●受講生へのコメント

研究の基礎力を養成する授業なので、積極的に取り組んでもらいたい。

●参考文献・教材

教材はプリントを配布する。
参考文献は適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LCCHN3601	授業コード	LM10150010	
中国語中国文学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Chinese Language and Literature Ⅰ				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 張　新民／大岩本　幸次				

●科目の主題

修士論文作成に至る研究の指導。

●到達目標

中国語・中国文学・中国文化学に関する諸テーマを専門的に研究するために必要な知識や研究方法を身につけることを目標とする。また学術論文やレポートの書き方等も具体的に指導する。

●授業内容・授業計画

修士論文の研究課題を取り扱うために必要な基礎的知識、研究方法の修得に努めさせる。同時に、関連する資料の調査、収集にも当たらせる。学生の研究課題に応じて、その分野の先行研究、関連書物の読解を行わせ、課題にかかわる問題点を整理、把握させる。またそれと並行して、主要なテクストの講読を行い、問題点に関する理解を深化させる。学生はその研究テーマに応じて、研究指導の教員の指導を受けるものとする。

（張　　新民）中国文化学分野の課題に関して研究指導を行う。（高橋　未来）中国文学分野の課題に関して研究指導を行う。（大岩本幸次）　中国語学分野の課題に関して研究指導を行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、前回の指導内容を踏まえ、修士論文執筆のための報告内容をしっかり用意すること。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の修士課程の集大成である。履修モデルとしての中国語中国文学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「中国語中国文学研究指導1」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、修士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LCCHN3602	授業コード	LM10160010	
中国語中国文学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesisin Chinese Language and Literature Ⅱ				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 張　新民／大岩本　幸次				

●科目の主題

修士論文作成に至る研究の指導。

●到達目標

中国語学・中国文学・中国文化学に関して、専門的に研究する上で必須の知識や方法を身につけることを目標とする。また学術論文やレポートの書き方等を具体的に指導する。

●授業内容・授業計画

中国語学・中国文学・中国文化学に関して、専門的に研究する上で必須の知識や方法を身につけることを目標とする。また学術論文やレポートの書き方等を具体的に指導する。

中国語中国文学研究指導Ⅰを受けて、収集した資料、文献の読解と整理を行わせ、主要なテクストの分析を進めさせると同時に、研究課題に即した論述のあり方を指導し、修士論文の完成を目指す。学生はその研究テーマに応じて、研究指導の教員の指導を受けるものとする。

（張　新民）中国文化学分野の課題に関して研究指導を行う。（高橋　未来）中国文学分野の課題に関して研究指導を行う。（大岩本幸次）　中国語学分野の課題に関して研究指導を行う。

●事前・事後学習の内容

毎回、前回の指導内容を踏まえ、修士論文執筆のための報告内容をしっかり用意すること。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

「中国語中国文学研究指導2」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質が評価されるのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「中国語中国文学研究指導2」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の学士課程の集大成である。履修モデルとしての中国語中国文学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「中国語中国文学研究指導2」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、学士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

適宜指示する。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000100	
修士論文（中文） Master's Thesis（中文）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	張　新民／大岩本　幸次／高橋　未来				

●科目の主題

中国語学・中国文学・中国文化に関わる修士論文作成のための指導。

●到達目標

各自が修士論文執筆に向けて解決しなければならない諸課題を取り上げ、2年間で修士論文を書き上げることができるよう指導する。

●授業内容・授業計画

各回の授業内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。

●事前・事後学習の内容

毎回、前回の指導内容を踏まえて、論文執筆のための報告内容をしっかり用意すること。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「中国語中国文学研究指導1」は、修士論文を提出する年度の前期に、「中国語中国文学研究指導2」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。履修モデルとしての中国語中国文学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

指定しない。

授業科目名	科目NO.	LCENG2503	授業コード	LM11030010
英文学研究Ⅱ Advanced Studies in English LiteratureⅡ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 田中　孝信			

●科目の主題

19世紀イギリス小説の系譜や背景の解説と個別作品の分析を行なう。

●到達目標

文学テクストの精読と多読を通して高度な読解力を培うとともに、文学研究の基本知識や論理的思考力、さらには資料収集法を身につける。

●授業内容・授業計画

チャールズ・ディケンズ文学の全体像を概観した上で、『大いなる遺産』(1860-61)を読む。主人公ピップの人間的成長が、語り手ピップのユーモアとペイソスの入り混じった繊細な回想的文体や、作者の巧妙なプロットによって、いかに展開しているかに注目する。特に、ヴィクトリア朝中期という「ジェントルマン」像が尊ばれた時代にあって、「男らしさ」とは何かを、同時代のさまざまな文献にも当たりながら考察する。

第1回 ディケンズとヴィクトリア朝社会
第2回 ディケンズ文学概観
第3回『大いなる遺産』を読む① ピップと脱獄囚マグウィッチ
第4回『大いなる遺産』を読む② ピップと義兄ジョー
第5回『大いなる遺産』を読む③ ピップと姉ミセス・ジョー
第6回『大いなる遺産』を読む④ ピップとサティス・ハウスの女主人ミス・ハヴィシャム
第7回『大いなる遺産』を読む⑤ ピップとミス・ハヴィシャムの養女エステラ
第8回『大いなる遺産』を読む⑥ ピップのダブルとしての鍛冶職人オーリック
第9回『大いなる遺産』を読む⑦ ピップのジェントルマン願望
第10回『大いなる遺産』を読む⑧ ピップにとってのロンドンの存在意義
第11回『大いなる遺産』を読む⑨ 若紳士ハーバートの役割
第12回『大いなる遺産』を読む⑩ ピップと弁護士ジャガーズ
第13回『大いなる遺産』を読む⑪ ピップと弁護士事務所の事務員ウェミック
第14回『大いなる遺産』を読む⑫ ピップにとっての汚穢
第15回 全体のまとめ

●事前・事後学習の内容

授業までに、教科書の指定された箇所を自分の力で読み解き、要点を整理した上で、コメントを準備しておくこと。授業後はすみやかに、誤読や浅薄な読解をしていた部分を中心に読み直し、理解を深めるようにする。そのため、各授業の前後にそれぞれ2時間程度の予習・復習を行うことが求められる。

●評価方法

レポート(70%)・平常点(30%)

●受講生へのコメント

訳書で構わないので、ディケンズの他の作品も読んでおくこと。特に、同じ一人称小説の『デイヴィッド・コパーフィールド』(1849-50)は必読書である。

●参考文献・教材

Charles Dickens, Great Expectations?(Oxford Illustrated Dickens)

授業科目名	科目NO.	LCENG2504	授業コード	LM11040010
英文学研究演習2 Advanced Studies and Seminar in English Literature 2			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 田中　孝信			

●科目の主題

19世紀イギリス小説が孕む様々な問題を、精神分析学、ディコンストラクション、ニューヒストリシズム、フェミニズムといった現代の批評理論を用いて分析し、作品の時代性とともに現代性を明らかにする。

●到達目標

さまざまな批評理論のテクストへの応用を通して、テクスト分析能力と論理的思考力を培う。

●授業内容・授業計画

前期に引き続きディケンズの『大いなる遺産』を読み、同時に批評論文を取り上げる。出版当時から現代に至るまでの批評の流れを概観しつつ、特に都市とジェンダーに着目した論文を検討し、最新のディケンズ研究の一端に触れる。それらを踏まえた上で、研究発表を通して受講生の問題意識を高める。

第1回『大いなる遺産』研究におけるテーマの多様性
第2回『大いなる遺産』を読む①　ピップの一人称の語りの特徴
第3回『大いなる遺産』を読む②　ピップの繊細さと罪の意識
第4回『大いなる遺産』を読む③　ピップのセクシュアリティ
第5回『大いなる遺産』を読む④　ピップの俗物性
第6回『大いなる遺産』を読む⑤　ピップの人間的成長
第7回『大いなる遺産』を読む⑥　二つのエンディング
第8回『大いなる遺産』批評論文を読む（1）ディコンストラクション
第9回『大いなる遺産』批評論文を読む（2）ニューヒストリシズム
第10回　ディケンズ文学批評論文の紹介と討論（1）都市
第11回　ディケンズ文学批評論文の紹介と討論（2）ジェンダー
第12回　ディケンズ文学批評論文の紹介と討論（3）精神分析
第13回　受講生の研究発表と質疑応答（1）
第14回　受講生の研究発表と質疑応答（2）
第15回　全体のまとめ

●事前・事後学習の内容

授業までに、指定された、教科書の個所や学術論文を自分の力で読み解き、要点を整理した上で、コメントを準備しておくこと。授業後は、誤読や浅薄な読解をしていた部分を中心に読み直し、理解を深めるようにする。そのため、各授業の前後にそれぞれ2時間程度の予習・復習を行うことが求められる。さらに、学期後半には研究発表も控えているので、自分なりのテーマを見つける姿勢で予習・復習に臨むこと。

●評価方法

レポート（70％）・平常点（30％）

●受講生へのコメント

ディケンズをジェンダーの観点から論じる際、トロロプやエリオットといった同時代作家や、スティーヴンソンやギッシングのような世紀末から20世紀初頭の作家たちとの比較検討も重要なので、彼らの作品についても訳書で構わないので読んでおくこと。

●参考文献・教材

Charles Dickens, Great Expectations?(Oxford Illustrated Dickens) およびプリント

授業科目名	科目NO.	LCENG2505	授業コード	LM11050010
英文学研究Ⅲ Advanced Studies in English LiteratureⅢ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	内丸　公平			

●科目の主題

ウィリアム・シェイクスピアの喜劇　A Midsummer Night's Dream

●到達目標

ウィリアム・シェイクスピアの喜劇、A Midsummer Night's Dreamを精読し、学生各自の視点から研究考察する。

●授業内容・授業計画

さまざまな観点から、ウィリアム・シェイクスピアの喜劇、A Midsummer Night's Dreamを精読する。第1回 A Midsummer Night's Dreamの精読(1) シェイクスピアの経歴
第2回 A Midsummer Night's Dreamの精読(2) シェイクスピア時代の英語の特色
第3回 A Midsummer Night's Dreamの精読(3) 本作品のテキストと参考辞書
第4回 A Midsummer Night's Dreamの精読(4) ギリシャ・ローマ神話との関係
第5回 A Midsummer Night's Dreamの精読(5) 祈願文、命令文、倒置文
第6回 A Midsummer Night's Dreamの精読(6) 誓言、慣用句
第7回 A Midsummer Night's Dreamの精読(7) 特殊な関係代名詞
第8回 A Midsummer Night's Dreamの精読(8) 異常出産の観点から見た本作品
第9回 A Midsummer Night's Dreamの精読(9) 当時の修辞法と本作品の関係
第10回 A Midsummer Night's Dreamの精読(10) 英国妖精伝承
第11回 A Midsummer Night's Dreamの精読(11) 本作品の初演の状況
第12回 A Midsummer Night's Dreamの精読(12) ピーター・ブルックの上演法
第13回 A Midsummer Night's Dreamの精読(13) ヤン・コットの見方
第14回 A Midsummer Night's Dreamの精読(14) ジェンダーから見た本作品
第15回 レポート相談日

●事前・事後学習の内容

授業までに教材の当該箇所を辞書等を用いて一通り読んでおくこと。また、学習内容を理解し、身に着けるためには、授業内容を確認し、自分なりに考えてみることが重要である。そのため、各授業の前後にそれぞれ2時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

平常点とレポート

●受講生へのコメント

しっかり予習すること

●参考文献・教材

William Shakespeare, A Midsummer Night's Dream (Arden Shakespeare Third Series), ed.by Sukanta Chaudhuri (Bloomsbury Arden, 2017)

授業科目名	科目NO.	LCENG2506	授業コード	LM11060010
英文学研究演習3 Advanced Studies and Seminar in English Literature 3			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	内丸　公平			

●科目の主題

オリバー・ゴールドスミスの喜劇、She Stoops to Conquer

●到達目標

She Stoops to Conquerの機知を理解する。

●授業内容・授業計画

"さまざまな観点に注意しながら、She Stoops to Conquerを精読する。

第1回 She Stoops to Conquerの精読(1) オリバー・ゴールドスミスの経歴
第2回 She Stoops to Conquerの精読(2) 18世紀の英語
第3回 She Stoops to Conquerの精読(3) 冒瀆語の使用
第4回 She Stoops to Conquerの精読(4) 地方領主階級の意識
第5回 She Stoops to Conquerの精読(5) ロンドン紳士階級の意識
第6回 She Stoops to Conquerの精読(6) 18世紀イギリスにおける結婚
第7回 She Stoops to Conquerの精読(7) 18世紀イギリスの財産相続における後見人
第8回 She Stoops to Conquerの精読(8) 本作品における機知
第9回 She Stoops to Conquerの精読(9) マーロウの内気さの意味
第10回 She Stoops to Conquerの精読(10) ジェンダーから見た本作品
第11回 She Stoops to Conquerの精読(11) 感傷喜劇の風刺としての本作品
第12回 She Stoops to Conquerの精読(12) 観客と登場人物の状況認識の相違から生じる笑い
第13回 She Stoops to Conquerの精読(13) 本作品の上演史
第14回 She Stoops to Conquerの精読(14) 本作品の先行研究
第15回　レポート相談日

●事前・事後学習の内容

授業までに教材の当該箇所を辞書等を用いて一通り読んでおくこと。また、学習内容を理解し、身に着けるためには、自分が解釈できず、教員によって解釈法を教わった箇所を、授業後に確認することが重要である。そのため、各授業の前後にそれぞれ2時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

平常点とレポート

●受講生へのコメント

きちんと予習に努めること。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCENG2507	授業コード	LM11070010
米文学研究 Advanced Studies in American Literature			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 古賀　哲男			

●科目の主題

［主題］ 米文学研究上の主要なテーマ（特に現代文学論・詩・批評）。ただし、本年度は昨年度に引き続き、文学史の新たなる構築例（A New Literary History of America [2007] eds. Greil Marcus Werner Sollors）を研究する。

●到達目標

［目標］ 米文学について主要な知識を教授し、受講生が博士課程前期を修了するのに適切な助言等を行う。

●授業内容・授業計画

[授業内容]

主として、講義形式により、テーマについての主要な解説を行うと同時に、演習計式でテーマを議論し、試験やレポート等で受講生のテーマについての理解を確認する。

第1回：イントロダクション：米文学研究とは何か
第2回：米文学研究テーマ1（1507: The name “America” appears on a map）
第3回：米文学研究テーマ2（1521, August 13: Mexico in America）
第4回：米文学研究テーマ3（1536, July 24: Alvar N??ez Cabeza de Vaca）
第5回：米文学研究テーマ4（1585: “Counterfeited according to the truth”）
第6回：米文学研究テーマ5（1607: Fear and love in the Virginia colony）
第7回：米文学研究テーマ6（1630: A city upon a hill）
第8回：米文学研究テーマ7（1643: A nearer neighbor to the Indians）
第9回：米文学研究テーマ8（1666, July 10: Anne Bradstreet）
第10回：米文学研究テーマ9（1670: The American jeremiad）
第11回：米文学研究テーマ10（1670: The stamp of God’s image）
第12回：米文学研究テーマ11（1673: The Jesuit relations）
第13回：米文学研究テーマ12（1683: Francis Daniel Pastorius）
第14回：米文学研究テーマ13（1692: The Salem witchcraft trials）

●事前・事後学習の内容

授業前は配布資料の該当部分について入念に下調べをする。授業後はレポート作成に向けて授業内容を確認する。

●評価方法

最終成績はレポート試験とするが、授業内における口頭発表も参考とする。

●受講生へのコメント

専門的に米文学を研究する以外に、ひろく文学・文化研究の基礎を学ぶつもりで受講されたい。

●参考文献・教材

主としてプリントによる。参考文献については授業中に指示。

授業科目名	科目NO.	LCENG2508	授業コード	LM11080010
米文学研究演習 Advanced Studies and Seminar in American Literature			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 古賀　哲男			

●科目の主題

［主題］　米文学研究上の主要なテーマを主題とする。ただし、本年度は昨年度に引き続き、文学史の新たなる構築例（A New Literary History of America [2007] eds. Greil Marcus and Werner Sollors）を研究する。

●到達目標

［目標］　米文学について主要なテーマを理解し、受講生が博士前期課程修了にふさわしい英語読解力を修得することができるようになる。

●授業内容・授業計画

[授業内容]

主として演習形式により、各テーマについて主要な解説を行い、試験やレポート等で受講生のテーマについての理解を確認する。

第1回：イントロダクション：米文学研究を発展させるために
第2回：米文学研究テーマ1（1693 1694, March 4: Edward Taylor）
第3回：米文学研究テーマ2（1700: Samuel Sewall, The Selling of Joseph ）
第4回：米文学研究テーマ3（1722: Benjamin Franklin, The Silence Dogood Letters）
第5回：米文学研究テーマ4（1740: The Great Awakening）
第6回：米文学研究テーマ5（Late 1740s; 1814, September 13 14: Two national anthems）
第7回：米文学研究テーマ6（1765, December 23: Michel-Guillaume Jean de Cr vecoeur）
第8回：米文学研究テーマ7（1773, September: Phillis Wheatley）
第9回：米文学研究テーマ8（1776: The Declaration of Independence）
第10回：米文学研究テーマ9（1784, June: Charles Willson Peale）
第11回：文学研究テーマ10（1787: James Madison, Notes of the Debates in the Federal Convention ）
第12回：米文学研究テーマ11（1787 1790: John Adams, Discourses on Davila ）
第13回：米文学研究テーマ12（1791: Philip Freneau and The National Gazette）
第14回：米文学研究テーマ13（1796: Washington's farewell address）

●事前・事後学習の内容

授業前には配布資料を入念に下調べをする。授業後はレポート作成に向けて授業内容を確認する。

●評価方法

英語読解力については授業内発表および試験によって評価し、テーマ理解についてはレポートによって評価する。
授業内発表50%　レポート25%　試験25%
総合点の6割以上の成績を単位取得の条件とする。

●受講生へのコメント

専門的に米文学を研究する以外に、ひろく文学・文化研究の基礎を学ぶつもりで受講されたい。

●参考文献・教材

主としてプリントによる。参考文献については授業中に指示。

授業科目名	科目NO.	LCENG2509	授業コード	LM11090010	
英米文化学研究 Advanced Studies in English and American Culture				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	Ian M RICHARDS				

●科目の主題

To improve students' understanding of the themes and styles of classic British and American fiction

●到達目標

Students will be given prints to read each week.

●授業内容・授業計画

Students will be given a weekly reading assignment. There will be a written test on the assignment in class. The remainder of the class will be used for discussion of topics related to the reading assignment.

第1回 Introduction
第2回 Short Story 1
第3回 Short Story 2
第4回 Short Story 3
第5回 Short Story 4
第6回 Short Story 5
第7回 Short Story 6
第8回 Short Story 7
第9回 Short Story 8
第10回 Short Story 9
第11回 Short Story 10
第12回 Short Story 11
第13回 Short Story 12
第14回 Review Test

●事前・事後学習の内容

You will need to bring a dictionary and writing materials to classes.

●評価方法

Attendance. Weekly written tests.

●受講生へのコメント

Students should prepare the reading assignments carefully before class.??In class students will be required to speak in detail on their reading assignments.

●参考文献・教材

プリント

授業科目名	科目NO.	LCENG2510	授業コード	LM11100010
英米文化学研究演習 Advanced Studies and Seminar in English and American Culture			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	Ian M RICHARDS			

●科目の主題

To improve students' understanding of the themes and styles of classic British and American fiction.

●到達目標

Students will be given prints to read each week.

●授業内容・授業計画

Students will receive a novel extract as a reading assignment each week. There will be a weekly written test and the remainder of the class will be used for discussion of topics related to the reading assignment.

第1回 Introduction
第2回 Novel Extract 1
第3回 Novel Extract 2
第4回 Novel Extract 3
第5回 Novel Extract 4
第6回 Novel Extract 5
第7回 Novel Extract 6
第8回 Novel Extract 7
第9回 Novel Extract 8
第10回 Novel Extract 9
第11回 Novel Extract 10
第12回 Novel Extract 11
第13回 Novel Extract 12
第14回 Review Test

●事前・事後学習の内容

You will need to bring a dictionary and writing materials to classes.

●評価方法

Attendance. Weekly tests.

●受講生へのコメント

Students should prepare the reading assignments carefully before class. Regular attendance is essential so as not to fall behind.??In class students will be required to speak in detail on their reading assignments.

●参考文献・教材

プリント

授業科目名	科目NO.	LCENG2511	授業コード	LM11110010
英語学研究 I Advanced Studies in English Linguistics I			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 豊田　純一			

●科目の主題

認知言語学の基礎を通して、英語の構造や使用を考察する。

●到達目標

英文法における基礎・多様性を認知を通して学び、文学などの言語を使った文化的活動を理解する基礎を習得することを目標とする。

●授業内容・授業計画

毎週特定のテーマを選び、まず重要事項を理解し、その内容に関連する例などを考察していく。

第1回 Introduction
第2回 Basic concepts（1）construal, perspective, foregrounding
第3回 Basic concepts（2）metaphor, frame
第4回 Space
第5回 Extension from spatial meanings
第6回 Radial categories
第7回 Constructions
第8回 Mental spaces
第9回 Historical changes
第10回 Count and mass nouns
第11回 Perfective and imperfective aspect
第12回 Causation and agency
第13回 Creativity and nature of meaning（1）Literature and cognitive linguistics
第14回 Creativity and nature of meaning（2）The Demon Lover by Elizabeth Bowen
第15回 Summary

●事前・事後学習の内容

教科書で扱う部分を授業の前に目を通しておくこと。さらに、普段から読んだり耳にする英語に対して、授業で扱ったことがどのようにあてはまるかを考えるようにできればさらに望ましい。

●評価方法

試験・レポート（60%）、平常点（40%）

●受講生へのコメント

出席率が70%に満たないものは、単位の対象外とする。出席点はないので、注意すること。
15分以上遅刻したものは欠席とみなすので、気を付けること。
試験・レポートは定期的にあるので、授業中の指示に従うこと。

●参考文献・教材

授業中に随時指示しする。

授業科目名	科目NO.	LCENG2512	授業コード	LM11120010	
英語学研究演習1 Advanced Studies and Seminar in English Linguistics 1				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	豊田　純一				

●科目の主題

Cognitive poeticsを通して、言語学と文学の接点があり、それがどの様なものなのかを、購読を通して知る。

●到達目標

文学をひとつの言語活動と捉え、それを認知言語学的視点から考察し、言語学と文学の密接な関係に慣れることを目標とする。

●授業内容・授業計画

毎週、特定の項目を選び、講読を通し内容を確認しながら、英語はどのような言語かを考えていく。

第1回 Figure and ground（1）視覚・聴覚における情報処理に関して
第2回 Figure and ground（2）図と地の入れ替わりに関して
第3回 Figure and ground（3）例外があるかないかについて
第4回 Figure and ground（4）文学作品の展開における図と地
第5回 Summary
第6回 Prototype（1）各自の「普通」について
第7回 Prototype（2）育成環境とプロトタイプ
第8回 Prototype（3）Milka chocolateと紫の牛について
第9回 Prototype（4）海外文学とプロトタイプ
第10回 Summary
第11回 Metaphor（1）比喩のない世界
第12回 Metaphor（2）文法と比喩
第13回 Metaphor（3）比喩の普遍性と例外
第14回 Metaphor（4）英語における比喩
第15回 Summary

●事前・事後学習の内容

講読箇所に必ず目を通しておくこと。さらに、普段から読んだり耳にする英語に対して、授業で扱ったことがどのようにあてはまるかを考えるようにできればなお望ましい。

●評価方法

試験・レポート（60%）、平常点（40%）

●受講生へのコメント

出席率が70%に満たないものは、単位の対象外とする。出席点はないので、注意すること。
15分以上遅刻したものは欠席とみなすので、気を付けること。
試験・レポートは定期的にあるので、授業中の指示に従うこと。

●参考文献・教材

授業中に随時指示します。

授業科目名	科目NO.	LCENG2515	授業コード	LM11140010
英米言語文化論 Studies in English and American Language and Culture			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	渡邊　克昭			

●科目の主題

楽園に死す―ドン・デリーロとアメリカ的想像力

●到達目標

本集中講義では、ポストモダン・アメリカ文学に親しむとともに、その諸相を具体的に英文のテクスト分析を通じて多角的に検証していきます。

本年度は、現代アメリカ文学の巨匠、ドン・デリーロに焦点を絞り、彼が楽園に埋もれた〈死〉のアポリアとどのように向き合い、そこからいかなるテクストを紡いできたか、〈死〉をめぐるアメリカ的想像力のしなやかな応答を、メディアとの関わりを中心に浮き彫りにします。

●授業内容・授業計画

第1回：イントロダクション―ドン・デリーロ文学入門
第I部　デリーロと「スペクタクルの日常」
第2回：広告の詩学/死学―差異と反復の『アメリカーナ』
第3回：〈死〉とメディアが交わるところ―ノイズから『ホワイト・ノイズ』へ
第4回：シミュラークルの暗殺―『リブラ』の「亡霊」、オズワルド
第5回：内破する未来へようこそ―9.11・『マオII』・「コークII」
第II部　逆光のアメリカン・サブライム
第6回　廃物のアウラと世紀末―封じ込められざる冷戦の『アンダーワールド』
第7回　蘇る標的―「撃つ／写す(シューティング)」の『アンダーワールド』
第8回　デリーロ文学とメディア（BBC ドキュメンタリー視聴）
第9回　敗北の「鬼(イット)」を抱きしめて―『アンダーワールド』における名づけのアポリア第III部〈死〉の時間、時間の〈死〉
第10回　喪の身体―『ボディ・アーティスト』における時と消滅の技法
第11回「崇高」という病―「享楽」の『コズモポリス』横断
第12回　9.11と「灰」のエクリチュール―『フォーリング・マン』における“nots”の亡霊第
13回　時の砂漠―惑星思考の『ポイント・オメガ』
第14回　囁き続ける水滴　『ゼロK』における「生命の保守」
第15回　試験

●事前・事後学習の内容

受講生は、配布されたプリントを必ず授業前に通読し、疑問点、コメントをいくつか用意して授業に臨んでください。授業後は、これまで学習した内容との関係において、いかに新しい知見が得られたか、再度学習の点検を行うことが求められます。疑問点があれば受講生がいつでも授業において質問し、その内容を適宜、授業にフィードバックし、クラスで共有する体制を整えたいと思っています。

●評価方法

成績評価：授業での質疑応答、コメントシート、最終試験を総合的に勘案し、評価を行います。

評価基準：現代アメリカ文学についての知識を深めるとともに、講義を糧にしていかに視野を広げ、思考を深めることができたかを評価基準とします。

●受講生へのコメント

随時コメントシートを提出してもらい、その内容を授業に随時フィードバックすることにより、インタラクティヴに講義を組み立てていきます。ざっくばらんに受講生と語り、楽しく授業を進めたいので、常に問題意識をもって授業に臨んでください。活発な質

疑応答を通じて、毎回新たな発見があるクリエイティヴな授業を展開できれば幸いです。

●参考文献・教材

プリント配布

参考書：渡邉克昭『楽園に死す--アメリカ的想像力と〈死〉のアポリア』（大阪大学出版会、2016年）

授業科目名	科目NO.	LCENG2516	授業コード	LM11150010
英語英米文学総合研究 I Comprehensive Studies in English and American Language and Literature I			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 田中　孝信／内丸　公平／古賀　哲男／豊田　純一 ／Ian　M　RICHARDS			

●科目の主題

英語圏の文学・文化・言語に関する各種研究方法の概説や研究資料の扱い方など。

●到達目標

英語圏の文学・文化・言語に関する各種研究方法の概説や研究資料の扱い方など様々な観点からの講義やそれに基づく討論を通して、受講生が総合的見地に立った研究が行なえるように、その基本的姿勢を習得させることを目的とする。

●授業内容・授業計画

担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマ(「イギリス文学・文化における〈他者〉の諸相」「イギリス文学のアダプテーション」「アメリカ文学・文化における前衛性」「英語の文法的特異性」"The Internationalization of Literature in English")を取り上げて講じる。

●事前・事後学習の内容

授業までに、指定された学術論文等の教材の大要を把握し、それをハンドアウトを用いて発表できるように準備しておくこと。授業後は、教員や他の受講生の読みと比較して自分の読解が不十分だった点を整理し、再読することで教材の論点をより明確にしなければならない。そのためには、各授業の前後にそれぞれ2時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

研究報告・平常点。

●受講生へのコメント

積極的に参加し、自分自身の明確な問題意識を持つように希望する。

●参考文献・教材

適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LCENG2517	授業コード	LM11160010
英語英米文学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in English and American Language and Literature Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 田中　孝信／内丸　公平／古賀　哲男／豊田　純一 ／Ian　M　RICHARDS			

●科目の主題

英語圏の文学・文化・言語に関する個別のテーマを巡る講義や討論。

●到達目標

英語圏の文学・文化・言語に関する個別のテーマを巡る講義や討論を通して、受講生に修士論文作成の方向性や自らの研究の位置づけを明確化させ、考察を深めさせる。

●授業内容・授業計画

担当教員が個別のテーマ(「ヴィクトリア朝小説と社会」「グローバル・シェイクスピアの諸相」「黒人詩と文化的背景」「言語の歴史的変化と社会的変動」"The Invention of Literature in America and New Zealand")を取り上げて論じる。

●事前・事後学習の内容

授業までに、指定された学術論文等の教材の大要を把握し、それをハンドアウトを用いて発表できるように準備しておくこと。同時に、関連文献にも目を向けることで、その教材の理解をより深くすることが求められる。授業後は、教員や他の受講生の読みと比較して自分の読解が不十分だった点を整理した上で再読し、教材の論点をより明確にしつつ、自分の考えを述べられるようにならなければならない。そのためには、各授業の前後にそれぞれ2時間程度の予習・復習を行うことが望ましい。

●評価方法

研究報告・平常点。

●受講生へのコメント

積極的に参加し、自分自身の明確な問題意識を持つように希望する。

●参考文献・教材

適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LCENG3601	授業コード	LM11170010
英語英米文学研究指導Ⅰ Supervision of MA Thesis in English and American Language and Literature Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 田中　孝信／豊田　純一			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「英語英米文学研究指導Ⅰ」（前期）、「英語英米文学研究指導Ⅱ」（後期）の指導によって完成させる。

前期の「英語英米文学研究指導Ⅰ」では、1年次までの学修に基づき、修士論文の執筆計画を立て、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文執筆計画を立て実施する
(2)問題意識を整理し、研究課題の学術的意義を提示する
(3)研究目的に応じた適確な課題を設定する
(4)研究課題に応じた適切な研究方法を計画する
(5)研究課題に応じた先行研究の読み込みを行う
(6)研究課題に応じた調査結果、文献資料を蓄積する
(7)修士論文研究に関わる研究倫理について考える

●授業内容・授業計画

第1回　オリエンテーション　修士論文とは何か(確認)　英語英米文学の方法論(確認)　修士論文研究・執筆計画について修士論文の評価規準・基準について
第2回　修士論文構想発表会(連続4コマ)
第3回　　テーマに関する問題意識の整理
第4回　　予想される(期待している)結論
第5回　　研究方法の目処　同学年他学年の学生、複数の教員との質疑応答から学ぶ
第6回　研究計画に即して研究倫理を考える
第7回　先行研究の読み込み
第8回「先行研究の整理」の意義と方法
第9回　修士論文の章立て
第10回　調査、文献分析の計画と結果の予想
第11回　修士論文中間発表会　―章立ての仮決定のために―(連続4コマ)
第12回　　問題意識の提示　論証しようとしていること(仮の結論)
第13回　　論証のための方法とその目処
第14回　　章立て　これからの課題
第15回　修士論文中間発表会のふりかえり

●事前・事後学習の内容

第1回　修士論文計画を立てて提出する。修士論文構想発表会の準備を行い、レジュメを作成する。
第2回　修士論文構想発表会の議論を踏まえ、自分の修士論構想を練り直す。
第3回　修士論文構想発表会の議論を踏まえ、自分の修士論構想を練り直す。
第4回　修士論文構想発表会の議論を踏まえ、自分の修士論構想を練り直す。
第5回　修士論文構想発表会の議論を踏まえ、自分の修士論構想を練り直す。
第6回　自分の研究計画に即して研究倫理を考え、研究倫理の観点から研究計画を練り上げる。
第7回　研究課題に応じた先行研究の読み込みを計画し、読み込んだ結果を発表する。
第8回　自分の修士論文に必要な「先行研究の整理」をおこなってみる。
第9回　修士論文の章立てを考える。
第10回　修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。
第11回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論文研究・執筆計画を練り直す。
第12回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論文研究・執筆計画を練り直す。

第13回 修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論文研究・執筆計画を練り直す。
第14回 修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論文研究・執筆計画を練り直す。
第15回 7月以降の修士論文執筆計画を立てる。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の修士課程の集大成である。履修モデルとしての英語英米文学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「英語英米文学研究指導Ⅰ」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、修士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

教科書:特に指定しない。
参考文献:特に指定しない。

授業科目名	科目NO.	LCENG3602	授業コード	LM11180010
英語英米文学研究指導Ⅱ Supervision of MA Thesis in English and American Language and LiteratureⅡ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 田中　孝信／豊田　純一			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「英語英米文学研究指導Ⅰ」（前期）、「英語英米文学研究指導Ⅱ」（後期）の指導によって完成させる。

後期の「英語英米文学研究指導Ⅱ」では、修士論文の仕上げに向けて、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文の評価規準と基準を知る。
(2)執筆途上において、その時点の自分の修士論文を評価基準に準拠して点検する。
(3)点検の結果を踏まえ、修士論文計画・執筆計画を修正しながら修士論文を完成させる。

●授業内容・授業計画

第1回　修士論文の進捗状況の報告
第2回　修士論文の評価基準の確認
第3回　修士論文中間発表会（4コマ連続）
第4回　完成に向けての執筆方針の確認
第5回　（研究方法論、課題設定、先行研究の整理章立て等）
第6回　完成に向けての研究・執筆計画
第7回　修士論文中間発表会の振り返り
第8回　問題意識と学術的意義を扱う部分についての点検
第9回　研究目的に応じた課題設定を扱う部分について点検
第10回　研究手法の説明を扱う部分についての点検
第11回　先行研究を扱う部分についての点検
第12回　調査結果、文献分析を扱う部分についての点検
第13回　論理の組み立てや一貫性に関する点検
第14回　学術論文としての表現、表記法等に関する点検
第15回　研究倫理の側面からの修士論文の点検　修士論文作成全体を通しての振り返り

●事前・事後学習の内容

第1回　修士論文研究進捗状況の報告レジュメ提出。
第2回　修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。
第3回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論研究・執筆計画を練り直す。
第4回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論研究・執筆計画を練り直す。
第5回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論研究・執筆計画を練り直す。
第6回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論研究・執筆計画を練り直す。
第7回　完成までの期間の研究・執筆計画を立てる。
第8回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第9回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第10回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第11回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第12回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第13回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第14回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第15回　振り返りのための発表の準備をする。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

「英語英米文学研究指導Ⅱ」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質が評

価されるのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「英語英米文学研究指導Ⅱ」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の学士課程の集大成である。履修モデルとしての英語英米文学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「英語英米文学研究指導Ⅱ」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、学士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

教科書：特に指定しない。

参考文献：特に指定しない。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000110	
修士論文（英文） Master's Thesis（英文）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	田中　孝信／豊田　純一				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポシシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「英語英米文学研究指導Ⅰ」「英語英米文学研究指導Ⅱ」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1)修士論文は、英語英米文学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2)(評価基準)修士論文は以下の各項目について、英語英米文学分野における十分な水準を満たさなければならない。

(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、英語英米文学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、英語英米文学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、英語英米文学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3)(論文の体裁)修士論文は、論を展開する上で、英語英米文学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

※各回の授業内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「英語英米文学研究指導Ⅰ」「英語英米文学研究指導Ⅱ」のシラバスを参照すること。

●事前・事後学習の内容

※各回の事前・事後学習内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「英語英米文学研究指導Ⅰ」「英語英米文学研究指導Ⅱ」のシラバスを参照すること。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「英語英米文学研究指導Ⅰ」は修士論文を提出する年度の前期に、「英語英米文学研究指導Ⅱ」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。履修モデルとしてのえいご研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

教科書:特に指定しない。

参考文献:各自が参考文献一覧を作成することになる。

授業科目名	科目NO.	LCDFX2501	授業コード	LM13210010
ドイツ語フランス語圏言語文化研究Ⅰ Advanced Studies in German and Francophone Language and Culture Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 講義／演習	担当教員名 長谷川　健一			

●科目の主題

水（川・湖・海）ないしは水の精をモティーフとしたドイツ語圏の伝説・文学作品をとりあげ、多角的な視点から論じ、受講生とともに考察する。

●到達目標

授業で取り上げる伝説や作品の分析・解釈を通じて、ドイツ語圏の歴史・文化・社会の特質について、適宜フランス語圏のそれと比較しつつ分析し、理解を深める。

●授業内容・授業計画

報告の内容と順番については初回の授業で決める。内容は以下の通りとなる。

第1回　イントロダクション
第2回　ライン河とドナウ河:『ニーベルンゲンの歌』(1)
第3回　ライン河とドナウ河:『ニーベルンゲンの歌』(2)
第4回　ライン河とドナウ河:『ニーベルンゲンの歌』(3)
第5回　水の精の伝説(1)
第6回　水の精の伝説(2)
第7回　フケーの『ウンディーネ』(1)
第8回　フケーの『ウンディーネ』(2)
第9回　ウンディーネ・モティーフの変遷
第10回　ハイネとローレライ・モティーフ
第10回　ブレンターノとローレライ・モティーフ
第11回　アイヒェンドルフとローレライ・モティーフ
第12回　シュトルム作品における水のモティーフ(1)
第13回　シュトルム作品における水のモティーフ(2)
第14回　発表と議論
第15回　総括

●事前・事後学習の内容

事前学習:あらかじめ読んでおくべき作品や資料を授業の最後に指示する。
事後学習:配布資料を読み直し、授業の内容を復習しておくこと。

●評価方法

平常点(70%:発表、授業への取り組み姿勢)とレポート(30%)による総合評価となる。ただし、レポートが未提出の場合、平常点はカウントされない。また、4回以上欠席した者は評価の対象としない。

●受講生へのコメント

授業で取り上げた作品や参考文献を積極的に読むこと。

●参考文献・教材

資料を配布する。参考文献は、授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCDFD2501	授業コード	LM13230010
ドイツ語圏文学研究Ⅰ Advanced Studies in German Literature Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 講義／演習	担当教員名 髙井　絹子			

●科目の主題

戦後ドイツ文学を牽引した文学集団「47年グループ」に関するドイツ語で書かれたテクストを読み、当時のドイツ文学を取り巻く諸状況について知見を増やします。

●到達目標

中・上級程度のドイツ語で書かれた評論テクストを正確に読み、要点をつかむことができる。テキストを音読したのち、自然な日本語に訳すことができる。戦後ドイツ語圏文学を取り巻く複雑な社会状況について理解し、作品解釈に役立てることができる。

●授業内容・授業計画

ドイツ語テクストを精読しつつ、そこに登場する作家たちの作品も適宜紹介します。

第1回 導入
第2回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Einleitung 1
第3回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Einleitung 2
第4回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Einleitung 3
第5回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第6回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第7回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第8回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第9回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第10回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第11回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第12回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第13回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第14回 Hermut Böttiger: Die Gruppe 47.　Kapital 6 Fräulein Kafka
第15回 試験とまとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習：指定した範囲の日本語訳を作る。
事後学習：授業中指示した関連事項について理解を深める。

●評価方法

授業に対する取り組みの姿勢（50%）、試験（50%）で評価します。

●受講生へのコメント

事前に指定された範囲は必ず予習してきてください。

●参考文献・教材

授業中にプリントを配布します。

授業科目名	科目NO.	LCDFD2502	授業コード	LM13240010
ドイツ語圏文学研究演習1 Advanced Studies and Seminar in German Literature 1			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	髙井　絹子			

●科目の主題

前期科目ドイツ語圏文学研究Ｉで得た知見をもとに、「47年グループ」にかかわりの深い作家I. Bachmannの作品を読み、解釈を試みる。

●到達目標

作品の書かれた状況を理解した上でテクストを読み、作家の意図するところを汲み取ることができる。間テクスト性の観点から、複数の作品を比較検討し、暗示やほのめかしを解釈することができる。

●授業内容・授業計画

文学テクストを精読します。そのあと作品論を読みます。

第 1 回 導入:作家紹介
第 2 回 I. Bachmann: *Alles* S.138,139
第 3 回 I. Bachmann: *Alles* S.140,141
第 4 回 I. Bachmann: *Alles* S.142,143
第 5 回 I. Bachmann:*Alles* S.144,145
第 6 回 I. Bachmann:*Alles* S.146,147
第 7 回 I. Bachmann: *Alles* S.148,149
第 8 回 I. Bachmann: *Alles* S.150,151
第 9 回 I. Bachmann: *Alles* S.152,153
第10回 I. Bachmann: *Alles* S.154,155
第11回 I. Bachmann:*Alles* S.156,157,158
第12回 作家・作品論講読 1
第13回 作家・作品論講読 2
第14回 作家・作品論講読 3
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習:指定した範囲の日本語訳を作る。
事後学習:授業中指示した関連事項を調べ、テキストの理解を深める。

●評価方法

授業への取り組み(50%、)試験(50%)による総合評価です。

●受講生へのコメント

事前に指定した範囲は必ず予習してきてください。

●参考文献・教材

授業中に指示します。

授業科目名	科目NO.	LCDFD2503	授業コード	LM13250010
ドイツ語圏文学研究Ⅱ Advanced Studies in German Literature Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 長谷川　健一			

●科目の主題

ドイツ語圏の近代およびそれ以前の文学について研究する。

●到達目標

ドイツ語のテクスト並びに研究文献の精読を通じて、18世紀ドイツ文学（啓蒙主義からシュトゥルム・ウント・ドラングまで）について理解を深める。

●授業内容・授業計画

18世紀ドイツに起こったシュトゥルム・ウント・ドラングと呼ばれる文学運動の特徴とその影響について、Johann Wolfgang von Goethe（1749-1832）の有名な書簡体小説Die Leiden des jungen Werthersの「1774年版」とその後修正が加えられた「1787年版」を手がかりに考察する。前期はとくに第1巻の部分を対象とする。

最初にシュトゥルム・ウント・ドラングの文学史的位置づけならびにその全体像について、研究文献を参照しつつ確認・検討した後、Die Leiden des jungen Werthersにおける①登場人物の描写、②恋愛と自殺をめぐる議論、③社会批判、④文学作品モティーフに関連した部分を精読し、2つの版を比較・検討しつつ議論する。受講生には、先行研究についての報告も求める。

第1回　イントロダクション：18世紀のドイツ文学
第2回　シュトゥルム・ウント・ドラングについて（1）
第3回　シュトゥルム・ウント・ドラングについて（2）
第4回　Die Leiden des jungen Werthersとその成立経緯
第5回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：登場人物の描写（1）
第6回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：登場人物の描写（2）
第7回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：登場人物の描写（3）
第8回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：恋愛と自殺（1）
第9回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：恋愛と自殺（2）
第10回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：恋愛と自殺（3）
第11回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：社会批判（1）
第12回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：社会批判（2）
第13回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：文学作品モティーフ（1）
第14回　Die Leiden des jungen Werthers（第1巻）の精読：文学作品モティーフ（2）
第15回　発表と総括

●事前・事後学習の内容

事前に指定した箇所を読み、訳を準備するとともに、概要をまとめておくこと。授業後は、紹介された文献を読み、関連するテーマについての理解を深めること。

●評価方法

平常点（60％：発表、報告、授業への取り組み姿勢）、レポート（40％）による総合評価となる。ただし、レポートが未提出の場合、平常点はカウントされない。

●受講生へのコメント

関連文献を積極的に読むこと。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

参考文献：Johann Wolfgang Goethe: Die Leiden des jungen Werthers. Erste Fassung von 1774. Textausgabe mit Kommentar und Materialien: Reclam XL　Text und Kontext. Stuttgart 2015.: Johann Wolfgang Goethe: Die Leiden des jungen Werthers: Studienausgabe. Paralleldruck der Fassungen von 1774 und 1787. Stuttgart 1999.

授業科目名	科目NO.	LCDFD2504	授業コード	LM13260010
ドイツ語圏文学研究演習2 Advanced Studies and Seminar in German Literature 2			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 長谷川　健一			

●科目の主題

ドイツ語圏の近代およびそれ以前の文学について研究する。

●到達目標

ドイツ語のテクスト並びに研究文献の精読を通じて、18世紀ドイツ文学（啓蒙主義からシュトゥルム・ウント・ドラングまで）について理解を深める。また、先行研究を踏まえて作品を分析・解釈することができる。

●授業内容・授業計画

前期のドイツ語圏文学研究Ⅱに引き続き、18世紀ドイツに起こったシュトゥルム・ウント・ドラングと呼ばれる文学運動の特徴とその影響について、Johann Wolfgang von Goethe（1749-1832）の有名な書簡体小説Die Leiden des jungen Werthersの「1774年版」とその後修正が加えられた「1787年版」を手がかりに考察する。後期はとくに第2巻と「編者より読者へ」の部分を対象とする。

最初にシュトゥルム・ウント・ドラングの研究状況について、個別事例に即して確認・検討した後、Die Leiden des jungen Werthersにおける①社会批判、②自殺に至る過程、③登場人物の描写、④文学作品モティーフに関連した部分を精読し、2つの版を比較・検討しつつ議論する。受講生には、先行研究についての報告も求める。

第1回　イントロダクション：前期の内容の復習
第2回　シュトゥルム・ウント・ドラング研究の状況（1）
第3回　シュトゥルム・ウント・ドラング研究の状況（2）
第4回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：社会批判（1）
第5回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：社会批判（2）
第6回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：自殺に至る過程（1）
第7回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：自殺に至る過程（2）
第8回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：自殺に至る過程（3）
第9回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：自殺に至る過程（4）
第10回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：登場人物の描写（1）
第11回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：登場人物の描写（2）
第12回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：登場人物の描写（3）
第13回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：文学作品モティーフ（1）
第14回　Die Leiden des jungen Werthersの精読：文学作品モティーフ（2）
第15回　発表と総括

●事前・事後学習の内容

事前に指定した箇所を読み、訳を準備するとともに、概要をまとめておくこと。授業後は、紹介された文献を読み、関連するテーマについての理解を深めること。

●評価方法

平常点（60％：発表、報告、授業への取り組み姿勢）、レポート（40％）による総合評価となる。ただし、レポートが未提出の場合、平常点はカウントされない。

●受講生へのコメント

関連文献を積極的に読むこと。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

参考文献：Johann Wolfgang Goethe: Die Leiden des jungen Werthers. Erste Fassung von 1774. Textausgabe mit Kommentar und Materialien: Reclam XL　Text und Kontext. Stuttgart 2015.: Johann Wolfgang Goethe: Die Leiden des jungen Werthers: Studienausgabe. Paralleldruck der Fassungen von 1774 und 1787. Stuttgart 1999.

授業科目名	科目NO.	LCDFD2505	授業コード	LM13270010
ドイツ語圏文化学研究 Advanced Studies in German Culture			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	長谷川　健一			

●科目の主題

18世紀のドイツ語圏における宗教と文学の関係について研究する。

●到達目標

1）文学テクストならびに関連する研究文献の精読を通じてドイツ語の読解力を磨く。
2）宗教と近代ドイツ文学の関係について理解を深める。

●授業内容・授業計画

17・18世紀ドイツ語圏における信仰刷新運動であるPietismusが近代ドイツ文学に与えた影響について、EnthusiasmusおよびSchwärmereiをめぐる同時代の議論を手がかりに考察する。前半はPietismusの概要を押さえたうえで、上記のキーワードとのかかわりについて、適宜研究文献を参照しつつ検討する。後半は、本考察の深化を図るべく、作家ユング＝シュティリング（Jung-Stilling 1740-1817）の3作品、すなわち自伝的小説（全6巻）の第1巻Henrich Stillings Jugend（1777）、第4巻Henrich Stillings h?usliches Leben（1789）ならびにTheobald oder Schw?rmer（1784/85）の関連部分を精読・分析し、18世紀ドイツ文学とPietismusの関係について考える。

第1回　イントロダクション
第2回　Pietismusについて：J. Spener とA.H.Francke
第3回　Pietismusについて：Der radikale Pietismus
第4回　Pietismusについて：ドイツ北西部のPietismus
第5回　EnthusiasmusおよびSchwärmereiについて(1)
第6回　EnthusiasmusおよびSchwärmereiについて(2)
第7回　Jung-Stilling: *Henrich Stillings Jugend*の精読と分析(1)
第8回　Jung-Stilling: *Henrich Stillings Jugend*の精読と分析(2)
第9回　Jung-Stilling: *Henrich Stillings Jugend*の精読と分析(3)
第10回　Jung-Stilling: *Henrich Stillings häusliches Leben*の精読と分析(1)
第11回　Jung-Stilling: *Henrich Stillings häusliches Leben*の精読と分析(2)
第12回　Jung-Stilling: *Henrich Stillings häusliches Leben*の精読と分析(3)
第13回　Jung-Stilling: *Theobald oder Schwärmer*の精読と分析(1)
第14回　Jung-Stilling: *Theobald oder Schwärmer*の精読と分析(2)
第15回　発表と総括

●事前・事後学習の内容

事前に指定した箇所を読み、訳を準備するとともに、概要をまとめておくこと。授業後は、紹介された文献を読み、関連するテーマについて理解を深めること。

●評価方法

平常点（70％：発表、報告、授業への取り組み姿勢）、レポート（30％）による総合評価となる。ただし、レポートが未提出の場合、平常点はカウントされない。

●受講生へのコメント

関連文献を積極的に読むこと。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

授業科目名	科目NO.	LCDFD2507	授業コード	LM12090010
ドイツ語学研究 Advanced Studies in German Linguistics			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	神竹　道士			

●科目の主題

ドイツ語をインド・ヨーロッパ語族の歴史的変遷のプロセスの中で捉え、ドイツ語という個別言語の体系化の流れを概観する。

●到達目標

個別の言語規則をより大きな言語体系の中に位置づけ、その歴史的変化の流れの中で言語規則が体系化され、同時に変遷していく過程を理論に則して理解することが本講義の目標である。

●授業内容・授業計画

本講義では、主に次の様な項目について取り上げる。

第1回　導入:ドイツ語の通時的研究
第2回　インド・ヨーロッパ語族
第3回　ゲルマン祖語とゲルマン諸語
第4回　第一次子音推移
第5回　第二次子音推移
第6回　音韻変化の規則性と類推形式
第7回　古高ドイツ語(750～1050年)
第8回　中高ドイツ語(1050～1350年)
第9回　初期新高ドイツ語(1350～1650年)
第10回　新高ドイツ語(1650～1950年)
第11回　現代ドイツ語(1950年～)
第12回　低地ドイツ語と高地ドイツ語
第13回　文法化と逸脱
第14回　規範と変種

●事前・事後学習の内容

事前学習:使用するテクストの下調べをする。
事後学習:授業で取り上げた項目について整理する。

●評価方法

テクストの読解力(70%)とテーマに関する理解度(30%)により評価する。

●受講生へのコメント

毎回必ず下調べをした上で授業に臨み、授業中は積極的に自分の意見を述べること。

●参考文献・教材

Augustin Speyer: Deutsche Sprachgeschichte. 2010.

授業科目名	科目NO.	LCDFF2501	授業コード	LM13290010
フランス語圏文学研究 Advanced Studies in Francophone Culture			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 原野　葉子			

●科目の主題

フランス語圏文学の古典的諸作品を経時的に取り上げ、原文の抜粋を精読する。高度なフランス語読解能力の錬成とともに、同時代の社会・歴史・思想・文化をめぐる総合的かつ立体的な知識の獲得を目指す。

●到達目標

高度なフランス語で書かれた文学テクスト(詩、小説、戯曲等)を理解できる。

個々の作品を取り巻く社会的・文化的背景、フランス語圏文学史、文学研究史、現代文学理論について概要を理解し、それについて議論できる。

●授業内容・授業計画

ルネサンス期～近現代にかけて、主要なフランス語圏文学作品の抜粋をフランス語で読む。また適宜、各受講生の関心のあるテーマについての発表とディスカッションを行う。

なお、取り上げる作家や内容については、参加者と協議の上、変更する場合もある。

1　オリエンテーション
2　モンテーニュ
3　パスカル
4　ラシーヌ
5　ルソー
6　ディドロ
7　スタンダール
8　フローベール
9　ランボー
10　プルースト
11　サルトル
12　コルテス
13　デュラス
14　マリーズ・コンデ
15　まとめ

●事前・事後学習の内容

テクストの予習、各作家についての事前調査、各自の発表準備に毎回2時間程度を充てること。

●評価方法

1)到達目標の達成度に基づいて評価を行う。

2)評価方法とその割合:授業への参加度(予習、討論)60%および発表40%。

3)単位取得の最低基準:

①5回以上欠席した場合、単位取得の資格を失う。

②到達目標に掲げた以下の2点を総合的に判断して、60%以上に達していること。

・高度なフランス語で書かれた文学テクスト(詩、小説、戯曲等)を理解できる。

・個々の作品を取り巻く社会的・文化的背景、フランス語圏文学史、文学研究史、現代文学理論について概要を理解し、それについて議論できる。

●受講生へのコメント

輪読形式で、しかも多くのテクストをどんどん読みすすめていきますので、必ず予習をしてきてください。重要なのは、まずしっかり辞書を引くこと、そしてフランス語の文法的な枠組みを正確につかまえたうえで訳文を組み立てることです。ざっくばらんに話し合いながら、原文ならではの面白さを一緒に味わっていきましょう。

●参考文献・教材

Nicole Blondeau, Fweeoudja Allouache, *Littérature progressive du Français : niveau avancé*, CLE international, 2005.　その他は授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCDFF2502	授業コード	LM13300010
フランス語圏文学研究演習 Advanced Studies and Seminar in Francophone Literature			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 原野　葉子			

●科目の主題

現代フランス語圏文学作品をとりあげ、特定のテーマに沿って深く考究することで、文学研究の基本姿勢と方法論を実践的に身に着ける。分析と討論を通じて文学テクストの多様な構成を精緻に解読するためのフランス語読解力および批判的思考法を養い、フランス語圏文学の思想的・文化的特質についての理解を深める。

今年度は20世紀後半のフランス人作家ジョルジュ・ペレックのテクストのなかから、おもに同名の映画台本をもとにした『エリス島物語：移民たちの彷徨と希望』*Récits d'Ellis Island : histoires d'errance et d'espoir*(1994)、エッセイ集『日常以下のもの』*L'Infra-ordinaire*1989)および『僕は生まれた』*Je suis né*(1990)を精読する。これらのいわば非虚構的な作品群を通じて、ユダヤ系の戦争孤児である作家が終生取り組み続けた「ホロコーストと（不可能な）記憶」、「日常と歴史／物語」といった問題系を照射する。

●到達目標

高度なフランス語で書かれた文学作品、歴史的資料および研究論文を読解し、それについて議論できる。

文学研究の基礎知識および基本的な方法論を身に着け、文学テクストに対してオリジナルな視点から分析を加えることができる。

現代フランス語圏文学を取り巻く思想的・文化的状況および主要な問題系を理解した上で、議論できる。

●授業内容・授業計画

テクストの抜粋を読み、『エリス島物語』については映画も鑑賞しながら、ディスカッション形式で考察を進めてゆく。

なお授業の具体的な進め方については、参加者の希望も取り入れながら決定する。

1　オリエンテーション：第二次世界大戦とフランス語圏の作家
2　『エリス島物語』読解と討論①
3　『エリス島物語』読解と討論②
4　『エリス島物語』読解と討論③
5　『エリス島物語』読解と討論④
6　『エリス島物語』読解と討論⑤
7　『日常以下のもの』読解と討論①
8　『日常以下のもの』読解と討論②
9　『日常以下のもの』読解と討論③
10　『日常以下のもの』読解と討論④
11　『僕は生まれた』読解と討論①
12　『僕は生まれた』読解と討論②
13　『僕は生まれた』読解と討論③
14　『僕は生まれた』読解と討論④
15　まとめ

●事前・事後学習の内容

テクストの予習、各作品および各テーマに関連した読書と考察の時間として毎回2時間程度をあててください。

●評価方法

1）到達目標の達成度に基づいて評価を行う。
2）評価方法とその割合：授業への参加度（予習、討論）60％および発表40％。
3）単位取得の最低基準：
①5回以上欠席した場合、単位取得の資格を失う。
②到達目標に掲げた以下の3点を総合的に判断して、60％以上に達していること。
・高度なフランス語で書かれた文学作品、歴史的資料および研究論文を読解し、それについて議論できる。
・文学研究の基礎知識および基本的な方法論を身に着け、文学テクストに対してオリジナルな視点から分析を加えることがで

きる。

・現代フランス語圏文学を取り巻く思想的・文化的状況および主要な問題系を理解した上で、議論できる。

●受講生へのコメント

事前に配布されるプリントを予習した上で出席してください。

●参考文献・教材

Georges Perec, *Récit d'Ellis island*, P.O.L, 2019.

Georges Perec, *L'infra-ordinaire ; je suis né ; Cantatrix Sopranica L.* Seuil, 1994.その他は授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCDFF2503	授業コード	LM13310010
フランス語圏文化学研究 Advanced Studies in Francophone Linguistics			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	白田　由樹			

●科目の主題

19世紀後半から20世紀転換期にかけてのパリを中心とする万国博覧会について扱った研究書や当時の報道資料に当たりながら、大衆消費社会の到来や差異化の欲求、ナショナリズムの台頭の中で、さまざまな異文化が影響または反発しあい、混交し、受容されていく経緯について考察する。

●到達目標

フランス語圏文化学の研究書や論文から研究の視点と方法論を学び取るとともに、必要に応じてフランス語または英語の一次資料を遡及して読むための力をつける。

●授業内容・授業計画

1851年のロンドン万博以降、欧米の各都市で開催された国際博覧会のうち、とくにパリで行われたものを取り上げながら、その背景にある社会状況や思想、文化事象の研究書を読み、研究の視点や方法について議論する。

各回の内容は以下のように予定している。ただし、順番やトピックスは変更される場合がある。

第1回 オリエンテーション：19世紀フランスと国際博覧会
第2回 1851年　ロンドン万博と各国への影響
第3回 第二帝政のフランスとサン＝シモン主義
第4回 1855年　第1回パリ万博とパリの都市改造
第5回1867年　第2回パリ万博とユートピア思想
第6回 アトラクションと異国趣味
第7回 1878年　第3回パリ万博と普仏戦争の影響
第8回 ジャポニスム：日本文化の解釈と受容
第9回 1889年　第4回パリ万博とエッフェル塔
第10回 国際市場・技術競争と国民国家アイデンティティ
第11回 1900年　第5回パリ万博とアール・ヌーヴォー
第12回「大衆消費社会のドリーム・ワールド」
第13回 19世紀末から20世紀初頭の植民地博覧会
第14回「他者」と近代的「国民文化」のポリティクス
第15回 レポート・総括

●事前・事後学習の内容

毎回必ず資料の下読みをしてくるとともに、必要に応じてその背景に関する参考資料にも目を通しておくこと。

●評価方法

授業への取り組み（70％）とレポート（30％）による。

●受講生へのコメント

19世紀末から20世紀転換期のフランス語圏文化に関する事象だけでなく、現代の日本でこうした研究主題を扱う意味を絶えず意識してください。

●参考文献・教材

授業で指示する。

授業科目名	科目NO.	LCDFF2504	授業コード	LM13320010
フランス語圏文化学研究演習 Advanced Studies and Seminar in Francophone Culture			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 白田　由樹			

●科目の主題

受講生各自のテーマに沿いながら、修士論文の執筆を視野に入れた基礎調査、文献の読解、先行研究の分析と報告の演習をおこなう。

●到達目標

各自の研究テーマに沿ってフランス語で書かれた先行研究や文献資料を読みこなす力、研究や論文の執筆に必要となる作法を身につける。

●授業内容・授業計画

先行研究や二次文献の収集と講読、それらの分析や検討をおこない、またそれを総合的に報告する実践をおこなう。

第1回 オリエンテーション、各自のテーマ紹介
第2回 フランス語資料の調査・検索ツール
第3回 基礎調査と文献リスト（先行研究等）、分野ごとの書式
第4回 文献の検討1:フランス語学・教育系
第5回 講読1:フランス語学系
第6回 講読2:フランス語教育系
第7回 文献の検討2:フランス文学・文化系
第8回 講読3:フランス文学系
第9回 講読4:フランス文化系
第10回 先行研究の分析・検討
第11回 報告1:フランス語学系
第12回 報告2:フランス語教育系
第13回 報告3:フランス文学系
第14回 報告4:フランス文化系
第15回 最終レポート・総括

●事前・事後学習の内容

毎回の課題準備（文献資料のリスト、テクストの入手、レジュメの作成、文献講読など）のほか、その回の課題のふり返りや修正を次回までにおこなうこと。

●評価方法

毎回の授業への参加と発表等の課題（70%）、最終レポート（30%）による。

●受講生へのコメント

情報収集や資料の検討、報告は大学以外の世界でも必要とされることが多くなっています。また、自分の専門だけでなく、他者の関心や研究内容を理解しようとする姿勢も大切です。そうした基本に立ち戻りつつ、それぞれの研究を進展させてください。

●参考文献・教材

授業の中で指示する。

授業科目名	科目NO.	LCDFF2505	授業コード	LM13090010
フランス語学研究 Advanced Studies in French Linguistics			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 福島　祥行			

●科目の主題

近代言語学者たちの足跡をたどりつつ、言語学研究の方法論と思想について考察するとともに、フランス言語学の方法論を学ぶ。

●到達目標

言語学の基礎的概念を身につけ、言語研究のよってたつ思想と方法論について深く思弁するなかで、人間存在についての思索方法を身につける。

●授業内容・授業計画

受講生とともに、言語研究者たちにかんする概説的なフランス語のテクストを読みつつ、その内容について考察し、各自の意見をのべてゆく。

第1回:イントロダクション
第2回:フェルディナン・ド・ソシュール
第3回:プラハ学派
第4回:ロマーン・ヤーコブソン
第5回:ルイ・イェルムスレウ
第6回:ギュスタヴ・ギヨーム
第7回:リュシアン・テニエール
第8回:レナード・ブルームフィールド
第9回:ノーム・チョムスキー
第10回:ミハイル・バフチン
第11回:ジョン・L・オースティン
第12回:ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン
第13回:ポール・グライス
第14回:ふりかえりとまとめ

●事前・事後学習の内容

事前に配布文章を読んでおくこと、および、事後のふりかえり等により、1回の授業あたり2時間の自習時間をとること。

●評価方法

ポートフォリオと自己評価、相互評価

●受講生へのコメント

言語に憑かれたひとびとの姿をとおして、言語そのもの、そして人間そのものについて思弁されたい。
また、受講生の関心にあわせて、テキストを変更することもある。

●参考文献・教材

■参考文献

ソシュール『一般言語学講義』岩波書店
ポティエ『一般言語学』岩波書店
レイコフ『認知意味論』紀伊國屋書店
チョムスキー『ミニマリスト・プログラム』翔泳社
ハートル『数詞と内部空間』勁草書房
グライス『論理と会話』勁草書房.

授業科目名	科目NO.	LCDFF2506	授業コード	LM13100010	
フランス語学研究演習 Advanced Studies and Seminar in French Linguistics				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	福島　祥行				

●科目の主題

近代言語学の歴史をたどりつつ、言語学の基礎を身につけるとともに、フランス言語学の方法論を学ぶ。

●到達目標

言語学の基礎的概念を身につけ、言語研究のよってたつ思想と方法論について深く思弁するなかで、人間存在についての思索方法を身につける。

●授業内容・授業計画

受講生とともに、言語学にかんする概説的なフランス語のテクストを読みつつ、その内容について考察し、各自の意見をのべてゆく。

第1回：イントロダクション
第2回：一般文法
第3回：歴史言語学・比較言語学
第4回：文献学
第5回：方言学・地理言語学
第6回：社会言語学
第7回：音声学
第8回：音韻論
第9回：語彙論
第10回：形態論
第11回：統辞論
第12回：意味論
第13回：語用論
第14回：ふりかえりとまとめ

●事前・事後学習の内容

事前に配布文章を読んでおくこと、および、事後のふりかえり等により、1回の授業あたり2時間の自習時間をとること。

●評価方法

ポートフォリオと自己評価、相互評価

●受講生へのコメント

言語学の諸相から、言語そのもの、そして人間そのものについて思弁されたい。
また、受講生の関心にあわせて、テキストを変更することもある。

●参考文献・教材

■参考文献

ソシュール『一般言語学講義』岩波書店
ポティエ『一般言語学』岩波書店
レイコフ『認知意味論』紀伊國屋書店
チョムスキー『ミニマリスト・プログラム』翔泳社
ハートル『数詞と内部空間』勁草書房
グライス『論理と会話』勁草書房

授業科目名	科目NO.	LCDFF2507	授業コード	LM13330010
フランス語圏言語文化論Ⅰ Higher Studies in Francophone Language and Culture Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 原野　葉子			

●科目の主題

フランス語圏にはどんな国々があるのだろう？そこで人々はどんな言葉を使い、どのような信仰をもち、どういった暮らしをしているのだろうか？ フランス語圏の多種多様な社会と文化のありようについて、音楽、料理や言語といったさまざまなテーマを取り上げ、フランス語のドキュメント（テクストおよび視聴覚資料）の精読・分析を通じて学んでいく。とはいえ一方向的な講義ではなく学生による発表と討議を中心とし、参加者の主体的な発見と学びを追究する。そこから、我々が暮らす日本の言語、社会と文化を逆照射する。

●到達目標

修論執筆をみすえ、フランス語の多様な文献を論理的かつ分析的に読み解く力を身に着ける。

フランス語圏文化の豊饒さと多様性を理解するとともに、日常の風俗や社会をめぐる幅広い知見と問題意識を身に着ける。フランス語圏の歴史と「今」を知ることで、西欧中心主義に偏らないグローバルかつ多角的な視座を獲得する。

●授業内容・授業計画

授業はフランス語ドキュメントの精読・視聴、および解釈をめぐるディスカッションによって進めてゆく。

基本的な計画は以下の通りだが、受講者からのリクエストにも柔軟に応じつつ論を進めてゆく予定である。また、各受講生の関心領域についての発表とディスカッションを適宜行ってもらう。

なお、本演習の枠内でトゥール大学大学院とのSkypeを介した合同語学研修を行う場合がある。

第1回 オリエンテーション：世界に広がるフランス語圏（地理と歴史）
第2回 クレオールとは？
第3回 ダンス
第4回 音楽
第5回 祭り
第6回 伝統
第7回 住居
第8回 共同体
第9回 宗教
第10回 料理
第11回 母語
第12回 商業
第13回 モード
第14回 文学
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

テクストの予習、各テーマについての事前調査および各自の発表準備に毎回2時間程度をあててください。

●評価方法

平常点60％および発表40％。

●受講生へのコメント

事前に配布されるプリントを予習した上で出席してください。

●参考文献・教材

Jackson Noutchié Njiké, *Civilisation progressive de la francophonie*,　CLE international 他。授業中に指示します。

授業科目名	科目NO.	LCDFF2508	授業コード	LM13340010
フランス語圏言語文化論Ⅱ Higher Studies in Francophone Language and Culture Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 白田　由樹			

●科目の主題

フランスの歴史・地理、文化・社会などに関するフランス語教材をもとに、伝統や歴史的経緯をふまえた今日のフランス語圏文化を教える／伝えることについて考察する。

●到達目標

フランス語圏言語文化学の研究者として必要とされる「フランス学」的な知識をフランス語の使用を通じつつ広げ、また自文化との比較なども交えながら多様な文化のあり方について知るとともに、自らの視点や考えを表現するための力を養成する。

●授業内容・授業計画

フランス語圏言語文化学の研究者として必要とされる「フランス学」的な知識をフランス語の使用を通じつつ毎回、指定のテーマに沿ったフランス語テクストを読み、補足としてインターネット記事やガイドブック等にも目を通しながら、それらの情報を総合して報告しあう。その上で、フランスを代表するイメージや文化的アイコンが生成されていく要因について、各自の考えを述べ合う機会を設ける。

各回の内容は以下のように予定している。ただし、各回のテーマや順序は、変更されることもある。

1. Histoire：Les Gaulois, Jeanne d'Arc et Naporéon
2. La République et ses symboles：Marianne et La Marseillaise
3. Monuments historiques：Châteaux de la Loire, les cochers
4. Gastronomie：les truffes, les macarons, les chefs...
5. Éducation：La Sorbonne, grandes écoles
6. La vie quotidienne：Metro, boulot, dodo... et vacances !
7. Après les guerres mondiales：Charles de Gaulle, le mai 68
8. Les personnages aimés par les Français：Abbé Pierre, Yannick Noah
9. La mode：Coco Chanel et Yves Saint Laurent
10. Lettres：Prix Goncourt, Simone de Beauvoir, Roland Barthes
11. Chansons：Édith Piaf, Serge Gainsbourg
12. Institutions：Académie française, légion d'honneur
13. Industrie：2CV, Michelin
14. La coutume et l'habitude：Galanterie, consierge
15. レポート

●事前・事後学習の内容

受講者は毎回の教材資料を下読みしておくほか、内容を補足した報告準備をすること。

●評価方法

平常点（毎回の報告準備と資料作成35%、質疑応答・意見交換への参加35％、最終発表30％）でおこなう。なお、事情なく3回以上の遅刻および5回以上の欠席をした者については、評価の対象としない。

●受講生へのコメント

フランス語圏に関わる研究をおこなう人は、なんらかの形で日仏双方の国に関して質問を受け、あるいはその文化を紹介する架け橋役になることも増えるはずです。本や資料の中だけでなく、現在のリアルな情報に触れる機会もできるだけ活用してください。

●参考文献・教材

プリントを配布

授業科目名	科目NO.	LCDFX2504	授業コード	LM13360010	
多文化学研究 Advanced Studies in Multiculture				単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 中條　健志				

●科目の主題

●到達目標

●授業内容・授業計画

●事前・事後学習の内容

●評価方法

●受講生へのコメント

●参考文献・教材

授業科目名	科目NO.	LCDFX2505	授業コード	LM13370010
地域社会文化学研究Ⅰ Advanced Area Studies in Society and Culture Ⅰ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 髙井　絹子			

●科目の主題

時代の大転換期に、文学、文化、思想、芸術の分野でどのような議論が行われ、どのような作品が生み出されたのか具体的に見ながら、世紀末ウィーンについて考察を加える。

●到達目標

ドイツ語圏の歴史や文化について知見を広げ、自分の研究テーマを相対的にみることができる。講義の中で得た知見をもとに発表内容を組み立て、質疑応答に柔軟に対応することができる。

●授業内容・授業計画

世紀末ウィーンの文化と社会について概観したのち、受講者による発表を行う。

第1回 導入
第2回 ウィーンの歴史
第3回 世紀末ウィーンとは何か
第4回 世紀末ウィーンの文化的装置
第5回 世紀末ウィーンの芸術 1
第6回 世紀末ウィーンの芸術 2
第7回 世紀末ウィーンの文学と思想 1
第8回 世紀末ウィーンの文学と思想 2
第9回 世紀末ウィーンの文学と思想 3
第10回 世紀末ウィーンの音楽と演劇 1
第11回 世紀末ウィーンの音楽と演劇 2
第12回 受講者による発表
第13回 受講者による発表
第14回 受講者による発表
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

事前事後とも、事前に提示した参考文献に目を通し、講義内容について理解を深めるとともに、発表準備をする。

●評価方法

授業への参加姿勢40%、発表60%。発表点にはほかの発表者の発表に対する質疑応答の内容を含む。

●受講生へのコメント

講義内容をもとに自分の発表テーマを絞り、各自40分程度の発表内容を考えることになります。事前事後の学習を大切にして下さい。

●参考文献・教材

授業中に指示します。

授業科目名	科目NO.	LCDFX2506	授業コード	LM13380010
地域社会文化学研究Ⅱ Advanced Area Studies in Society and Culture Ⅱ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 粕谷　雄一			

●科目の主題

音楽から知る現代のアフリカ

●到達目標

現代のアフリカ理解の基礎知識を得る

●授業内容・授業計画

第一回　現代アルジェリアの民衆音楽
第二回　アラブ人と伝統音楽
第三回　アラブ移民の音楽文化
第四回　現アルジェリアの民衆運動と音楽
第五回　トゥアレグ人とギター
第六回　ソマリア、モーリタニアと音楽
第七回　カリブ海のアフリカ系人
第八回　南北アメリカ大陸のアフリカ系人
第九回　セネガルの音楽
第十回　コートディヴォワールの音楽
第十一回　コンゴ民主共和国とルワンダ情勢
第十二回　マダガスカルとレユニオンの音楽
第十三回　ポルトガル語圏の音楽
第十四回　世界音楽、アフリカと日本
第十五回　試験

●事前・事後学習の内容

インターネットで指定の音楽を視聴し、課題について調査する。

●評価方法

課題達成度70％と試験30%

●受講生へのコメント

音楽を通すのが現代のアフリカ理解の最良の道であることを理解してください。

●参考文献・教材

文字資料は授業中に配布します。参考書は最初の時間に指定します。

授業科目名	科目NO.	LCDFX2507	授業コード	LM13390010
ドイツ語フランス語圏言語文化学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in German and Francophone Language and Culture Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	髙井　絹子／原野　葉子／福島　祥行／白田　由樹／長谷川　健一			

●科目の主題

ドイツ語圏およびフランス語圏の文学・語学・文化に関する基本的な問題について、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマを取り上げて講じる。それと平行して各種研究方法について概説し、研究資料の扱いについても講じる。また受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討議をする。

●到達目標

受講生が広い総合的見地に立った研究を行えるよう、その基礎を与えることを目的とする。

●授業内容・授業計画

Ⅰでは、主として、ドイツ語圏の文学・語学・文化に関する問題を取り上げる。

●事前・事後学習の内容

事前に発表の準備をすること、および、事後のふりかえり等により、1回の授業あたり2時間以上の自習時間をとること。

●評価方法

平常点とレポートにより、総合的に評価する。

●受講生へのコメント

出席を重視します。

●参考文献・教材

適宜、プリントを配布し、参考文献を紹介する。

授業科目名	科目NO.	LCDFX2508	授業コード	LM13400010
ドイツ語フランス語圏言語文化学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in German and Francophone Language and Culture Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	髙井　絹子／原野　葉子／福島　祥行／白田　由樹／長谷川　健一			

●科目の主題

ドイツ語圏およびフランス語圏の文学・語学・文化に関する基本的な問題について、担当教員がそれぞれの専門分野におけるテーマを取り上げて講じる。それと平行して各種研究方法について概説し、研究資料の扱いについても講じる。また受講生からレポートや研究報告を求め、それに基づく討議をする。

●到達目標

受講生が広い総合的見地に立った研究を行えるよう、その基礎を与えることを目的とする。

●授業内容・授業計画

Ⅱでは、主として、フランス語圏の文学・語学・文化に関する問題を取り上げる。

●事前・事後学習の内容

事前に発表の準備をすること、および、事後のふりかえり等により、1回の授業あたり2時間以上の自習時間をとること。

●評価方法

平常点とレポートにより、総合的に評価する。

●受講生へのコメント

出席を重視します。

●参考文献・教材

適宜、プリントを配布し、参考文献を紹介する。

授業科目名	科目NO.	LCDFX3601	授業コード	LM13410010
ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅰ Supervision of MA Thesis in German and Francophone Language and Culture Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	髙井　絹子／福島　祥行／白田　由樹			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「ドイツ語フランス語現文化学研究指導Ⅰ」（前期）、「ドイツ語フランス語言語文化学研究指導Ⅱ」（後期）の指導によって完成させる。前期の「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅰ」では、1年次までの学修に基づき、修士論文の執筆計画を立て、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文執筆計画を立て実施する
(2)問題意識を整理し、研究課題の学術的意義を提示する
(3)研究目的に応じた適確な課題を設定する
(4)研究課題に応じた適切な研究方法を計画する
(5)研究課題に応じた先行研究の読み込みを行う
(6)研究課題に応じた実験結果、調査結果、文献資料を蓄積する
(7)修士論文研究に関わる研究倫理について考える

●授業内容・授業計画

（髙井絹子教授） ドイツ語圏学に関して、歴史的あるいは現代的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文が作成できるよう、適切な指導を行う。

（福島祥行教授） フランス語圏学に関して、社会的、文化的、歴史的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文が作成できるよう、適切な指導を行う。

（白田由樹教授） フランス語圏学に関して、歴史的、社会的、文化的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文作成ができるよう、適切な指導を行う。

第1回オリエンテーション
修士論文とは何か（確認）
ドイツ語フランス語圏言語文化学の方法論（確認）
修士論文研究・執筆計画について
修士論文の評価規準・基準について修士論文計画を立てて提出する。
修士論文構想発表会の準備を行い、レジュメを作成する。第2回修士論文構想発表会（連続4コマ）
テーマに関する問題意識の整理
予想される（期待している）結論
研究方法の目処

同学年他学年の学生、複数の教員との質疑応答から学ぶ修士論文構想発表会の議論を踏まえ、自分の修士論構想を練り直す。第3回第4回第5回第6回研究計画に即して研究倫理を考える自分の研究計画に即して研究倫理を考え、研究倫理の観点から研究計画を練り上げる。第7回先行研究の読み込み研究課題に応じた先行研究の読み込みを計画し、読み込んだ結果を発表する。第8回「先行研究の整理」の意義と方法自分の修士論文に必要な「先行研究の整理」を行ってみる。第9回修士論文の章立て修士論文の章立てを考える。第10回実験、調査、文献分析の計画と結果の予想修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。第11回修士論文中間発表会
—章立ての仮決定のために—（連続4コマ）
問題意識の提示
論証しようとしていること（仮の結論）
論証のための方法とその目処
章立て

これからの課題修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論文研究・執筆計画を練り直す。第12回第13回第14回第15回修士論文中間発表会のふりかえり7月以降の修士論文執筆計画を立てる。

●事前・事後学習の内容

各自、テーマの考察を行う。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の修士課程の集大成である。ドイツ語フランス語圏言語文化学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅰ」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、修士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

とくに指定しない。

授業科目名	科目NO.	LCDFX3602	授業コード	LM13420010
ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ Supervision of MA Thesis in German and Francophone Language and Culture Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	髙井 絹子／福島 祥行／白田 由樹			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅰ」（前期）、「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ」（後期）の指導によって完成させる。後期の「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ」では、修士論文の仕上げに向けて、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文の評価規準と基準を知る
(2)執筆途上において、その時点の自分の修士論文を評価基準に準拠して点検する
(3)点検の結果を踏まえ、修士論文計画・執筆計画を修正しながら修士論文を完成させる

●授業内容・授業計画

（髙井絹子教授）　ドイツ語圏学に関して、歴史的あるいは現代的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文が作成できるよう、適切な指導を行う。
（福島祥行教授）　フランス語圏学に関して、社会的、文化的、歴史的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文が作成できるよう、適切な指導を行う。
（白田由樹教授）　フランス語圏学に関して、歴史的、社会的、文化的問題意識をもち、広い視野に立った修士論文作成ができるよう、適切な指導を行う。
第1回 修士論文の進捗状況の報告修士論文研究進捗状況の報告レジュメ提出。
第2回 修士論文の評価基準の確認修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。
第3回 修士論文中間発表会（4コマ連続）
完成に向けての執筆方針の確認（研究方法論、課題設定、先行研究の整理章立て等）
完成に向けての研究・執筆計画修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論研究・執筆計画を練り直す。
第4回～第7回 修士論文中間発表会の振り返り完成までの期間の研究・執筆計画を立てる。
第8回 問題意識と学術的意義を扱う部分についての点検点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第9回 研究目的に応じた課題設定を扱う部分について点検点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第10回 研究手法の説明を扱う部分についての点検点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第11回 先行研究を扱う部分についての点検点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第12回 実験結果、調査結果、文献分析を扱う部分についての点検点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第13回 論理の組み立てや一貫性に関する点検点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第14回 学術論文としての表現、表記法等に関する点検点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第15回 研究倫理の側面からの修士論文の点検
修士論文作成全体を通しての振り返り振り返りのための発表の準備をする。

●事前・事後学習の内容

各自、テーマの考察を行う。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質が評価されるのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の学士課程の集大成である。ドイツ語フランス語圏言語文化学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究

指導Ⅱ」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、学士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

とくに指定しない。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000120	
修士論文（独仏） Master's Thesis（独仏）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	髙井　絹子／福島　祥行／白田　由樹				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポシシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅰ」「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

（1）修士論文は、ドイツ語フランス語圏言語文化学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

（2）（評価基準）修士論文は以下の各項目について、ドイツ語フランス語圏言語文化学における十分な水準を満たさなければならない。

(a) 研究課題（テーマ）の学術的意義

明確な問題意識に基づき、ドイツ語フランス語圏言語文化学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、ドイツ語フランス語圏言語文化学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、ドイツ語フランス語圏言語文化学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

（3）（論文の体裁）修士論文は、論を展開する上で、ドイツ語フランス語圏言語文化学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

各回の授業内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「ドイツ語フランス語言語文化学研究指導Ⅰ」「ドイツ語フランス語言語文化学研究指導Ⅱ」のシラバスを参照すること。

●事前・事後学習の内容

各自、論文執筆を進める。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅰ」は、修士論文を提出する年度の前期に、「ドイツ語フランス語圏言語文化学研究指導Ⅱ」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。ドイツ語フランス語圏言語文化学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

指定しない。

授業科目名	科目NO.	LCLNG2501	授業コード	LM14210010
言語応用学研究 I Advanced Studies in Linguistics Applied I			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 井狩　幸男			

●科目の主題

神経心理学と心理言語学の学際領域である神経心理言語学分野の問題を取り上げ、人間と言語の関係を、脳における言語処理の共時的観点、並びに言語発達の通時的観点から考察し、人間にとって言語とは何かという問題を検討しながら、従来の言語研究とは異なった視点から、言語の本質に迫ることを目的とする。

●到達目標

次の2つを目標とする。

(1) 神経心理言語学に関わる様々な問題について、基本的な知識を得る。

(2) 修士論文のテーマとの関係性を探る。

●授業内容・授業計画

博士論文1本と関連書籍1冊を使用し、神経心理言語学に関する問題について深く考察する。

第1回 授業の進め方について

第2回 母語獲得における脳内原理の解説

第3回 言語習得のための神経基盤 同期

第4回 言語習得のための神経基盤 統合

第5回 言語習得のための神経基盤 調整

第6回 「同期」「統合」「調整」と英語教育

第7回 前半の授業のまとめ

第8回 アフォーダンス・非線形力学系理論の解説

第9回 運動と自己組織

第10回 歩行における脳と環境の強結合

第11回 身体の自由度問題と脳のバインディング問題

第12回 初期発達過程におけるU字型現象

第13回 脳と身体のデザイン原理

第14回 後半の授業のまとめ

第15回 本講義の総括

●事前・事後学習の内容

事前に、講義で扱う章をしっかり読み込む。事後に、扱った章の理解度チェックを行う。

●評価方法

発表準備・発表内容・授業への取り組みを総合的に評価する。

●受講生へのコメント

テキストを読み進める中で、言語現象に関わる諸相を多面的に深く考察することに習熟して欲しい。

●参考文献・教材

井狩幸男（2009）『生きたことばを習得するための英語教育－母語獲得と脳科学の研究成果を踏まえて－』

多賀厳太郎（2002）『脳と身体の動的デザイン － 運動・知覚の非線形力学と発達』金子書房

授業科目名	科目NO.	LCLNG2502	授業コード	LM14220010
言語応用学研究演習1 Advanced Studies and Seminar in Linguistics Applied 1			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 井狩　幸男			

●科目の主題

本科目では、母語獲得研究と脳科学研究から得られる知見に基づき、言語習得の諸条件を検討すると共に、その条件を可能とする脳内神経機構について考察する。

●到達目標

母語獲得と脳科学の研究成果から得られる知見を基に、言語応用学の諸相を深く考察する。

●授業内容・授業計画

神経心理言語学の関連書籍2冊を読み進める。

第1回 本講義の進め方について
第2回 早期のカテゴリー表象と概念
第3回 初期の語彙
第4回 脳と認知の発達
第5回 子どもの文法理解の発達
第6回 子どもの文法理解の発達
第7回 数学的・科学的思考
第8回 学習と認知発達における社会認知的見解
第9回 意識の実験、無意識の深さを測る
第10回 意識は何のためにあるのか？
第11回 意識的思考のしるし
第12回 意識を理論化する
第13回 究極のテスト
第14回 意識の未来
第15回 本講義の総括

●事前・事後学習の内容

事前に、講義で扱う章をしっかり読み込む。事後に、扱った章の理解度チェックを行う。

●評価方法

発表準備・発表内容・授業への取り組みを総合的に評価する。

●受講生へのコメント

言語現象を多面的に深く考察する姿勢を身につけることにより、修士論文の執筆に役立つことを期待する。

●参考文献・教材

ジョン・オーツ 他 (2010)『子どもの認知と言語はどう発達するか』松柏社
スタニスラス・ドゥアンヌ (2015)『意識と脳』紀伊國屋書店

授業科目名	科目NO.	LCLNG2503	授業コード	LM14230010
言語応用学研究Ⅱ Advanced Studies in Linguistics AppliedⅡ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	山崎　雅人			

●科目の主題

講義の内容については、できるだけ受講生の要望に柔軟に対応できるようにするが、修士課程の大きな目標である修士論文の研究方法をいかに理解・習得するかについて、言語応用学専修の修士論文の分析（特にそこで用いられている研究手段の分析）等を通じて、受講生自身の論文作成に資するように、講義を行う。

●到達目標

修士論文に要求されるレベルとはどのようなものかを、具体的に理解することを到達目標とする。

●授業内容・授業計画

本講義では、当専修で過去に執筆された修士論文の分析により、扱われているさまざまな課題を横断的に検討する作業を行い、当該学問の核となる問題意識を映し出すよう努めて行く。受講生には、各自が興味を抱いた言語学・言語応用論上のテクニカル・タームを手がかりとして、それに関連する論文や研究書を紹介することで、共有知識を増やすよう解説及び議論を行う。さらに最終段階では、各自の研究計画書に基づいた方針を発展させることで、その後の研究方向を発展させる手がかりを得られるよう努める。

第1回 講義の進め方の説明
第2回 修士論文の分析 1(総論的評価)
第3回 修士論文の分析 2(結論部分の分析)
第4回 修士論文の分析 3(序論部分の分析)
第5回 修士論文の分析 4(本論部分の分析)
第6回 修士論文の分析 5(本論部分②の分析)
第7回 修士論文の研究テーマを見出すために 1
第8回 修士論文の研究テーマを見出すために 2
第9回 修士論文の研究テーマを見出すために 3
第10回 修士論文の研究テーマを見出すために 4
第11回 修士論文の研究テーマを見出すために 5
第12回 研究計画書に基づく発展研究 1
第13回 研究計画書に基づく発展研究 2
第14回 研究計画書に基づく発展研究 3
第15回 補遺とまとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習としては、当専修の修士論文を指定された観点から分析した結果をレジュメにまとめて準備する。事後学習としては、発表と質疑応答で得た理解を次の発表の技術向上に資するよう、整理する。

●評価方法

上記の計画にそって、報告担当者には資料を伴った発表が求められる。講義は、その内容への解説と報告者以外の受講生によるコメントを主軸に進められる。こうした平常の講義への参画により、成績評価を行う。

●受講生へのコメント

言語応用学専修の大学院生のみならず、言語学・言語応用学を通じて、各自の学問的地平を広げようと思う他専修の大学院生の求めにも応じる体制を思量している。

●参考文献・教材

教室で指示する。

授業科目名	科目NO.	LCLNG2504	授業コード	LM14240010	
言語応用学研究演習2 Advanced Studies and Seminar in Linguistics Applied 2				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 山崎　雅人				

●科目の主題

修士論文の雛型もしくは習作となる小論文の作成を通じて、翌年の修士論文の作業手順を学ぶ。

●到達目標

研究課題の検討やデータの取扱など、論文執筆で直面するさまざまな問題について自ら考察し、解決策を案出することを到達目標とする。

●授業内容・授業計画

全十五回を、前半と後半の二期に分け、前半では先行研究をよい意味で「換骨奪胎」してみることで、修士論文の骨格を組み立てる。後半ではデータ部分を仮想的に扱いつつ、方法論を組み立てることで修士論文の習作を作り上げ、二年次での実際の研究作業を進める手がかりとする。

第1回 演習の進め方について
第2回 先行研究の分析　その1
第3回 先行研究の分析　その2
第4回 先行研究の分析　その3
第5回 三先行研究の結論の比較
第6回 三先行研究の序論の比較
第7回 三先行研究の本論の比較
第8回 方法論の研究　その1　実証方法の再検討
第9回 方法論の研究　その2　実験環境の変更
第10回 レジュメ期　その1
第11回 レジュメ期　その2
第12回 文章期　その1
第13回 文章期　その2
第14回 プレゼン予行演習
第15回 補遺とまとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習としては、序論・本論（仮説提示⇒実証）・結論という、論文を構成する各部分の特徴に応じて、発表の準備を行うこと。事後学習としては、発表した内容を振り返って、次の回の発表技術の向上に資するため知識と理解を整理すること。

●評価方法

出席・課題作業・コメントや質疑応答など、受講生に求められることをどれだけ積極的にこなしたかで、総合的に判断する。

●受講生へのコメント

修士論文の完成度が修士課程の満足度に比例する。全力を尽くしてほしい。

●参考文献・教材

教室で指示する。

授業科目名	科目NO.	LCLNG2505	授業コード	LM14250010	
言語応用学研究Ⅲ Advanced Studies in Linguistics AppliedⅢ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	田中　一彦				

●科目の主題

英語、日本語の意味論、語用論に関する講義、および文献講読を通じて、ことばの分析力を養うことを目的とする。

●到達目標

講義、および文献の精読により、事実観察の仕方、データ収集、およびその分析方法を身につける。

●授業内容・授業計画

廣瀬・長谷川(2010)『日本語から見た日本人』を精読しながら、日本人の中の「集団主義」を問い直し、具体的な日本語の表現データを元に、彼らの主張の是非を問う。

第1回 授業概要の説明
第2回 日本人は「集団主義的」か ―言語学からの批判的検討―伝聞と情報のなわ張り part1
第3回 日本人は「集団主義的」か ―言語学からの批判的検討―伝聞と情報のなわ張り part2
第4回 日本人は「集団主義的」か ―言語学からの批判的検討―伝聞と情報のなわ張り part3
第5回 日本語における独り言 part1
第6回 日本語における独り言 part2
第7回 日本語における独り言 part3
第8回 第5回から第6回のまとめ
第9回 伝聞と情報の縄張り part 1
第10回 伝聞と情報の縄張り part 2
第11回 伝聞と情報の縄張り part 3
第12回 言語使用の形態と公的性の度合い part1
第13回 言語使用の形態と公的性の度合い part2
第14回 第9回から第13回のまとめ
第15回 授業の総括

●事前・事後学習の内容

事前に論文を精読し、必要に応じて、参考文献も参照しながら、当該のトピックに関して積極的に議論できるように準備をしておく。また、授業後には、自分の議論展開の妥当性を他の受講生の議論と比較しながら検討する。

●評価方法

授業中の議論への積極的な参加態度(40%)および、レポートの成績(60%)を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

たえず、「ことば」に対してアンテナをはっていてもらいたい。

●参考文献・教材

プリント配布

授業科目名	科目NO.	LCLNG2506	授業コード	LM14260010	
言語応用学研究演習3 Advanced Studies and Seminar in Linguistics Applied 3				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	田中　一彦				

●科目の主題

英語、日本語の意味論、語用論に関する文献の読解を通じて、論文の構成法を含めたことばの分析力を養うことを目的とする。

●到達目標

特定のテーマに絞ったことばのデータ収集を行い、その問題点を発見し、その解決策を見出す力を身につける。

●授業内容・授業計画

中右(2018)『英文法の心理』の第1部および和田(2009)を精読しながら、日本語と英語の状況の把握の仕方や「内」と「外」の視点がどのように言語現象に影響を与えているかを認識し、彼らの主張の是非を問う。なお、中右(2018)、和田(2009)の精読をする前に、一般的な日英比較論を検討する。

第1回 授業の概要説明
第2回 日英比較論序説1
第3回 日英比較論序説2
第4回 日英比較論のまとめ
第5回 日英語は現実をどのように切り分けるか 1
第6回 日英語は現実をどのように切り分けるか 2
第7回 日英語は現実をどのように切り分けるか 3
第8回 日英語は現実をどのように切り分けるか 4
第9回 第5回から第8回のまとめ
第10回 「内」の視点・「外」の視点と時制現象 ―日英語対照研究―(和田尚明)1
第11回 「内」の視点・「外」の視点と時制現象 ―日英語対照研究―(和田尚明)2
第12回 「内」の視点・「外」の視点と時制現象 ―日英語対照研究―(和田尚明)3
第13回 「内」の視点・「外」の視点と時制現象 ―日英語対照研究―(和田尚明)4
第14回 第10回から第13回のまとめ
第15回 総括

●事前・事後学習の内容

事前に論文を精読し、必要に応じて、参考文献も参照しながら、当該のトピックに関して積極的に議論できるようにしておく。授業後は、自らの議論の展開の仕方の妥当性を他の受講生の議論の仕方と比較しながら検討する。

●評価方法

授業中の議論への参加態度の積極性(40%)および、レポートの成績(60%)を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

十分な予習を行い、授業中の議論に積極的に参加することが望ましい。

●参考文献・教材

プリントを配布

授業科目名	科目NO.	LCLNG2507	授業コード	LM14270010
言語応用学研究Ⅳ Advanced Studies in Linguistics AppliedⅣ			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 関　茂樹			

●科目の主題

英語の意味論の分野を対象とする。講義を通じて、論文の構成、議論の組み立て、言語資料の収集およびその利用法といった基本的な事柄を確認することと各自の研究分野に積極的に取り組むことを課題とする。

●到達目標

新しい言語理論とともに伝統的な文法論の成果を取り入れ、基本的な方法論の理解を深めることを目標とする。同時に、文の統語構造と情報伝達機能の双方をバランスよく考察できるような能力を身につけることを目標とする。 講義、および文献の精読により、事実観察の仕方、データ収集、およびその分析方法を理解する。

●授業内容・授業計画

意味論と統語論の分野で定評のある Quirk et al. (1985) を取り上げ、情報構造と音調単位の特徴とを分析した章を主に精読する。同時に、様々な観点から記述内容と分析の妥当性を検討する。

第1回　オリエンテーション
第2回　第18章 *(Theme, Focus, and Information Processing)* を精読する。
第3回　第18章（*Theme, Focus, and Information Processing)* を精読する。
第4回　第18章（*Theme, Focus, and Information Processing)* を精読する。
第5回　第18章（*Theme, Focus, and Information Processing)* を精読する。
第6回　第18章（*Theme, Focus, and Information Processing)* を精読する。
第7回　第18章（*Theme, Focus, and Information Processing)* を精読する。
第8回　第18章（*Theme, Focus, and Information Processing)* を精読する。
第9回　第18章 *(Theme, Focus, and Information Processing)* を精読する。
第10回　第18章 *(Theme, Focus, and Information Processing)* を精読する。
第11回　第19章（*From Sentence to Text)* を精読する。
第12回　第19章（*From Sentence to Text)* を精読する。
第13回　第19章（*From Sentence to Text)* を精読する。
第1 4回　全体のまとめ

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、予め配布した文献資料を十分に読み込むこと。配布資料の内容の要点および疑問点を整理し、次の授業で確認に努めること。受講後は、関連文献を読み、内容の理解を深めること。

●評価方法

平常点(30%)とレポートの成績(70%)を総合的に評価する。

●受講生へのコメント

十分な予習を行い、授業中の議論に積極的に参加することが望ましい。

●参考文献・教材

プリント配布

授業科目名	科目NO.	LCLNG2508	授業コード	LM14280010	
言語応用学研究演習4 Advanced Studies and Seminar in Linguistics Applied 4				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 辻　香代				

●科目の主題

言語の習得論に関する領域を対象とする。世界の言語教育政策、外国語教授法等に影響を及ぼした言語習得の理論を考察する。また、言語習得研究に関連する社会言語学、認知言語学等の基本的な知識を身につけ、各受講者の研究が発展することを目指す。

●到達目標

次の3つを目標とする。

1.言語習得の仕組みに関する様々な理論を説明することができる。
2. 言語習得の研究に関わる領域について、基本的な知識を得ることができる。
3. 言語学習に関する知見を再考する姿勢を身につけることができる。

●授業内容・授業計画

言語の習得論を扱ったテキストと英語による文献・資料を熟読する。
担当回の内容をまとめ、グループ発表する(*発表言語:英語)。

第1回 言語習得に関する通説を考える
第2回 言語習得研究の多様性*
第3回 第一言語習得の理論*
第4回 第二言語学習者の言語*
第5回 言語習得における要因*
第6回 第二言語習得の理論*
第7回 臨界期仮説と早期英語教育
第8回 言語習得の理論と実践
第9回 中間発表
第10回 言語と文化*
第11回 言語習得とアイデンディティ理論*
第12回 言語教育政策と言語計画*
第13回 言語情報処理に関する技術革命*
第14回 最終発表
第15回 言語学習の纏わる通説の再考

●事前・事後学習の内容

事前学習として、授業で扱う教材の章及び関連文献を分析的に読み、授業内における議論に向けて、共感できる部分や疑問に思う箇所などを整理しておくこと。事後学習として、講義を通じて得られた知見を整理することが望ましい。上記2点を「毎回の課題」とする。

●評価方法

平常点(出席点、授業への積極性、毎回の課題を含む)、授業内における発表、期末レポートによる。授業数の3分の2以上の出席が単位認定の条件となる。

●受講生へのコメント

言語の習得論に関する知見を概観し，各自の論文を深めることを期待する。
事前学習を主体的におこなったうえで，積極的に授業に参加することが望ましい。

●参考文献・教材

指定教材1:P. M. Lightbown & N. Spada (2013). How Language are Learned: 4th Edition, Oxford University Press

参考文献

JACET SLA研究会編著(2005)「文献から見る第二言語習得研究」開拓社

その他の参考文献・資料等は、必要に応じ、随時紹介する。″

授業科目名	科目NO.	LCLNG2509	授業コード	LM14290010
言語応用学総合研究Ⅰ Advanced Comprehensive Studies in Linguistics Applied Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	田中　一彦／井狩　幸男／山崎　雅人／辻　香代			

●科目の主題

前期博士課程入学初年度において、言語応用学に関わる諸分野について総合的な知見が得られるような講義を行う。担当教員の専門分野は意味論、語用論、心理言語学、比較言語文化学であり、それぞれの分野の基本文献と方法論について習熟することを目標とする。

●到達目標

修士論文を書くための構想の土台をつくることを目標とする。

●授業内容・授業計画

各教員の研究対象は主として英語であり、参考用書物にはもっぱら英語のものを用いる。教員のそれぞれの専門分野について、これまでの研究内容を講義し、議論の組み立て方、資料の収集方法、その適切な引用の仕方、効果的な表現法などに習熟してもらうことを目標とする。その過程で、修士論文のテーマを見出し、各自の構想発表へつなげることを期待している。

第1回：研究にあたっての心構え

第2回から第4回：各自の研究テーマをもとに基本論文の紹介

第5回から第10回：各自の研究テーマをもとに基本論文の考察

第11回から第14回：各自の研究テーマをもとに基本論文について議論を深める

第15回　まとめ

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、指定された文献を精読するなど、十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、授業の要点や指導教員からのコメントを整理し、理解に努めること。

●評価方法

レポートおよび平常点による。

●受講生へのコメント

さまざまな分野の文献を多く読むことが必要であり、各自が研究対象とする分野、テーマについて、積極的に取り組むことが必要である。

●参考文献・教材

主にプリントを使用する。参考文献は授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCLNG2510	授業コード	LM14300010
言語応用学総合研究Ⅱ Advanced Comprehensive Studies in Linguistics Applied Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	田中　一彦／井狩　幸男／山崎　雅人／辻　香代			

●科目の主題

前期博士課程入学初年度において、言語応用学に関わる諸分野について総合的な知見が得られるような講義を行う。担当教員の専門分野は意味論、語用論、心理言語学、比較言語文化学であり、それぞれの分野の基本文献と方法論について習熟することを目標とする。

●到達目標

様々な分野の論文を読み、自分の修士論文の研究テーマを決定する。

●授業内容・授業計画

各教員の研究対象は主として英語であり、参考用書物にはもっぱら英語のものを用いる。教員のそれぞれの専門分野について、議論の組み立て方、資料の収集方法、その適切な引用の仕方、効果的な表現法などに習熟してもらうことを目標とする。その過程で、修士論文のテーマを見出し、各自の構想発表へつなげることを期待している。

●事前・事後学習の内容

受講に際しては、指定された文献を精読するなど、十分な準備を行った上で臨むこと。また、授業の終了後には、授業の要点や指導教員からのコメントを整理し、理解に努めること。

●評価方法

レポートと平常点による。

●受講生へのコメント

それぞれの研究課題を明確にし、研究課題と研究の方向についてわかりやすく表現できるように心がけること。

●参考文献・教材

主としてプリントを使用する。授業中に参考文献を指示する。

授業科目名	科目NO.	LCLNG3601	授業コード	LM14310010
言語応用学研究指導Ⅰ Research Guidance in Linguistics Applied Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	田中　一彦／井狩　幸男／山崎　雅人			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「言語応用学研究指導Ⅰ」（前期）、「言語応用学研究指導Ⅱ」（後期）の指導によって完成させる。

前期の「言語応用学研究指導Ⅰ」では、1年次までの学修に基づき、修士論文の執筆計画を立て、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文執筆計画を立て実施する
(2)問題意識を整理し、研究課題の学術的意義を提示する
(3)研究目的に応じた適確な課題を設定する
(4)研究課題に応じた適切な研究方法を計画する
(5)研究課題に応じた先行研究の読み込みを行う
(6)研究課題に応じた実験結果、調査結果、文献資料を蓄積する
(7)修士論文研究に関わる研究倫理について考える

●授業内容・授業計画

第1回　オリエンテーション
　　修士論文とは何か
　　言語応用学の方法論
　　修士論文研究・執筆計画について
　　修士論文の評価規準・基準について
第2回から第10回　修士論文構想発表会
　　テーマに関する問題意識の整理
　　予想される(期待している)結論
　　研究方法の目処
　　同学年他学年の学生、複数の教員との質疑応答から学ぶ
第11回から第14回　修士論文中間発表会
　　問題意識の提示
　　論証しようとしていること(仮の結論)
　　論証のための方法とその目処
　　章立て
　　これからの課題
第15回　修士論文中間発表会のふりかえり

(井狩幸男教授)神経心理言語学の立場から、母語獲得、第二言語習得、バイリンガリズム、失語症、失読症において観察されるさまざまな言語現象を通して、人間にとって言語とは何かという問題を検討し、同時に、言語への応用を探る。

(山崎雅人教授)言語類型論と認知言語学の視点から諸言語の多様性を貫く原理の分布状況を考察し、様々なデータを一貫した論理に基づいて分析する論考を構築できるように指導する。

(田中一彦教授)伝統的な言語理論を考慮しつつ、現代の代表的な言語理論を考察する。主に、小説・新聞・雑誌などを言語資料として、特定の言語現象を意味論、語用論、さらには談話といった多角的側面から分析できるように指導する。

(辻香代准教授)応用言語学の立場から、母語獲得、第二言語習得、バイリンガリズムなどにおいて観察されるさまざまな言語現象を通して、人間にとって言語とは何かという問題を検討し、同時に、言語への応用を探る

研究の指導を行う。

●事前・事後学習の内容

受講の前に、必要な参考文献を収集し、各自の課題と関連する内容および疑問点を整理すること。受講後に各自の疑問点、教員からのコメントをまとめ次に備えること。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

●受講生へのコメント

論論文作成のための資料の妥当性、論述の方法、文章表現について絶えず注意を心がけたい。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCLNG3602	授業コード	LM14320010
言語応用学研究指導Ⅱ Research Guidance in Linguistics AppliedⅡ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	田中　一彦／井狩　幸男／山崎　雅人			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「言語応用学研究指導Ⅰ」（前期）、「言語応用学研究指導Ⅱ」（後期）の指導によって完成させる。

後期の「言語応用学研究指導Ⅱ」では、修士論文の仕上げに向けて、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文の評価規準と基準を知る
(2)執筆途上において、その時点の自分の修士論文を評価基準に準拠して点検する
(3)点検の結果を踏まえ、修士論文計画・執筆計画を修正しながら修士論文を完成させる

●授業内容・授業計画

第1回から第6回　修士論文の進捗状況の報告
第7回から第10回　修士論文の中間発表会
第11回から第14回　修士論文の進捗状況の報告
論文の完成にむけての考察と推敲
第15回　研究倫理の側面からの修士論文の点検
修士論文作成全体を通しての振り返り

(井狩幸男教授)神経心理言語学の立場から、母語獲得、第二言語習得、バイリンガリズム、失語症、失読症において観察されるさまざまな言語現象を通して、人間にとって言語とは何かという問題を検討し、同時に、言語への応用を探る。

(山崎雅人教授)言語類型論と認知言語学の視点から諸言語の多様性を貫く原理の分布状況を考察し、様々なデータを一貫した論理に基づいて分析する論考を構築できるように指導する。

(田中一彦教授)伝統的な言語理論を考慮しつつ、現代の代表的な言語理論を考察する。主に、小説・新聞・雑誌などを言語資料として、特定の言語現象を意味論、語用論、さらには談話といった多角的側面から分析できるように指導する。

(辻香代准教授)応用言語学の立場から、母語獲得、第二言語習得、バイリンガリズムなどにおいて観察されるさまざまな言語現象を通して、人間にとって言語とは何かという問題を検討し、同時に、言語への応用を探る研究の指導を行う。

●事前・事後学習の内容

受講の前に、必要な参考文献を収集し、各自の課題と関連する内容および疑問点を整理すること。受講後に各自の疑問点、教員からのコメントをまとめ次に備えること。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

「言語応用学研究指導Ⅱ」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質が評価されるのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「言語応用学研究指導Ⅱ」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の学士課程の集大成である。言語学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「言語応用学研究指導Ⅱ」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、学士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

授業中に指示をする。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000130	
修士論文（言応） Master's Thesis（言応）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	田中　一彦／井狩　幸男／山崎　雅人				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポリシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間を通しし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生同士が切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめ細かな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「言語応用学研究指導Ⅰ」「言語応用学研究指導Ⅱ」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1)修士論文は、言語応用学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2)(評価基準)修士論文は以下の各項目について、言語応用学分野における十分な水準を満たさなければならない。

(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、言語応用学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法が用いられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切に用いられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、言語応用学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、言語応用学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3)(論文の体裁)修士論文は、論を展開する上で、言語応用学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

「言語応用学研究指導Ⅰ」「言語応用学研究指導Ⅱ」のシラバスを参照すること。

●事前・事後学習の内容

「言語応用学研究指導Ⅰ」「言語応用学研究指導Ⅱ」のシラバスを参照すること。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」に従い、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査を行う。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準に従って実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「言語応用学研究指導Ⅰ」は、修士論文を提出する年度の前期に、「言語応用学研究指導Ⅱ」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。言語応用学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

授業中に指示をする。

授業科目名	科目NO.	LCART3601	授業コード	LM15150010
表現文化学研究指導Ⅰ Supervision of Master's Thesis in Culture and Representation Ⅰ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	高島　葉子／小田中　章浩／野末　紀之			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「表現文化学研究指導1」（前期）、「表現文化学研究指導2」（後期）の指導によって完成させる。

前期の「表現文化学研究指導1では、1年次までの学修に基づき、修士論文の執筆計画を立て、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文執筆計画を立て実施する
(2)問題意識を整理し、研究課題の学術的意義を提示する
(3)研究目的に応じた適確な課題を設定する
(4)研究課題に応じた適切な研究方法を計画する
(5)研究課題に応じた先行研究の読み込みを行う
(6)研究課題に応じた実験結果、調査結果、文献資料を蓄積する
(7)修士論文研究に関わる研究倫理について考える

●授業内容・授業計画

第1回　オリエンテーション

修士論文とは何か(確認)表現文化学の方法論(確認)、修士論文研究・執筆計画について、 修士論文の評価規準・基準について

第2回～第5回　修士論文構想発表会(連続4コマ)

テーマに関する問題意識の整理、予想される(期待している)結論、研究方法の目処、同学年他学年の学生、複数の教員との質疑応答から学ぶ

第6回　研究計画に即して研究倫理を考える

第7回　先行研究の読み込み

第8回　「先行研究の整理」の意義と方法

第9回　修士論文の章立て

第10回　調査、文献分析の計画と結果の予想

第11回～第14回　修士論文中間発表会―章立ての仮決定のために―(連続4コマ)

問題意識の提示、論証しようとしていること(仮の結論)、論証のための方法とその目処、章立てこれからの課題

第15回　修士論文中間発表会のふりかえり

●事前・事後学習の内容

第1回　修士論文計画を立てて提出する。修士論文構想発表会の準備を行い、レジュメを作成する。
第2回～第5回　修士論文構想発表会の議論を踏まえ、自分の修士論構想を練り直す。
第6回　自分の研究計画に即して研究倫理を考え、研究倫理の観点から研究計画を練り上げる。
第7回　研究課題に応じた先行研究の読み込みを計画し、読み込んだ結果を発表する。
第8回　自分の修士論文に必要な「先行研究の整理」を行ってみる。
第9回　修士論文の章立てを考える。
第10回　修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。
第11回～第14回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論文研究・執筆計画を練り直す。
第15回　7月以降の修士論文執筆計画を立てる。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の修士課程の集大成である。履修モデルとしての表現文化学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「表現文化学研究指導1」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、修士課程を集大成させてほしい。修士論文作成にあたっては、指導教員と相談しつつ綿密な計画を立ててのぞむこと。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LCART3602	授業コード	LM15160010
表現文化学研究指導Ⅱ Supervision of Master's Thesis in Culture and Representation Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	高島　葉子／小田中　章浩／野末　紀之			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「表現文化学研究指導1」（前期）、「表現文化学研究指導2」（後期）の指導によって完成させる。

後期の「表現文化学研究指導2」では、修士論文の仕上げに向けて、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文の評価規準と基準を知る。

(2)執筆途上において、その時点の自分の修士論文を評価基準に準拠して点検する。

(3)点検の結果を踏まえ、修士論文計画・執筆計画を修正しながら修士論文を完成させる研究指導Ⅰで習得した知見・方法論の基礎の上に立って、修士論文を完成させる。

●授業内容・授業計画

第1回　修士論文の進捗状況の報告

第2回　修士論文の評価基準の確認

第3回～第6回　修士論文中間発表会（4コマ連続）

完成に向けての執筆方針の確認（研究方法論、課題設定、先行研究の整理章立て等）、完成に向けての研究・執筆計画

第7回　修士論文中間発表会の振り返り

第8回　問題意識と学術的意義を扱う部分についての点検

第9回　研究目的に応じた課題設定を扱う部分について点検

第10回　研究手法の説明を扱う部分についての点検

第11回　先行研究を扱う部分についての点検

第12回　調査結果、文献分析を扱う部分についての点検

第13回　論理の組み立てや一貫性に関する点検

第14回　学術論文としての表現、表記法等に関する点検

第15回　研究倫理の側面からの修士論文の点検、修士論文作成全体を通しての振り返り

●事前・事後学習の内容

第1回　修士論文研究進捗状況の報告レジュメ提出する。

第2回　修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。

第3回～第6回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論研究・執筆計画を練り直す。

第7回　完成までの期間の研究・執筆計画を立てる。

第8回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。

第9回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。

第10回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。

第11回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。

第12回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。

第13回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。

第14回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。

第15回　振り返りのための発表の準備をする。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

「表現文化学研究指導2」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質が評価されるのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「表現文化学研究指導2」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の学士課程の集大成である。履修モデルとしての表現文化学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の

学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「表現文化学研究指導2」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、学士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

授業中に指示。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000140	
修士論文（表文） Master's Thesis（表文）				単位数	0単位
授業形態	担当教員名				
演習	高島　葉子／小田中　章浩／野末　紀之				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポシシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「表現文化学研究指導1」「表現文化学研究指導2」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1)修士論文は、表現文化学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2)(評価基準)修士論文は以下の各項目について、表現文化学分野における十分な水準を満たさなければならない。

(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、表現文化学分野における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、表現文化学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、表現文化学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3)(論文の体裁)修士論文は、論を展開する上で、表現文化学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

各回の授業内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「表現文化学研究指導1」「表現文化学研究指導2」のシラバスを参照すること。

●事前・事後学習の内容

各回の事前・事後学習内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「表現文化学研究指導1」「表現文化学研究指導2」のシラバスを参照すること。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「表現文化学研究指導1」は、修士論文を提出する年度の前期に、「表現文化学研究指導2」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。履修モデルとしての表現文化学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

各自が参考文献一覧を作成することになる。

授業科目名	科目NO.	LDASA3601	授業コード	LM16220010
アジア都市文化学研究指導Ⅰ Instruction for Studies in Asian Culture and Urbanism I			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	多和田　裕司／野崎　充彦／菅原　真弓／増田　聡			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「アジア都市文化学研究指導Ⅰ」（前期）、「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」（後期）の指導によって完成させる。

前期の「アジア都市文化学研究指導Ⅰ」では、1年次までの学修に基づき、修士論文の執筆計画を立て、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文執筆計画を立て実施する
(2)問題意識を整理し、研究課題の学術的意義を提示する
(3)研究目的に応じた適確な課題を設定する
(4)研究課題に応じた適切な研究方法を計画する
(5)研究課題に応じた先行研究の読み込みを行う
(6)研究課題に応じた実験結果、調査結果、文献資料を蓄積する
(7)修士論文研究に関わる研究倫理について考える

●授業内容・授業計画

第1回　オリエンテーション
　修士論文とは何か(確認)
　アジア都市文化学の方法論(確認)
　修士論文研究・執筆計画について
　修士論文の評価規準・基準について
第2回～第5回　修士論文構想発表会(連続4コマ)
　テーマに関する問題意識の整理
　予想される(期待している)結論
　研究方法の目処
　同学年他学年の学生、複数の教員との質疑応答から学ぶ
第6回　研究計画に即して研究倫理を考える
第7回　先行研究の読み込み
第8回　「先行研究の整理」の意義と方法
第9回　修士論文の章立て
第10回　実験、調査、文献分析の計画と結果の予想
第11回～第14回　修士論文中間発表会―章立ての仮決定のために―(連続4コマ)
　問題意識の提示
　論証しようとしていること(仮の結論)
　論証のための方法とその目処
　章立て
　これからの課題
第15回　修士論文中間発表会のふりかえり

●事前・事後学習の内容

第1回　修士論文計画を立てて提出する
　修士論文構想発表会の準備を行い、レジュメを作成する。
第2回～第5回　修士論文構想発表会の議論を踏まえ、自分の修士論構想を練り直す。
第6回　自分の研究計画に即して研究倫理を考え、研究倫理の観点から研究計画を練り上げる。

第7回　研究課題に応じた先行研究の読み込みを計画し、読み込んだ結果を発表する。
第8回　自分の修士論文に必要な「先行研究の整理」を行ってみる。
第9回　修士論文の章立てを考える。
第10回　修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。
第11回～第14回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論文研究・執筆計画を練り直す。
第15回　7月以降の修士論文執筆計画を立てる。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の修士課程の集大成である。アジア都市文化学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「アジア都市文化学研究指導Ⅰ」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、修士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

特に指定しない。

授業科目名	科目NO.	LDASA3602	授業コード	LM16230010
アジア都市文化学研究指導Ⅱ Instruction for Studies in Asian Culture and Urbanism Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	多和田　裕司／野崎　充彦／菅原　真弓／増田　聡			

●科目の主題

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「アジア都市文化学研究指導Ⅰ」（前期）、「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」（後期）の指導によって完成させる。

後期の「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」では、修士論文の仕上げに向けて、修士論文中間発表会といった機会を柱としながら、修士論文に必要な知識、技能を修士論文の執筆を通して身に付けるようにする。

●到達目標

(1)修士論文の評価規準と基準を知る
(2)執筆途上において、その時点の自分の修士論文を評価基準に準拠して点検する
(3)点検の結果を踏まえ、修士論文計画・執筆計画を修正しながら修士論文を完成させる

●授業内容・授業計画

第1回　修士論文の進捗状況の報告
第2回　修士論文の評価基準の確認
第3回～第6回　修士論文中間発表会（4コマ連続）
　完成に向けての執筆方針の確認
　（研究方法論、課題設定、先行研究の整理章立て等）
　完成に向けての研究・執筆計画
第7回　修士論文中間発表会の振り返り
第8回　問題意識と学術的意義を扱う部分についての点検
第9回　研究目的に応じた課題設定を扱う部分について点検
第10回　研究手法の説明を扱う部分についての点検
第11回　先行研究を扱う部分についての点検
第12回　実験結果、調査結果、文献分析を扱う部分についての点検
第13回　論理の組み立てや一貫性に関する点検
第14回　学術論文としての表現、表記法等に関する点検
第15回　研究倫理の側面からの修士論文の点検
　修士論文作成全体を通しての振り返り

●事前・事後学習の内容

第1回　修士論文研究進捗状況の報告レジュメ提出
第2回　修士論文中間発表の準備を行い、レジュメを作成する。
第3回～第6回　修士論文中間発表会の議論を踏まえ、自分の修士論研究・執筆計画を練り直す。
第7回　完成までの期間の研究・執筆計画を立てる。
第8回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第9回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第10回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第11回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第12回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第13回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第14回　点検の対象になる部分を執筆する。点検を受けた部分を修正し、補足ための研究計画を立てる。
第15回　振り返りのための発表の準備をする。

●評価方法

修士論文中間発表会等の発表内容、議論への貢献、および、文献一覧の作成等、各回で指定する課題の内容などにより評価する。

「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」の評価は、「修士論文」の評価と同時期に行われるが、後者が論文の内容そのものの質が評価されるのに対して、前者は、論文作成過程の学修状況が評価の対象となる。ただし、仮に「修士論文」が不可となった場合は、「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」も不可となる。

●受講生へのコメント

修士論文は2年間の学士課程の集大成である。アジア都市文化学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」は授業科目のひとつであるが、この科目の演習を基盤としながら、修士論文に主体的に取り組み、学士課程を集大成させてほしい。

●参考文献・教材

特に指定しない。

授業科目名	科目NO.		授業コード	LM18000150	
修士論文（アジア都市文化学） Master's Thesis（Asia ）				単位数	0単位
授業形態 演習	担当教員名 多和田　裕司／野崎　充彦／菅原　真弓／増田　聡				

●科目の主題

文学研究科では、修士論文を通しての学修を重視しており、ディプロマポシシーで定める学修成果を学生が修めることができるよう、修士課程の2年間をとおし、授業科目における指導のほか、専修ごとの修士論文ガイダンス、修士論文構想発表会、修士論文中間発表会など、学生どうしが切磋琢磨できる機会を設け、あわせて、きめこまかな個別指導を行う。

修士論文は、2年間にわたる学修の成果であるが、実際の執筆にあたっては、2年次の「アジア都市文化学研究指導Ⅰ」「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」の指導によって完成させる。

●到達目標

修士論文の審査基準は次のとおりであり、これを到達目標とする。

(1)修士論文は、アジア都市文化学分野における一定の研究成果を示すものでなければならない。

(2)(評価基準)修士論文は以下の各項目について、アジア都市文化学分野における十分な水準を満たさなければならない。

(a) 研究課題(テーマ)の学術的意義

明確な問題意識に基づき、教育学分野【←専修に応じて書き換えてください】における研究の学術的意義が述べられていること。

(b) 研究課題の的確性

研究目的に応じた的確な課題が設定されていること。

(c) 研究方法の妥当性

研究を遂行する上で、適切な研究手法がもちいられていること。

(d) 先行研究との関連

当該専門分野における主たる先行研究を踏まえたものであること。

(e) 資料利用の適切性

論旨を展開するうえで、実験結果、調査結果、文献資料などが適切にもちいられていること。

(f) 論旨の一貫性

論旨が論理的に組み立てられ、一貫して展開されていること。

(g) 学術論文としての体裁

表現、表記法などが学術論文として適切であるとともに、アジア都市文化学分野の慣例に従ったものであること。

(h) 研究倫理の遵守

研究の目的、遂行過程、成果発表のそれぞれについて、アジア都市文化学分野が定める研究上守るべき倫理基準が満たされていること。

(3)(論文の体裁)修士論文は、論を展開する上で、アジア都市文化学分野の特性に応じた十分な分量でなければならない。

●授業内容・授業計画

※各回の授業内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「アジア都市文化学研究指導Ⅰ」「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」のシラバスを参照すること。

●事前・事後学習の内容

※各回の事前・事後学習の内容の記述は「修士論文」にそぐわないので省略する。なお、「修士論文」に連動するものとして、「アジア都市文化学研究指導Ⅰ」「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」のシラバスを参照すること。

●評価方法

修士論文は、「大阪市立大学学位規程に関する文学研究科内規」にしたがい、研究科教授会において当該専攻の教員から主査1 名、副査2名を審査員として選出した上で審査をおこなう。

2月に実施する面接試験の日時は、各専修から通知する。

修士論文審査については、文学研究科が定める「修士論文ならびに博士論文に関する文学研究科ガイドライン」に示す手順と評価基準にしたがって実施する。

●受講生へのコメント

「修士論文」および「アジア都市文化学研究指導Ⅰ」は、修士論文を提出する年度の前期に、「アジア都市文化学研究指導Ⅱ」は後期の履修登録期間中にWeb履修登録すること。

修士論文は2年間の博士前期課程の集大成である。アジア都市文化学の研究方法と専門知識を踏まえ、2年間の学修成果を基盤とした論文を完成させてほしい。また、学術情報総合センターの文献や機能を活用し、複数の教員や同学年・異学年の学生と頻繁に議論を進めながら、互いに切磋琢磨して研究を深めてほしい。

●参考文献・教材

指定しない。

授業科目名	科目NO.	LEGEN1501	授業コード	LM00130010
文化構想学研究a（表現文化） Advanced Studies in Cultural Management:a(Culture and Representation)			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	高島　葉子／野末　紀之／増田　聡／海老根　剛			

●科目の主題

本講義では、現代文化としての表現文化（映画、演劇、文芸、アート、音楽、マンガ、ゲーム、ファッション、建築や都市景観、インターネットアプリケーションなど）を考えるための基礎的な論点を講じる。カルチュラル・スタディーズや大衆文化論、批判理論、表象文化論、文学理論などからの表現文化へのアプローチを概説するとともに、担当教員が専門とする表現文化ジャンルについて文化構想学の観点から論じる。講義科目であるが、随時、テーマに関して討論を行う。

●到達目標

文化構想学の観点から現代文化としての表現文化を考察するにための理論と基礎的な論点を学ばせることを目的とする。

●授業内容・授業計画

第1回～第3回：増田聡担当

ポピュラー文化研究の近年のトピックを概観するとともに、ポピュラー文化諸ジャンルの相互関係についてメディア論的な観　点より講義する。さらにポピュラー音楽の領域を対象に、今日の文化実践における諸問題について検討を行い、文化を構想す手法への導入とする。

第4回～第7回：野末紀之担当

文学の表象とその制度化の歴史、作品読解の規範化とその変遷を対象とする研究について講義する。

第8回～第10回：高島葉子担当

民間説話・伝承に関する研究方法とこれらの題材が創作作品（児童文学など）の中でどのように表現され、変容しているか、時代や社会との関係のなかで考察する方法を講義する。

第11回～第14回：海老根剛担当

映画やアニメーション、ゲームといった映像文化の今日的動向とそれを考察する諸理論について講義する。

第15回：まとめ

●事前・事後学習の内容

第1回～第3回：授業前は、指定されたポピュラー文化に関する文献・資料を読んでおく。
授業後は、講義内容の論点を整理し、受講生の関心に応じて参考文献を参照する。

第4回～第7回：授業前は、文学の表象と文学の表象による制度化、作品読解の規範化についての指定された文献・資料を読んでおく。
授業後は、講義内容の論点を整理し、受講生の関心に応じて参考文献を参照する。

第8回～第10回：授業前は、民間説話・伝承の改変、アダプテーションに関する指定された文献・資料を読んでおく。
授業後は、講義内容の論点を整理し、受講生の関心に応じて参考文献を参照する。

第11回～第14回：授業前は、映像文化に関する指定された文献・資料を読んでおく。授業後は、講義内容の論点を整理し、受講生の関心に応じて参考文献を参照する。

●評価方法

授業での討論30％、期末レポート70％により総合的に評価する。講義内容を踏まえて、受講生自身の関心を基に独自の観点から論を展開しているかいなかを評価基準とする。討論において必ず発言し、指定した字数を満たした論理的に破綻のないレポート作成することが、合格の最低基準である。

●受講生へのコメント

自己の研究領域のみではなく、表現文化学研究全般における基本概念についても習得・確認することを常に心がけること。

●参考文献・教材

各担当者が授業中、あるいはHPで指示する。

授業科目名	科目NO.	LEGEN1502	授業コード	LM00140010
文化構想学研究b（アジア文化） Advanced Studies in Cultural Management:b (Asian Culture)			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	多和田　裕司／松浦　恆雄／堀　まどか			

●科目の主題

本講義では、地域文化研究、比較文化研究の立場から、文化の実践的、課題解決的な活用に向けての方策について考察する。文化の実践的活用には、他地域との対比のなかで地域の文化的文脈を適切に理解するとともに、地域性を踏まえた活用方法をもちいなければならない。講義においては、日本を含めた東アジアおよび東南アジアにおける地域に根ざした文化の活用可能性について、具体的な実践例を踏まえて検討する。あわせて、受講者に、文化の実践的活用にたいして、相対的、比較文化的な視点を持たせることを目的とする。

●到達目標

東アジアおよび東南アジアにおける地域に根ざした文化の活用可能性について、実践例などを踏まえて説明することができる。文化の実践的活用を相対的、比較文化的な視点からとらえることができる。

●授業内容・授業計画

第1回　東アジア中華圏における伝統演劇を中心とする伝統文化を対象とし、その現代的な文化活用のあり方について講義する。

第2回　同上

第3回　同上

第4回　同上

第5回　同上

第6回　東南アジアのイスラーム圏を例に、イスラーム文化の活用による国家運営が多文化・多宗教社会における国民統合や共生的社会の確立に及ぼしてきた影響について講義する。

第7回　同上

第8回　同上

第9回　同上

第10回　同上

第11回　日本をアジアのなかの地方として把握し、文芸文化の交渉の歴史や実態、比較文化研究の方法と意義について講義する。

第12回　同上

第13回　同上

第14回　同上

第15回　同上

●事前・事後学習の内容

授業中に配布される資料等をもとに、基本的概念や用語などについて事前、事後に確認しておくこと。

●評価方法

到達目標への達成度をもとに評価する。評価は、期末レポートによって行う。

●受講生へのコメント

文化の実践的活用に関する自らの研究を、相対的、比較文化的にとらえるための視点を身につけてほしい。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

●備考

2019年度までの入学生は「アジア都市文化学基礎研究Ⅰ」に読替

授業科目名	科目NO.	LEGEN1503	授業コード	LM00150010
文化構想学研究c（文化資源） Advanced Studies in Cultural Management:c(Cultural Resources)			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	天野　景太／小田中　章浩／菅原　真弓 ／沼田 里衣			

●科目の主題

文化構想学研究の基礎に関する科目のうち、文化資源学分野の事項を主たる内容とした講義科目である。文化構想学の主要な対象である文化の創造・創発に関する事象、および文化の社会的運用のあり方について、多様な事例に基づきつつ原理的な考察をおこなう。文化資源学専攻に所属する4名の教員によるオムニバス講義とする。

●到達目標

文化の創造・創発に関する多様な事象、および文化の社会的運用のあり方に関する基礎的な研究および手法について理解することができる。さらに、自らの研究テーマと関連づけながら具体的な事例を想起し、考察を展開することができる。

●授業内容・授業計画

第1回：ガイダンス（天野）

第2回：文化および文化構想学に関する基礎研究（天野）

第3回：文化政策（政治・制度的視点）に関する研究（天野）

第4回：文化政策（経済・経営的視点）に関する研究（天野）

第5回：視覚芸術と文化資源（1）：文化資源学の考え方（菅原）

第6回：視覚芸術と文化資源（2）：美術史学と文化資源学（菅原）

第7回：博物館と文化資源（1）：文化資源を収集、保存、研究、公開する「ハコ」として（菅原）

第8回：博物館と文化資源（2）：文化資源としての博物館（菅原）

第9回：演劇と文化資源（1）：演劇の起源と共同体の形成（小田中）

第10回：演劇と文化資源（2）：演劇の上演と共同体の維持（小田中）

第11回：演劇と文化資源（3）：ショービジネスと共同体（小田中）

第12回：文化構想における福祉的観点（沼田）

第13回：音楽教育と文化実践（沼田）

第14回：文化構想に関する実践研究（沼田）

第15回：まとめ（天野）

●事前・事後学習の内容

事前学習として、毎回次の回のテーマに関する文献・論文を指示する。次回までに、それらを熟読した上で、疑問点や論点を整理し、ノートに記録しておくこと。事後学習として、授業を通じて得られた知識に関連する具体例を文献やWEB等を通じて調べておくこと。

●評価方法

文化構想学研究に関する理論的・方法論的知識の理解度、およびそれらの応用能力により評価する。毎回の講義後に提出してもらう小レポート（40%）および、期末レポート（60%）によって行う。自らが研究テーマとする文化事象を文化構想学的な視点から考察するための基礎的能力を獲得することが、単位取得の最低要件である。

●受講生へのコメント

本授業は、文化資源学専修の教員が担当するが、履修にあたり文化資源学研究に関する前提知識は必要としない。文化資源学専修所属の院生のみならず、幅広い専修からの履修を歓迎する。

●参考文献・教材

毎回ごとに指示する。また、プリントを配布する場合もある。

授業科目名	科目NO.	LEART2501	授業コード	LM19010010	
テクスト文化論研究 Advanced Studies in Culture Theory				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	野末　紀之				

●科目の主題

19世紀後半のイギリスの文学者John Addington SymondsのMemoirsを、いくつかの重要なエピソードを取上げながら精読する。

●到達目標

同性愛が刑罰の対象であった当時のイギリス社会において、Symondsはみずからの欲望をどのように表現し、また表現しえなかったのか。恋人や妻はどのようにとらえられていたのか。テクストと文化のさまざまな力（圧力、誘導、解放）はどのような関係にあるのかについて考察を加え、それにより得られた知見を各自の研究に活かすことが目標である。

●授業内容・授業計画

第1回：イントロダクション
第2回：生涯の概観
第3回：幼年期の夢（1）
第4回：幼年期の夢（2）
第5回：パブリック・スクールにおける事件（1）
第6回：パブリック・スクールにおける事件（2）
第7回：大学における事件（1）
第8回：大学における事件（2）
第9回：結婚（1）
第10回：結婚（2）
第11回：大陸での冒険
第12回：欲望と文化批判（1）
第13回：欲望と文化批判（2）
第14回：まとめ
第15回：試験

●事前・事後学習の内容

辞書を綿密に引き、内容を理解する事前学習に2時間、内容確認と問題点の整理および考察のための事後学習に1時間必要。

●評価方法

必要な出席回数を満たしたうえで、平常点（30%）、レポート（35%）、試験（35%）による。

●受講生へのコメント

同じようなテーマを扱った作品を積極的に読んでほしい。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

●備考

2019年度までの入学生は「表現文化学研究Ⅱ」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2502	授業コード	LM19020010	
テクスト文化論研究演習 Advanced Seminar in Culture Theory				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	野末　紀之				

●科目の主題

19世紀後半から20世紀初頭におけるイギリスの男性同性愛にかんするさまざまなテクストを精読する。

●到達目標

男性同性愛をめぐる歴史的表象および擁護論のありようを理解するとともに、その理解を現代的問題の考察につなげることが目標である。

●授業内容・授業計画

第1回：イントロダクション
第2回：男性同性愛への処罰
第3回：男性同性愛表象――詩（1）
第4回：男性同性愛表象――詩（2）
第5回：男性同性愛表象――詩（3）
第6回：男性同性愛表象――散文（1）
第7回：男性同性愛表象――散文（2）
第8回：男性同性愛表象――散文（3）
第9回：男性同性愛擁護論（1）
第10回：男性同性愛擁護論（2）
第11回：男性同性愛擁護論（3）
第12回：現代における男性同性愛表象（1）
第13回：現代における男性同性愛表象（2）
第14回：まとめ
第15回：試験

●事前・事後学習の内容

辞書を綿密に引いて内容理解に迫るための事前学習に2時間、内容確認と問題点の整理の事後学習に1時間必要。

●評価方法

必要な出席回数を満たしたうえで、平常点（30％）、レポート（35％）、試験（35％）による。

●受講生へのコメント

同じテーマの文学テクストを積極的に読んでほしい。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

●備考

2019年度までの入学生は「表現文化学研究演習2」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2503	授業コード	LM19030010
比較表現論研究 Advanced Studies in Comparative Representation			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	高島　葉子			

●科目の主題

本講義では、物語、特に民話、神話など本来口承文芸であった物語を中心に、その研究のための理論的枠組みと方法論を講義する。口承文芸は人類最古の物語形式であるが、無文字社会を含む様々な構造と体制の社会の中で、いかに物語が構想され、表現され、受容され、改変されてきたのか、物語を語る行為の持つ意味と役割、そして社会と物語のダイナミックな関係について、口承文芸学のみならず、比較文化・比較文学、文化人類学、歴史学、ジェンダー論等学際的観点から検討する方法を、研究書、論文の講読を通して学ぶ。

●到達目標

文化・社会と説話の関係、説話の変容、改変を研究する視点と方法を身につける。今年度は、Jack Zipsの著作を講読することを通して文化社会学的視点からの説話の研究方法を学ぶ。

●授業内容・授業計画

第1回：オリエンテーション
第2回：The origin of the fairy tale(1)文献講読と質疑応答・解説
第3回：The origin of the fairy tale(2)文献講読と質疑応答・解説
第4回：受講生による問題提起と討論
第5回：Rumpelstiltskin and the decline of female productivity(1)文献講読と質疑応答・解説
第6回：Rumpelstiltskin and the decline of female productivity(2)文献講読と質疑応答・解説
第7回：受講生による問題提起と討論
第8回：The cultural evolution of storytelling and fairy tales(1)文献講読と質疑応答・解説
第9回：The cultural evolution of storytelling and fairy tales(2)文献講読と質疑応答・解説
第10回：The cultural evolution of storytelling and fairy tales(3)文献講読と質疑応答・解説
第11回：受講生による問題提起と討論
第12回：Witch as fairy/fairy as witch: Unfathomable Baba Yagas(1)文献講読と質疑応答・解説
第13回：Witch as fairy/fairy as witch: Unfathomable Baba Yagas(2)文献講読と質疑応答・解説
第14回：Witch as fairy/fairy as witch: Unfathomable Baba Yagas(3)文献講読と質疑応答・解説
第15回：受講生による問題提起と討論

●事前・事後学習の内容

毎回、授業前には講読箇所の予習を行い、要点をまとめておく。授業後は、講読箇所の理解を深める。

●評価方法

授業への参加40%、学期末レポート60%で評価する。毎回の授業では、文献講読の正確さを質擬応答により評価し、期末レポートでは、文献講読を通して得た知見を踏まえて、独自の見解を展開することができているかによって評価する。毎回の予習と、指示した字数を満たし論理的に展開した期末レポートの提出を、合格のための最低基準とする。

●受講生へのコメント

グリム、ペローの童話の代表話、ロシア民話のバーバ・ヤガーの登場する話を読み、民間説話の基本的な知識は予め学習しておく必要がある。

●参考文献・教材

Jack Zipes, Fairy Tale as Myth: Myth as Fairy Tale (1993), The Irresistible Fairy Tale: The Cultural and Social History of a Genre(2012)から抜粋でプリントを配布する

●備考

2019年度までの入学生は「表現文化学研究Ｖ」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2504	授業コード	LM19040010	
比較表現論研究演習 Advanced Seminar in Comparative Representation				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
演習	高島　葉子				

●科目の主題

ブリテン諸島を中心とするヨーロッパの妖精伝承と日本の妖怪伝承との比較研究を通して比較文化研究の可能性を探 る

●到達目標

妖精伝承、妖怪伝承を通して民衆の世界観を理解する方法を学ぶとともに、比較研究による異文化理解、文化比較などの研究 の基本的方法を身につける。また、日本文化についての英語文献を読むことにより、英語による日本文化研究の発信のための基礎固めを目指す。

●授業内容・授業計画

イギリスの民俗学者Katharine Briggsの著作と日本の妖怪文化研究者Micheal D. Fosterによる文献を輪読する形式で、妖 精伝承と妖怪伝承について学ぶ。担当者にレジュメを作成して報告してもらった後、受講生全員で討論し理解を深める。 学期末には各自のテーマで発表し、レポートにまとめてもらう。

第1回 ガイダンス
第2回 文献講読と討論
第3回 文献講読と討論
第4回 文献講読と討論
第5回 文献講読と討論
第6回 文献講読と討論
第7回 文献講読と討論
第8回 文献講読と討論
第9回 文献講読と討論
第10回 文献講読と討論
第11回 各自のテーマに基づく研究報告
第12回 各自のテーマに基づく研究報告
第13回 各自のテーマに基づく研究報告
第14回 各自のテーマに基づく研究報告
第15回 まとめ

●事前・事後学習の内容

事前に文献を読み込み、事後に学んだ知識を定着させ、それに基づいて各自で考察を行う。

●評価方法

授業での報告および議論への参加50%、レポート50%で評価する。

●受講生へのコメント

妖精や妖怪は、古くから現代にいたるまで様々なジャンルの作品にモチーフとして使われてきた。民間伝承の研究を専門としない学生にも妖精・妖怪伝承の知識は有用であろう。

●参考文献・教材

プリント配布

●備考

2019年度までの入学生は「表現文化学研究演習5」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2505	授業コード	LM19050010
ポピュラー文化論研究 Advanced Studies in Popular Culture			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 増田　聡			

●科目の主題

本講義では、音楽をはじめとしたポピュラー文化の表現と構造を研究するための学際的方法論を学ぶ。「ポピュラー文化」概念の史的理解を踏まえつつ、主として （1）文化研究・大衆文化論（2）芸術学・美学（3）メディア論の三領域におけるポピュラー文化研究の理論と方法を概観するとともに、受講生の研究関心に応じて主要研究や最新研究のリサーチを行い、ポピュラー文化研究に必要な素養を養成する。また、都市空間やネット空間におけるポピュラー文化の現状調査の方法を身につけ、新たな文化表現・文化実践を構想するための基礎的知見を養う。

●到達目標

ポピュラー文化研究に関する理論的視点の概要を身につけ、自身の研究テーマに応じて的確な理論を取り入れ、自身の研究の研究史的位置付けについて的確に説明できるようになること。

●授業内容・授業計画

第1回:オリエンテーション
第2回:ポピュラー文化概念の歴史
第3回:大衆文化論(1)
第4回:大衆文化論(2)
第5回:大衆文化論(3)
第6回:メディア論(1)
第7回:メディア論(2)
第8回:メディア論(3)
第9回:ポピュラー文化の美学(1)
第10回:ポピュラー文化の美学(2)
第11回:カルチュラル・スタディーズ(1)
第12回:カルチュラル・スタディーズ(2)
第13回:ポピュラー文化の調査法(1)
第14回:ポピュラー文化の調査法(2)
第15回:まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習:毎回提示されるテキストの該当箇所を事前に精読し、内容を把握するとともに疑問点をメモしておく。第13回、第14回については、調査対象に関する知見を指示された方法で身につけ、調査に備える。

事後学習:授業内の討議を踏まえて、テキストを再読し、理論的要点を把握する。第13回、第14回については、調査を踏まえて明らかになった知見をまとめておく。

●評価方法

ポピュラー文化研究に関する理論的視点の概要を身につけ、自身の研究テーマに応じて的確な理論を取り入れ、自身の研究を研究史的に位置付ける能力について評価を行う。授業での報告や討議への貢献に基づいて総合的に評価する(100%)。ポピュラー文化研究の理論史の概要の把握、および自身の研究テーマとの関連について解説できることを合格の最低基準とする。

●受講生へのコメント

授業内容の理解を確認しつつ進むので、積極的に発言を行うことが望まれる。また、受講生の関心と能力に応じて都市空間やネット空間における実践調査を行うこともある。

●参考文献・教材

渡辺裕監訳『アドルノ　音楽・メディア論集』(平凡社)、Th.W.アドルノ『音楽社会学序説』(平凡社)、毛利嘉孝『ポピュラー音楽と資本主義』(せりか書房)。その他、授業内で指示する。

●備考

2019年度までの入学生は「都市文化学研究」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2506	授業コード	LM19060010
ポピュラー文化論研究演習 Advanced Seminar in Popular Culture			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 増田　聡			

●科目の主題

音楽をはじめとしたポピュラー文化の表現と構造を研究するための学際的方法論の訓練を行う。（１）文化研究・大衆文化論（２）芸術学・美学（３）メディア論の領域から、受講生の能力と関心に基づいて選択された日本語あるいは英語文献を精読することで、ポピュラー文化研究に必要となる研究手法と理論的思考力を発展させ、各自の関心に応じた研究対象に対して適切に用いることができる能力を養成する。また、理論的な研究を文化実践へと展開させる構想力を獲得すべく、必要に応じて都市空間やネット空間におけるポピュラー文化実践の現状調査を行うとともに、新たな文化実践の可能性について検討を行う。

●到達目標

ポピュラー文化研究に関する理論的視点の最新の研究動向について把握し、自身の研究テーマに応じて的確な理論を取り入れ、適切な理論的観点を用いて説明できるようになること。

●授業内容・授業計画

第1回：オリエンテーション
第2回：文献購読と討議（文化研究・大衆文化論）
第3回：文献購読と討議（文化研究・大衆文化論）
第4回：文献購読と討議（文化研究・大衆文化論）
第5回：文献購読と討議（文化研究・大衆文化論）
第6回：文献購読と討議（ポピュラー音楽の美学）
第7回：文献購読と討議（ポピュラー音楽の美学）
第8回：文献購読と討議（ポピュラー音楽の美学）
第9回：文献購読と討議（ポピュラー音楽の美学）
第10回：文献購読と討議（メディア論）
第11回：文献購読と討議（メディア論）
第12回：文献購読と討議（メディア論）
第13回：文献購読と討議（メディア論）
第14回：文献購読と討議（メディア論）
第15回：まとめ

●事前・事後学習の内容

事前学習：毎回提示されるテキストの該当箇所を事前に精読し、内容を把握するとともに疑問点をメモしておく。
事後学習：授業内の討議を踏まえて、テキストを再読し、理論的要点を把握する。

●評価方法

ポピュラー文化研究に関する理論的視点の最新の研究動向について把握し、自身の研究テーマに応じて的確な理論を取り入れ、適切な理論的観点を用いて説明できる能力について評価を行う。授業での報告や討議への貢献を総合的に評価する（100%）。ポピュラー文化研究の近年の動向の把握、および自身の研究テーマとの関連について解説できることを合格の最低基準とする。

●受講生へのコメント

授業内容の理解を確認しつつ進むので、積極的に発言を行うことが望まれる。また、受講生の関心と能力に応じて都市空間やネット空間における実践調査を行うこともある。

●参考文献・教材

毛利嘉孝（編）『アフター・ミュージッキング』（東京藝術大学出版会）、井手口彰典『同人音楽とその周辺』（青弓社）、飯田豊（編著）『現代メディア・イベント論』（勁草書房）を予定するが、履修者の関心に応じて変更する可能性がある。授業内で適宜指示する。

●備考

2019年度までの入学生は「都市文化学研究演習」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2507	授業コード	LM19070010
表象文化構造論研究 Advanced Studies in Culture and Representation			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	海老根　剛			

●科目の主題

映像の制作・流通・受容の全過程がほぼ完全にデジタル化した現在、20世紀の映像表現の考察において自明の前提をなしていた諸カテゴリーがことごとく機能不全に陥っているようにみえる。たとえば、実写／アニメーション、動画／静止画、視覚（見ること）／触覚（触れること）はもはや対立概念であることをやめ、ショット／モンタージュという映画表現の基本原理もコンポジティングの論理に浸透されて骨抜きにされていく。また、現在、日々生み出される膨大な映像の多くは、もはや人間によって撮影されることも、見られることも、必ずしも必要としていない。フローと化した映像は、まずマシンによって「見られ」、アルゴリズムによって「読まれ」るのであり、その後ではじめて私たちの前に姿を現す。今年の授業では、こうした映像のあり方の変容を、国内外の多様な文献を参照しながら考えてみたい。

出発点として、生命をめぐるテクノロジーの進展とアニメーション映像の進化を the animatic apparatus（アニメーション装置）という概念を用いて分析する Deborah Levitt の著作 ″The Animatic Apparatus. Animation, Vitality, and the Future of the Image″（2018, Zero Books）を購読する。本書では押井守のアニメーションや初音ミクのライブなども論じられているので、適宜、具体例を参照しながら議論を進めたい。その後、アニメーションやデジタル映像に関する基本文献や技術的文献も参照しながら、現在の映像のありようについて考察を深めていく予定。

●到達目標

現代の映像表現の考察を通して現代文化の変容を考察する。またそこで得られた知見をみずからの研究に役立てる。

●授業内容・授業計画

第1回 イントロダクション
第2回 The Animatic Apparatus. (1)
第3回 The Animatic Apparatus. (2)
第4回 The Animatic Apparatus. (3)
第5回 The Animatic Apparatus. (4)
第6回 The Animatic Apparatus. (5)
第7回 作品上映
第8回 デジタル映像論の購読（1）
第9回 デジタル映像論の購読（2）
第 10 回 デジタル映像論の購読（3）
第 11 回 デジタル映像論の購読（4）
第 12 回 アニメーション論の購読（1）
第 13 回 アニメーション論の購読（2）
第 14 回 アニメーション論の購読（3）

●事前・事後学習の内容

各回の授業で購読する文献を読んで授業に参加すること。また各自で文献で論じられている作品などを鑑賞することが望ましい。

●評価方法

授業中に行う発表にもとづいて評価する。

●受講生へのコメント

Deborah Levitt の著作は狭い意味でのアニメーション研究ではなく、映像表現を通して現代社会の変容を考察するメディア研究です（著者自身は media ethology と呼んでいます）。各自の研究関心に引き寄せて文献を読み、みずからの研究に役立ててください。

●参考文献・教材

Deborah Levitt. The Animatic Apparatus. Animation, Vitality, and the Future of the Image, 2018, Zero Books. など。

●備考

2019年度までの入学生は「表現文化学研究Ⅳ」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2508	授業コード	LM19080010
表象文化構造論研究演習 Advanced Seminar in Culture and Representation			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 海老根　剛			

●科目の主題

後期の授業も前期に引き続いて現在の映像のあり方を考察する。

映像の制作・流通・受容の全過程がほぼ完全にデジタル化した現在、20世紀の映像表現の考察において自明の前提をなしていた諸カテゴリーがことごとく機能不全に陥っているようにみえる。たとえば、実写／アニメーション、動画／静止画、視覚（見ること）／触覚（触れること）はもはや対立概念であることをやめ、ショット／モンタージュという映画表現の基本原理もコンポジティングの論理に浸透されて骨抜きにされていく。また、現在、日々生み出される膨大な映像の多くは、もはや人間によって撮影されることも、見られることも、必ずしも必要としていない。フローと化した映像は、まずマシンによって「見られ」、アルゴリズムによって「読まれ」るのであり、その後ではじめて私たちの前に姿を現す。今年の授業では、こうした映像のあり方の変容を、国内外の多様な文献を参照しながら考えてみたい。

出発点として、生命をめぐるテクノロジーの進展とアニメーション映像の進化を the animatic apparatus（アニメーション装置）という概念を用いて分析する Deborah Levitt の著作 ″The Animatic Apparatus. Animation, Vitality, and the Future of the Image″（2018, Zero Books）を購読する。本書では押井守のアニメーションや初音ミクのライブなども論じられているので、適宜、具体例を参照しながら議論を進めたい。その後、アニメーションやデジタル映像に関する基本文献や技術的文献も参照しながら、現在の映像のありようについて考察を深めていく予定。

●到達目標

現代の映像表現の考察を通して現代文化の変容を考察する。またそこで得られた知見をみずからの研究に役立てる。

●授業内容・授業計画

第1回 イントロダクション
第2回 The Animatic Apparatus. (1)
第3回 The Animatic Apparatus. (2)
第4回 The Animatic Apparatus. (3)
第5回 The Animatic Apparatus. (4)
第6回 The Animatic Apparatus. (5)
第7回 作品上映
第8回 デジタル映像論の購読（1）
第9回 デジタル映像論の購読（2）
第 10 回 デジタル映像論の購読（3）
第 11 回 デジタル映像論の購読（4）
第 12 回 アニメーション論の購読（1）
第 13 回 アニメーション論の購読（2）
第 14 回 アニメーション論の購読（3）

●事前・事後学習の内容

各回の授業で購読する文献を読んで授業に参加すること。また各自で文献で論じられている作品などを鑑賞することが望ましい。

●評価方法

授業中に行う発表にもとづいて評価する。

●受講生へのコメント

Deborah Levitt の著作は狭い意味でのアニメーション研究ではなく、映像表現を通して現代社会の変容を考察するメディア研究です（著者自身は media ethology と呼んでいます）。各自の研究関心に引き寄せて文献を読み、みずからの研究に役立ててください。

前期の授業の続きなので、前期の「表象文化構造論研究」を履修していることが望ましい。

●参考文献・教材

Deborah Levitt. The Animatic Apparatus. Animation, Vitality, and the Future of the Image, 2018, Zero Books. など。

●備考

2019年度までの入学生は「表現文化学研究演習4」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2509	授業コード	LM19090010
表現文化学特別講義a Advanced Studies on Specific Issues in Culture and Representation:a			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 山中　千恵			

●科目の主題

本授業では、主に日本で発展してきたマンガというメディアの特性とそれが生み出す文化について考察する。マンガ史、マンガ産業論、表現論などのマンガ・コミックス研究の成果を整理し、社会学的な観点も踏まえつつ、マンガ文化について理解していくこととする。

●到達目標

マンガ研究の基本的理論を理解し、研究を行う上で必要な知識を習得する。

●授業内容・授業計画

第1回　イントロダクション：授業スケジュールと注意事項を確認し，この授業での到達目標や身につく力についての説明を行なう。また，この授業で扱う「マンガ研究」の特性について，簡単に学習する。さらに，事前・事後学習として使う書籍等についても説明する。

第2回～3回マンガの歴史：マンガはいかに社会的に位置づけられてきたのか。言説および産業構造からこれを考察する。

第4回～7回マンガ表現論：マンガ表現論の議論及び、役割語の議論に基づきマンガ表現の特質について考察する。

第8回マンガと教育：学習マンガをとりあげ、その歴史とイデオロギーについて考察する。

第9回マンガと戦争の記憶：戦争・災害を描くマンガをとりあげ、リアリティとマンガ表現の関係について考察する。

第10回　少女マンガ：少女マンガの歴史を確認し、その特徴を考察する。

第11回～14回（京都国際マンガミュージアムでの授業）　マンガとミュージアム：マンガの展示やマンガとミュージアムの関係について考察する。

第15回授業のまとめ

●事前・事後学習の内容

各授業回に以下の事前事後学習を行うこと。

［事前学習］大学の授業支援システムWebClassにアクセスし、配付プリント等を印刷・参照し、授業内容を理解しておく。

［事後学習］配布プリントを読み返し、学んだ内容に関連する参考資料にあたって理解を深めるとともに、新しく学んだ語彙や概念を要約し、自分なりに説明できるようにしておく。

●評価方法

平常点（授業時レポート・小テストなど）100％

●受講生へのコメント

集中講義最終日は京都国際マンガミュージアムでの学外実習を行います。

●参考文献・教材

授業中に指示・配布

●備考

2019年度までの入学生は「表現文化学研究Ⅵ」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2510	授業コード	LM19100010
表現文化学特別講義b Advanced Studies on Specific Issues in Culture and Representation:b			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 木村　覚			

●科目の主題

テクノロジーの進展と結びつけながら、とくに身体的没入の問題に主眼を置いて諸々の文化現象を美学的に研究します。ヴァーチャル・リアリティやVtuberなど、身体拡張を可能にする様々な技術が私たちを取り巻いています。スマートフォンもそうした身体拡張の道具と言えるでしょう。人文学を研究する私たちもそうした事象に取り囲まれて生きています。主として以下の４点に焦点を当てながら、こうした今日的事象を考察していきます。

「ヴァーチャル」: 没入体験と美学の関係、virtualの意味、VRの体験を通してaffordanceを考える。Vtuberなどを　通して「アバター」のアイデンティティについて考える。

「優美」:「ピュグマリオン」の神話を媒介にして美学の歴史から見た「没入」の問題を考える。19世紀のバレエを参考に、没入のロジックを解明してゆく。

「ダンス」: 20世紀のモダンダンス が問題にした「キネステジア（運動感覚）」について検討する。モダンダンス以後のempathyについて検討する。CGの身体と現実の身体との比較を通してダンスを再考する。

「システム」:「システム」とアートの関係、また「障害」をキーワードに身体拡張の問題を考察する。

●到達目標

テクノロジーを介した今日的文化現象を人文学的に研究するために必要ないくつかの考え方が身につく。「優美」を中心に西洋美学の基本的な思考が身につく。20世紀のダンスの問題が自分の課題として考えられる。「システム」をめぐるアートの考え方が身につく。

●授業内容・授業計画

第1回　イントロダクション　没入と美学
第2回　「バーチャル」について
第3回　「VR」について
第4回　アバターについて
第5回　ピュグマリオンと優美
第6回　カスティリオーネの優美論
第7回　ディドロとルソーの優美論
第8回　バレエ「コッペリア」をめぐって
第9回　モダンダンスと感情移入（empathy）
第10回　ポストモダンダンスと感情移入（empathy）
第11回　暗黒舞踏と感情移入（empathy）
第12回　踊るCGと踊る身体
第13回　「システム」とアート
第14回　「障害」と身体拡張

●事前・事後学習の内容

各回で取り上げた文化現象に関して、インターネットの中で調べられるものについては、復習として各自アクセスして自習してください。また第3回で「VR」を体験してもらいます。事前に各自のスマート・フォンに試してみたいVRのコンテンツ、アプリを入れておいてください。ゴーグルを持っている人は、実際に試してみてください。当日はスマート・フォンを持参してください。

●評価方法

各回での小レポート（10%）＋学期末レポート（90%）

主として授業の理解と授業で紹介した問題を自分の問題として捉え応用する力を評価します。

●受講生へのコメント

ダンスなど扱いますが、経験がなくても問題ありません。領域横断的で欲張りな内容なので、どの分野でも構いませんので、自分なりに関心の持てるテーマやジャンルを探しながら講義を受けてください。上にも記しましたが、VRは実際に体験したいと思っています。積極的な授業参加を希望します。

●参考文献・教材

授業中に配布します。

●備考

2019年度までの入学生は「表現文化学特殊研究」に読替

授業科目名	科目NO.	LEART2511	授業コード	LM19110010
表現文化学総合研究 I Comprehensive Studies in Culture and Representation I			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	高島　葉子／野末　紀之／増田　聡			

●科目の主題

表現文化学という新しい領域横断的な学問の成立の過程と、研究の前提となる知識（文化理論など）について総合的に習得させる。また言語テクスト、民間説話、ポピュラー音楽、映画、アニメーション等の文化的コンテンツを研究するにあたって必要な基礎的方法論についても習熟させる。専修所属教員全員による集団指導体制のもと、受講生による研究発表や討議を通して、受講生個々の問題関心を表現文化学分野の中で研究課題として具体化させるとともに、研究発表のためのプレゼンテーション技術も学習させる。

（野末紀之）言語テクスト、文学の表象およびその制度化の歴史に関する研究について担当する。
（高島葉子）民間説話の比較文化的研究および民間説話に関する文化社会学的研究について担当する。
（増田聡）ポピュラー文化論、メディア論的な研究について担当する。
（海老根剛）映画、アニメーション、ゲームといった映像文化研究について担当する。

●到達目標

表現文化学研究にあたって必要とされる知見、研究方法論習得するとともに、研究発表や討議を通して、独自の見解を説得力をもってプレゼンテーションできるスキルを身につける。

●授業内容・授業計画

第1回:オリエンテーション
第2回:受講生各自の研究テーマに基づいて基本文献、論文の紹介
第3回:受講生各自の研究テーマに基づいて基本文献、論文の紹介
第4回:受講生各自の研究テーマに基づいて基本文献、論文の紹介
第5回:受講生各自の研究テーマに基づいて基本文献、論文の紹介
第6回:各自の研究テーマに関連した基本文献、論文の考察
第7回:各自の研究テーマに関連した基本文献、論文の考察
第8回:各自の研究テーマに関連した基本文献、論文の考察
第9回:各自の研究テーマに関連した基本文献、論文の考察
第10回:各自の研究テーマに関する基本文献、論文、文献の考察
第11回:各自の研究テーマに関する基本文献、論文について議論を深める
第12回:各自の研究テーマに関する基本文献、論文について議論を深める
第13回:各自の研究テーマに関する基本文献、論文について議論を深める
第14回:各自の研究テーマに関する基本文献、論文について議論を深める
第15回:まとめ、今後の研究方針を示す

●事前・事後学習の内容

発表担当者は、毎回、発表のために事前に文献資料の精読のうえレジュメ作成を作成すること。また、事後は、指導教員からコメントを整理し、理解を深めておくこと。

●評価方法

到達目標への到達度を基に評価する。授業における発表60％、議論への参加40％により評価する。

合格のための最低基準は、毎回の議論に参加し、表現文化学研究において必要とされる基本的知見を用いて、明確かつ説得的に各自のテーマに関するプレゼンテーションを行うことである。

●受講生へのコメント

自己の研究領域のみではなく、表現文化研究全般における基本的概念などについても習得・確認することを常に意識すること。

●参考文献・教材

随時指示する。

授業科目名	科目NO.	LEART2512	授業コード	LM19120010
表現文化学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Culture and Representation Ⅱ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	高島　葉子／野末　紀之／増田　聡			

●科目の主題

表現文化学という新しい領域横断的な学問の成立の過程と、研究の前提となる知識（文化理論など）について総合的に習得させる。また言語テクスト、民間説話、ポピュラー音楽、映画、アニメーション等の文化的コンテンツを研究するにあたって必要な基礎的方法論についても習熟させる。専修所属教員全員による集団指導体制のもと、受講生による研究発表や討議を通して、受講生個々の問題関心を表現文化学分野の中で研究課題として具体化させるとともに、研究発表のためのプレゼンテーション技術も学習させる。

（野末紀之）言語テクスト、文学の表象およびその制度化の歴史に関する研究について担当する。
（高島葉子）民間説話の比較文化的研究および民間説話に関する文化社会学的研究について担当する。
（増田聡）ポピュラー文化論、メディア論的な研究について担当する。
（海老根剛）映画、アニメーション、ゲームといった映像文化研究について担当する。

●到達目標

総合研究Ⅰで修得した知見・スキルの基礎の上に立って、さらに修士論文執筆に向けて総合的知見を獲得し、これに基づいて論文の具体的テーマを設定し、執筆のための計画を立てる。

●授業内容・授業計画

第1回：オリエンテーション
第2回：各自の研究テーマに関する前期の議論、考察のまとめ
第3回：各自の研究テーマに関する前期の議論、考察のまとめ
第4回：各自の研究テーマに関する前期の議論、考察のまとめ
第5回：研究を深めるために必要な資料、文献を紹介、整理
第6回：研究を深めるために必要な資料、文献を紹介、整理
第7回：研究を深めるために必要な資料、文献を紹介、整理
第8回：修士論文にまとめる論点についての考察、議論
第9回：修士論文にまとめる論点についての考察、議論
第10回：修士論文にまとめる論点についての考察、議論
第11回：修士論文にまとめる論点についての議論を深める
第12回：修士論文にまとめる論点についての議論を深める
第13回：修士論文にまとめる論点についての議論を深める
第14回：修士論文にまとめる論点についての議論を深める
第15回：各自の課題を整理、修士論文執筆の計画をたてる

●事前・事後学習の内容

発表担当者は、毎回の発表のために事前に文献資料の精読のうえレジュメ作成を作成すること。また、事後は、指導教員からコメントを整理し、理解を深めておくこと。

●評価方法

到達目標への到達度を基に評価する。授業における発表60％、議論への参加40％により評価する。

合格のための最低基準としては、毎回の議論に参加し、前期で習得した知見とスキルに基づいた発表と議論を通して、最終的に修士論文のテーマを設定し、執筆計画を立てることが求められる。

●受講生へのコメント

自己の研究領域のみではなく、表現文化研究全般における基本的概念などについても習得・確認することを常に意識すること。

●参考文献・教材

随時指示する。

授業科目名	科目NO.	LEASA2501	授業コード	LM20010010
アジア文化構想学研究演習 Advanced Seminar in Cultural Managementin Asia			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	多和田　裕司／松浦　恆雄／堀　まどか			

●科目の主題

本演習では、「文化構想学研究ｂ」での学修を深化させるべく、日本を含めた東アジアおよび東南アジア地域における文化の実践的、課題解決的な活用を主題とする内外の先行研究を演習形式で講読する。国民統合や対外的なナショナルイメージの創出、集客や地域振興、公共的意識の醸成など、現在、アジア諸地域においても、政治、経済、社会の各領域で文化の活用が図られている。本演習では、先行研究の講読を通して、さまざまな文化や文化的コンテンツの活用方法、それがもたらした結果やその功罪などを把握する。

●到達目標

東アジアおよび東南アジアにおける文化活用に関する文献をもとに、文化の実践的活用について自ら検討することができる。

●授業内容・授業計画

第1回　東アジア諸文化における文化活用についての文献講読
第2回　同上
第3回　同上
第4回　同上
第5回　同上
第6回　東南アジア諸文化における文化活用についての文献講読
第7回　同上
第8回　同上
第9回　同上
第10回　同上
第11回　日本文化における文化活用についての文献講読
第12回　同上
第13回　同上
第14回　同上
第15回　同上

●事前・事後学習の内容

毎回指定される課題文献について、内容の要約、質疑への準備などを行っておくこと。

●評価方法

到達目標への達成度をもとに評価する。評価は、受講生による各回の発表や討議内容など、平常点によって行う。

●受講生へのコメント

受講生の報告と議論を中心とする授業であり、受講生には積極的な授業参加を求める。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LEASA2502	授業コード	LM20020010
アジア地域文化創造論研究 Advanced Studies in Region and CulturalCreation in Asia			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 松浦　恆雄			

●科目の主題

本科目の主題は、アジア地域文化、特に中華圏の文化状況に関する理解に基づく文化創造に就いて、深い知見を獲得することにある。

●到達目標

本科目の今年度の到達目標は、中華圏の文学芸術に対する理解に基づく文化創造に就いて、深く理解するための視野を身につけることである。

●授業内容・授業計画

授業では、蕭映『蒼涼時代的霊魂之舞　20世紀40年代中国現代主義詩歌研究』を章ごとに検討し、取り上げられている詩人、詩歌についても広く検討する。授業は、受講生の報告と教員の説明を織り交ぜて行う。受講生による議論も重視する。

第一回:ガイダンス。
第二回:第一章(1)
第三回:第一章(2)
第四回:第二章(1)
第五回:第二章(2)
第六回:第三章(1)
第七回:第三章(2)
第八回:第四章(1)
第九回:第四章(2)
第十回:第五章(1)
第十一回:第五章(2)
第十二回:第六章(1)
第十三回:第六章(2)
第十四回:まとめ。

●事前・事後学習の内容

事前に、授業で取り扱うテキストについて十分な準備をして臨むこと。事後には、授業で配布した資料などをきちんと整理し、読み直すこと。

●評価方法

平常点(出席、報告、議論)

●受講生へのコメント

第一回の授業で、具体的な授業の進め方や受講生の担当の仕方についての説明を行うので、必ず出席すること。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

授業科目名	科目NO.	LEASA2503	授業コード	LM20030010
アジア地域文化創造論研究演習 Advanced Seminar on Region and CulturalCration in Asia			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 松浦　恆雄			

●科目の主題

本科目の主題は、アジア地域文化、特に中華圏の文化状況に関する理解に基づく文化創造に就いて、より深い知見を獲得することにある。

●到達目標

本科目の到達目標は、アジア地域文化、特に中華圏の文学芸術について、より深く理解するための視野を身につけることである。

●授業内容・授業計画

授業では、台湾を代表する演劇研究者である王安祈氏の著述を読む。受講生の報告と教員の説明とを織り交ぜて行う。受講生による議論も重視する。

第一回:ガイダンス。
第二回:『為京劇表演体系発声』国家出版社、2006年(1)
第三回:同上(2)
第四回:同上(3)
第五回:同上(4)
第六回:『性別、政治与京劇表演文化』台大出版中心、2011年(1)
第七回:同上(2)
第八回:同上(3)
第九回:同上(4)
第十回:『録音留声　名伶争鋒――戯曲物質載体研究』国家出版社、2016年(1)
第十一回:同上(2)
第十二回:同上(3)
第十三回:同上(4)
第十四回:まとめ。

●事前・事後学習の内容

事前に、授業で扱うテキストを十分に読んでおくこと、爾後には、授業で配布する資料などをきちんと整理して、テキストもう一度読み直すこと。

●評価方法

平常点(出席、報告、議論)

●受講生へのコメント

第一回目の授業で、授業の進め方や受講生の報告の仕方についての説明をするので、必ず出席すること。

●参考文献・教材

プリントを配布する。

授業科目名	科目NO.	LEASA2504	授業コード	LM20040010	
アジア共生文化政策論研究 Advanced Studies in Multicultural Policyin Asia				単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 多和田　裕司				

●科目の主題

本講義では、しばしば多文化共生社会の代表例として言及されるマレーシアについて、多文化共生の理念と実践の詳細を把握し、共生的な文化を構想するための同国の方策について考察する。多様な民族、言語、宗教からなる同国の方策を学ぶことで、共生文化構築のための具体策を検討する。

●到達目標

マレーシアにおける多文化共生の現状、共生政策、課題や問題点などを説明できる。共生文化構築のための方策を、現実の社会状況との関連のなかで考えることができる。

●授業内容・授業計画

第1回:多文化共生から共生文化へ:授業のねらい
第2回:マレーシアにおける多文化状況
第3回:多文化社会の形成
第4回:同上
第5回:多文化の共存と緊張
第6回:多文化共生政策(経済)
第7回:多文化共生政策(言語と教育)
第8回:多文化共生政策(文化)
第9回:多文化共生政策(宗教)
第10回:グローバル化と多文化状況の変容
第11回:同上
第12回:共生文化の萌芽
第13回:同上
第14回:多文化と共生文化をめぐる対立
第15回:講義の総括

●事前・事後学習の内容

授業中に紹介される参考文献を読んでおくこと。

●評価方法

到達目標への達成度をもとに評価する。評価は、期末レポートによっておこなう。合格のための最低基準として、マレーシアにおける多文化共生の現状や政策、課題や問題点などを説明できること、ならびに共生文化構築のための方策を、現実の社会状況との関連のなかで検討できることを求める。

●受講生へのコメント

マレーシアでの具体的事例を参考にしながら、真に共生的な社会実現のための方策を考えてほしい。

●参考文献・教材

授業中に指示する。

授業科目名	科目NO.	LEASA2505	授業コード	LM20050010	
アジア共生文化政策論研究演習 Advanced Seminar in Multicultural Policyin Asia				単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 多和田　裕司				

●科目の主題

本講義では、文化的多様性に富む東南アジア諸社会を対象としながら、多文化共生の実際と課題について、とくに文化人類学および関連領域の代表的文献の講読と受講生による発表ならびに討論をもとに検討する。東南アジアにおける多文化共生の現状を深く知ることによって、共生文化の構想に向けた理論と方策について受講生とともに考える。

●到達目標

専門文献をもとに、共生文化の構想に向けた方策を自ら考えることができる。

●授業内容・授業計画

第1回:オリエンテーション
第2回:多文化政策にかんする文献の講読
第3回:同上
第4回:同上
第5回:同上
第6回:グローバル化と文化変容にかんする文献の講読
第7回:同上
第8回:同上
第9回:同上
第10回:共生文化の創造にかんする文献の講読
第11回:同上
第12回:同上
第13回:同上
第14回:受講生による発表
第15回:受講生による発表

●事前・事後学習の内容

毎回指定される課題文献について、内容の要約、質疑への準備などをおこなっておくこと。

●評価方法

到達目標への達成度をもとに評価する。評価は、受講生による発表によっておこなう。合格のための最低基準として、共生文化の構想について、自らの見解をまとめ発表できることを求める。

●受講生へのコメント

受講生の報告と議論を中心とする授業であり、受講生には積極的な授業参加を求める。

●参考文献・教材

授業中に適宜指示する。

●備考

2019年度までの入学生は「アジア民族文化学研究演習」に読替

授業科目名	科目NO.	LEASA2506	授業コード	LM20060010
アジア比較文化実践論研究 Advanced Comparative Studies and Practice in Asian Culture			単位数	2単位
授業形態 講義／演習	担当教員名 堀　まどか			

●科目の主題

比較文化学の研究方法の基礎と課題について学び、領域横断的・複合領域的な研究とその可能性を実践的に学ぶ。本講座では、〈境界の文学・文学の境界〉をキーワードに、日本を含めたアジア都市を題材にした日本語文学を中心にし、個々のテキストや作家について、一国文学史観を超えて、国際的な文脈のなかで再構築する。また、文化相対主義の観点から、従来の文学史の陥穽についても検討していく。近代日本を軸に、「内」と「外」の影響関係や相互交流を考え、そこにまつわる境界性や臨界点を問うことで、アジア文化に対する未来志向の視野と認識を構築することをめざす。本科目は、講義と受講生によるディスカッション・報告を交えて行う。

●到達目標

学生が、比較文化学の研究方法の基礎と歴史を理解し把握することができる。また、領域横断的・複合領域的な文化研究のその可能性を実践的に応用的に考え、独自の観点を説明できる。

●授業内容・授業計画

第1回:「境界者」のまなざし/イントロダクション
第2回:文学の証言性①
第3回:文学の証言性②
第4回:文学の象徴性と寓話性①
第5回:文学の象徴性と寓話性②
第6回:文学研究から文化研究へ①
第7回:文学研究から文化研究へ②
第8回:アジアの文化と文学①
第9回:アジアの文化と文学②
第10回:アジアの文化と文学③
第11回:多文化主義の現在①
第12回:多文化主義の現在②
第13回:比較の視点と課題
第14回:総括・まとめ

●事前・事後学習の内容

前回までに配布された作品、論文、記事を事前に読み、疑問点や課題点を整理しておくこと。

●評価方法

(1)到達目標の達成度について評価をおこなう。
(2)評価方法は、授業内での演習発表(質疑、ディスカッションを含む)(60%)、レポート(40%)
(3)合格のための最低基準は70%

●受講生へのコメント

自主的に、積極的に、学ぶ姿勢が求められる。

●参考文献・教材

毎回、レジュメを配布する。参考書は、受講生の到達度に合わせて、授業内で指示する。

●備考

2019年度までの入学生は「アジア比較文化学研究」へ読替

授業科目名	科目NO.	LEASA2507	授業コード	LM20070010
アジア比較文化実践論研究演習 Advanced Comparative Seminar and Practice in Asian Culture			単位数	2単位
授業形態 講義／演習	担当教員名 堀　まどか			

●科目の主題

日本語の（もしくは日本語に翻訳された）文学・文芸をテキストに、アジア諸地域の文化表象を読み解き、研究分析する。歴史、政治、時事問題、地理風土を合わせて、「文化」の諸相について分析し、研究発表、討論を行う。現代から未来へとつながるアジアの共通理解・共通認識のために何が必要なのか。アジアの複雑な歴史や文化風俗的な差異と齟齬に気を配りながら、多種混交な近現代の文化現象に対する認識を再構築することをめざす。国際社会で活躍するために必要となる知識と態度を身につけながら、同時に効果的な学術発表や、実践的なプレゼンテーションの方法と技術を習得する。

●到達目標

学生がアジアの共通理解・共通認識に向けて、歴史や文化風俗的な差異と齟齬に気を配りながら、多種混交な近現代の文学・文芸に対する知識を理解することができる。また、文学研究を、文化の諸相とともに分析することの意義を理解し説明することができる。社会で活躍するための基礎的知識を身につけ、効果的な学術発表や、実践的なプレゼンテーションをおこなうことができる。

●授業内容・授業計画

第1回：演習授業の目的と方法/イントロダクション
第2回：演習の課題設定と構想について/講義・項別相談
第3回：演習と討論/研究の対象と範囲①
第4回：演習と討論/研究の対象と範囲②
第5回：演習と討論/範囲と評価基準①
第6回：演習と討論/範囲と評価基準②
第7回：演習と討論/文化研究の動き①
第8回：演習と討論/文化研究の動き②
第9回：演習と討論/文化の諸相の分析①
第10回：演習と討論/文化の諸相の分析②
第11回：演習と討論/文化の諸相の分析③
第12回：演習と討論/文化の諸相の分析④
第13回：演習と討論/新しい方法の模索
第14回：最終まとめ

●事前・事後学習の内容

前回まで指導や討論で伝えられた課題点をもとに、演習発表のための十全な準備をすること。次の時間に扱う資料や作品を読み、疑問や課題点を整理し分析しておくこと。

●評価方法

（1）到達目標の達成度について評価をおこなう。
（2）評価方法は、授業内での演習発表（質疑、ディスカッションを含む）（60％）、レポート（40％）
（3）合格のための最低基準は70％

●受講生へのコメント

とくになし。

●参考文献・教材

毎回、レジュメを配布する。参考書は、受講生の到達度に合わせて、授業内で指示する。

●備考

2019年度までの入学生は「アジア比較文化学研究演習」に読替

授業科目名	科目NO.	LEASA2508	授業コード	LM20080010
アジア文化学特別講義a Special Lecture on Asian Culture: a			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
講義	Shulatov Yaroslav			

●科目の主題

日露関係を中心として、東アジアにおける国際関係史について考える

●到達目標

あるひとつの地域の文化的特性を包括的にとらえることの意味や当該専門分野における方法論を学ぶ

●授業内容・授業計画

第1回:ガイダンス。アジアにおけるロシア、東アジア・極東政策の歴史的背景、概要と構造
第2回:日露関係の概要、全体構造と相互イメージ。「初顔合わせ」
第3回:東アジアにおけるロシアと日露関係の黎明。「官民」交流の実態と「相互発見」
第4回:映画観賞(「おろしあ国酔夢譚」)
第5回:江戸時代における日露関係と対露観。「救難者」、「脅威」、「文明国」のロシア
第6回:衝突から国交樹立へ。19世紀前半における東アジアと日露関係
第7回:幕末の危機:動揺する対露観。(「幕末のスパシーボ」)
第8回:明治維新から19世紀末まで。「先生」から「敵」へ
第9回:日露戦争への道、戦争経過と結果。「第0次世界大戦」と東アジアにおける新秩序
第10回:近代における文化交流:技術・学問・芸術など
第11回:近代における文化交流:文学を中心に
第12回:「敵国」から「同盟国」へ。日露関係の「黄金時代」の内外要因と
第13回:ロシア革命と東アジア。ソヴィエト・ロシアと日本
第14回:戦前期における日ソ関係と東アジア。
第15回:まとめ・試験

●事前・事後学習の内容

＊ 講義で使われるレジュメ/キーワード(主要な登場人物、条約、会議など)のリストを授業HPにアップするので、授業の前に各自でダウンロードして、必ず参考にすること。
＊ 授業の前にHPにアップする参考文献、必ず事前に読むこと。
＊ それ以外、適宜紹介する

●評価方法

授業への参加(出席/コメントペーパー) 50 %
期末レポート 50 %

●受講生へのコメント

積極的に参加して、しっかりとノートを取り、授業中でも質問することを歓迎する。

●参考文献・教材

参考文献:五百旗頭 真 (編集), 下斗米 伸夫 (編集), A.V.トルクノフ (編集)『日ロ関係史:パラレル・ヒストリーの挑戦』東京大学出版会、2015年。
必要に応じて、資料を授業HPにアップし、または講義でプリントを配布する。

●備考

2019年度までの入学生は「ｱｼﾞｱ都市文化学特講Ⅰ」に読替

授業科目名	科目NO.	LEASA2509	授業コード	LM20090010
アジア文化学特別講義b Special Lecture on Asian Culture: b			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 王　静			

●科目の主題

現代中国における「茶文化」を事例として、ナショナル化とグローバル化の反復を特徴とする現代文化の生産・消費のメカニズムを検証するとともに、今日における文化の動態を捉える方法について考察する。

●到達目標

文化の生成をめぐる多様なメカニズムについて、日常生活におけるごく「ありきたり」の事象をもとに具体的に検討していく過程を示すことで、受講生に文化研究の一つの方向性とそのための方法を理解させる。

●授業内容・授業計画

現代中国における茶文化の様態を概説した上で、茶文化の生成から拡大、定着へと至るメカニズムを政治・学術研究・外交・経済活動等の側面から講義とディスカッションの形式で検討する。

第1回　オリエンテーション、中国茶文化の概要
第2回　文化と政治①:新中国の茶葉生産
第3回　文化と政治②:茶葉経済を支えるための茶文化創造
第4回　文化と政治③:中華文化の復興と台湾茶芸の構築
第5回　文化と政治④:中国茶芸の再構築
第6回　文化と学術研究①:「茶文化」の提唱
第7回　文化と学術研究②:飲茶と健康
第8回　文化と学術研究③:茶文化を対象とした研究・教育
第9回　文化と外交①:茶葉生産を通した国交締結
第10回　文化と外交②:茶芸を中心とした茶文化交流
第11回　文化と経済活動①:茶芸館
第12回　文化と経済活動②:茶文化観光
第13回　文化と経済活動③:「中国茶」の経済価値
第14回　文化の伝播と受容、アジア茶文化圏の現在
第15回　期末レポートの討論

●事前・事後学習の内容

毎回次回の授業に関する参考文献の予習箇所を指定する。各自で事前に読んでおくとともに、内容の整理や疑問点の洗い出しなど、ディスカッションに備えた準備をしておくこと。なお、各回の準備には4時間以上の学習を行なうことが望ましい。

●評価方法

平常点(授業内の質問やディスカッション)50%、期末レポート50%で総合的に評価する。

●受講生へのコメント

・第1回目の授業はオリエンテーションを行なうため、受講予定者は第1回授業には必ず出席すること。
・第2回目の授業からは、講義の内容や教科書の指定箇所を踏まえたディスカッションを行うため、予習が必須である。

●参考文献・教材

王静(2017)『現代中国茶文化考』(思文閣出版)

●備考

2019年度までの入学生は「アジア都市文化学特講Ⅱ」に読替

授業科目名	科目NO.	LEASA2510	授業コード	LM20100010
アジア文化学総合研究Ⅰ Comprehensive Studies in Asian Culture I			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	多和田　裕司／松浦　恆雄／堀　まどか			

●科目の主題

専修所属教員全員による集団指導体制のもと、受講生による研究発表や討議を通して、受講生個々の問題関心をアジア文化学分野の中で研究課題として具体化させる。

●到達目標

東アジア、東南アジアの芸能、芸術、文芸、民族文化、宗教文化などアジア諸文化を研究するために必要な基礎的方法論と比較研究という観点を総合的に習得し、自らの研究に活かすことができる。

●授業内容・授業計画

第1回：オリエンテーション
第2回：受講生による発表と教員・学生全員による討議：研究課題の設定
第3回：同上
第4回：同上
第5回：同上
第6回：受講生による発表と教員・学生全員による討議：研究方法について
第7回：同上
第8回：同上
第9回：同上
第10回：同上
第11回：受講生による発表と教員・学生全員による討議：研究の構成と研究計画
第12回：同上
第13回：同上
第14回：同上
第15回：総合討議

●事前・事後学習の内容

発表の準備（配付資料の作成、プレゼンテーション資料の作成などを含む）をしておくこと。

●評価方法

到達目標への達成度をもとに評価する。評価は、期末レポートによっておこなう。合格のための最低基準として、自らの研究課題が明確であるとともに、研究の方法論が確立されていることを求める。

●受講生へのコメント

オリエンテーション時に、発表順の決定や、PC、プロジェクター、コピー機等機器の操作ガイダンスをおこなう。

●参考文献・教材

発表者が資料等を事前に作成して配布する。

●備考

2019年度までの入学生は「アジア都市文化学総合研究Ⅰ」に読替

授業科目名	科目NO.	LEASA2511	授業コード	LM20110010
アジア文化学総合研究Ⅱ Comprehensive Studies in Asian CultureⅡ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	多和田　裕司／松浦　恆雄／堀　まどか			

●科目の主題

専修所属教員全員による集団指導体制のもと、受講生による発表や討議を通して、受講生個々の研究課題の特徴や問題点を明確にさせながら修士論文作成のための準備を整えさせる。

●到達目標

東アジア、東南アジアの芸能、芸術、文芸、民族文化、宗教文化などアジア諸文化を研究するために必要な実践的方法論を習得し、自らの研究に活かすことができる。

●授業内容・授業計画

第1回：オリエンテーション
第2回：受講生による発表と教員・学生全員による討議：研究の進捗状況報告
第3回：同上
第4回：同上
第5回：同上
第6回：受講生による発表と教員・学生全員による討議：先行研究の概要と課題
第7回：同上
第8回：同上
第9回：同上
第10回：同上
第11回：受講生による発表と教員・学生全員による討議：修士論文作成に向けての研究計画の策定
第12回：同上
第13回：同上
第14回：同上
第15回：総合討議

●事前・事後学習の内容

発表の準備（配付資料の作成、プレゼンテーション資料の作成などを含む）をしておくこと。

●評価方法

到達目標への達成度をもとに評価する。評価は、期末レポートによっておこなう。合格のための最低基準として、研究課題と方法論の双方において、修士論文作成のための準備が整っていることを求める。

●受講生へのコメント

オリエンテーション時に、発表順を決定する。

●参考文献・教材

発表者が資料等を事前に作成して配布する。

●備考

2019年度までの入学生は「アジア都市文化学総合研究Ⅱ」に読替

授業科目名	科目NO.	LECRS2501	授業コード	LM21010010
国際文化資源論研究 Advanced Studies of Global Cultural Resources			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	小田中　章浩			

●科目の主題

本科目は文化資源学専修の大学院前期博士課程科目のうち、演劇分野における文化資源のあり方について考察するものである。この研究では演劇を題材として、それが世界の中で文化資源としてどのように活用されているのかを検証する。今日、世界各地でさまざまな演劇祭が開催され、多いものは数十万規模の観客を動員している。ただしこの種の演劇フェスティヴルの現象面に捕らわれることなく、この講義ではその根底にある「公共の演劇」のあり方について理論的な検討を行う。より具体的には演劇とコミュニティの関係について歴史的な理解を深めつつ、それらが今日の演劇祭へどうつながっているのかを考察する。

●到達目標

世界各地で行われている演劇祭について、その社会、歴史的な背景の違いから生じる特性について理解を深めること。

●授業内容・授業計画

第1回：イントロダクション：演劇祭の社会・歴史的機能
第2回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(1)
第3回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(2)
第4回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(3)
第5回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(4)
第6回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(5)
第7回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(6)
第8回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(7)
第9回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(8)
第10回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(9)
第11回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(10)
第12回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(11)
第13回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(12)
第14回：演劇祭に関する文献購読とディスカッション(13)
第15回：授業の総括

●事前・事後学習の内容

授業参加者は事前に指定された文献について予備学習するために、少なくとも毎週4時間の事前学習を必要とする。

●評価方法

世界各地で行われている演劇祭の中から、少なくとも三つを取り上げ、それらの社会的な機能の違いについて学術的なスタイルで記述できること。評価は期末レポート（100％）によって行う。

●受講生へのコメント

授業は、受講者による発表、ならびにその後教員を交えて行われるディスカッションによって進行する。

●参考文献・教材

講義開始時に指示する。

授業科目名	科目NO.	LECRS2502	授業コード	LM21020010
国際文化資源論研究演習 Advanced Seminar on Global Cultural Resources			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 小田中　章浩			

●科目の主題

本科目は文化資源学専修の大学院前期博士課程科目のうち、演劇分野における文化資源のあり方について考察するものである。この演習は前期の研究を基礎として、演劇とコミュニティの関係について考察を行う。より具体的には世界各地のアマチュア演劇を含んだ「コミュニティ・シアター」のあり方と、日本の各地で行われている同種の（しかしその実態は必ずしも同じではない）「地域演劇」の事例を比較することによって、演劇の担い手と観客との関係、求められる演劇の美的性質の違い、さらに演劇が共同体を活性化、あるいは再生するためにどのような機能を果たし得るかについて考える。

●到達目標

世界的なコミュニティ・シアターの多様なあり方について理解すること。

●授業内容・授業計画

第1回：イントロダクション：コミュニティ・シアターの歴史と社会的機能
第2回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(1)
第3回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(2)
第4回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(3)
第5回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(4)
第6回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(5)
第7回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(6)
第8回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(7)
第9回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(8)
第10回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(9)
第11回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(10)
第12回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(11)
第13回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(12)
第14回：コミュニティ・シアターに関する文献購読とディスカッション(13)
第15回：授業の総括

●事前・事後学習の内容

授業参加者は事前に指定された文献について下調べをするために、少なくとも毎週4時間の事前学習を必要とする。

●評価方法

さまざまなコミュニティ・シアターの中から、少なくとも三つを取り上げ、それらの社会的な機能の違いについて学術的なスタイルで記述できること。評価は期末レポート（100％）によって行う

●受講生へのコメント

授業は、受講者による発表、ならびにその後教員を交えて行われるディスカッションによって進行する。

●参考文献・教材

講義開始時に指示する。

授業科目名	科目NO.	LECRS2503	授業コード	LM21030010	
芸術文化資源論研究 Advanced Studies of Fine Arts as Cultural Resources				単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 菅原　真弓				

●科目の主題

芸術分野における文化資源は、最も強く従来の価値評価の影響下にある。ここでは、ありとあらゆる目に見えるモノ（ヴィジュアルイメージ）を等しく文化資源として定義し直し、これらを検討し評価する手法を説く。これまでに行われてきた美術史学の研究手法を取り入れつつ、美術史学が従来、研究の対象としてこなかったモノ（≒文化資源）の新たな価値づけを行うための学びを提示する。

具体的には本研究の主題に基づき、担当教員が課題として提示する研究論文の精読を行う。そして各回、担当者を決めて文献の要約（小発表）を行い、担当者の司会によって討論を実施することとする。また併せて、実地の見学（フィールドワーク）も実施する。

●到達目標

芸術分野における文化資源について理解し、これを評価検討する手法を得る。

●授業内容・授業計画

第1回: イントロダクション
第2回: ブレイク 関連文献の収集方法と講読文献策定
第3回 :文献講読および討論1
第4回 :文献講読および討論2
第5回 :文献講読および討論3
第6回 :フィールドワーク　1
第7回 :文献講読および討論4
第8回 :文献講読および討論5
第9回 :文献講読および討論6
第10回 :フィールドワーク　2
第11回 :文献講読および討論7
第12回 :文献講読および討論8
第13回 :文献講読および討論9
第14回 :フィールドワーク　3

●事前・事後学習の内容

第3回以降は、文献の要約（小発表）および討論を実施するので、履修者は全員、各回の対象となる文献を事前に通読しておくことが求められる。また各回の振り返りを各自行い、その成果を授業内で求める。

●評価方法

授業参加意欲および小発表、討論への参加。

●受講生へのコメント

芸術文化資源に関する授業である。授業内あるいは授業曜日時限以外の日程でもフィールドワーク（主に展覧会見学実習）を行うので、必ず出席すること。

●参考文献・教材

授業内で適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LECRS2504	授業コード	LM21040010
芸術文化資源論研究演習 Advanced Seminar on Fine Arts as Cultural Resources			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 菅原　真弓			

●科目の主題

芸術分野における文化資源についてのより具体的な考察を進める。先行する芸術文化資源の研究を振り返りつつ、それらが拠り所とする価値観について考察し、その功罪を明らかにする。その上で、新たな価値評価基準の創出を試みる演習とする。

具体的には、履修者各自が研究テーマとする文化資源について考察をする研究発表を行い、その上でディスカッションを通じて学びを深めるものとする。

●到達目標

芸術分野における文化資源に関する具体的考察を行い、芸術文化資源研究を進める。また、

1　自らの研究内容を、より分かりやすくプレゼンテーションする能力を培う

2　他者の研究内容に関して、建設的な意見を発することができる能力を養い、かつ他者の研究内容や手法を自らの研究に役立てる能力を培う

を目標とする。

●授業内容・授業計画

第1回:イントロダクション
第2回:　発表テーマと研究手法
第3回　:研究発表とディスカッション1
第4回　:研究発表とディスカッション2
第5回　:研究発表とディスカッション3
第6回　:研究発表とディスカッション4
第7回　:研究発表とディスカッション5
第8回　:研究発表とディスカッション6
第9回　:研究発表とディスカッション7
第10回　:研究発表とディスカッション8
第11回　:研究発表とディスカッション9
第12回　:研究発表とディスカッション10
第13回　:研究発表とディスカッション11
第14回　:研究発表とディスカッション12

●事前・事後学習の内容

受講者各自の研究発表に際しては、事前に予告レジュメ(発表内容を要約したもの+発表に際しての主たる参考文献を記したもの)の提出を義務付けるので、発表者以外の受講者は、授業に先立ち予告レジュメと参考文献を読み込み、実り多いディスカッションとなるよう準備を行う。授業後は各回の発表内容に関する理解をより深める学びを行い、かつ発表手法等については自らの発表に役立てるようにしていく。

●評価方法

発表内容および授業参加意欲を以て評価。

●受講生へのコメント

自らの研究内容を、より分かりやすくプレゼンテーションする能力を培うことは自明だが、他者の研究内容に関して、建設的な意見を発することができる能力を養い、かつ他者の研究内容や手法を自らの研究に役立てる能力を培ってほしいと考える。

●参考文献・教材

授業内で適宜指示する。

●備考

2019年度までの入学生は「都市環境学研究演習」に読替

授業科目名	科目NO.	LECRS2505	授業コード	LM21050010
観光文化資源論研究 Advanced Studies of Tourism and CulturalResources			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 天野　景太			

●科目の主題

本科目では文化資源研究のうち、観光・まちづくりの領域に関する内容を扱う。まず、観光文化のダイナミズムを捉える理論的枠組みを検討した上で、実際の文化資源の呈示と消費のあり方に関して、観光社会学、観光文化論、観光マーケティング研究の成果等を手がかりとしながら、国際間比較、地域間比較も意識しつつ解読する。現代はグローバリゼーションに伴い国境を越えた人々や資本、モノの移動はますます増加、多様化しているが、その中にあって観光は、最も先鋭的かつ具体的に、異なる社会・文化の接触、交流、衝突等がおこる現場といえる。本科目では、そこにおいて展開する観光文化のダイナミズムを捉える理論的枠組みを検討した上で、それらを援用しつつ諸地域における実際の観光文化資源のあり方の関して、比較の視点を意識ながら解読を試みる。

●到達目標

いわゆる「観光資源論」を越えて、観光まちづくりの実践を中心とした観光的文脈における文化資源をめぐる社会的動向について、そのリアリティを学際的視点から捉えられるようになる。

●授業内容・授業計画

第1回：イントロダクション
第2回：観光学／観光文化資源論の視点と方法
第3回：文化資源をめぐる観光とまちづくりの展開
第4回：観光振興機関の歴史と現在
第5回：広域観光圏の形成
第6回：都市観光の社会学
第7回：観光開発・観光マネジメントの機能と課題
第8回：MICEと観光拠点都市
第9回：大阪・関西万博のインパクト
第10回：多様化する宿泊形態と民泊の展開
第11回：文化遺産（世界遺産）と地域主導型観光
第12回：災害と観光文化資源
第13回：観光文化資源の今日的仮題
第14回：各自のレポートに基づいたディスカッション

●事前・事後学習の内容

事前学習として、テキスト（『「観光まちづくり」再考』）を熟読し、わからない用語等は調べておき、疑問点とレビューをノートに整理しておくこと。第4回は同書第1部第1章、第5回は同書第一部第2章、第6回は同書第2部第1章、第7回は同書第2部第2章、第8回は同書第2部第3章、第9回は同書第2部第4章、第10回は同書第2部第5章、第11回は同書第3部第1章、第12回は同書第3部第2章、第13回は同書第3部第3章の内容を中心に、講義を行う。

●評価方法

観光文化資源をめぐる今日的動向についての知識を理解することとともに、それらを捉えるセンスが養われたかどうかが、単位取得のための基準である。それらを、各回の授業参画への積極度（50%）、および期末レポート（50%）によって評価を行う。

●受講生へのコメント

日頃から 観光に関するニュースや調査データを親しんでおくことが望ましい。また、自らの観光経験や旅ロケ番組等の視聴経験を振り返り、それらを観光文化資源論学的な視点から省察する習慣をつけておくことが望ましい。また、観光研究は座学だけでなく理論と実際（現場）との往復を繰り返すことが求められる。本年度も必要に応じて観光地域の視察や、他の教員の科目とのジョイントによる大阪の都市文化資源視察、講師が担当する学部の演習系科目の取り組みとのジョイントなども企画予定なので、積極的に参加されたい。

●参考文献・教材

安福恵美子編『「観光まちづくり」再考―内発的観光の展開に向けて』古今書院、2016年。
安福恵美子『ツーリズムと文化体験：“場”の価値とそのマネジメントをめぐって』流通経済大学出版会、2008年。

●備考

2019年度までの入学生は「アジア観光文化学研究」に読替

授業科目名	科目NO.	LECRS2506	授業コード	LM21060010
観光文化資源論研究演習 Advanced Seminar on Tourism and CulturalResources			単位数	2単位
授業形態 演習	担当教員名 天野　景太			

●科目の主題

「観光文化資源の編成、再編成の現場を読み解く」をテーマとした演習である。日本を含む世界の観光地域の中から複数の事例を選定し、当該地域のデータを収集、分析することを通じて、新たな観光文化の生成、展開の可能性についての検討を行う。これらを通じて、本科目は文化資源を対象とした調査とそれに基づく理論化の技術を養うための演習として位置づけられる。

●到達目標

観光分野における文化資源のあり方に関する実証研究の方法に関して修得できると同時に、現代観光を捉えるための理論構築のための想像力(創造力)を身につけることができる。

●授業内容・授業計画

第1回:イントロダクション
第2回:観光文化資源に関する実証研究の展開(講義形式)
第3回:対象とするフィールドに関する文献・資料の検討【1】
第4回:対象とするフィールドに関する文献・資料の検討【2】
第5回:対象とするフィールドに関する文献・資料の検討【3】
第6回:観光文化資源調査の企画・設計に関する報告【1】
第7回:観光文化資源調査の企画・設計に関する報告【2】
第8回:観光文化資源調査の企画・設計に関する報告【3】
第9回:観光文化資源調査の企画・設計に関する報告【4】
第10回:データの整理と解釈に関する報告【1】
第11回:データの整理と解釈に関する報告【2】
第12回:データの整理と解釈に関する報告【3】
第13回:データの整理と解釈に関する報告【4】
第14回:ラウンドテーブル

●事前・事後学習の内容

第3回～第5回に関しては、授業内で指示する文献、または履修者各自で持ち寄った文献の精読を、第6回～第13回に関しては、現地フィールドワークなどを通じた1次資料の収集や、2次資料の解読などの実査を各自で推進していくことが求められる。

●評価方法

演習における報告や議論への参加度(34%)、プロジェクトワーク(33%)、期末レポート(33%)で評価する。授業の成果を活かして自ら適切なデータ収集が出来ること、およびデータに基づいた分析により、オリジナルな考察ができることが、単位認定の最低基準である。

●受講生へのコメント

日頃から 観光に関するニュースや調査データを親しんでおくことが望ましい。また、自らの観光経験や旅ロケ番組等の視聴経験を振り返り、それらを観光文化資源論学的な視点から省察する習慣をつけておくことが望ましい。また、観光研究は座学だけでなく理論と実際(現場)との往復を繰り返すことが求められる。本年度も必要に応じて観光地域の視察や、他の教員の科目とのジョイントによる大阪の都市文化資源視察、講師が担当する学部の演習系科目の取り組みとのジョイントなども企画予定なので、積極的に参加されたい。

●参考文献・教材

安福恵美子・天野景太『観光まちづくりの今日的展開(仮)』古今書院、2020年刊行予定。

●備考

2019年度までの入学生は「ｱｼﾞｱ観光文化学研究演習」に読替

授業科目名	科目NO.	LECRS2507	授業コード	LM21070010
社会実践文化資源論研究 Advanced Studies of Socially Engaged　Cultural Resources			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 沼田　里衣			

●科目の主題

本科目は、文化資源の社会的運用のありかたを理解する科目群のうち、音楽分野についての諸問題を取り上げ、考察することが目的である。音楽療法やコミュニティ音楽等の実践領域に関連する臨床音楽学の研究知見を理解し、それを自身の研究に生かせるようになることを目標とする。テキストとして、音楽療法、コミュニティ音楽療法、コミュニティ音楽、音楽学、障害学、臨床哲学、アートマネジメント、現代美術批評に関するものを扱う。社会包摂の観点から、一つの事例を詳細かつ多角的な視点から分析し、評価する力を養うことを目的とする。

●到達目標

音楽療法やコミュニティ音楽の実践領域を理論的に考察し、理解すること。

●授業内容・授業計画

第1回:概説:コミュニティと音楽
第2回:コミュニティと音楽に関する文献講読1
第3回:コミュニティと音楽に関する文献講読2
第4回:コミュニティと音楽に関する文献講読3
第5回:コミュニティと音楽に関する文献講読4
第6回:コミュニティと音楽に関する文献講読5
第7回:コミュニティと音楽に関する文献講読6
第8回:コミュニティと音楽に関する文献講読7
第9回:コミュニティと音楽に関する文献講読8
第10回:コミュニティと音楽に関する文献講読9
第11回:コミュニティと音楽に関する文献講読10
第12回:コミュニティと音楽に関する文献講読11
第13回:コミュニティと音楽に関する文献講読12
第14回:総括

授業で取り上げる文献について事前に予習し、そのなかで取り上げられている理論や事例について関連のテキストやウェブ上の動画等で調べておくこと。また、授業内で行ったディスカッションについてまとめておくこと。

●事前・事後学習の内容

コミュニティと音楽に関する活動の企画書を作成できること。授業内で取り上げたポイントを抑えた上で具体的に構想できているかどうかをレポートで評価する(100%)。

●評価方法

各自の研究テーマに即した視点から文献を読み込み、考察すること。

●受講生へのコメント

各授業において、必要な文献を示し、資料を配布する。

●参考文献・教材

別途指示する。

授業科目名	科目NO.	LECRS2508	授業コード	LM21080010
社会実践文化資源論研究演習 Advanced Seminar on Socially Engaged　Cultural Resources			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	沼田　里衣			

●科目の主題

本科目は、文化資源の社会的運用のありかたを理解する科目群のうち、音楽分野についての諸問題を取り上げ、考察するものである。社会的課題との関連から行われる文化実践について、受講者のニーズを取り入れながら、高度な論究を進める。研究の主眼となる文献の選択から始め、その批判的読解と議論を通して新しい知見の発見へ至ることを目的とする。取り扱う主な領域は、音楽療法、コミュニティ音楽療法、コミュニティ音楽、音楽学、障害学、臨床哲学、アートマネジメント、現代美術批評等である。

●到達目標

社会的課題との関連から行われる文化実践について、文献講読を通して研究手法を学ぶ。

●授業内容・授業計画

第1回：概説：健康と音楽
第2回：健康と音楽に関する文献講読1
第3回：健康と音楽に関する文献講読2
第4回：健康と音楽に関する文献講読3
第5回：健康と音楽に関する文献講読4
第6回：健康と音楽に関する文献講読5
第7回：健康と音楽に関する文献講読6
第8回：健康と音楽に関する文献講読7
第9回：健康と音楽に関する文献講読8
第10回：健康と音楽に関する文献講読9
第11回：健康と音楽に関する文献講読10
第12回：健康と音楽に関する文献講読11
第13回：健康と音楽に関する文献講読12
第14回：総括

●事前・事後学習の内容

授業で取り上げる文献について事前に予習し、取り上げられている理論や事例について関連のテキストやウェブ上の動画等で調べておくこと。また、授業内で行ったディスカッションについてまとめておくこと。

●評価方法

健康と音楽に関する議論のうち、一つのトピックを取り上げ、それについて論述したものをレポートとして提出すること。現代社会の諸問題と関連づけて音楽を捉えられているかを評価する（100%）。

●受講生へのコメント

各自の研究テーマに即した視点から文献を読み込み、考察すること。

●参考文献・教材

各授業において、必要な文献を示し、資料を配布する。

授業科目名	科目NO.	LECRS2509	授業コード	LM21090010
文化資源学特別講義 a Special Lectures of Cultural Resource studies:a			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 木川 剛志			

●科目の主題

文化資源としての映画やテレビ放送、デジタル動画などの映像コンテンツに注目し、それらが社会において果たしてきた役割を歴史的に考察するとともに、現在国内外で行われている映画あるいは映像イベントについて、それらを文化的、社会的、あるいはイデオロギー的なコンテクストの中で読み解くことによって、その意義について検討する。

●到達目標

文化資源としての映画やテレビ放送、デジタル動画などの映像コンテンツの歴史的経緯とその意義について理解を深める。

●授業内容・授業計画

第1回 概説:映像とはなにか。
第2回 映画の誕生:リュミエール兄弟、シネマトグラフと映像の原体験
第3回 メディアとは1:マクルーハン「メディアはメッセージである」
第4回 メディアとは2:ハーバード・J・ガンズ、メディアとコミュニティ
第5回 エンターテイメントとしての映画:チャップリンを中心に
第6回 日本映画の誕生:その歴史と特徴、黒澤明と小津安二郎の比較を通じて
第7回 1-6のまとめ
第8回 映像とジャーナリズム
第9回 日本における映画文化:ATGを中心に
第10回 映画からテレビへ:劇場からお茶の間へ
第11回 テレビからネットへ:アメリカと日本の構造的差異
第12回 映画祭、ローカルから世界へ
第13回 観光映像:マーケティングと動画配信のこれからの形
第14回 5G時代の映像のあり方
第15回 試験

本授業では映像の歴史を扱うので、現在の常識では不適切と思われる表現の映像も閲覧することもある。その際には閲覧前に不適切な理由も説明した上で上映する。また、見ることを望まない受講者の一時退出も認める。

●事前・事後学習の内容

本授業では取り扱うメディア作品や映画などを見たことを前提に授業を進める。短い作品は授業内でも上映するが、多くは授業時間内では鑑賞できない長さの作品なので、受講者は事前に見ておくこと(2時間程度)。また、行った授業に関するReading Listも提供するので事後に復習を行うことが望ましい(2時間程度)。

●評価方法

試験50% レポート30% 毎回の授業で配るコメントシート20%の配分で評価する。

●受講生へのコメント

本授業では、メディア学から映画、情報学と幅広い分野を学ぶ。そのためにもっとも重要なことは好奇心であり、授業内で扱う内容だけでなく、映像全般に興味を持っていることを期待する。また授業内でも興味への動機付けを積極的に行う。

●参考文献・教材

参考文献
吉見俊哉「メディア文化論」有斐閣
伊藤守「よくわかるメディア・スタディーズ」ミネルヴァ書房
吉田喜重「小津安二郎の反映画」岩波現代文庫"

授業科目名	科目NO.	LECRS2510	授業コード	LM21100010
文化資源学特別講義 b Special Lectures of Cultural Resource studies:b			単位数	2単位
授業形態 講義	担当教員名 福田 一史			

●科目の主題

文化資源としてのマンガ、アニメ、デジタルゲームの可能性について検討する。これらを対象とした文化振興の方策について、草の根のゲーム博物館の運営や地域組織のコスプレイベントの仕掛けづくりといった、アーカイブやツーリズム分野における実践事例に基づきつつ展望する。

●到達目標

文化資源としてのマンガ、アニメ、デジタルゲームの可能性について検討し、現代における社会的な役割と今後について展望する。

●授業内容・授業計画

第1回:ガイダンス

講義構成や評価ポリシーなど、その枠組みを紹介する。また、本講義で主要なテーマとなる文化資源の定義を整理し、近年の動向を概観する。

第2～3回:文化資源としてのマンガ・アニメ・デジタルゲーム

これまで文化資源研究の主要な対象は、伝統的な文化資源や、学術資源などであった。それらと比較して、本講義で対象となるマンガ・アニメ・デジタルゲームなどは、いくつかの点において性質を異にする。ここでは、これらの文化資源としての特徴について議論する。

第4～6回:文化資源の保存と情報化

2001年に制定された「文化芸術振興基本法」では、マンガ・アニメ・デジタルゲームなどのポピュラー文化も、その対象として想定されている。そのような背景もあり、これらを保存し、活用する施策が各地で行われるようになった。また、各分野の研究・教育なども活発化しつつあり、それらをいかに情報化し、学術的・産業的に利活用する基盤を構築するかということも一つのテーマとなっている。ここではそのような保存や情報基盤構築の現状と、今後の展望などについて議論する。

第7回:文化資源の保存と情報化:海外の動向

文化資源の保存と情報化について、海外の事例などを紹介しつつ、その動向を紹介する。

第8～9回:文化資源の利活用

フィルムコミッションなどに見られる通り、映像などの文化資源を活用した地域振興などの利活用事例は古くから展開されてきた。2000年代以降は、アニメーションをテーマにした町おこしイベントや聖地巡り、ゲームの見本市の開催など、ポピュラー文化に根ざした新しい地域振興やアイデンティティ形成などが行われるようになっている。ここでは、そのような活動の全体像を捉えるとともに、権利者やファンなどとどのように関係性を構築すべきか、といった論点について論じる。

第10～11回:文化資源の利活用(事例研究)

文化資源を用いた地域振興、またポピュラー文化振興のための施策、これらについて事例を取り上げて、具体的に検討を行う。その上で、文化資源を如何にして振興すべきか、またポピュラー文化をそのような施策に用いる上で問題点がどのよう形で生じるか、また以下に文化資源を創造するコミュニティに貢献できるか、講義参加者らとディスカッションを行う。

第12～14回:グループワーク

受講生でグループを組織し、文化資源の保存と情報化、もしくは文化資源の利活用をテーマとする調査を実施する。また、第14回目の講義の際に、各グループの調査結果の発表を実施する。

第15回:総括

ここまでの講義内容を振り返り、包括的な整理を行うほか、ディスカッションによる補完を実施する。

●事前・事後学習の内容

各講義で配布する講義資料やスライドを活用し、事後学習を実施することを推奨する。
また、セッションごとに文献が指定され、その講読が必要となることがある。

●評価方法

″以下の割合により評価を実施する。最も大きな割合を占めるのはレポートであるが、出席点や講義での発言など、講義期間全般のコミットメントを重視する。
・講義への出席・グループワークにおけるコミットメント(30%)
・講義での発言や課題の提出(30%)
・レポート(40%)″

●受講生へのコメント

講義の後半でグループワークを実施する。

●参考文献・教材

教科書・参考文献は指定しない。ただし、講読すべき文献は随時講義中に指定する。

授業科目名	科目NO.	LECRS2511	授業コード	LM21110010
文化資源学総合研究 I Comprehensive Study of　Cultural Resources I			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	菅原　真弓／小田中　章浩／沼田　里衣／天野　景太			

●科目の主題

文化資源学を研究する際の基礎的な視点と方法を確立するための指導を行う。履修者各自の研究課題の発表と、その内容に基づく討論を基本スタイルとし、個々の問題関心の深化、調査・研究方法の確立を促す。

●到達目標

文化資源学を研究する際の基礎的な視点と方法を確立する。

●授業内容・授業計画

第1回:イントロダクション1
第2回:イントロダクション2
第3回:受講学生の発表とディスカッション(1)
第4回:受講学生の発表とディスカッション(2)
第5回:受講学生の発表とディスカッション(3)
第6回:受講学生の発表とディスカッション(4)
第7回:受講学生の発表とディスカッション(5)
第8回:受講学生の発表とディスカッション(6)
第9回:受講学生の発表とディスカッション(7)
第10回:受講学生の発表とディスカッション(8)
第11回:受講学生の発表とディスカッション(9)
第12回:受講学生の発表とディスカッション(10)
第13回:受講学生の発表とディスカッション(11)
第14回:総括

●事前・事後学習の内容

発表準備および事後の指導を踏まえた復習などにおおむね4時間程度を必要とする。

●評価方法

発表内容等により評価。

●受講生へのコメント

文化資源学は学際的な学問であり、範囲は非常に広い。履修者それぞれの発表内容について関心を持ち、自己の研究テーマに活かす努力をすること。また発表後の討論に積極的に参加すること。

●参考文献・教材

授業内で適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LECRS2512	授業コード	LM21120010
文化資源学総合研究Ⅱ Comprehensive Study of　Cultural ResourcesⅡ			単位数	2単位
授業形態	担当教員名			
演習	菅原　真弓／小田中　章浩／沼田　里衣／天野　景太			

●科目の主題

修士論文の執筆を見据え、履修者が研究課題の発表を行い、それに関して教員ならびに履修者全員が討論を行うことによって、各自の研究の深化を促す。文化資源学専修の教員全員で指導にあたる。

●到達目標

履修者の研究発表に関し、教員ならびに履修者全員の討論によって各自の研究深化を促す

●授業内容・授業計画

履修者の研究発表に基づき、担当教員が自らの専門の立場から指導を行う。また履修者全員による討論を実施する。

第1回:イントロダクション1
第2回:イントロダクション2
第3回:受講学生の発表とディスカッション(1)
第4回:受講学生の発表とディスカッション(2)
第5回:受講学生の発表とディスカッション(3)
第6回:受講学生の発表とディスカッション(4)
第7回:受講学生の発表とディスカッション(5)
第8回:受講学生の発表とディスカッション(6)
第9回:受講学生の発表とディスカッション(7)
第10回:受講学生の発表とディスカッション(8)
第11回:受講学生の発表とディスカッション(9)
第12回:受講学生の発表とディスカッション(10)
第13回:受講学生の発表とディスカッション(11)
第14回:総括

●事前・事後学習の内容

発表準備および事後の指導を踏まえた復習などにおおむね4時間程度を必要とする。

●評価方法

発表内容等により評価。

●受講生へのコメント

文化資源学は学際的な学問であり、範囲は非常に広い。履修者それぞれの発表内容について関心を持ち、自己の研究テーマに活かす努力をすること。また発表後の討論に積極的に参加すること。

●参考文献・教材

授業内で適宜指示する。

授業科目名	科目NO.	LXGEN2506	授業コード	LM17060010	
国際都市社会論Ⅱ International Urban Society Ⅱ				単位数	2単位
授業形態	担当教員名				
講義	祖田　亮次				

●科目の主題

1. Objective of the course

In this class, we will study the interaction between culture and psychology. This course will explore how we can better understand human behavior, thought, and feeling by taking into account the role of culture, a perspective gaining popularity in the 21st century. We will look at various topics currently under discussion in this field, as well as methodologies to analyse psychological matters in relation to culture.

●到達目標

2. Goal

Students are expected to be able to evaluate basic issues discussed in cultural psychology, and gain knowledge on research methods, and to apply skills and knowledge to various phenomena in the daily life.

●授業内容・授業計画

3. Weekly plan

Week 1: Overview of the relationship between psychology and culture
Week 2: Cultural psychology research methods
Week 3: Cultural psychology and replication issues
Week 4: Culture and self-construal
Week 5: Culture and attribution, the fundamental attribution error, locus of control
Week 6: Culture, perception, and cognition
Week 7: The relation between language, culture, and thought: The Sapir-Whorf hypothesis
Week 8: Bilingualism and Translation (1): linguistic competence
Week 9: Bilingualism Translation: cultural influence
Week 10: Prejudice
Week 11: Overcoming Prejudice
Week 12: Helping Behavior
Week 13: Cultural Neuroscience
Week 14: Intercultural Communication
Week 15: Summary of the course

●事前・事後学習の内容

4. Preparation and review for each class

Students are advised to read relevant materials prior to each meeting, and think how topics dealt with in the class can be applied to our verbal and cultural activities in our daily life.

●評価方法

5. Evaluation methods

Essays (80%), class participation (20%)

●受講生へのコメント

6. Comments for students (raising awareness to particulars that you wish to address)

Topics covered in this course can be found in our daily life, and in addition to lectures and academic readings, I would like for the students to reflect upon and discuss their own experiences with different cultures and languages.

●参考文献・教材

7. Text books and other materials

References:

People: Psychology from a Cultural Perspective. Matsumoto, David. Brooms/Cole, 1994
Culture and Psychology. Matsumoto, David and Juang, Linda. Australia: Wadsworth, Cengage Learning,
2013文化心理学〈上〉心がつくる文化、文化がつくる心(心理学の世界専門編)、増田貴彦、山岸俊男、2010.